Linux From Scratch

Version SVN-20170122

製作： Gerard Beekmans
編集総括： Bruce Dubbs
日本語訳： 松山 道夫

Linux From Scratch: Version SVN-20170122

製作： Gerard Beekmans, 編集総括： Bruce Dubbs, 、 日本語訳： 松山 道夫

製作著作 © 1999-2017 Gerard Beekmans

Copyright © 1999-2017, Gerard Beekmans

All rights reserved.

本書は クリエイティブコモンズライセンス に従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンス に従ってください。

Linux® は Linus Torvalds の登録商標です。

目次

序文 vii
i. はしがき vii
ii. 対象読者 vii
iii. LFS が対象とする CPU アーキテクチャー viii
iv. LFS と各種標準 viii
v. 各パッケージを用いる理由 ix
vi. 必要な知識 xiv
vii. 本書の表記 xiv
viii. 本書の構成 xv
ix. 正誤情報 xv
x. 日本語訳について xv
I. はじめに 1
1. はじめに 2
1.1. LFS をどうやって作るか 2
1.2. 前版からの変更点 2
1.3. 変更履歴 3
1.4. 変更履歴（日本語版） 5
1.5. 情報源 6
1.6. ヘルプ 6
II. ビルド作業のための準備 9
2. ホストシステムの準備 10
2.1. はじめに 10
2.2. ホストシステム要件 10
2.3. 作業段階ごとの LFS 構築 12
2.4. 新しいパーティションの生成 13
2.5. ファイルシステムの生成 14
2.6. 変数 $LFS の設定 15
2.7. 新しいパーティションのマウント 15
3. パッケージとパッチ 17
3.1. はじめに 17
3.2. 全パッケージ 18
3.3. 必要なパッチ 23
4. 準備作業の仕上げ 25
4.1. はじめに 25
4.2. $LFS/tools ディレクトリの生成 25
4.3. LFS ユーザーの追加 25
4.4. 環境設定 26
4.5. SBU 値について 27
4.6. テストスイートについて 27
5. 一時的環境の構築 29
5.1. はじめに 29
5.2. ツールチェーンの技術的情報 29
5.3. 全般的なコンパイル手順 30
5.4. Binutils-2.27 - 1回め 32
5.5. GCC-6.3.0 - 1回め 34
5.6. Linux-4.9.5 API ヘッダー 37
5.7. Glibc-2.24 38
5.8. Libstdc++-6.3.0 40
5.9. Binutils-2.27 - 2回め 41
5.10. GCC-6.3.0 - 2回め 42
5.11. Tcl-core-8.6.6 45
5.12. Expect-5.45 46
5.13. DejaGNU-1.6 47
5.14. Check-0.10.0 48
5.15. Ncurses-6.0 49
5.16. Bash-4.4 50
5.17. Bzip2-1.0.6 51
5.18. Coreutils-8.26 52

5.19. Diffutils-3.5 53
5.20. File-5.29 54
5.21. Findutils-4.6.0 55
5.22. Gawk-4.1.4 56
5.23. Gettext-0.19.8.1 57
5.24. Grep-2.27 58
5.25. Gzip-1.8 59
5.26. M4-1.4.18 60
5.27. Make-4.2.1 61
5.28. Patch-2.7.5 62
5.29. Perl-5.24.1 63
5.30. Sed-4.3 64
5.31. Tar-1.29 65
5.32. Texinfo-6.3 66
5.33. Util-linux-2.29.1 67
5.34. Xz-5.2.3 68
5.35. ストリップ 69
5.36. 所有者の変更 69
III. LFSシステムの構築 70
6. 基本的なソフトウェアのインストール 71
6.1. はじめに 71
6.2. 仮想カーネルファイルシステムの準備 71
6.3. パッケージ管理 72
6.4. Chroot 環境への移行 75
6.5. ディレクトリの生成 76
6.6. 基本的なファイルとリンクの生成 76
6.7. Linux-4.9.5 API ヘッダー 79
6.8. Man-pages-4.09 80
6.9. Glibc-2.24 81
6.10. ツールチェーンの調整 87
6.11. Zlib-1.2.11 89
6.12. File-5.29 90
6.13. Binutils-2.27 91
6.14. GMP-6.1.2 93
6.15. MPFR-3.1.5 95
6.16. MPC-1.0.3 96
6.17. GCC-6.3.0 97
6.18. Bzip2-1.0.6 101
6.19. Pkg-config-0.29.1 103
6.20. Ncurses-6.0 104
6.21. Attr-2.4.47 107
6.22. Acl-2.2.52 108
6.23. Libcap-2.25 109
6.24. Sed-4.3 110
6.25. Shadow-4.2.1 111
6.26. Psmisc-22.21 114
6.27. Iana-Etc-2.30 115
6.28. M4-1.4.18 116
6.29. Bison-3.0.4 117
6.30. Flex-2.6.3 118
6.31. Grep-2.27 119
6.32. Readline-7.0 120
6.33. Bash-4.4 121
6.34. Bc-1.06.95 122
6.35. Libtool-2.4.6 123
6.36. GDBM-1.12 124
6.37. Gperf-3.1 125
6.38. Expat-2.2.0 126
6.39. Inetutils-1.9.4 127
6.40. Perl-5.24.1 129
6.41. XML::Parser-2.44 131

6.42. Intltool-0.51.0 132
6.43. Autoconf-2.69 133
6.44. Automake-1.15 134
6.45. Xz-5.2.3 135
6.46. Kmod-23 137
6.47. Gettext-0.19.8.1 139
6.48. Procps-ng-3.3.12 141
6.49. E2fsprogs-1.43.3 143
6.50. Coreutils-8.26 146
6.51. Diffutils-3.5 150
6.52. Gawk-4.1.4 151
6.53. Findutils-4.6.0 152
6.54. Groff-1.22.3 153
6.55. GRUB-2.02~beta3 155
6.56. Less-481 157
6.57. Gzip-1.8 158
6.58. IPRoute2-4.9.0 159
6.59. Kbd-2.0.4 161
6.60. Libpipeline-1.4.1 163
6.61. Make-4.2.1 164
6.62. Patch-2.7.5 165
6.63. Sysklogd-1.5.1 166
6.64. Sysvinit-2.88dsf 167
6.65. Eudev-3.2.1 168
6.66. Util-linux-2.29.1 170
6.67. Man-DB-2.7.6.1 174
6.68. Tar-1.29 177
6.69. Texinfo-6.3 178
6.70. Vim-8.0.069 180
6.71. デバッグシンボルについて 183
6.72. 再度のストリップ 183
6.73. 仕切り直し 183
7. システム設定 185
7.1. はじめに 185
7.2. LFS-ブートスクリプト-20150222 186
7.3. デバイスとモジュールの扱いについて 188
7.4. デバイスの管理 191
7.5. 全般的なネットワークの設定 193
7.6. System V ブートスクリプトの利用と設定 195
7.7. Bash シェルの初期起動ファイル 203
7.8. /etc/inputrc ファイルの生成 205
7.9. /etc/shells ファイルの生成 206
8. LFS システムのブート設定 208
8.1. はじめに 208
8.2. /etc/fstab ファイルの生成 208
8.3. Linux-4.9.5 210
8.4. GRUB を用いたブートプロセスの設定 214
9. 作業終了 216
9.1. 作業終了 216
9.2. ユーザー登録 216
9.3. システムの再起動 216
9.4. 今度は何? 217
IV. 付録 219
A. 略語と用語 220
B. 謝辞 222
C. パッケージの依存関係 224
D. ブートスクリプトと sysconfig スクリプト version-20150222 233
D.1. /etc/rc.d/init.d/rc 233
D.2. /lib/lsb/init-functions 237
D.3. /etc/rc.d/init.d/mountvirtfs 250
D.4. /etc/rc.d/init.d/modules 251

D.5. /etc/rc.d/init.d/udev 252
D.6. /etc/rc.d/init.d/swap 254
D.7. /etc/rc.d/init.d/setclock 255
D.8. /etc/rc.d/init.d/checkfs 256
D.9. /etc/rc.d/init.d/mountfs 258
D.10. /etc/rc.d/init.d/udev_retry 260
D.11. /etc/rc.d/init.d/cleanfs 261
D.12. /etc/rc.d/init.d/console 263
D.13. /etc/rc.d/init.d/localnet 265
D.14. /etc/rc.d/init.d/sysctl 266
D.15. /etc/rc.d/init.d/sysklogd 267
D.16. /etc/rc.d/init.d/network 269
D.17. /etc/rc.d/init.d/sendsignals 270
D.18. /etc/rc.d/init.d/reboot 271
D.19. /etc/rc.d/init.d/halt 272
D.20. /etc/rc.d/init.d/template 273
D.21. /etc/sysconfig/modules 274
D.22. /etc/sysconfig/createfiles 274
D.23. /etc/sysconfig/udev-retry 275
D.24. /sbin/ifup 275
D.25. /sbin/ifdown 277
D.26. /lib/services/ipv4-static 279
D.27. /lib/services/ipv4-static-route 280
E. Udev 設定ルール 283
E.1. 55-lfs.rules 283
F. LFS ライセンス 284
F.1. クリエイティブコモンズライセンス 284
F.2. MIT ライセンス (The MIT License) 287
項目別もくじ 288

序文

はしがき

私が Linux について学び始め理解するようになったのは 1998 年頃からです。Linux ディストリビューションのインストールを行ったのはその時が初めてです。そして即座に Linux 全般の考え方や原理について興味を抱くようになりました。

何かの作業を完成させるには多くの方法があるものです。同じことは Linux ディストリビューションについても言えます。この数年の間に数多くのディストリビューションが登場しました。あるものは今も存在し、あるものは他のものへと形を変え、そしてあるものは記憶の彼方へ追いやられたりもしました。それぞれが利用者の求めに応じて、さまざまに異なる形でシステムを実現してきたわけです。最終ゴールが同じものなのに、それを実現する方法はたくさんあるものです。したがって私は一つのディストリビューションにとらわれることが不要だと思い始めました。Linux が登場する以前であれば、オペレーティングシステムに何か問題があったとしても、他に選択肢はなくそのオペレーティングシステムで満足する以外にありませんでした。それはそういうものであって、好むと好まざるは関係がなかったのです。それが Linux になって ”選ぶ” という考え方が出てきました。何かが気に入らなかったら、いくらでも変えたら良いし、そうすることがむしろ当たり前となったのです。

数多くのディストリビューションを試してみましたが、これという 1 つに決定できるものがありませんでした。個々のディストリビューションは優れたもので、それぞれを見てみれば正しいものです。ただこれは正しいとか間違っているとかの問題ではなく、個人的な趣味の問題へと変化しています。こうしたさまざまな状況を通じて明らかになってきたのは、私にとって完璧なシステムは 1 つもないということです。そして私は自分自身の Linux を作り出して、自分の好みを満足させるものを目指しました。

本当に自分自身のシステムを作り出すため、私はすべてをソースコードからコンパイルすることを目指し、コンパイル済のバイナリパッケージは使わないことにしました。この「完璧な」Linux システムは、他のシステムが持つ弱点を克服し、逆にすべての強力さを合わせ持つものです。当初は気の遠くなる思いがしていましたが、そのアイデアは今も持ち続けています。

パッケージが相互に依存している状況やコンパイル時にエラーが発生するなどを順に整理していく中で、私はカスタムメイドの Linux を作り出したのです。この Linux は今日ある他の Linux と比べても、十分な機能を有し十分に扱いやすいものとなっています。これは私自身が作り出したものです。いろいろなものを自分で組み立てていくのは楽しいものです。さらに個々のソフトウェアまでも自分で作り出せれば、もっと楽しいものになるのでしょうが、それは次の目標とします。

私の求める目標や作業経験を他の Linux コミュニティの方々とも共有する中で、私の Linux への挑戦は絶えることなく続いていくことを実感しています。このようなカスタムメイドの Linux システムを作り出せば、独自の仕様や要求を満たすことができるのはもちろんですが、さらにはプログラマーやシステム管理者の Linux 知識を引き伸ばす絶好の機会となります。壮大なこの意欲こそが Linux From Scratch プロジェクト誕生の理由です。

Linux From Scratch ブックは関連プロジェクトの中心に位置するものです。皆さんご自身のシステムを構築するために必要となる基礎的な手順を提供します。本書が示すのは正常動作するシステム作りのための雛形となる手順ですので、皆さんが望んでいる形を作り出すために手順を変えていくことは自由です。それこそ、本プロジェクトの重要な特徴でもあります。そうしたとしても手順を踏み外すものではありません。我々は皆さんが旅に挑戦することを応援します。

あなたの LFS システム作りが素晴らしいひとときとなりますように。そしてあなた自身のシステムを持つ楽しみとなりますように。

```
--
Gerard Beekmans
gerard@linuxfromscratch.org
```

対象読者

本書を読む理由はさまざまにあると思いますが、よく挙がってくる質問として以下があります。「既にある Linux をダウンロードしてインストールすれば良いのに、どうして苦労してまで手作業で Linux を構築しようとするのか。」

本プロジェクトを提供する最大の理由は Linux システムがどのようにして動作しているのか、これを学ぶためのお手伝いをすることです。LFS システムを構築してみれば、さまざまなものが連携し依存しながら動作している様子を知ることができます。そうした経験をした人であれば Linux システムを自分の望む形に作りかえる手法も身につけることができます。

LFS の重要な利点として、他の Linux システムに依存することなく、システムをより適切に制御できる点が挙げられます。LFS システムではあなたが運転台に立って、システムのあらゆる側面への指示を下していきます。

さらに非常にコンパクトな Linux システムを作る方法も身につけられます。通常の Linux ディストリビューションを用いる場合、多くのプログラムをインストールすることになりますが、たいていのプログラムは使わないものですし、その内容もよく分からないものです。それらのプログラムはハードウェアリソースを無駄に占有することになります。今日のハードドライブや CPU のことを考えたら、リソース消費は大したことはないと思うかもしれません。しかし問題がなくなったとしても、サイズの制限だけは気にかける必要があることでしょう。例えばブータブル CD、USB スティック、組み込みシステムなどのことを思い浮かべてください。そういったものに対して LFS は有用なものとなるでしょう。

カスタマイズした Linux システムを構築するもう一つの利点として、セキュリティがあります。ソースコードからコンパイルしてシステムを構築するということは、あらゆることを制御する権限を有することになり、セキュリティパッチは望みどおりに適用できます。他の人がセキュリティホールを修正しバイナリパッケージを提供するのを待つ必要がなくなるということです。他の人がパッチとバイナリパッケージを提供してくれたとしても、それが本当に正しく構築され、問題を解決してくれているかどうかは、調べてみなければ分からないわけですから。

Linux From Scratch の最終目標は、実用的で完全で、基盤となるシステムを構築することです。Linux システムを一から作り出すつもりのない方は、本書から得られるものはないかもしれません。

LFS を構築する理由はさまざまですから、すべてを列記することはできません。学習こそ、理由を突き詰める最大最良の手段です。LFS 構築作業の経験を積むことによって、情報や知識を通じてもたらされる意義が十二分に理解できるはずです。

LFS が対象とする CPU アーキテクチャー

LFS が対象としている CPU アーキテクチャーは AMD/インテル x86 CPU（32ビット）と x86_64 CPU（64ビット）です。Power PC や ARM については、本書の手順を多少修正することで動作することが確認されています。これらの CPU を利用したシステムをビルドする場合は、この後に示す諸条件を満たす必要がありますが、まずはそのアーキテクチャーをターゲットとする、LFS システムそのものや Ubuntu、Red Hat/Fedora、SuSE などの Linux システムが必要です。ホストが 64 ビット AMD/インテルによるシステムであったとしても 32 ビットシステムは問題なくインストールできます。

64 ビットシステムにて明らかなことをここに記しておきます。32 ビットシステムに比べると、実行プログラムのサイズは多少大きくなり、実行速度は若干速くなります。例えば Core2Duo CPU をベースとするシステム上に、LFS 6.5 をビルドしてみたところ、以下のような情報が得られました。

```
アーキテクチャー ビルド時間   ビルドサイズ
32 ビット         198.5 分     648 MB
64 ビット         190.6 分     709 MB
```

ご存知かと思いますが 64 ビットによってビルドを行っても、32 ビットのときのビルドに比べて 4% 早くなるだけで 9% は大きなものになります。つまり 64ビットシステムによって得られることは比較的小さいということです。もちろん 4GB 以上の RAM を利用していたり、4GB を超えるデータを取り扱いたいならば、64 ビットシステムを用いるメリットが大きいのは間違いありません。

LFS の手順に従って作り出す 64 ビットシステムは、”純粋な”64 ビットシステムと言えます。つまりそのシステムは 64 ビット実行モジュールのみをサポートするということです。”複数のライブラリ”によるシステムをビルドするのなら、多くのアプリケーションを二度ビルドしなければなりません。一度は 32 ビット用であり、一度は 64 ビット用です。現時点にて本書はこの点をサポートしませんが、後々のリリースに向けて検討中です。さしあたりそのような応用的なトピックに関しては Cross Linux From Scratch プロジェクトを参照してください。

LFS と各種標準

LFS の構成は出来る限り Linux の各種標準に従うようにしています。 主な標準は以下のものです。

- POSIX.1-2008
- Filesystem Hierarchy Standard (FHS) Version 3.0
- Linux Standard Base (LSB) Version 5.0

LSB はさらに以下の４つの標準から構成されます。 コア (Core)、デスクトップ (Desktop)、ランタイム言語 (Runtime Languages)、画像処理 (Imaging) です。 また一般的な要求事項に加えて、アーキテクチャーに固有の要求事項もあります。 Gtk3 やグラフィックスという二項目に関しての試用も含んでいます。 LFS では前節にて示したように、各アーキテクチャーに適合することを目指します。

注記

LSB の要求に対しては異論のある方も多いでしょう。 LSB を定義するのは、私有ソフトウェア (proprietary software) をインストールした場合に、要求事項を満たしたシステム上にて問題なく動作することを目指すためです。 LFS はソースコードから構築するシステムですから、どのパッケージを利用するかをユーザー自身が完全に制御できます。 また LSB にて要求されているパッケージであっても、インストールしない選択をとることもできます。

LFS の構築にあたっては LSB に適合していることを確認するテスト (certifications tests) をクリアするように構築することも可能です。 ただし LFS の範囲外にあるパッケージ類を追加しなければ実現できません。 そのような追加パッケージ類については、おおむね BLFS にて導入手順を説明しています。

LFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Findutils, Gawk, Grep, GTK+2, Gzip, M4, Man-DB, Ncurses, Procps, Psmisc, Sed, Shadow, Tar, Util-linux, Zlib
LSB デスクトップ:	なし
LSB ランタイム言語:	Perl
LSB 画像処理:	なし
LSB Gtk3、LSB グラフィックス (試用):	なし

BLFS 提供のパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	At, Batch (At の一部), Cpio, Ed, Fcrontab, Initd-tools, Lsb_release, NSPR, NSS, PAM, Pax, Sendmail (または Postfix または Exim), time
LSB デスクトップ:	Alsa, ATK, Cairo, Desktop-file-utils, Freetype, Fontconfig, Gdk-pixbuf, Glib2, Icon-naming-utils, Libjpeg-turbo, Libpng, Libtiff, Libxml2, MesaLib, Pango, Qt4, Xdg-utils, Xorg
LSB ランタイム言語:	Python, Libxml2, Libxslt
LSB 画像処理:	CUPS, Cups-filters, Ghostscript, SANE
LSB Gtk3、LSB グラフィックス (試用):	GTK+3

LFS, BLFS で提供しないパッケージで LSB 要求に従うもの

LSB コア:	なし
LSB デスクトップ:	なし
LSB ランタイム言語:	なし
LSB 画像処理:	なし
LSB Gtk3、LSB グラフィックス (試用):	なし

各パッケージを用いる理由

既に説明しているように LFS が目指すのは、完成した形での実用可能な基盤システムを構築することです。 LFS に含まれるパッケージ群は、パッケージの個々を構築していくために必要となるものばかりです。 そこからは最小限の基盤となるシステムを作り出します。 そしてユーザーの望みに応じて、より完璧なシステムへと拡張していくものとなります。 LFS は極小システムを意味するわけではありません。 厳密には必要のないパッケージであっても、重要なものとして含んでいるものもあります。 以下に示す一覧は、本書内の各パッケージの採用根拠について説明するものです。

- Acl

  このパッケージはアクセス制御リスト (Access Control Lists) を管理するツールを提供します。 これはファイルやディレクトリに対して、きめ細かく様々なアクセス権限を定義するために利用されます。

- Attr

  このパッケージはファイルシステムオブジェクト上の拡張属性を管理するプログラムを提供します。

- Autoconf

  このパッケージは、以下に示すようなシェルスクリプトを生成するプログラムを提供します。 つまり開発者が意図しているテンプレートに基づいて、ソースコードを自動的に設定する（configure する）ためのシェルスクリプトです。 特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。

- Automake

  このパッケージは、テンプレートとなるファイルから Makefile を生成するためのプログラムを提供します。 特定のパッケージのビルド方法に変更があった場合は、パッケージ再構築を行うことになるため、その場合に本パッケージが必要となります。

- Bash

  このパッケージは、システムとのインターフェースを実現する Bourne シェルを提供し、LSB コア要件を満たします。 他のシェルを選ばずにこれを選ぶのは、一般的に多用されていることと、基本的なシェル関数においての拡張性が高いからです。

- Bc

  このパッケージは、任意精度（arbitrary precision）の演算処理言語を提供します。 Linux カーネルの構築に必要となります。

- Binutils

  このパッケージは、リンカー、アセンブラーのような、オブジェクトファイルを取り扱うプログラムを提供します。 各プログラムは LFS における他のパッケージをコンパイルするために必要となり、さらに LFS にて示される以外のパッケージでも必要となります。

- Bison

  このパッケージは yacc（Yet Another Compiler Compiler）の GNU バージョンを提供します。 LFS において利用するプログラムの中に、これを必要とするものがあります。

- Bzip2

  このパッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 これは LFS パッケージの多くを伸張（解凍）するために必要です。

- Check

  このパッケージは、他のプログラムに対するテストハーネス（test harness）を提供します。 これは一時的なツールチェーンにおいてのみインストールします。

- Coreutils

  このパッケージは、ファイルやディレクトリを参照あるいは操作するための基本的なプログラムを数多く提供します。 各プログラムはコマンドラインからの実行によりファイル制御を行うために必要です。 また LFS におけるパッケージのインストールに必要となります。

- DejaGNU

  このパッケージは、他のプログラムをテストするフレームワークを提供します。 これは一時的なツールチェーンプログラムをインストールする際にだけ必要となります。

- Diffutils

  このパッケージは、ファイルやディレクトリ間の差異を表示するプログラムを提供します。 各プログラムはパッチを生成するために利用されます。 したがってパッケージのビルド時に利用されることが多々あります。

- E2fsprogs

  このパッケージは ext2, ext3, ext4 の各ファイルシステムを取り扱うユーティリティを提供します。 各ファイルシステムは Linux がサポートする一般的なものであり、十分なテストが実施されているものです。

- Eudev

  このパッケージはデバイスマネージャーです。 /dev ディレクトリにデバイスとして登録された項目の追加削除を動的に制御します。

- Expat

  このパッケージは比較的小規模の XML 解析ライブラリを提供します。 XML-Parser Perl モジュールがこれを必要とします。

- Expect

このパッケージは、スクリプトで作られた対話型プログラムを通じて、他のプログラムとのやりとりを行うプログラムを提供します。 通常は他のパッケージをテストするために利用します。 本書では一時的なツールチェーンの構築時にしかインストールしません。

- File

このパッケージは、指定されたファイルの種類を判別するユーティリティプログラムを提供します。 他のパッケージにおいて、ビルド時にこれを必要とするものもあります。

- Findutils

このパッケージは、ファイルシステム上のファイルを検索するプログラムを提供します。 これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Flex

このパッケージは、テキスト内の特定パターンの認識プログラムを生成するユーティリティを提供します。 これは lex（字句解析; lexical analyzer）プログラムの GNU 版です。 LFS 内の他のパッケージの中にこれを必要としているものがあります。

- Gawk

このパッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。 プログラムは GNU 版の awk（Aho-Weinberg-Kernighan）です。 これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Gcc

これは GNU コンパイラーコレクションパッケージです。 C コンパイラーと C++ コンパイラーを含みます。また LFS ではビルドしないコンパイラーも含まれています。

- GDBM

このパッケージは GNU データベースマネージャーライブラリを提供します。 LFS が扱う Man-DB パッケージがこれを利用しています。

- Gettext

このパッケージは、各種パッケージが国際化を行うために利用するユーティリティやライブラリを提供します。

- Glibc

このパッケージは C ライブラリです。Linux 上のプログラムはこれがなければ動作させることができません。

- GMP

このパッケージは数値演算ライブラリを提供するもので、任意精度演算（arbitrary precision arithmetic）についての有用な関数を含みます。 これは GCC をビルドするために必要です。

- Gperf

このパッケージは、キーセットから完全なハッシュ関数を生成するプログラムを提供します。 Eudev がこれを必要としています。

- Grep

このパッケージはファイル内を検索するプログラムを提供します。 これは他のパッケージにて、ビルド時のスクリプトにおいて利用されています。

- Groff

このパッケージは、テキストを処理し整形するプログラムをいくつか提供します。 重要なものプログラムとして man ページを生成するものを含みます。

- GRUB

これは Grand Unified Boot Loader です。 ブートローダーとして利用可能なものの中でも、これが最も柔軟性に富むものです。

- Gzip

このパッケージは、ファイルの圧縮と伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 LFS において、パッケージを伸張（解凍）するために必要です。

- Iana-etc

このパッケージは、ネットワークサービスやプロトコルに関するデータを提供します。 ネットワーク機能を適切に有効なものとするために、これが必要です。

- Inetutils

このパッケージは、ネットワーク管理を行う基本的なプログラム類を提供します。

- Intltool

  本パッケージはソースファイルから翻訳対象となる文字列を抽出するツールを提供します。

- IProute2

  このパッケージは、IPv4、IPv6 による基本的な、あるいは拡張したネットワーク制御を行うプログラムを提供します。 IPv6 への対応があることから、よく使われてきたネットワークツールパッケージ（net-tools）に変わって採用されました。

- Kbd

  このパッケージは、米国以外のキーボードに対してのキーテーブルファイルやキーボードユーティリティを提供します。 また端末上のフォントも提供します。

- Kmod

  このパッケージは Linux カーネルモジュールを管理するために必要なプログラムを提供します。

- Less

  このパッケージはテキストファイルを表示する機能を提供するものであり、表示中にスクロールを可能とします。 また Man-DB において man ページを表示する際にも利用されます。

- Libcap

  このパッケージは Linux カーネルにて利用される POSIX 1003.1e 機能へのユーザー空間からのインターフェースを実装します。

- Libpipeline

  Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟にかつ容易に操作するライブラリを提供します。 これは Man-DB パッケージが必要としています。

- Libtool

  このパッケージは GNU の汎用的なライブラリに対してのサポートスクリプトを提供します。 これは、複雑な共有ライブラリの取り扱いを単純なものとし、移植性に優れた一貫した方法を提供します。 LFS パッケージのテストスイートにおいて必要となります。

- Linux Kernel

  このパッケージは ”オペレーティングシステム” であり GNU/Linux 環境における Linux です。

- M4

  このパッケージは汎用的なテキストマクロプロセッサーであり、他のプログラムを構築するツールとして利用することができます。

- Make

  このパッケージは、パッケージ構築を指示するプログラムを提供します。 LFS におけるパッケージでは、ほぼすべてにおいて必要となります。

- Man-DB

  このパッケージは man ページを検索し表示するプログラムを提供します。 man パッケージではなく本パッケージを採用しているのは、その方が国際化機能が優れているためです。 このパッケージは man プログラムを提供しています。

- Man-pages

  このパッケージは Linux の基本的な man ページを提供します。

- MPC

  このパッケージは複素数演算のための関数を提供します。 GCC パッケージがこれを必要としています。

- MPFR

  このパッケージは倍精度演算（multiple precision）の関数を提供します。 GCC パッケージがこれを必要としています。

- Ncurses

  このパッケージは、端末に依存せず文字キャラクターを取り扱うライブラリを提供します。 メニュー表示時のカーソル制御を実現する際に利用されます。 LFS の他のパッケージでは、たいていはこれを必要としています。

- Patch

  このパッケージは、パッチ ファイルの適用により、特定のファイルを修正したり新規生成したりするためのプログラムを提供します。 パッチファイルは diff プログラムにより生成されます。 LFS パッケージの中には、構築時にこれを必要とするものがあります。

- Perl

  このパッケージは、ランタイムに利用されるインタープリター言語 PERL を提供します。 LFS の他のパッケージでは、インストール時やテストスイートの実行時にこれを必要とするものがあります。

- Pkg-config

  このパッケージは、既にインストールされたライブラリやパッケージのメタデータを取得するプログラムを提供します。

- Procps-NG

  このパッケージは、プロセスの監視を行うプログラムを提供します。 システム管理にはこのパッケージが必要となります。 また LFS ブートスクリプトではこれを利用しています。

- Psmisc

  このパッケージは、実行中のプロセスに関する情報を表示するプログラムを提供します。 システム管理にはこのパッケージが必要となります。

- Readline

  このパッケージは、コマンドライン上での入力編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。 これは Bash が利用しています。

- Sed

  このパッケージは、テキストの編集を、テキストエディターを用いることなく可能とします。 LFS パッケージにおける configure スクリプトは、たいていこれを必要としています。

- Shadow

  このパッケージは、セキュアな手法によりパスワード制御を行うプログラムを提供します。

- Sysklogd

  このパッケージは、システムメッセージログを扱うプログラムを提供します。 例えばカーネルが出力するログや、デーモンプロセスが異常発生時に出力するログなどです。

- Sysvinit

  このパッケージは init プログラムを提供します。 これは Linux システム上のすべてのプロセスの基点となるものです。

- Tar

  このパッケージは、アーカイブや圧縮機能を提供するもので LFS が扱うすべてのパッケージにて利用されています。

- Tcl

  このパッケージはツールコマンド言語（Tool Command Language）を提供します。 LFS が扱うパッケージにてテストスイートの実行に必要となります。 これは一時的なツールチェーンの構築時にのみインストールします。

- Texinfo

  このパッケージは Info ページに関しての入出力や変換を行うプログラムを提供します。 LFS が扱うパッケージのインストール時には、たいてい利用されます。

- Util-linux

  このパッケージは数多くのユーティリティプログラムを提供します。 その中には、ファイルシステムやコンソール、パーティション、メッセージなどを取り扱うユーティリティがあります。

- Vim

  このパッケージはテキストエディターを提供します。 これを採用しているのは、従来の vi エディタとの互換性があり、しかも数々の有用な機能を提供するものだからです。 テキストエディターは個人により好みはさまざまですから、もし別のエディターを利用したいなら、そちらを用いても構いません。

- XML::Parser

  このパッケージは Expat とのインターフェースを実現する Perl モジュールです。

- XZ Utils

このパッケージはファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 一般的に用いられるものの中では高い圧縮率を実現するものであり、特に XZ フォーマットや LZMA フォーマットの伸張（解凍）に利用されます。

- Zlib

  このパッケージは、圧縮や解凍の機能を提供するもので、他のプログラムがこれを利用しています。

必要な知識

LFS システムの構築作業は決して単純なものではありません。 ある程度の Unix システム管理の知識が必要です。 問題を解決したり、説明されているコマンドを正しく実行することが求められます。 ファイルやディレクトリのコピー、それらの表示確認、カレントディレクトリの変更、といったことは最低でも知っていなければなりません。 さらに Linux の各種ソフトウェアを使ったりインストールしたりする知識も必要です。

LFS ブックでは、最低でも そのようなスキルがあることを前提としていますので、数多くの LFS サポートフォーラムは、ひょっとすると役に立たないかもしれません。 フォーラムにおいて基本的な知識を尋ねたとしたら、誰も回答してくれないでしょう。 そうするよりも LFS に取り掛かる前に以下のような情報をよく読んでください。

LFS システムの構築作業に入る前に、以下を読むことをお勧めします。

- ソフトウェア構築のハウツー（Software-Building-HOWTO）http://www.tldp.org/HOWTO/Software-Building-HOWTO.html

  これは Linux 上において「一般的な」 Unix ソフトウェアを構築してインストールする方法を総合的に説明しています。 だいぶ前に書かれたものですが、ソフトウェアのビルドとインストールを行うために必要となる基本的な方法が程よくまとめられています。
- ソースコードからのインストール入門ガイド（Beginner's Guide to Installing from Source）http://moi.vonos.net/linux/beginners-installing-from-source/

  このガイドは、ソフトウェアをソースコードからビルドするために必要な基本的スキルや技術をほど良くまとめています。

本書の表記

本書では、特定の表記を用いて分かりやすく説明を行っていきます。 ここでは Linux From Scratch ブックを通じて利用する表記例を示します。

```
./configure --prefix=/usr
```

この表記は特に説明がない限りは、そのまま入力するテキストを示しています。 またコマンドの説明を行うために用いる場合もあります。

場合によっては、1行で表現される内容を複数行に分けているものがあります。 その場合は各行の終わりにバックスラッシュ（あるいは円記号）を表記しています。

```
CC="gcc -B/usr/bin/" ../binutils-2.18/configure \
  --prefix=/tools --disable-nls --disable-werror
```

バックスラッシュ（または円記号）のすぐ後ろには改行文字がきます。 そこに余計な空白文字やタブ文字があると、おかしな結果となるかもしれないため注意してください。

```
install-info: unknown option '--dir-file=/mnt/lfs/usr/info/dir'
```

上の表記は固定幅フォントで示されており、たいていはコマンド入力の結果として出力される端末メッセージを示しています。 あるいは /etc/ld.so.conf といったファイル名を示すのに利用する場合もあります。

Emphasis

上の表記はさまざまな意図で用いています。 特に重要な説明内容やポイントを表します。

http://www.linuxfromscratch.org/

この表記は LFS コミュニティ内や外部サイトへのハイパーリンクを示します。 そこには「ハウツー」やダウンロードサイトなどが含まれます。

```
cat > $LFS/etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:
......
EOF
```

上の表記は設定ファイル類を生成する際に示します。 1行目のコマンドは `$LFS/etc/group` というファイルを生成することを指示しています。 そのファイルへは2行目以降 EOF が記述されるまでのテキストが出力されます。 したがってこの表記は通常そのままタイプ入力します。

<REPLACED TEXT>

上の表記は入力するテキストを仮に表現したものです。 これをそのまま入力するものではないため、コピー、ペースト操作で貼り付けないでください。

[OPTIONAL TEXT]

上の表記は入力しなくてもよいオプションを示しています。

`passwd(5)`

上の表記はマニュアルページ（man ページ）を参照するものです。 カッコ内の数字は man の内部で定められている特定のセクションを表しています。 例えば passwd コマンドには2つのマニュアルページがあります。 LFS のインストールに従った場合、2つのマニュアルページは `/usr/share/man/man1/passwd.1` と `/usr/share/man/man5/passwd.5` に配置されます。 `passwd(5)` という表記は `/usr/share/man/man5/passwd.5` を参照することを意味します。 man passwd という入力に対しては「passwd」という語に合致する最初のマニュアルページが表示されるものであり `/usr/share/man/man1/passwd.1` が表示されることになります。 特定のマニュアルページを見たい場合は man 5 passwd といった入力を行う必要があります。 マニュアルページが複数あるケースはまれですので、普通は man <プログラム名> と入力するだけで十分です。

本書の構成

本書は以下の部から構成されます。

第 I 部 - はじめに

第I部では LFS 構築作業を進めるための重要事項について説明します。 また本書のさまざまな情報についても説明します。

第 II 部 - ビルド作業のための準備

第II部では、パーティションの生成、パッケージのダウンロード、一時的なツールのコンパイルといった、システム構築の準備作業について説明します。

第 III 部 - LFSシステムの構築

第III部では LFS システムの構築作業を順に説明していきます。 そこでは全パッケージのコンパイルとインストール、ブートスクリプトの設定、カーネルのインストールを行います。 出来上がる Linux システムをベースとして、他のソフトウェアを必要に応じて導入し、このシステムを拡張していくことができます。 本書の終わりには、インストール対象のプログラム、ライブラリ、あるいは重要なファイル類についてのさくいんも示します。

正誤情報

LFS システムを構築するためのソフトウェアは日々拡張され更新されています。 LFS ブックがリリースされた後に、セキュリティフィックスやバグフィックスが公開されているかもしれません。 本版にて説明するパッケージや作業手順に対して、セキュリティフィックスやバグフィックス等が必要かどうか、ビルド作業を行う前に http://www.linuxfromscratch.org/lfs/errata/development/を確認してください。 そして LFS ビルド作業を進めながら、対応する節においての変更を確認し適用してください。

日本語訳について

日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。 日本語訳に関する情報を示すために設けました。

はじめに

本書は LFS ブック SVN-20170122 の日本語版 20170123 です。 オリジナルの LFS ブックと同様に DocBook を用いて構築しています。

日本語版の提供について

日本語版 LFS ブックは OSDN.jp 内に開発の場を設け http://lfsbookja.osdn.jp/ にて「LFSブック日本語版」のプロジェクト名で提供するものです。

HTML ファイル類や日本語化のために構築しているソース類について、あるいはそれらの取り扱い（ライセンス）については上記サイトを参照してください。

日本語版の生成について

日本語版 LFS ブックの生成は、以下のようにして行っています。

- そもそも LFS ブックのソースは、LFS のサイト http://www.linuxfromscratch.org/ において、Static 版として公開されていると同時に Subversion により、日々開発更新されているソース（XMLソース）が公開されています。 日本語版はその XML ソースに基づいて作成しています。
- XML ソースは DocBook XML DTD の書式に従ったファイル形式です。 日本語版では、ソースに記述された原文を日本語訳文に変えて、同様の処理により生成しています。 ソース内に含まれる `INSTALL` ファイルには、処理に必要となるツール類の詳細が示されています。 それらのツール類はすべて BLFS にてインストールする対象となっていますので、興味のある方は参照してください。
- 日本語訳にあたっては、原文にて「地の文」として表現されている文章を日本語化しています。 逆に各手順におけるコマンド説明（四角の枠囲いで示されている箇所）は、日本語化の対象とはしていません。 コマンド類や設定記述が英単語で行われるわけですから、これは当たり前のことです。 ただ厳密に言えば、その四角の枠囲いの中でシェルのコメント書きが含まれる場合があり、これは日本語化せずそのまま表記しています。

日本語版における注意点

日本語版 LFS ブックを参照頂く際には、以下の点に注意してください。

- 本ページの冒頭にあるように、原文にはない記述は「日本語訳情報」として枠囲い文章で示すことにします。
- 訳者は Linux に関する知識を隅から隅まで熟知しているわけではありません。 したがってパッケージのことや Linux の仕組みに関して説明されている原文の、真の意味が捉えられず、原文だけを頼りに訳出している箇所もあります。 もし誤訳、不十分な訳出、意味不明な箇所に気づかれた場合は、是非ご指摘、ご教示をお願いしたいと思います。
- 日本語訳にて表記しているカタカナ用語について触れておきます。 特に語末に長音符号がつく（あるいはつかない）用語です。 このことに関しては訳者なりに捉えているところがあるのですが、詳述は省略します。 例えば「ユーザー(user)」という用語は語末に長音符号をつけるべきと考えます。 一方「コンピュータ（computer)」という用語は、情報関連その他の分野では長音符号をつけない慣用があるものの、昨今これをつけるような流れもあり情勢が変わりつつあります。 このように用語表記については、大いに ”ゆれ” があるため、訳者なりに取り決めて表記することにしています。 なじみの表記とは若干異なるものが現れるかもしれませんが、ご了承いただきたいと思います。

第I部 はじめに

第1章 はじめに

1.1. LFS をどうやって作るか

LFS システムは、既にインストールされている Linux ディストリビューション (Debian、OpenMandriva、Fedora、openSUSE など) を利用して構築していきます。 この既存の Linux システム（ホスト）は、LFS 構築のためにさまざまなプログラム類を利用する基盤となります。 プログラム類とはコンパイラー、リンカー、シェルなどです。 したがってそのディストリビューションのインストール時には「開発 (development)」オプションを選択し、それらのプログラム類が利用できるようにしておく必要があります。

コンピューター内にインストールされているディストリビューションを利用するのではなく、他に提供されている LiveCD を利用することもできます。

第2章では、新しく構築する Linux のためのパーティションとファイルシステムの生成方法について説明します。 そのパーティション上にて LFS システムをコンパイルしインストールします。 第3章では LFS 構築に必要となるパッケージとパッチについて説明します。 これらをダウンロードして新たなファイルシステム内に保存します。 第4章は作業環境の準備について述べています。 この章では重要な説明を行っていますので、第5章以降に進む前に是非注意して読んでください。

第5章では数多くのパッケージをインストールします。 これらは基本的な開発ツール（ツールチェーン）を構成するものであり、第6章において最終的なシステムを構築するために利用します。 パッケージの中には自分自身を循環的に必要とするような依存関係を持つものがあります。 例えばコンパイラーをコンパイルするためにはコンパイラーが必要となります。

第5章ではツールチェーンの第1回めの構築方法を示します。 そこではまず Binutils と GCC を構築します。（第1回めと表現しているということは、つまりこれら2つのパッケージは後に再構築します。）次に C ライブラリである Glibc を構築します。 Glibc は第1回めのツールチェーンを用いてコンパイルされます。 そして第2回めのツールチェーン構築を行います。 この時のツールチェーンは新たに構築した Glibc をリンクします。 それ以降の第5章に示すパッケージは第2回めのツールチェーンプログラムを用いて構築します。 上の作業をすべて終えたら LFS のインストール作業はもはやホストディストリビューションに依存しません。 ただし作動させるカーネルだけは使い続けます。

ホストシステムのツール類から新しいシステムを切り離していくこの手順は、やり過ぎのように見えるかもしれません。 5.2.「ツールチェーンの技術的情報」にて詳細に説明しているので参照してください。

第6章にて LFS システムが出来上がります。 chroot（ルートをチェンジする）プログラムを使って仮想的な環境に入り LFS パーティション内のディレクトリをルートディレクトリとしてシェルを起動します。 これは LFS パーティションをルートパーティションとするシステム再起動と同じことです。 ただ実際にはシステムを再起動はしません。 再起動できるシステムとするためにはもう少し作業を必要としますし、この時点ではまだそれが必要ではないので chroot を行う方法を取ります。 chroot を使うメリットは、LFS 構築作業にあたって引き続きホストシステムを利用できることです。 パッケージをコンパイルしている最中には、通常どおり別の作業を行うことができます。

インストールの仕上げとして第7章にてベースシステムの設定を行い、第8章にてカーネルとブートローダーを設定します。 第9章では LFS システム構築経験を踏まえて、その先に進むための情報を示します。 本書に示す作業をすべて実施すれば、新たな LFS システムを起動することが出来ます。

上はごく簡単な説明にすぎません。 各作業の詳細はこれ以降の章やパッケージの説明を参照してください。 内容が難しいと思っていても、それは徐々に理解していけるはずです。 読者の皆さんには、是非 LFS アドベンチャーに挑んで頂きたいと思います。

1.2. 前版からの変更点

以下に示すのは前版から変更されているパッケージです。

アップグレード:

-
- Bash 4.4
- Eudev 3.2.1
- E2fsprogs 1.43.3
- File 5.29
- Flex 2.6.3
- Gawk 4.1.4
- GCC 6.3.0

- GMP 6.1.2
- Gperf-3.1
- Grep 2.27
- IPRoute2 4.9.0
- Kbd 2.0.4
- Linux 4.9.5
- Man-DB 2.7.6.1
- Man-pages 4.09
- MPFR 3.1.5
- Perl 5.24.1
- Readline 7.0
- Sed 4.3
- Texinfo 6.3
- Tzdata 2016j
- Util-Linux 2.29.1
- Vim 8.0.069
- XZ-Utils 5.2.3
- Zlib 1.2.11

追加:

-

削除:

-
- bash-4.3.30-upstream_fixes-3.patch
- readline-6.3-upstream_fixes-3.patch

1.3. 変更履歴

本書は Linux From Scratch ブック、バージョン SVN-20170122 です。 本書が 6ヶ月以上更新されていなければ、より新しい版が公開されているはずです。以下のミラーサイトを確認してください。 http://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html

以下は前版からの変更点を示したものです。

変更履歴：

- 2017-01-22
  - [bdubbs] - linux-4.9.5.tar.xz へのアップデート。 #4030 を Fix に。
  - [bdubbs] - kbd-2.0.4 へのアップデート。 #4029 を Fix に。
  - [bdubbs] - perl-5.24.1 へのアップデート。 #4031 を Fix に。
  - [bdubbs] - zlib-1.2.11 へのアップデート。 #4032 を Fix に。
  - [bdubbs] - util-linux-2.29.1 へのアップデート。 #4034 を Fix に。
- 2017-01-08
  - [bdubbs] - linux-4.9.1.tar.xz へのアップデート。 #4028 を Fix に。
  - [bdubbs] - sed-4.3.tar.xz へのアップデート。 #4025 を Fix に。
  - [bdubbs] - gperf-3.1 へのアップデート。 #4026 を Fix に。
- 2017-01-03
  - [dj] - zlib-1.2.10 へのアップデート。 #4023 を Fix に。
  - [dj] - m4-1.4.18 へのアップデート。 #4022 を Fix に。
  - [dj] - binutils のビルドにおいてインストール済の zlib を用いるようにし、LTO プラグインを有効に。
- 2017-01-01
  - [bdubbs] - flex-2.6.3 へのアップデート。 #4020 を Fix に。

- [bdubbs] - xz-5.2.3 へのアップデート。 #4021 を Fix に。
- 2016-12-21
  - [bdubbs] - gcc-6.3.0 へのアップデート。 #4018 を Fix に。
  - [bdubbs] - gmp-6.1.2 へのアップデート。 #4017 を Fix に。
  - [bdubbs] - iproute2-4.9.0 へのアップデート。 #4016 を Fix に。
  - [bdubbs] - man-pages-4.09 へのアップデート。 #4015 を Fix に。
  - [bdubbs] - man-db-2.7.6.1 へのアップデート。 #4014 を Fix に。
  - [bdubbs] - linux-4.9 へのアップデート。 #4013 を Fix に。
  - [bdubbs] - eudev-3.2.1 へのアップデート。 #4013 を Fix に。
- 2016-12-18
  - [dj] - x86_64 の出力を利用しているツールチェーンの健全性チェックを更新。
- 2016-12-17
  - [dj] - x86_64 ビルドにて {,/usr}/lib64 シンボリックリンクを削除。 ダイナミックローダーに対しては /lib64 ディレクトリへのシンボリックリンクを追加。 ディレクトリ配置の変更に伴い glibc, gcc, libcap のインストール手順を調整。
- 2016-12-10
  - [bdubbs] - linux-4.8.14 へのアップデート。 #4012 を Fix に。
  - [bdubbs] - grep-2.27 へのアップデート。 #4011 を Fix に。
  - [bdubbs] - 第5章の texinfo の configure 処理での false エラーについて言及。 #4004 を Fix に。
- 2016-12-03
  - [dj] - coreutils-8.26 へのアップデート。 #4010 を Fix に。
  - [dj] - linux-4.8.12 へのアップデートと最新の out of memory 問題への対処。 #4008 を Fix に。
  - [dj] - tzdata-2016j へのアップデート。 #4007 を Fix に。
- 2016-11-22
  - [dj] - linux-4.8.10 へのアップデート。 #4005 を Fix に。
  - [dj] - flex-2.6.2-fixes-1.patch の追加。 #4003 を Fix に。
- 2016-11-17
  - [renodr] - linux-4.8.8 へのアップデート。 #4002 を Fix に。
- 2016-11-09
  - [bdubbs] - vim-8.0.069 へのアップデート。 #4001 を Fix に。
  - [bdubbs] - tzdata-2016i へのアップデート。 #3999 を Fix に。
  - [bdubbs] - file-5.29 へのアップデート。 #3998 を Fix に。
  - [bdubbs] - flex-2.6.2 へのアップデート。 #3997 を Fix に。
  - [bdubbs] - linux-4.8.6 へのアップデート。 #3996 を Fix に。
  - [bdubbs] - util-linux-2.29 へのアップデート。 #3987 を Fix に。
- 2016-11-07
  - [bdubbs] - /etc/inputrc の機能を明確化。
- 2016-10-22
  - [ken] - iproute2-4.8.0 へのアップデート。 #3992 を Fix に。
  - [ken] - tzdata-2016h へのアップデート。 #3995 を Fix に。
  - [ken] - linux-4.8.3 へのアップデート。 #3994 を Fix に。
- 2016-10-09
  - [bdubbs] - linux-4.8.1 へのアップデート。 #3983 を Fix に。
  - [bdubbs] - mpfr-3.1.5 へのアップデート。 #3984 を Fix に。
  - [bdubbs] - tzdata-2016g へのアップデート。 #3985 を Fix に。
  - [bdubbs] - grep-2.26 へのアップデート。 #3988 を Fix に。

    - [bdubbs] - man-pages-4.08 へのアップデート。 #3991 を Fix に。
  - 2016-09-16
    - [bdubbs] - bash-4.4 へのアップデート。 #3981 を Fix に。
    - [bdubbs] - readline-7.0 へのアップデート。 #3982 を Fix に。
    - [bdubbs] - linux-4.7.4 へのアップデート。 #3980 を Fix に。
  - 2016-09-14
    - [bdubbs] - vim-8.0 へのアップデート。 #3979 を Fix に。
  - 2016-09-12
    - [bdubbs] - texinfo-6.3 へのアップデート。 #3978 を Fix に。
  - 2016-09-10
    - [bdubbs] - e2fsprogs-1.43.3 へのアップデート。 #3977 を Fix に。
  - 2016-09-09
    - [bdubbs] - gawk-4.1.4 へのアップデート。 #3973 を Fix に。
    - [bdubbs] - e2fsprogs-1.43.2 へのアップデート。 #3974 を Fix に。
    - [bdubbs] - linux-4.7.3 へのアップデート。 #3975 を Fix に。
    - [bdubbs] - util-linux-2.28.2 へのアップデート。 #3976 を Fix に。
  - 2016-09-07
    - [bdubbs] - LFS-7.10 リリース。

1.4. 変更履歴（日本語版）

ここに示すのは LFS ブックSVN-20170122日本語版（バージョン20170123）の変更履歴です。

日本語訳情報

本節はオリジナルの LFS ブックにはないものです。 LFS ブック日本語版の変更履歴を示すために設けています。

「SVN-20150123」という表記は、オリジナル LFS ブック SVN 版のバージョン番号を意味します。 また「Changeset 12345」という表記は、オリジナル XML ソースファイルの Subversion 管理下でのリビジョン（その参照ページ）を意味します。

変更履歴：

- 2017-01-23
  - [matsuand] - SVN-20170122, Changeset 11169 ～ 11172 対応。
- 2017-01-09
  - [matsuand] - SVN-20170108, Changeset 11159 ～ 11168 対応。
- 2016-12-25
  - [matsuand] - SVN-20161221, Changeset 11157, 11158 対応。
- 2016-12-19
  - [matsuand] - SVN-20161217, Changeset 11155, 11156 対応。
- 2016-12-18
  - [matsuand] - SVN-20161217, Changeset 11152, 11154 対応。
- 2016-12-07
  - [matsuand] - SVN-20161203, Changeset 11149 対応。
- 2016-11-26
  - [matsuand] - SVN-20161122, Changeset 11139 ～ 11147 対応。
- 2016-10-23
  - [matsuand] - SVN-20161022, Changeset 11134 ～ 11136 対応。
- 2016-10-11

    - [matsuand] - SVN-20161010, Changeset 11133 対応。
  - 2016-10-10
    - [matsuand] - SVN-20161009, Changeset 11131, 11132 対応。
  - 2016-10-02
    - [matsuand] - SVN-20160929, Changeset 11129, 11130 対応。
  - 2016-09-17
    - [matsuand] - SVN-20160916, Changeset 11127, 11128 対応。
  - 2016-09-13
    - [matsuand] - SVN-20160912, Changeset 11124 ～ 11126 対応。
  - 2016-09-10
    - [matsuand] - SVN-20160910, Changeset 11121 ～ 11123 対応。
  - 2016-09-10
    - [matsuand] - SVN-20160909, Changeset 11120 対応。
  - 2016-09-08
    - [matsuand] - LFS-7.10 リリース対応。

1.5. 情報源

1.5.1. FAQ

LFS システムの構築作業中にエラー発生したり、疑問を抱いたり、あるいは本書の誤記を発見した場合、まず手始めに http://www.linuxfromscratch.org/faq/ に示されている「よく尋ねられる質問」(Frequently Asked Questions; FAQ) を参照してください。

1.5.2. メーリングリスト

linuxfromscratch.org サーバーでは、LFS 開発プロジェクトのために多くのメーリングリストを立ち上げています。 このメーリングリストは主となる開発用とは別に、サポート用のものもあります。 FAQ だけでは問題解決に至らなかった場合に、次の手としてメーリングリストを検索する以下のサイトを参照してください。 http://www.linuxfromscratch.org/search.html

これ以外に、投稿の方法、アーカイブの配置場所などに関しては http://www.linuxfromscratch.org/mail.html を参照してください。

1.5.3. IRC

LFS コミュニティのメンバーの中には、インターネットリレーチャット (Internet Relay Chat; IRC) によるサポートを行っている者もいます。 ここに対して質問を挙げる場合は、FAQ やメーリングリストに同様の質問や答えがないかどうかを必ず確認してください。 IRC は irc.freenode.net において、チャネル名 #LFS-support により提供しています。

1.5.4. ミラーサイト

LFS プロジェクトは世界中にミラーサイトがあります。 これらを使えばウェブサイト参照やパッケージのダウンロードがより便利に利用できます。 以下のサイトによりミラーサイトの情報を確認してください。 http://www.linuxfromscratch.org/mirrors.html

1.5.5. 連絡先

質問やコメントは（上に示した）メーリングリストを活用してください。

1.6. ヘルプ

本書に基づく作業の中で問題が発生したり疑問が生まれた場合は http://www.linuxfromscratch.org/faq/#generalfaq にある FAQ のページを確認してください。 質問への回答が示されているかもしれません。 そこに回答が示されていなかったなら、問題の本質部分を見極めてください。 トラブルシューティングとして以下のヒントが有用かもしれません。 http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/errors.txt

FAQ では問題解決ができない場合、メーリングリスト http://www.linuxfromscratch.org/search.html を検索してください。

我々のサイトにはメーリングリストやチャットを通じての情報提供を行う LFS コミュニティがあります。（詳細は 1.5.「情報源」を参照してください。）我々は日々数多くのご質問を頂くのですが、たいていの質問は FAQ やメーリングリストを調べてみれば容易に答えが分かるものばかりです。 したがって我々が最大限の支援を提供できるよう、ある程度の問題はご自身で解決するようにしてください。 そうして頂くことで、我々はもっと特殊な状況に対するサポートを手厚く行っていくことができるからです。 いくら調べても解決に至らず、お問い合わせ頂く場合は、以下に示すように十分な情報を提示してください。

1.6.1. 特記事項

問題が発生し問い合わせをする場合には、以下に示す基本的な情報を含めてください。

- お使いの LFS ブックのバージョン。（本書の場合 SVN-20170122 ）
- LFS 構築に用いたホスト Linux のディストリビューションとそのバージョン。
- ホストシステム要件 におけるスクリプトの出力結果。
- 問題が発生したパッケージまたは本書内の該当の章または節。
- 問題となったエラーメッセージや状況に対する詳細な情報。
- 本書どおりに作業しているか、逸脱していないかの情報。

注記

本書の作業手順を逸脱していたとしても、 我々がお手伝いしないわけではありません 。 つまるところ LFS は個人的な趣味によって構築されるものです。 本書の手順とは異なるやり方を正確に説明してください。 そうすれば内容の評価、原因究明が容易になります。

1.6.2. Configure スクリプトの問題

configure スクリプトの実行時に何か問題が発生した時は config.log ファイルを確認してみてください。 configure スクリプトの実行中に、端末画面に表示されないエラーが、このファイルに出力されているかもしれません。 問合せを行う際には 該当する 行を示してください。

1.6.3. コンパイル時の問題

コンパイル時に問題が発生した場合は、端末画面への出力とともに、数々のファイルの内容も問題解決の糸口となります。 configure スクリプトと make コマンドの実行によって端末画面に出力される情報は重要です。 問い合わせの際には、出力されるすべての情報を示す必要はありませんが、関連する情報は十分に含めてください。 以下に示すのは make コマンドの実行時に出力される情報を切り出してみた例です。

```
gcc -DALIASPATH=\"/mnt/lfs/usr/share/locale:.\"
-DLOCALEDIR=\"/mnt/lfs/usr/share/locale\"
-DLIBDIR=\"/mnt/lfs/usr/lib\"
-DINCLUDEDIR=\"/mnt/lfs/usr/include\" -DHAVE_CONFIG_H -I. -I.
-g -O2 -c getopt1.c
gcc -g -O2 -static -o make ar.o arscan.o commands.o dir.o
expand.o file.o function.o getopt.o implicit.o job.o main.o
misc.o read.o remake.o rule.o signame.o variable.o vpath.o
default.o remote-stub.o version.o opt1.o
-lutil job.o: In function `load_too_high':
/lfs/tmp/make-3.79.1/job.c:1565: undefined reference
to `getloadavg'
collect2: ld returned 1 exit status
make[2]: *** [make] Error 1
make[2]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'
make[1]: *** [all-recursive] Error 1
make[1]: Leaving directory `/lfs/tmp/make-3.79.1'
make: *** [all-recursive-am] Error 2
```

たいていの方は、上のような場合に終わりの数行しか示してくれません。

```
make [2]: *** [make] Error 1
```

問題を解決するにはあまりに不十分な情報です。 そんな情報だけでは「何かがオカしい結果となった」ことは分かっても「なぜオカしい結果となった」のかが分からないからです。 上に示したのは、十分な情報を提供して頂くべきであることを例示したものであり、実行されたコマンドや関連するエラーメッセージが十分に含んだ例となっています。

インターネット上に、問い合わせを行う方法を示した優れた文章があります。 http://catb.org/~esr/faqs/smart-questions.html この文章に示される内容やヒントを参考にして、より確実に回答が得られるよう心がけてください。

第II部 ビルド作業のための準備

第2章 ホストシステムの準備

2.1. はじめに

この章では LFS システムの構築に必要となるホストツールを確認し、必要に応じてインストールします。 そして LFS システムをインストールするパーティションを準備します。 パーティションを生成しファイルシステムを構築した上で、これをマウントします。

2.2. ホストシステム要件

ホストシステムには以下に示すソフトウェアが必要であり、それぞれに示されているバージョン以降である必要があります。 最近の Linux ディストリビューションを利用するなら、あまり問題にはならないはずです。 ディストリビューションによっては、ソフトウェアのヘッダーファイル群を別パッケージとして提供しているものが多々あります。 例えば「<パッケージ名>-devel」であったり「<パッケージ名>-dev」といった具合です。 お使いのディストリビューションがそのような提供の仕方をしている場合は、それらもインストールしてください。

各パッケージにて、示しているバージョンより古いものでも動作するかもしれませんが、テストは行っていません。

- Bash-3.2 (/bin/sh が bash に対するシンボリックリンクまたはハードリンクである必要があります。)
- Binutils-2.17 (2.27 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Bison-2.3 (/usr/bin/yacc が bison へのリンクか、bison を実行するためのスクリプトである必要があります。)
- Bzip2-1.0.4
- Coreutils-6.9
- Diffutils-2.8.1
- Findutils-4.2.31
- Gawk-4.0.1 (/usr/bin/awk が gawk へのリンクである必要があります。)
- GCC-4.7 と C++ コンパイラである g++ (6.3.0 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)

注記

gcc が利用しているライブラリが矛盾した状態になっていて、LFS パッケージのビルドに失敗するという、そのようなディストリビューションがあることが報告されています。 そうであるかどうかは、/usr/lib または /usr/lib64 の中にある libgmp.la, libmpfr.la, libmpc.la を見てみてください。 これらは三つともすべて存在するか、逆にすべて存在しないことが正しいことであって、１つだけや２つだけという状態であってはなりません。 もしシステムがそのような状態になっていたら、 .la ファイルをリネームするか削除するか、あるいは存在していないライブラリのパッケージを再インストールしてください。

- Glibc-2.11 (2.24 以上のバージョンは、テストしていないためお勧めしません。)
- Grep-2.5.1a
- Gzip-1.3.12
- Linux Kernel-2.6.32

カーネルのバージョンを指定しているのは、第6章にて glibc をビルドする際にバージョンを指定するからであり、開発者の勧めに従うためです。 これは udev においても必要になります。

ホストシステムのカーネルバージョンが 2.6.32 より古い場合は、ここに示した条件に合致するカーネルに置き換えることが必要です。 これを実施するには２つの方法があります。 お使いの Linux システムのベンダーが 2.6.32 以上のバージョンのカーネルを提供しているかを調べることです。 提供していれば、それをインストールします。 もしそれがない場合や、あったとしてもそれをインストールしたくない場合、カーネルをご自身でコンパイルする必要があります。 カーネルのコンパイルと（ホストシステムが GRUB を利用しているとして）ブートローダーの設定方法については 第8章 を参照してください。

- M4-1.4.10
- Make-3.81
- Patch-2.5.4
- Perl-5.8.8
- Sed-4.1.5
- Tar-1.22
- Texinfo-4.7
- Xz-5.0.0

重要項目

上で示しているシンボリックリンクは、本書の説明を通じて LFS を構築するために必要となるものです。 シンボリックリンクが別のソフトウェア（例えば dash や mawk）を指し示している場合でもうまく動作するかもしれません。 しかしそれらに対して LFS 開発チームはテストを行っていませんしサポート対象としていません。 そのような状況に対しては作業手順の変更が必要となり、特定のパッケージに対しては追加のパッチを要するかもしれません。

ホストシステムに、上のソフトウェアの適切なバージョンがインストールされているかどうか、またコンパイルが適切に行えるかどうかは、以下のスクリプトを実行して確認することができます。

```
cat > version-check.sh << "EOF"
#!/bin/bash
# Simple script to list version numbers of critical development tools
export LC_ALL=C
bash --version | head -n1 | cut -d" " -f2-4
MYSH=$(readlink -f /bin/sh)
echo "/bin/sh -> $MYSH"
echo $MYSH | grep -q bash || echo "ERROR: /bin/sh does not point to bash"
unset MYSH

echo -n "Binutils: "; ld --version | head -n1 | cut -d" " -f3-
bison --version | head -n1

if [ -h /usr/bin/yacc ]; then
  echo "/usr/bin/yacc -> `readlink -f /usr/bin/yacc`";
elif [ -x /usr/bin/yacc ]; then
  echo yacc is `/usr/bin/yacc --version | head -n1`
else
  echo "yacc not found"
fi

bzip2 --version 2>&1 < /dev/null | head -n1 | cut -d" " -f1,6-
echo -n "Coreutils: "; chown --version | head -n1 | cut -d")" -f2
diff --version | head -n1
find --version | head -n1
gawk --version | head -n1

if [ -h /usr/bin/awk ]; then
  echo "/usr/bin/awk -> `readlink -f /usr/bin/awk`";
elif [ -x /usr/bin/awk ]; then
  echo awk is `/usr/bin/awk --version | head -n1`
else
  echo "awk not found"
fi
```

```
gcc --version | head -n1
g++ --version | head -n1
ldd --version | head -n1 | cut -d" " -f2-  # glibc version
grep --version | head -n1
gzip --version | head -n1
cat /proc/version
m4 --version | head -n1
make --version | head -n1
patch --version | head -n1
echo Perl `perl -V:version`
sed --version | head -n1
tar --version | head -n1
makeinfo --version | head -n1
xz --version | head -n1
echo 'int main(){}' > dummy.c && g++ -o dummy dummy.c
if [ -x dummy ]
  then echo "g++ compilation OK";
  else echo "g++ compilation failed"; fi
rm -f dummy.c dummy
EOF

bash version-check.sh
```

またライブラリの整合性をいくつかチェックします。

```
cat > library-check.sh << "EOF"
#!/bin/bash
for lib in lib{gmp,mpfr,mpc}.la; do
  echo $lib: $(if find /usr/lib* -name $lib|
               grep -q $lib;then :;else echo not;fi) found
done
unset lib
EOF

bash library-check.sh
```

上のスクリプトによって識別するファイルは、すべて存在しているか、またはすべて存在しないものであるはずです。1つだけ、あるいは2つだけしか存在しないなら不適切です。

2.3. 作業段階ごとの LFS 構築

LFS は一度にすべてを構築するものとして説明を行っています。 つまり作業途中にシステムをシャットダウンすることは想定していません。 ただこれは、システム構築を立ち止まることなくやり続けろと言っているわけではありません。 LFS 構築を途中から再開する場合には、どの段階からなのかに応じて、特定の作業を再度行うことが必要となります。

2.3.1. 第1章～第4章

これらの章ではホストシステム上で作業を行います。 作業を再開する際には以下に注意します。

- 2.4節以降において root ユーザーにより実行する作業では LFS 環境変数の設定が必要です。 さらにそれはrootユーザーにおいて 設定されていなければなりません。

2.3.2. 第5章

- /mnt/lfs パーティションがマウントされていることが必要です。
- 第5章における処理をすべて、ユーザー lfs により実施することが必要です。 第5章における処理の実施前には su - lfs を行うことが必要です。
- 5.3.「全般的なコンパイル手順」に示す内容は極めて重要です。 パッケージのインストール作業に少しでも疑わしい点があったならば、展開作業を行った tarball やその展開ディレクトリをいったん消去し、再度展開し作業をやり直してください。

2.3.3. 第6章～第8章

- /mnt/lfs パーティションがマウントされていることが必要です。

- chroot 環境に入った際には、環境変数 LFS が root ユーザーにおいて設定されている必要があります。 それ以外で LFS 変数は使いません。
- 仮想ファイルシステムがマウントされている必要があります。 これは chroot 環境への移行前後において、ホストの仮想端末を変更することで実現します。 root ユーザーとなって 6.2.2.「/dev のマウントと有効化」 と 6.2.3.「仮想カーネルファイルシステムのマウント」 を実行する必要があります。

2.4. 新しいパーティションの生成

どのようなオペレーティングシステムでも同じことが言えますが、本システムでもインストール先は専用のパーティションを用いることにします。 LFS システムを構築していくには、利用可能な空のパーティションか、あるいはパーティション化していないものをパーティションとして生成して利用することにします。

最小限のシステムであれば 6 GB 程度のディスク容量があれば十分です。 これだけあればパッケージやソースの収容に十分で、そこでコンパイル作業を行っていくことができます。 しかし主要なシステムとして LFS を構築するなら、さらにソフトウェアをインストールすることになるはずなので、さらなる容量が必要となります。 20 GB ほどのパーティションがあれば、増量していくことを考えても十分な容量でしょう。 LFS システムそのものがそれだけの容量を要するわけではありません。 これだけの容量は十分なテンポラリ領域のために必要となるものであり、また LFS の完成後に機能追加していくためのものです。 パッケージをインストールした後はテンポラリ領域は開放されますが、コンパイルの間は多くの領域を利用します。

コンパイル処理において十分なランダムアクセスメモリ（Random Access Memory; RAM）を確保できるとは限りませんので、スワップ（swap）領域をパーティションとして設けるのが普通です。 この領域へは利用頻度が低いデータを移すことで、アクティブな処理プロセスがより多くのメモリを確保できるようにカーネルが制御します。 swap パーティションは、LFS システムのものとホストシステムのものを共有することもできます。 その場合は新しいパーティションを作る必要はありません。

ディスクのパーティション生成は cfdisk コマンドや fdisk コマンドを使って行います。 コマンドラインオプションにはパーティションを生成するハードディスク名を指定します。 例えば IDE（Integrated Drive Electronics）ディスクであれば /dev/sda といったものになります。 そして Linux ネイティブパーティションと、必要なら swap パーティションを生成します。 プログラムの利用方法について不明であれば cfdisk(8) や fdisk(8) を参照してください。

注記

上級者の方であれば別のパーティション設定も可能です。 最新の LFS システムは、ソフトウェア RAID アレーや、LVM 論理ボリュームを利用することができます。 ただしこれらを実現するには initramfs が必要であり、高度なトピックです。 こういったパーティション設定は、LFS 初心者にはお勧めしません。

新しく生成したパーティションの名前を覚えておいてください。（例えば sda5 など。）本書ではこのパーティションを LFS パーティションとして説明していきます。 また swap パーティションの名前も忘れないでください。 これらの名前は、後に生成する /etc/fstab ファイルに記述するために必要となります。

2.4.1. パーティションに関するその他の問題

LFS メーリングリストにてパーティションに関する有用情報を望む声をよく聞きます。 これは個人の趣味にもよる極めて主観的なものです。 既存ディストリビューションが採用しているデフォルトのパーティションサイズと言えば、たいていはスワップパーティションを小容量で配置した上で、そのドライブ内の残容量すべてのサイズを割り当てています。 このようなサイズ設定は LFS では最適ではありません。その理由はいくつかあります。 そのようにしてしまうと、複数のディストリビューションの導入時や LFS 構築時に、柔軟さを欠き、構築がしにくくなります。 バックアップを取る際にも無用な時間を要し、ファイルシステム上にて不適当なファイル配置を生み出すため、余計なディスク消費を発生させます。

2.4.1.1. ルートパーティション

ルートパーティション（これを /root ディレクトリと混同しないでください）は 10 GB もあれば、どんなシステムであっても妥当なところでしょう。 それだけあれば LFS 構築も、また BLFS においてもおそらく十分なはずです。 実験的に複数パーティションを設けるとしても、これだけのサイズは必要です。

2.4.1.2. スワップパーティション

既存のディストリビューションは、たいていはスワップパーティションを自動的に生成します。 一般にスワップパーティションのサイズは、物理 RAM サイズの二倍の容量とすることが推奨されています。 しかしそれだけの容量はほとんど必要ありません。 ディスク容量が限られているなら、スワップパーティションの容量を 2GB 程度に抑えておいて、ディスクスワップがどれだけ発生するかを確認してみてください。

スワップは好ましいことではありません。 一般にスワップが発生しているかどうかは、ディスクアクセスの様子やコマンド実行時にシステムがどのように反応するかを見てみれば分かります。 例えば 5GB くらいのファイルを編集するといった極端なコマンド実行を行ってみて、スワップが起きるかどうかを確認することが重要です。 スワップがごく普通に発生するようであれば、RAMを増設するのが適切です。

2.4.1.3. Grub バイオスパーティション

GUID パーティションテーブル (GUID Partition Table; GPT) においてブートディスク をパーティショニングした場合、1MB 程度の小さなパーティションを生成しておく必要があります。 このパーティションはフォーマットされておらず、ブートローダーのインストール中に GRUB によって利用されます。 通常このパーティションは、 fdisk を用いた場合には 'BIOS Boot' と名付けられます。 また gdisk を用いた場合はEF02 というコード名が与えられます。

注記

Grub バイオスパーティションは BIOS がシステムをブートするために用いているドライブ上にある必要があります。 これは必ずしも LFS ルートパーティションがあるドライブと同一であるわけではありません。 システム上のドライブはすべてがパーティションテーブルタイプが同一であるとは限りません。 Grub バイオスパーティションに対して求められることは、ブートディスクのパーティションタイプに対して必要になることです。

2.4.1.4. 有用なパーティション

この他にも、必要のないパーティションというものがいくつかあります。 しかしディスクレイアウトを取り決めるには考えておく必要があります。 以下に示すのは十分な説明ではありませんが、一つの目安として示すものです。

- /boot - 作成することが強く推奨されます。 カーネルやブート情報を収納するために利用するパーティションです。 容量の大きなディスクの場合、ブート時に問題が発生することがあるので、これを回避するには、一つ目のディスクドライブの物理的に一番最初のパーティションを選びます。 パーティションサイズを 100MB とすればそれで十分です。
- /home - 作成することが強く推奨されます。 複数のディストリビューションや LFS の間で、ホームディレクトリおよびユーザー固有の設定を共有することができます。 パーティションサイズは、ある程度大きく取ることになりますが、利用可能なディスク残容量に依存します。
- /usr - /usr ディレクトリを別パーティションとして設けるのは、一般にはシンクライアント (thin client) 向けサーバーやディスクレスワークステーションにおいて行われます。 普通 LFS では必要ありません。 5 GB くらいの容量があれば、たいていのアプリケーションをインストールするのに十分なものでしょう。
- /opt - このディレクトリは BLFS などにおいて、Gnome や KDE といった巨大なパッケージをいくつもインストールする際に活用されます。 /usr ディレクトリ以外にインストールする場合です。 これを別パーティションとするなら、一般的には 5 ～ 10 GB 程度が適当でしょう。
- /tmp - /tmp ディレクトリを別パーティションとするのは普通は行いません。 ただしシンクライアント (thin client) では有効です。 別パーティションとする場合であっても、数GB程度あれば十分です。
- /usr/src - このパーティションは LFS のパッケージソースを収容し LFS ビルド工程にて共用するものとして有効に利用することができます。 さらに BLFS パッケージソースを収容しビルドする場所としても利用可能です。 30～50GB くらいの容量があれば、十分なものです。

ブート時に自動的にパーティションをマウントしたい場合は **/etc/fstab** ファイルにて設定します。 パーティションの設定方法については 8.2.「/etc/fstab ファイルの生成」で説明しています。

2.5. ファイルシステムの生成

空のパーティションが準備できたのでファイルシステムを作ります。 LFS では Linux カーネルが識別できるならどのようなファイルシステムを用いるのでも構いません。 ただ最も標準的なものとして ext3 と ext4 があります。 ファイルシステムをどのようにするかは単純な話ではなく、収容するファイルの性質やパーティションサイズにも依存します。 例えば以下のとおりです。

ext2
: 比較的小容量のパーティションで、/boot のようにあまり更新されないパーティションに対して適してます。

ext3
: ext2 の拡張でありジャーナルを含みます。 このジャーナルとは、不測のシャットダウン時などに、パーティション状態の復元に用いられます。 汎用的なファイルシステムとして用いることができます。

ext4
: パーティションタイプとして用いられる ext 系の最新バージョンです。 新たな機能として、ナノ秒単位のタイムスタンプの提供、大容量ファイル (16 TB) の生成利用、処理性能の改善が加えられています。

この他のファイルシステムとして、FAT32, NTFS, ReiserFS, JFS, XFS などがあり、それぞれに特定の目的に応じて活用されています。 ファイルシステムの詳細については http://en.wikipedia.org/wiki/Comparison_of_file_systems を参照してください。

LFS ではルートファイルシステム（/）として ext4 を用いるものとします。 LFS 用のパーティションに対して ext4 ファイルシステムを生成するために以下のコマンドを実行します。

```
mkfs -v -t ext4 /dev/<xxx>
```

既に存在している swap パーティションを用いることにした場合は、初期化操作を行う必要はありません。 新しい swap パーティションを作成した場合は、以下のコマンドを実行して初期化を行う必要があります。

```
mkswap /dev/<yyy>
```

<yyy> の部分は swap パーティションの名に合わせて置き換えてください。

2.6. 変数 $LFS の設定

本書の中では環境変数 LFS を何度も用います。 LFS システムのビルド作業時には常に定義しておくことを忘れないでください。 この変数は LFS パーティションとして選んだマウントポイントを定義します。 例えば /mnt/lfs というものです。 他のものとしても構いません。 LFS を別のパーティションにビルドする場合、このマウントポイントはそのパーティションを示すようにしてください。 ディレクトリを取り決めたら、変数を以下のコマンドにより設定します。

```
export LFS=/mnt/lfs
```

上のように変数を定義しておくと、例えば mkdir $LFS/tools といったコマンドを、この通りに入力することで実行できるので便利です。 これが実行されると、シェルが「$LFS」を「/mnt/lfs」に（あるいは変数にセットされている別のディレクトリに）置換して処理してくれます。

注意

$LFS が常にセットされていることを忘れずに確認してください。 特に、別ユーザーでログインし直した場合（su コマンドによって root ユーザーや別のユーザーでログインした場合）には、忘れずに確認してください。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が LFS システムのビルドディレクトリであることを確認してください。 本書に示す例に従っている場合は /mnt/lfs が表示されるはずです。 出力が正しくない場合は、冒頭に示したコマンド実行により $LFS 変数に正しいディレクトリを設定してください。

注記

LFS 変数を確実に設定しておくために、ローカルな .bash_profile および /root/.bash_profile に上記変数を export するコマンドを記述しておく方法もあります。 なお /etc/passwd ファイルにて LFS 変数を必要とするユーザーは、シェルとして bash を利用するようにしてください。 /root/.bash_profile ファイルはログインプロセスの一部として機能するためです。

2.7. 新しいパーティションのマウント

ファイルシステムが生成できたら、パーティションをアクセスできるようにします。 これを行うためにはマウントポイントを定める必要があります。 本書では前に示したように、環境変数 LFS に指定されたディレクトリに対してファイルシステムがマウントされるものとします。

マウントポイントを生成し、LFS ファイルシステムをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS
```

<xxx> の部分は LFS パーティション名に合わせて置き換えてください。

LFS に対して複数のパーティションを用いる場合（例えば / と /usr が別パーティションである場合）は、以下を実行してそれぞれをマウントします。

```
mkdir -pv $LFS
mount -v -t ext4 /dev/<xxx> $LFS
mkdir -v $LFS/usr
mount -v -t ext4 /dev/<yyy> $LFS/usr
```

<*xxx*> や <*yyy*> の部分は、それぞれ適切なパーティション名に置き換えてください。

この新しいパーティションは特別な制限オプション（nosuid、nodev など）は設定せずにマウントします。 mount コマンドの実行時に引数を与えずに実行すれば、LFS パーティションがどのようなオプション設定によりマウントされているかが分かります。 もし nosuid、nodevオプションが設定されていたら、マウントし直してください。

swap パーティションを用いる場合は、swapon コマンドを使って利用可能にしてください。

```
/sbin/swapon -v /dev/<zzz>
```

<*zzz*> の部分は swap パーティション名に置き換えてください。

こうして動作環境が整いました。次はパッケージのダウンロードです。

第3章 パッケージとパッチ

3.1. はじめに

この章では基本的な Linux システム構築のためにダウンロードするべきパッケージの一覧を示します。 各パッケージのバージョンは動作が確認されているものを示しており、本書ではこれに基づいて説明します。 ここに示すバージョンよりも新しいものは使わないようお勧めします。 あるバージョンでビルドしたコマンドが、新しいバージョンでも動作する保証はないからです。 最新のパッケージの場合、何かの対処を要するかもしれません。 そのような対処方法は本書の開発版において開発され安定化が図られるかもしれません。

ダウンロードサイトは常にアクセス可能であるとは限りません。 本書が提供された後にダウンロードする場所が変更になっていたら Google (http://www.google.com/) を使って検索してみてください。 たいていのパッケージを見つけ出すことが出来るはずです。 それでも見つけられなかったら http://www.linuxfromscratch.org/lfs/packages.html#packages に示されている方法に従って入手してください。

ダウンロードしたパッケージやパッチは、ビルド作業を通じて常に利用可能な場所を選んで保存しておく必要があります。 またソース類を伸張してビルドを行うための作業ディレクトリも必要です。 そこで本書では $LFS/sources ディレクトリを用意し、ソースやパッチの保存場所とし、そこでビルドを行う作業ディレクトリとします。 このディレクトリにしておけば LFS パーティションに位置することから LFS ビルドを行う全工程において常に利用することが出来ます。

ダウンロードを行う前にまずはそのようなディレクトリを生成します。 root ユーザーとなって以下のコマンドを実行します。

```
mkdir -v $LFS/sources
```

このディレクトリには書き込み権限とスティッキーを与えます。 「スティッキー (Sticky)」は複数ユーザーに対して書き込み権限が与えられても、削除については所有者しか実行出来ないようにします。 以下のコマンドによって書き込み権限とスティッキーを定めます。

```
chmod -v a+wt $LFS/sources
```

パッケージとパッチのダウンロードを簡単に行う方法として wget-list を利用する方法があります。 これは以下のように wget の入力引数に指定し利用します。

```
wget --input-file=wget-list --continue --directory-prefix=$LFS/sources
```

日本語訳情報

オリジナルの LFS ブックでは、wget-list 内に含まれる、各種パッケージの入手 URL が主に米国サイトとなっています。一方、日本国内にて作業する方であれば、例えば GNU のパッケージ類は国内に数多くのミラーサイトが存在するため、そちらから取得するのが適切でしょう。これはネットワークリソースを利用する際のマナーとも言えるものです。堅苦しい話をするつもりはありません。国内サイトから入手することにすればダウンロード速度が断然早くなります。メリットは大きいと思いますのでお勧めします。

国内から入手可能なものは国内から入手することを目指し、訳者は以下の手順により wget-list を書き換えて利用しています。一例として国内には理化学研究所のサイト (ftp.riken.jp) があります。そこでは GNU パッケージ類がミラー提供されています。そこで wget-list にて ftp.gnu.org を指し示している URL を ftp.riken.jp に置き換えます。また同じ方法で Linux カーネル、Perl、Vim の入手先も変更します。

```
mv wget-list{,.orig}
cat > wget-list-ja.sed << "EOF"
s|ftp\.gnu\.org/gnu/|ftp.riken.jp/GNU/gnu/|g
s|https://www\.kernel\.org/pub/linux/|http://ftp.riken.jp/Linux/kernel.org/linux/|g
s|www\.cpan\.org|ftp.riken.jp/lang/CPAN|g
s|ftp\.vim\.org|ftp.jp.vim.org|g
EOF
sed -f wget-list-ja.sed wget-list.orig > wget-list
rm wget-list-ja.sed
```

上記はあくまで一例です。しかもすべてのパッケージについて、国内サイトからの入手となるわけではありません。ただし上記を行うだけでも、大半のパッケージは国内サイトを向くことになります。上記にて国内のミラーサイトは、ネットワーク的に "より近い" ものを選んでください。サイトを変えた場合は、パッケージの URL が異なることが多々あるため、適宜 sed 置換内容を書き換えてください。

注意する点として各パッケージが更新されたばかりの日付では、国内ミラーサイトへの同期、反映が間に合わず、ソース類が存在しないことが考えられます。その場合にはパッケージ取得に失敗してしまいます。そこで wget-list と wget-list.orig を順に利用し、かつ wget コマンドにて -N オプションを使って（取得済のものはスキップするようにして）以下のコマンドを実行すれば、確実にすべてのパッケージを入手することができます。

```
wget -N --input-file=wget-list --continue --directory-prefix=$LFS/sources
wget -N --input-file=wget-list.orig --continue --directory-prefix=$LFS/sources
```

さらに LFS-7.0 からは md5sums というファイルを用意しています。 このファイルは、入手した各種パッケージのファイルが正しいことを確認するために用いることができます。 このファイルを $LFS/sources に配置して以下を実行してください。

```
pushd $LFS/sources
md5sum -c md5sums
popd
```

3.2. 全パッケージ

以下に示すパッケージをダウンロードするなどしてすべて入手してください。

• Acl (2.2.52) - 380 KB:
ダウンロード: http://download.savannah.gnu.org/releases/acl/acl-2.2.52.src.tar.gz
MD5 sum: a61415312426e9c2212bd7dc7929abda

• Attr (2.4.47) - 336 KB:
ホームページ: http://savannah.nongnu.org/projects/attr
ダウンロード: http://download.savannah.gnu.org/releases/attr/attr-2.4.47.src.tar.gz
MD5 sum: 84f58dec00b60f2dc8fd1c9709291cc7

• Autoconf (2.69) - 1,186 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/autoconf/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/autoconf/autoconf-2.69.tar.xz
MD5 sum: 50f97f4159805e374639a73e2636f22e

• Automake (1.15) - 1,462 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/automake/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/automake/automake-1.15.tar.xz
MD5 sum: 9a1ddb0e053474d9d1105cfe39b0c48d

• Bash (4.4) - 9,158 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/bash/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/bash/bash-4.4.tar.gz
MD5 sum: 148888a7c95ac23705559b6f477dfe25

• Bc (1.06.95) - 288 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/bc/
ダウンロード: http://alpha.gnu.org/gnu/bc/bc-1.06.95.tar.bz2
MD5 sum: 5126a721b73f97d715bb72c13c889035

• Binutils (2.27) - 25,488 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/binutils/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/binutils/binutils-2.27.tar.bz2
MD5 sum: 2869c9bf3e60ee97c74ac2a6bf4e9d68

• Bison (3.0.4) - 1,928 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/bison/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/bison/bison-3.0.4.tar.xz
MD5 sum: c342201de104cc9ce0a21e0ad10d4021

• Bzip2 (1.0.6) - 764 KB:
ホームページ: http://www.bzip.org/
ダウンロード: http://www.bzip.org/1.0.6/bzip2-1.0.6.tar.gz
MD5 sum: 00b516f4704d4a7cb50a1d97e6e8e15b

• Check (0.10.0) - 752 KB:
ホームページ: https://libcheck.github.io/check
ダウンロード: http://sourceforge.net/projects/check/files/check/0.10.0/check-0.10.0.tar.gz
MD5 sum: 53c5e5c77d090e103a17f3ed7fd7d8b8

• Coreutils (8.26) - 5,676 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/coreutils/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/coreutils/coreutils-8.26.tar.xz
MD5 sum: d5aa2072f662d4118b9f4c63b94601a6

• DejaGNU (1.6) - 512 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/dejagnu/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/dejagnu/dejagnu-1.6.tar.gz
MD5 sum: 1fdc2eb0d592c4f89d82d24dfdf02f0b

• Diffutils (3.5) - 1,330 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/diffutils/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/diffutils/diffutils-3.5.tar.xz
MD5 sum: 569354697ff1cfc9a9de3781361015fa

• Eudev (3.2.1) - 1,778 KB:
ダウンロード: http://dev.gentoo.org/~blueness/eudev/eudev-3.2.1.tar.gz
MD5 sum: 49f71f6c271ffa95b3c20d757d45c2e5

• E2fsprogs (1.43.3) - 7,233 KB:
ホームページ: http://e2fsprogs.sourceforge.net/
ダウンロード: http://downloads.sourceforge.net/project/e2fsprogs/e2fsprogs/v1.43.3/e2fsprogs-1.43.3.tar.gz
MD5 sum: ec0cd4faac71b2fcf9f73733e4d50ead

• Expat (2.2.0) - 405 KB:
ホームページ: http://expat.sourceforge.net/
ダウンロード: http://prdownloads.sourceforge.net/expat/expat-2.2.0.tar.bz2
MD5 sum: 2f47841c829facb346eb6e3fab5212e2

• Expect (5.45) - 614 KB:
ホームページ: http://expect.sourceforge.net/
ダウンロード: http://prdownloads.sourceforge.net/expect/expect5.45.tar.gz
MD5 sum: 44e1a4f4c877e9ddc5a542dfa7ecc92b

• File (5.29) - 766 KB:
ホームページ: http://www.darwinsys.com/file/
ダウンロード: ftp://ftp.astron.com/pub/file/file-5.29.tar.gz
MD5 sum: b7b57b36b577c9cede2f2d1342203302

注記

File パッケージ (5.29) は上記の場所から入手できなくなっているかもしれません。 これはサイト管理者が、新バージョンのリリースと同時に古いバージョンを削除することがあるためです。 適切なバージョンをダウンロードするためには、以下に示す別のサイトを参照してください。 http://www.linuxfromscratch.org/lfs/download.html#ftp

• Findutils (4.6.0) - 3,692 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/findutils/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/findutils/findutils-4.6.0.tar.gz
MD5 sum: 9936aa8009438ce185bea2694a997fc1

• Flex (2.6.3) - 1,373 KB:
ホームページ: http://flex.sourceforge.net
ダウンロード: https://github.com/westes/flex/releases/download/v2.6.3/flex-2.6.3.tar.gz
MD5 sum: a5f65570cd9107ec8a8ec88f17b31bb1

• Gawk (4.1.4) - 2,313 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gawk/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gawk/gawk-4.1.4.tar.xz
MD5 sum: 4e7dbc81163e60fd4f0b52496e7542c9

• GCC (6.3.0) - 97,562 KB:
ホームページ: http://gcc.gnu.org/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gcc/gcc-6.3.0/gcc-6.3.0.tar.bz2
MD5 sum: 677a7623c7ef6ab99881bc4e048debb6

• GDBM (1.12) - 822 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gdbm/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gdbm/gdbm-1.12.tar.gz
MD5 sum: 9ce96ff4c99e74295ea19040931c8fb9

• Gettext (0.19.8.1) - 7,041 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gettext/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gettext/gettext-0.19.8.1.tar.xz
MD5 sum: df3f5690eaa30fd228537b00cb7b7590

• Glibc (2.24) - 13,237 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/libc/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/glibc/glibc-2.24.tar.xz
MD5 sum: 97dc5517f92016f3d70d83e3162ad318

• GMP (6.1.2) - 1,901 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gmp/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gmp/gmp-6.1.2.tar.xz
MD5 sum: f58fa8001d60c4c77595fbbb62b63c1d

• Gperf (3.1) - 1188 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gperf/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gperf/gperf-3.1.tar.gz
MD5 sum: 9e251c0a618ad0824b51117d5d9db87e

• Grep (2.27) - 1,329 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/grep/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/grep/grep-2.27.tar.xz
MD5 sum: 6138dd227c39d4a25f81eea76a44d4cb

• Groff (1.22.3) - 4,091 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/groff/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/groff/groff-1.22.3.tar.gz
MD5 sum: cc825fa64bc7306a885f2fb2268d3ec5

• GRUB (2.02~beta3) - 5,890 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/grub/
ダウンロード: http://alpha.gnu.org/gnu/grub/grub-2.02~beta3.tar.xz
MD5 sum: ab399fc6f74a97d66ff77f04b743149c

• Gzip (1.8) - 712 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/gzip/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/gzip/gzip-1.8.tar.xz
MD5 sum: f7caabb65cddc1a4165b398009bd05b9

• Iana-Etc (2.30) - 201 KB:
ホームページ: http://freecode.com/projects/iana-etc
ダウンロード: http://anduin.linuxfromscratch.org/LFS/iana-etc-2.30.tar.bz2
MD5 sum: 3ba3afb1d1b261383d247f46cb135ee8

• Inetutils (1.9.4) - 1,333 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/inetutils/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/inetutils/inetutils-1.9.4.tar.xz
MD5 sum: 87fef1fa3f603aef11c41dcc097af75e

• Intltool (0.51.0) - 159 KB:
ホームページ: http://freedesktop.org/wiki/Software/intltool
ダウンロード: http://launchpad.net/intltool/trunk/0.51.0/+download/intltool-0.51.0.tar.gz
MD5 sum: 12e517cac2b57a0121cda351570f1e63

• IPRoute2 (4.9.0) - 599 KB:
ホームページ: https://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/utils/net/iproute2/iproute2-4.9.0.tar.xz
MD5 sum: 44a8371a4b2c40e48e4c9f98cbd41391

• Kbd (2.0.4) - 1,008 KB:
ホームページ: http://ftp.altlinux.org/pub/people/legion/kbd
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/utils/kbd/kbd-2.0.4.tar.xz
MD5 sum: c1635a5a83b63aca7f97a3eab39ebaa6

• Kmod (23) - 440 KB:
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/utils/kernel/kmod/kmod-23.tar.xz
MD5 sum: 3cf469f40ec2ed51f56ba45ea03793e7

• Less (481) - 310 KB:
ホームページ: http://www.greenwoodsoftware.com/less/
ダウンロード: http://www.greenwoodsoftware.com/less/less-481.tar.gz
MD5 sum: 50ef46065c65257141a7340123527767

• LFS-Bootscripts (20150222) - 32 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/lfs/downloads/development/lfs-bootscripts-20150222.tar.bz2
MD5 sum: f973e50b1b2da4a553898403498af17a

• Libcap (2.25) - 64 KB:
ホームページ: https://sites.google.com/site/fullycapable/
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/libs/security/linux-privs/libcap2/libcap-2.25.tar.xz
MD5 sum: 6666b839e5d46c2ad33fc8aa2ceb5f77

• Libpipeline (1.4.1) - 787 KB:
ホームページ: http://libpipeline.nongnu.org/
ダウンロード: http://download.savannah.gnu.org/releases/libpipeline/libpipeline-1.4.1.tar.gz
MD5 sum: e54590ec68d6c1239f67b5b44e92022c

• Libtool (2.4.6) - 951 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/libtool/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/libtool/libtool-2.4.6.tar.xz
MD5 sum: 1bfb9b923f2c1339b4d2ce1807064aa5

• Linux (4.9.5) - 91,009 KB:
ホームページ: http://www.kernel.org/
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/kernel/v4.x/linux-4.9.5.tar.xz
MD5 sum: 88c89fc9fca0fdb3b5fbf3f8f232c626

注記

Linux カーネルはわりと頻繁に更新されます。 多くの場合はセキュリティ脆弱性の発見によるものです。 特に正誤情報 (errata) のページにて説明がない限りは、入手可能な最新の 4.9.x カーネルを用いてください。 低速度のネットワークや高負荷の帯域幅を利用するユーザーが Linux カーネルをアップデートしようとする場合は、同一バージョンのカーネルパッケージとそのパッチを個別にダウンロードする方法もあります。 その場合、時間の節約を図ることができ、あるいはマイナーバージョンが同一であれば複数パッチを当ててアップグレードする作業時間の短縮が図れます。

• M4 (1.4.18) - 1,180 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/m4/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/m4/m4-1.4.18.tar.xz
MD5 sum: 730bb15d96fffe47e148d1e09235af82

• Make (4.2.1) - 1,375 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/make/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/make/make-4.2.1.tar.bz2
MD5 sum: 15b012617e7c44c0ed482721629577ac

• Man-DB (2.7.6.1) - 1,506 KB:
ホームページ: http://www.nongnu.org/man-db/
ダウンロード: http://download.savannah.gnu.org/releases/man-db/man-db-2.7.6.1.tar.xz
MD5 sum: 2948d49d0ed7265f60f83aa4a9ac9268

• Man-pages (4.09) - 1,486 KB:
ホームページ: http://www.kernel.org/doc/man-pages/
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/docs/man-pages/man-pages-4.09.tar.xz
MD5 sum: 91c721409bbf823d8f62bee3a1fe8ae3

• MPC (1.0.3) - 655 KB:
ホームページ: http://www.multiprecision.org/
ダウンロード: http://www.multiprecision.org/mpc/download/mpc-1.0.3.tar.gz
MD5 sum: d6a1d5f8ddea3abd2cc3e98f58352d26

• MPFR (3.1.5) - 1,101 KB:
ホームページ: http://www.mpfr.org/
ダウンロード: http://www.mpfr.org/mpfr-3.1.5/mpfr-3.1.5.tar.xz
MD5 sum: c4ac246cf9795a4491e7766002cd528f

• Ncurses (6.0) - 3,059 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/ncurses/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu//ncurses/ncurses-6.0.tar.gz
MD5 sum: ee13d052e1ead260d7c28071f46eefb1

• Patch (2.7.5) - 711 KB:
ホームページ: http://savannah.gnu.org/projects/patch/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/patch/patch-2.7.5.tar.xz
MD5 sum: e3da7940431633fb65a01b91d3b7a27a

• Perl (5.24.1) - 13,759 KB:
ホームページ: http://www.perl.org/
ダウンロード: http://www.cpan.org/src/5.0/perl-5.24.1.tar.bz2
MD5 sum: 178ee0e8fa544dbc76d99cf041e2c9f0

• Pkg-config (0.29.1) - 1,967 KB:
ホームページ: http://www.freedesktop.org/wiki/Software/pkg-config
ダウンロード: https://pkg-config.freedesktop.org/releases/pkg-config-0.29.1.tar.gz
MD5 sum: f739a28cae4e0ca291f82d1d41ef107d

• Procps (3.3.12) - 826 KB:
ホームページ: http://sourceforge.net/projects/procps-ng
ダウンロード: http://sourceforge.net/projects/procps-ng/files/Production/procps-ng-3.3.12.tar.xz
MD5 sum: 957e42e8b193490b2111252e4a2b443c

• Psmisc (22.21) - 447 KB:
ホームページ: http://psmisc.sourceforge.net/
ダウンロード: http://downloads.sourceforge.net/project/psmisc/psmisc/psmisc-22.21.tar.gz
MD5 sum: 935c0fd6eb208288262b385fa656f1bf

• Readline (7.0) - 2,842 KB:
ホームページ: http://cnswww.cns.cwru.edu/php/chet/readline/rltop.html
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/readline/readline-7.0.tar.gz
MD5 sum: 205b03a87fc83dab653b628c59b9fc91

• Sed (4.3) - 1,140 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/sed/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/sed/sed-4.3.tar.xz
MD5 sum: 1957fe58dffa4a4106c1f1d7cc8dee18

• Shadow (4.2.1) - 1,558 KB:
ダウンロード: http://pkg-shadow.alioth.debian.org/releases/shadow-4.2.1.tar.xz
MD5 sum: 2bfafe7d4962682d31b5eba65dba4fc8

• Sysklogd (1.5.1) - 88 KB:
ホームページ: http://www.infodrom.org/projects/sysklogd/
ダウンロード: http://www.infodrom.org/projects/sysklogd/download/sysklogd-1.5.1.tar.gz
MD5 sum: c70599ab0d037fde724f7210c2c8d7f8

• Sysvinit (2.88dsf) - 108 KB:
ホームページ: http://savannah.nongnu.org/projects/sysvinit
ダウンロード: http://download.savannah.gnu.org/releases/sysvinit/sysvinit-2.88dsf.tar.bz2
MD5 sum: 6eda8a97b86e0a6f59dabbf25202aa6f

• Tar (1.29) - 1,950 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/tar/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/tar/tar-1.29.tar.xz
MD5 sum: a1802fec550baaeecff6c381629653ef

• Tcl (8.6.6) - 5,731 KB:
ホームページ: http://tcl.sourceforge.net/
ダウンロード: http://sourceforge.net/projects/tcl/files/Tcl/8.6.6/tcl-core8.6.6-src.tar.gz
MD5 sum: 98ebf13bbd90257e006c219369dd5f67

• Texinfo (6.3) - 4,364 KB:
ホームページ: http://www.gnu.org/software/texinfo/
ダウンロード: http://ftp.gnu.org/gnu/texinfo/texinfo-6.3.tar.xz
MD5 sum: 32baefe5c7080dfb512a4eac5ce67b2a

• Time Zone Data (2016j) - 316 KB:
ホームページ: http://www.iana.org/time-zones
ダウンロード: http://www.iana.org/time-zones/repository/releases/tzdata2016j.tar.gz
MD5 sum: db361d005ac8b30a2d18c5ca38d3e8ab

• Udev-lfs Tarball (udev-lfs-20140408) - 11 KB:
ダウンロード: http://anduin.linuxfromscratch.org/LFS/udev-lfs-20140408.tar.bz2
MD5 sum: c2d6b127f89261513b23b6d458484099

• Util-linux (2.29.1) - 4,179 KB:
ホームページ: http://freecode.com/projects/util-linux
ダウンロード: https://www.kernel.org/pub/linux/utils/util-linux/v2.29/util-linux-2.29.1.tar.xz
MD5 sum: 0cbb6d16ab9c5736e5649ef1264bee6e

• Vim (8.0.069) - 10,389 KB:
ホームページ: http://www.vim.org
ダウンロード: ftp://ftp.vim.org/pub/vim/unix/vim-8.0.069.tar.bz2
MD5 sum: 457543a7754b0d3c1c0aa4d4c3bb4070

• XML::Parser (2.44) - 232 KB:
ホームページ: https://github.com/chorny/XML-Parser
ダウンロード: http://cpan.metacpan.org/authors/id/T/TO/TODDR/XML-Parser-2.44.tar.gz
MD5 sum: af4813fe3952362451201ced6fbce379

• Xz Utils (5.2.3) - 1009 KB:
ホームページ: http://tukaani.org/xz
ダウンロード: http://tukaani.org/xz/xz-5.2.3.tar.xz
MD5 sum: 60fb79cab777e3f71ca43d298adacbd5

• Zlib (1.2.11) - 457 KB:
ホームページ: http://www.zlib.net/
ダウンロード: http://zlib.net/zlib-1.2.11.tar.xz
MD5 sum: 85adef240c5f370b308da8c938951a68

全パッケージのサイズ合計: 約 352 MB

3.3. 必要なパッチ

パッケージに加えて、いくつかのパッチも必要となります。 それらのパッチはパッケージの不備をただすもので、本来なら開発者が修正すべきものです。 パッチは不備修正だけでなく、ちょっとした修正を施して扱いやすいものにする目的のものもあります。 以下に示すものが LFS システム構築に必要となるパッチすべてです。

日本語訳情報

各パッチに付けられている簡略な名称については、訳出せずそのまま表記することにします。

• Bc Memory Leak Patch - 1.4 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/bc-1.06.95-memory_leak-1.patch
MD5 sum: 877e81fba316fe487ec23501059d54b8

• Bzip2 Documentation Patch - 1.6 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/bzip2-1.0.6-install_docs-1.patch
MD5 sum: 6a5ac7e89b791aae556de0f745916f7f

• Coreutils Internationalization Fixes Patch - 168 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/coreutils-8.26-i18n-1.patch
MD5 sum: e1f87b10b23d66344e5e99e7fabfa7a2

• Glibc FHS Patch - 2.8 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/glibc-2.24-fhs-1.patch
MD5 sum: 9a5997c3452909b1769918c759eff8a2

• Kbd Backspace/Delete Fix Patch - 12 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/kbd-2.0.4-backspace-1.patch
MD5 sum: f75cca16a38da6caa7d52151f7136895

• Sysvinit Consolidated Patch - 3.9 KB:
ダウンロード: http://www.linuxfromscratch.org/patches/lfs/development/sysvinit-2.88dsf-consolidated-1.patch
MD5 sum: 0b7b5ea568a878fdcc4057b2bf36e5cb

全パッチの合計サイズ: 約 189.7 KB

上に挙げた必須のパッチに加えて LFS コミュニティが提供する任意のパッチが数多くあります。 それらは微小な不備改修や、デフォルトでは利用できない機能を有効にするなどを行います。 http://www.linuxfromscratch.org/patches/downloads/ にて提供しているパッチ類を確認してください。 そして自分のシステムにとって必要なものは自由に適用してください。

第4章 準備作業の仕上げ

4.1. はじめに

本章では一時システムをビルドするために、あともう少し作業を行います。 $LFS ディレクトリ内にインストールディレクトリを作ります。 リスク軽減のために一般ユーザーを生成し、このユーザーにおいてのビルド環境を作ります。 また LFS パッケージ類の構築時間を測る手段として標準時間「SBUs」について説明し、各パッケージのテストスイートについて触れます。

4.2. $LFS/tools ディレクトリの生成

第5章にてビルドしていくプログラムは、すべて $LFS/tools ディレクトリ配下にインストールされます。 これらは第6章にてコンパイル生成されるプログラムとは区別されます。 ここでコンパイルするプログラムは一時的なものであり、最終的な LFS システムを構成するものではありません。 これらのプログラムを分離したディレクトリに置いておけば、後に必要がなくなった時には簡単に削除できます。 またホストシステムの実行環境に入り混じってしまうことを避ける意味もあります。（第5章の作業でついうっかり、といった失敗がなくなります。）

$LFS/tools ディレクトリは root ユーザーになって以下のコマンドを実行して生成します。

```
mkdir -v $LFS/tools
```

次にホストシステム上に /tools のシンボリックリンクを作成します。 これは LFS パーティションに生成されたディレクトリを指し示すものです。 root ユーザーのままで以下を実行します。

```
ln -sv $LFS/tools /
```

注記

上のコマンドに間違いはありません。 ln コマンドにはいくつか文法の異なるバージョンがあります。 間違いがあると思った場合には info coreutils ln や ln(1) をよく確認してください。

シンボリックリンクを作成することで、ツールチェーンをコンパイルする準備が整いました。 これにより常に /tools ディレクトリを参照したツールチェーンが生成できます。 コンパイラー、アセンブラー、リンカーは本章において動作し（いくつかのツール類は依然ホストシステムのものを利用しますが)、次章においても同様に動作します。（次章では「chroot」によって LFS パーティションに移動して利用します。）

4.3. LFS ユーザーの追加

root ユーザーでログインしていると、ちょっとした誤操作がもとで、システムを破壊する重大な事態につながることがあります。 そこでパッケージのビルドにあたっては通常のユーザー権限にて作業することにします。 あなた自身のユーザーを利用するのでも構いませんが、全く新しいユーザー環境として lfs というユーザーを作成するのが分かりやすいでしょう。 所属するグループも lfs という名で作成します。 ビルド作業においてはこのユーザーを利用していきます。 そこで root ユーザーになって、新たなユーザーを追加する以下のコマンドを実行します。

```
groupadd lfs
useradd -s /bin/bash -g lfs -m -k /dev/null lfs
```

コマンドラインオプションの意味:

-s /bin/bash
lfs ユーザーが利用するデフォルトのシェルを bash にします。

-g lfs
lfs ユーザーのグループを lfs とします。

-m
lfs ユーザーのホームディレクトリを生成します。

-k /dev/null
このパラメーターは、ディレクトリ名をヌルデバイス（null device）に指定しています。 こうすることでスケルトンディレクトリ（デフォルトは /etc/skel）からのファイル群のコピーを無効とします。

lfs
生成するグループおよびユーザーの名称を与えます。

lfs ユーザーとしてログインするために lfs に対するパスワードを設定します。（root ユーザーでログインしている時に lfs へのユーザー切り替えを行なう場合には lfs ユーザーのパスワードは設定しておく必要はありません。）

```
passwd lfs
```

$LFS/tools ディレクトリの所有者を lfs ユーザーとすることで、このディレクトリへのフルアクセス権を設定します。

```
chown -v lfs $LFS/tools
```

前述したような作業ディレクトリを作成している場合は、そのディレクトリに対しても lfs ユーザーを所有者とします。

```
chown -v lfs $LFS/sources
```

lfs でログインします。 これはディスプレイマネージャーを通じて仮想端末を用いることができます。 また以下のコマンドを実行するのでも構いません。

```
su - lfs
```

パラメーター「-」は su コマンドの実行において、非ログイン（non-login）シェルではなく、ログインシェルを起動することを指示します。 ログインシェルとそうでないシェルの違いについては bash(1) や info bash を参照してください。

4.4. 環境設定

作業しやすい動作環境とするために bash シェルに対するスタートアップファイルを二つ作成します。 lfs ユーザーでログインして、以下のコマンドによって .bash_profile ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bash_profile << "EOF"
exec env -i HOME=$HOME TERM=$TERM PS1='\u:\w\$ ' /bin/bash
EOF
```

lfs ユーザーとしてログインした時、起動されるシェルは普通はログインシェルとなります。 この時、ホストシステムの /etc/profile ファイル（おそらく環境変数がいくつか定義されている）と .bash_profile が読み込まれます。 .bash_profile ファイル内の exec env -i.../bin/bash というコマンドが、起動しているシェルを全くの空の環境として起動し直し HOME、 TERM、PS1 という環境変数だけを設定します。 これはホストシステム内の不要な設定や危険をはらんだ設定を、ビルド環境に持ち込まないようにするためです。 このようにすることできれいな環境作りを実現できます。

新しく起動するシェルはログインシェルではなくなります。 したがってこのシェルは /etc/profile ファイルや .bash_profile ファイルは読み込まず、代わりに .bashrc ファイルを読み込みます。 そこで以下のようにして .bashrc ファイルを生成します。

```
cat > ~/.bashrc << "EOF"
set +h
umask 022
LFS=/mnt/lfs
LC_ALL=POSIX
LFS_TGT=$(uname -m)-lfs-linux-gnu
PATH=/tools/bin:/bin:/usr/bin
export LFS LC_ALL LFS_TGT PATH
EOF
```

set +h コマンドは bash のハッシュ機能を無効にします。 通常このハッシュ機能は有用なものです。 実行ファイルのフルパスをハッシュテーブルに記憶しておき、再度そのパスを探し出す際に PATH 変数の探査を省略します。 しかしこれより作り出すツール類はインストール直後にすぐ利用していきます。 ハッシュ機能を無効にすることで、プログラム実行が行われる際に、シェルは必ず PATH を探しにいきます。 つまり $LFS/tools ディレクトリ以下に新たに構築したツール類は必ず実行されるようになるわけです。 そのツールの古いバージョンがどこか別のディレクトリにあったとしても、その場所を覚えていて実行されるということがなくなります。

ユーザーのファイル生成マスク（file-creation mask; umask）を 022 にセットするのは、新たなファイルやディレクトリの生成はその所有者にのみ許可し、他者は読み取りと実行を可能とするためです。（システムコール open(2) にてデフォルトモードが適用される場合、新規生成ファイルのパーミッションモードは 644、同じくディレクトリは 755 となります。）

環境変数 LFS は常に指定したマウントポイントを指し示すように設定します。

LC_ALL 変数は特定のプログラムが扱う国情報を制御します。 そのプログラムが出力するメッセージを、指定された国情報に基づいて構成します。 LC_ALL 変数は「POSIX」か「C」にセットしてください。（両者は同じです。）そのようにセットしておけば、chroot 環境下での作業が問題なく進められます。

LFS_TGT 変数は標準にないマシン名称を設定します。 しかしこれはこの先、クロスコンパイラーやクロスリンカーの構築、これを用いたツールチェーンの構築の際に、うまく動作させるための設定です。 詳しくは 5.2.「ツールチェーンの技術的情報」にて説明しているので参照してください。

/tools/bin ディレクトリを PATH 変数の先頭に設定します。 第5章にてインストールするプログラムは、インストールした直後からシェルによって実行指示が下されます。 この設定は、ハッシュ機能をオフとしたことと連携して、古いプログラムが実行されないようにします。 たとえホストシステムとの間で同一の実行プログラムがあったとしても、第5章の作業環境下では適切なプログラム実行が実現されます。

一時的なツールを構築する準備の最後として、今作り出したユーザープロファイルを source によって取り込みます。

```
source ~/.bash_profile
```

4.5. SBU 値について

各パッケージをコンパイルしインストールするのにどれほどの時間を要するか、誰しも知りたくなるところです。 しかし Linux From Scratch は数多くのシステム上にて構築可能であるため、正確な処理時間を見積ることは困難です。 最も大きなパッケージ（Glibc）の場合、処理性能の高いシステムでも２０分はかかります。 それが性能の低いシステムとなると３日はかかるかもしれません！本書では処理時間を正確に示すのでなく、標準ビルド単位（Standard Build Unit; SBU）を用いることにします。

SBU の測定は以下のようにします。 本書で最初にコンパイルするのは 第5章における Binutils です。 このパッケージのコンパイルに要する時間を標準ビルド時間とし、他のコンパイル時間はその時間からの相対時間として表現します。

例えばあるパッケージのコンパイル時間が 4.5 SBU であったとします。 そして Binutils の1回目のコンパイルが 10分であったとすると、そのパッケージは およそ 45分かかることを意味しています。 幸いにも、たいていのパッケージは Binutils よりもコンパイル時間は短いものです。

一般にコンパイル時間は、例えばホストシステムの GCC のバージョンの違いなど、多くの要因に左右されるため SBU 値は正確なものになりません。 SBU 値は、インストールに要する時間の目安を示すものに過ぎず、場合によっては十数分の誤差が出ることもあります。

注記

最新のシステムは複数プロセッサー（デュアルコアとも言います）であることが多く、パッケージのビルドにあたっては「同時並行のビルド」によりビルド時間を削減できます。 その場合プロセッサー数がいくつなのかを環境変数に指定するか、あるいは make プログラムの実行時に指定する方法があります。 例えばコア2デュオであれば、以下のようにして同時並行の二つのプロセスを実行することができます。

```
export MAKEFLAGS='-j 2'
```

あるいはビルド時の指定として以下のようにすることもできます。

```
make -j2
```

上のようにして複数プロセッサーが利用されると、本書に示している SBU 単位は、通常の場合に比べて大きく変化します。 そればかりか場合により make 処理に失敗することもあります。 したがってビルド結果を検証するにしても話が複雑になります。 複数のプロセスラインがインターリーブにより多重化されるためです。 ビルド時に何らかの問題が発生したら、単一プロセッサー処理を行ってエラーメッセージを分析してください。

4.6. テストスイートについて

各パッケージにはたいていテストスイートがあります。 新たに構築したパッケージに対しては、テストスイートを実行しておくのがよいでしょう。 テストスイートは「健全性検査（sanity check)」を行い、パッケージのコンパイルが正しく行われたことを確認します。 テストスイートの実行によりいくつかのチェックが行われ、開発者の意図したとおりにパッケージが正しく動作することを確認していきます。 ただこれは、パッケージにバグがないことを保証するものではありません。

テストスイートの中には他のものにも増して重要なものがあります。 例えば、ツールチェーンの要である GCC、Binutils、Glibc に対してのテストスイートです。 これらのパッケージはシステム機能を確実なものとする重要な役割を担うものであるためです。 GCC と Glibc におけるテストスイートはかなりの時間を要します。 それが低い性能のマシンであればなおさらです。 でもそれらを実行しておくことを強く推奨します。

注記

作業を進めてみれば分かることですが、 第5章の作業においてテストスイートを実行することはあまり意味がありません。 というのも、この章において実施するテストに対しては、ホストシステムによるある程度の影響があるためです。 時には不可解なエラーが発生することもあります。 第5章にて生成するツール類は一時的なものであり、その後には利用しなくなります。 したがって普通のユーザーであれば 第5章においてはテストスイートを実行しないことをお勧めします。 テストスイートを実行する手順を説明してはいますが、それはテスターの方、開発者の方のために説明しているものであって、それらは全くのオプションです。

Binutils と GCC におけるテストスイートの実行では、擬似端末 (pseudo terminals; PTY) を使い尽くす問題が発生します。 これにより相当数のテストが失敗します。 これが発生する理由はいくつかありますが、もっともありがちな理由としてはホストシステムの devpts ファイルシステムが正しく構成されていないことがあげられます。 この点については http://www.linuxfromscratch.org/lfs/faq.html#no-ptys においてかなり詳しく説明しています。

パッケージの中にはテストスイートに失敗するものがあります。 しかしこれらは開発元が認識しているもので致命的なものではありません。 以下の http://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/development/ に示すログを参照して、失敗したテストが実は予期されているものであるかどうかを確認してください。 このサイトは、本書におけるすべてのテストスイートの正常な処理結果を示すものです。

第5章 一時的環境の構築

5.1. はじめに

この章では最小限の Linux システムを構築していく方法を示します。 このシステムは、最終的に第6章にて LFS システムを構築するためのもので、そのために必要なツール類をすべて含んでいます。 最小限とは言いつつも、取り扱いやすい実行環境を提供します。

最小限のシステムを構築するために、以下の二段階の手順を踏みます。 初めにホストシステムに依存しない新しいツールチェーン（コンパイラー、アセンブラー、リンカー、ライブラリ、その他の有用なユーティリティ）を構築します。 次にこのツールチェーンを使って、他の重要なツール類を構築していきます。

この章にて生成されるファイル群は **$LFS/tools** ディレクトリ配下にインストールされます。 これらのファイルは、次章にてインストールされるファイル群や、ホスト環境にあるファイル群とは区分けされます。 ここで構築されるパッケージ類は、あくまで一時的なものであるため、この後に構築する LFS システムを汚したくないためにこのようにします。

5.2. ツールチェーンの技術的情報

本節ではシステムをビルドする原理や技術的な詳細について説明します。 この節のすべてをすぐに理解する必要はありません。 この先、実際の作業を行っていけば、いろいろな情報が明らかになってくるはずです。 各作業を進めながら、いつでもこの節に戻って読み直してみてください。

第5章の最終目標は一時的なシステム環境を構築することです。 この一時的なシステムには、システム構築のための十分なツール類を有し、ホストシステムとは切り離されたものです。 この環境へは chroot によって移行します。この環境は第6章において、クリーンでトラブルのない LFS システムの構築を行う土台となるものです。 構築手順の説明においては、初心者の方であっても失敗を最小限にとどめ、同時に最大限の学習材料となるように心がけています。

注記

これより先に進む前に、作業するプラットフォームの「三つの組（target triplet)」で表される名称を確認してください。 「三つの組」は config.guess スクリプトを実行することで簡単に確認できます。 そのスクリプトは多くのパッケージのソースに含まれています。 Binutils パッケージのソースを伸張（解凍）し **./config.guess** スクリプトを実行してその出力を確認してみてください。 例えば 32 ビット Intel プロセッサーでは i686-pc-linux-gnu のような出力が得られます。 64 ビット システムでは x86_64-pc-linux-gnu のようになります。

利用しているプラットフォームに応じたダイナミックリンカー（dynamic linker）の名前についても確認してください。 ダイナミックローダー（dynamic loader）とも表現されるものです。(Binutils が提供する標準的なリンカー ld とは異なりますので注意してください。) Glibc が提供するこのダイナミックリンカーは、プログラムが必要としている共有ライブラリを見つけ出してロードし、実行のための準備を行った上で実際に実行します。 32 ビットマシンのダイナミックリンカーの名前は **ld-linux.so.2** といったものになります（64 ビットシステムでは **ld-linux-x86-64.so.2**)。 確実にその名前を調べるなら、ホストシステム内のどれでも良いので実行モジュールを選んで **readelf -l <**実行モジュール名**> | grep interpreter** と入力します。 出力される結果を確認してください。 あらゆるプラットフォームの情報を知りたいなら Glibc のソースディレクトリのルートにある **shlib-versions** ファイルに記されています。

第5章におけるビルド手順がどのように機能するのか、その技術的な情報を以下に示します。

- 動作させているプラットフォームの名前を微妙に変えます。 三つの組の ”ベンダー ” フィールドを変更するもので、**LFS_TGT** 変数に定め利用します。 こうしておいて Binutils と GCC の初回の構築を行なえば、互換性のあるクロスコンパイラー、クロスリンカーを確実に構築できるようになります。 もう一つ別のアーキテクチャーに対する実行モジュールを作らなくても、そのクロスコンパイラーとクロスリンカーを使えば、生成される実行モジュールは現在のハードウェアに適合したものとなります。
- 一時的に構築するライブラリはクロスコンパイルにより生成します。 クロスコンパイラーというものは元来、ホストシステムへ依存するものではないためです。 こうすることで、ホストシステムのヘッダーやライブラリが、一時的なツール類を壊してしまうような危険を減らすことができ、同時に 64 ビットマシンにて 32 ビットあるいは 64 ビットの双方のライブラリを構築することができるようになります。
- gcc のソースを適切に調整することで、どのダイナミックリンカーを用いるのかをコンパイラーに指示します。

Binutils をまず初めにインストールします。 この後の GCC や Glibc の configure スクリプトの実行ではアセンブラーやリンカーに対するさまざまな機能テストが行われるためで、そこではどの機能が利用可能または利用不能であるかが確認されます。 ただ重要なのは Binutils を一番初めにビルドするという点だけではありません。 Gcc や Glibc の

configure が正しく処理されなかったとすると、ツールチェーンがわずかながらも不完全な状態で生成されてしまいます。 この状態は、すべてのビルド作業を終えた最後になって、大きな不具合となって現れてくることになります。 テストスイートを実行することが欠かせません。 これを実行しておけば、この先に行う多くの作業に入る前に不備があることが分かるからです。

Binutils はアセンブラーとリンカーを二箇所にインストールします。 **/tools/bin** と **/tools/$LFS_TGT/bin** です。 これらは一方が他方のハードリンクとなっています。 リンカーの重要なところはライブラリを検索する順番です。 ld コマンドに *--verbose* オプションをつけて実行すれば詳しい情報が得られます。 例えば **ld --verbose | grep SEARCH** を実行すると、検索するライブラリのパスとその検索順を示してくれます。 ダミープログラムをコンパイルして ld に *--verbose* オプションをつけてリンクを行うと、どのファイルがリンクされたが分かります。 例えば **gcc dummy.c -Wl,--verbose 2>&1 | grep succeeded** と実行すれば、リンカーの処理中にオープンに成功したファイルがすべて表示されます。

次にインストールするのは GCC です。 configure の実行時には以下のような出力が行われます。

```
checking what assembler to use... /tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/as
checking what linker to use... /tools/i686-lfs-linux-gnu/bin/ld
```

これを示すのには重要な意味があります。 GCC の configure スクリプトは、利用するツール類を探し出す際に PATH ディレクトリを参照していないということです。 しかし gcc の実際の処理にあたっては、その検索パスが必ず使われるわけでもありません。 gcc が利用する標準的なリンカーを確認するには **gcc -print-prog-name=ld** を実行します。

さらに詳細な情報を知りたいときは、ダミープログラムをコンパイルする際に *-v* オプションをつけて実行します。 例えば **gcc -v dummy.c** と入力すると、プリプロセッサー、コンパイル、アセンブルの各処理工程が示されますが、さらに gcc がインクルードした検索パスとその読み込み順も示されます。

次に健全化された (sanitized) Linux API ヘッダーをインストールします。 これにより、標準 C ライブラリ (Glibc) が Linux カーネルが提供する機能とのインターフェースを可能とします。

次のパッケージは Glibc です。 Glibc 構築の際に気にかけるべき重要なものは、コンパイラー、バイナリツール、カーネルヘッダーです。 コンパイラーについては、一般にはあまり問題にはなりません。 Glibc は常に configure スクリプトにて指定される *--host* パラメーターに関連づけしたコンパイラーを用いるからです。 我々の作業においてそのコンパイラーとは i686-lfs-linux-gnu-gcc になります。 バイナリツールとカーネルヘッダーは多少複雑です。 従って無理なことはせずに有効な configure オプションを選択することが必要です。 configure 実行の後は **glibc-build** ディレクトリにある **config.make** ファイルに重要な情報が示されているので確認してみてください。 なお *CC="i686-lfs-gnu-gcc"* とすれば、どこにある実行モジュールを利用するかを制御でき *-nostdinc* と *-isystem* を指定すれば、コンパイラーに対してインクルードファイルの検索パスを制御できます。 これらの指定は Glibc パッケージの重要な面を示しています。 Glibc がビルドされるメカニズムは自己完結したビルドが行われるものであり、ツールチェーンのデフォルト設定には基本的に依存しないことを示しています。

Binutils の2回めのビルドにおいては ld コマンドのライブラリ検索パスを設定するために configure の *--with-lib-path* スイッチを指定します。

GCC の第2回目のビルドにおいても、ソースを修正して新しいダイナミックリンカーが用いられるようにします。 これをもし誤ってしまうと、ホストシステムの **/lib** ディレクトリが埋め込まれたダイナミックリンカーを用いるものとして GCC が生成されてしまいます。 こうしてしまうと、ホストシステムに依存しない形を目指すという目的が達成できません。 これ以降、コアとなるツールチェーンは、自己完結し (self-contained)、自分だけで処理できる (self-hosted) ものとなります。 第5章の残りのパッケージは **/tools** にある新たな Glibc を用いてビルドされます。

第6章での chroot による環境下では、実質的なパッケージとして Glibc を初めにビルドします。 これは上に述べているように自己完結した性質を目指すためです。 **/usr** に Glibc をインストールしたら、ツールチェーンのデフォルトディレクトリの変更を行い LFS システムを構築する残りのパッケージをビルドしていきます。

5.3. 全般的なコンパイル手順

パッケージをビルドしていく際には、以下に示す内容を前提とします:

- パッケージの中には、コンパイルする前にパッチを当てるものがあります。 パッチを当てるのは、そのパッケージが抱える問題を回避するためです。 本章と次章の双方でパッチを当てるものがあり、あるいは本章と次章のいずれか一方でパッチを当てるものもあります。 したがってパッチをダウンロードする説明が書かれていないなら、何も気にせず先に進んでください。 パッチを当てた際に offset や fuzz といった警告メッセージが出る場合がありますが、これらは気にしないでください。 このような時でもパッチは問題なく適用されています。
- コンパイルの最中に、警告メッセージが画面上に出力されることがよくあります。 これは問題はないため無視して構いません。 警告メッセージは、メッセージ内に説明されているように、C や C++ の文法が誤りではないものの推奨されていないものであることを示しています。 C 言語の標準はよく変更されますが、パッケージの中には古い基準に従っているものもあります。 問題はないのですが、警告として画面表示されることになるわけです。

- もう一度、環境変数 LFS が正しく設定されているかを確認します。

```
echo $LFS
```

上の出力結果が LFS パーティションのマウントポイントのディレクトリであることを確認してください。 本書では /mnt/lfs ディレクトリとして説明しています。

- 最後に以下の二つの点にも注意してください。

重要項目

ビルドにあたっては ホストシステム要件にて示す要件やシンボリックリンクが、正しくインストールされていることを前提とします。

- bash シェルの利用を想定しています。
- sh は bash へのシンボリックリンクであるものとします。
- /usr/bin/awk は gawk へのシンボリックリンクであるものとします。
- /usr/bin/yacc は bison へのシンボリックリンクであるか、あるいは bison を実行するためのスクリプトであるものとします。

重要項目

ビルド作業では以下の点が重要です。

1. ソースやパッチファイルを配置するディレクトリは /mnt/lfs/sources/ などのように chroot 環境でもアクセスが出来るディレクトリとしてください。 /mnt/lfs/tools/ ディレクトリにソースを置くことは やめて ください。
2. ソースディレクトリに入ります。
3. 各パッケージについて：
   a. tar コマンドを使ってパッケージの tarball を伸張（解凍）します。 第5章では、パッケージを伸張（解凍）するのは lfs ユーザーとします。
   b. パッケージの伸張（解凍）後に生成されたディレクトリに入ります。
   c. 本書の手順に従ってビルド作業を行っていきます。
   d. ソースディレクトリに戻ります。
   e. ビルド作業を通じて生成されたパッケージディレクトリを削除します。

5.4. Binutils-2.27 - 1回め

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 1 SBU
必要ディスク容量: 519 MB

5.4.1. クロスコンパイル版 Binutils のインストール

注記

前の節に戻って再度説明をよく読み、重要事項として説明している内容をよく理解しておいてください。 そうすればこの後の無用なトラブルを減らすことができるはずです。

Binutils は一番最初にビルドするパッケージです。 ここでビルドされるリンカーやアセンブラーを使って、Glibc や GCC のさまざまな機能が利用できるかどうかを判別することになります。

Binutils のドキュメントでは Binutils をビルドする際に、ビルド専用のディレクトリを使ってビルドすることを推奨しています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

注記

本節以降で SBU値を示していきます。 これを活用していくなら、本パッケージの configure から初めのインストールまでの処理時間を計測しましょう。 具体的には処理コマンドを time で囲んで **time { ./configure ... && ... && make install; }** と入力すれば実現できます。

注記

概算ビルド時間と必要ディスク容量は、この第5章ではテストスイートに関わる時間や容量は含めないことにします。

Binutils をコンパイルするための準備をします。:

```
../configure --prefix=/tools            \
             --with-sysroot=$LFS        \
             --with-lib-path=/tools/lib \
             --target=$LFS_TGT          \
             --disable-nls              \
             --disable-werror
```

configure オプションの意味

--prefix=/tools
configure スクリプトに対して Binutils プログラムを **/tools** ディレクトリ以下にインストールすることを指示します。

--with-sysroot=$LFS
クロスコンパイル時に、ターゲットとして必要となるシステムライブラリを $LFS より探し出すことを指示します。

--with-lib-path=/tools/lib
リンカーが用いるべきライブラリパスを指定します。

--target=$LFS_TGT
変数 LFS_TGT に設定しているマシン名は config.guess スクリプトが返すものとは微妙に異なります。 そこでこのオプションは、Binutils のビルドにあたってクロスリンカーをビルドするように configure スクリプトに指示するものです。

--disable-nls
一時的なツール構築にあたっては i18n 国際化は行わないことを指示します。

--disable-werror
ホストのコンパイラーが警告を発した場合に、ビルドが中断することがないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。通常ならここでテストスイートを実行します。 しかしシステム構築初期のこの段階ではテストスイートのフレームワーク（Tcl, Expect, DejaGNU）が準備できていません。 さらにこの時点で生成されるプログラムは、すぐに次の生成作業によって置き換えられますから、この時点でテストを実行することはあまり意味がありません。

x86_64 にて作業をしている場合は、ツールチェーンの切り分けを適切に行うためにシンボリックリンクを作成します。

```
case $(uname -m) in
  x86_64) mkdir -v /tools/lib && ln -sv lib /tools/lib64 ;;
esac
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.13.2.「Binutils の構成」を参照してください。

5.5. GCC-6.3.0 - 1回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 8.3 SBU
必要ディスク容量: 2.5 GB

5.5.1. クロスコンパイル版 GCC のインストール

最近の GCC は GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。 これらのパッケージはホストシステムに含まれていないかもしれないため、以下を実行してビルドの準備をします。 個々のパッケージを GCC ソースディレクトリの中に伸張（解凍）し、ディレクトリ名を変更します。 これは GCC のビルド処理においてそれらを自動的に利用できるようにするためです。

注記

本節においては誤解が多く発生しています。 ここでの手順は他のものと同様であり、手順の概要（パッケージビルド手順）は説明済です。 まず初めに gcc の tarball を伸張（解凍）し、生成されたソースディレクトリに移動します。 それに加えて本節では、以下の手順を行うものとなります。

```
tar -xf ../mpfr-3.1.5.tar.xz
mv -v mpfr-3.1.5 mpfr
tar -xf ../gmp-6.1.2.tar.xz
mv -v gmp-6.1.2 gmp
tar -xf ../mpc-1.0.3.tar.gz
mv -v mpc-1.0.3 mpc
```

以下のコマンドは GCC のデフォルトのダイナミックリンカーの配置ディレクトリを、既にインストールされている /tools とします。 また GCC のインクルードパスから /usr/include を除きます。

```
for file in gcc/config/{linux,i386/linux{,64}}.h
do
  cp -uv $file{,.orig}
  sed -e 's@/lib\(64\)\?\(32\)\?/ld@/tools&@g' \
      -e 's@/usr@/tools@g' $file.orig > $file
  echo '
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1 "/tools/lib/"
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2 ""' >> $file
  touch $file.orig
done
```

上のコマンドがよく分からない場合は一つ一つ読み下していってください。 まず gcc/config ディレクトリには linux.h, linux64.h, sysv4.h といったファイルのいずれかがあります。 それらが存在したら、ファイル名称の末尾に「.orig」をつけたファイルとしてコピーします。 そして一つめの sed コマンドでは、そのファイル内にある「/lib/ld」, 「/lib64/ld」, 「/lib32/ld」という記述部分の頭に「/tools」を付与します。 また二つめの sed コマンドによってハードコーディングされている「/usr」という部分を書き換えます。 そしてここで加えるべき定義文をファイルの末尾に追加し、検索パスと startfile プリフィックスを変更します。 この際に「/tools/lib/」の終わりには「/」が必要となります。 最後に touch によってコピーしたファイルのタイムスタンプを更新します。 cp -u を用いるのは、誤ってコマンドを二度起動したとしてもオリジナルファイルを壊さないようにするためです。

そしてホストが x86_64 である場合は、64ビットライブラリのデフォルトディレクトリ名を「lib」とします。

```
case $(uname -m) in
  x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' \
        -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
 ;;
esac
```

GCC のドキュメントでは、専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
../configure                                       \
    --target=$LFS_TGT                              \
    --prefix=/tools                                \
    --with-glibc-version=2.11                      \
    --with-sysroot=$LFS                            \
    --with-newlib                                  \
    --without-headers                              \
    --with-local-prefix=/tools                     \
    --with-native-system-header-dir=/tools/include \
    --disable-nls                                  \
    --disable-shared                               \
    --disable-multilib                             \
    --disable-decimal-float                        \
    --disable-threads                              \
    --disable-libatomic                            \
    --disable-libgomp                              \
    --disable-libmpx                               \
    --disable-libquadmath                          \
    --disable-libssp                               \
    --disable-libvtv                               \
    --disable-libstdcxx                            \
    --enable-languages=c,c++
```

configure オプションの意味:

--with-newlib
この時点では利用可能な C ライブラリがまだ存在しません。 したがって libgcc のビルド時に inhibit_libc 定数を定義します。 これを行うことで、libc サポートを必要とするコード部分をコンパイルしないようにします。

--without-headers
完璧なクロスコンパイラーを構築するなら、GCC はターゲットシステムに互換性を持つ標準ヘッダーを必要とします。 本手順においては標準ヘッダーは必要ありません。 このスイッチは GCC がそういったヘッダーを探しにいかないようにします。

--with-local-prefix=/tools
ローカルプリフックス (local prefix) は、GCC がローカルにインストールされているインクルードファイルを探しにいくディレクトリを意味します。 そのデフォルトは /usr/local です。 この設定を /tools とすることで、GCC が探し出すパスから /usr/local を除外します。

--with-native-system-header-dir=/tools/include
GCC がシステムヘッダーを探し出すデフォルトのパスは /usr/include です。 後に root を変更する際には、このディレクトリは $LFS/usr/include となります。 しかしこの直後の2つの作業を通じて、ヘッダーをインストールする先は $LFS/tools/include としています。 つまり本スイッチは GCC がヘッダーを正しく見つけ出せるようにするものです。 GCC の2回めのビルドでは、同じスイッチを用いて、ホストシステムのヘッダーは一切見つけ出さないようにします。

--disable-shared
このオプションは内部ライブラリをスタティックライブラリとしてリンクすることを指示します。 ホストシステムに関係しそうな問題を回避するためです。

--disable-decimal-float, --disable-threads, --disable-libatomic, --disable-libgomp, --disable-libmpx, --disable-libquadmath, --disable-libssp, --disable-libvtv, --disable-libstdcxx
これらのオプションは順に、十進浮動小数点制御、スレッド処理、libatomic, libgomp, libmpx, libquadmath, libssp, libvtv, C++ 標準ライブラリのサポートをいずれも無効にすることを指示します。 これらの機能を含めていると、クロスコンパイラーをビルドする際にはコンパイルに失敗します。 またクロスコンパイルによって一時的な libc ライブラリを構築する際には不要なものです。

--disable-multilib
x86_64 に対して LFS は まだ multilib のサポートをしていません。 このオプション指定は x86 には無関係です。

--enable-languages=c,c++
このオプションは C コンパイラーおよび C++ コンパイラーのみビルドすることを指示します。 この時点で必要なのはこの言語だけだからです。

GCC をコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 この時点でもテストスイートを実行することはできます。 ただ前にも述べているように、テストスイートのフレームワークがまだ準備できていません。 さらにこの時点で生成されるプログラムは、すぐに次の生成作業によって置き換えられますから、この時点でテストを実行することはあまり意味がありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.17.2.「GCC の構成」を参照してください。

5.6. Linux-4.9.5 API ヘッダー

Linux API ヘッダー (linux-4.9.5.tar.gz 内) は Glibc が利用するカーネル API を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 750 MB

5.6.1. Linux API ヘッダー のインストール

Linux カーネルはアプリケーションプログラミングインターフェース (Application Programming Interface) を、システムの C ライブラリ (LFS の場合 Glibc) に対して提供する必要があります。 これを行うには Linux カーネルのソースに含まれる、さまざまな C ヘッダーファイルを「健全化 (sanitizing)」して利用します。

本パッケージ内にある不適切なファイルを残さないように、以下を処理します。

```
make mrproper
```

そしてユーザーが利用するカーネルヘッダーファイルをソースから抽出します。 それらはいったん中間的なローカルディレクトリに置かれ、必要な場所にコピーされます。 ターゲットディレクトリに既にあるファイルは削除されてからソースからの抽出処理が行われます。

```
make INSTALL_HDR_PATH=dest headers_install
cp -rv dest/include/* /tools/include
```

本パッケージの詳細は 6.7.2.「Linux API ヘッダー の構成」を参照してください。

5.7. Glibc-2.24

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。 このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルド時間: 4.0 SBU
必要ディスク容量: 715 MB

5.7.1. Glibc のインストール

Glibc のドキュメントでは、専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

次に Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../configure                               \
      --prefix=/tools                      \
      --host=$LFS_TGT                      \
      --build=$(../scripts/config.guess) \
      --enable-kernel=2.6.32               \
      --with-headers=/tools/include        \
      libc_cv_forced_unwind=yes            \
      libc_cv_c_cleanup=yes
```

configure オプションの意味:

--host=$LFS_TGT, --build=$(../scripts/config.guess)
このようなオプションを組み合わせることで /tools ディレクトリにあるクロスコンパイラー、クロスリンカーを使って Glibc がクロスコンパイルされるようになります。

--enable-kernel=2.6.32
Linux カーネル 2.6.32 以上のサポートを行うよう指示します。 これ以前のカーネルは利用することができません。

--with-headers=/tools/include
これまでに tools ディレクトリにインストールしたヘッダーファイルを用いて Glibc をビルドすることを指示します。 こうすればカーネルにどのような機能があるか、どのようにして処理効率化を図れるかなどの情報を Glibc が得られることになります。

libc_cv_forced_unwind=yes
5.4.「Binutils-2.27 - 1回め」においてインストールしたリンカーは、クロスコンパイルにより生成したものです。これは Glibc をインストールするまでは使えません。 これはつまり force-unwind サポートに対するテストは失敗することを意味します。 正しく動作するリンカーに依存するためです。 libc_cv_forced_unwind=yes の変数設定は、configure スクリプトに対してテストを実行しなくても force-unwind サポート機能を利用可能とすることを指示します。

libc_cv_c_cleanup=yes
上と同様に configure スクリプトに対して libc_cv_c_cleanup=yes を指示します。 これによりテストが省略され、C のクリーンアップハンドリング (cleanup handling) のサポートを指定します。

ビルド中には以下のようなメッセージが出力されるかもしれません。

```
configure: WARNING:
*** These auxiliary programs are missing or
*** incompatible versions: msgfmt
*** some features will be disabled.
*** Check the INSTALL file for required versions.
```

msgfmt プログラムがない場合 (missing) や互換性がない場合 (incompatible) でも特に問題はありません。 msgfmt プログラムは Gettext パッケージが提供するもので、ホストシステムに含まれているかもしれません。

注記

本パッケージは ”並行ビルド (parallel make)” を行うとビルドに失敗するとの報告例があります。 もしビルドに失敗した場合は make コマンドに ”-j1” オプションをつけて再ビルドしてください。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

注意

この時点で以下を必ず実施します。 新しいツールチェーンの基本的な機能（コンパイルやリンク）が正常に処理されるかどうかを確認することです。 健全性のチェック（sanity check）を行うものであり、以下のコマンドを実行します。

```
echo 'int main(){}' > dummy.c
$LFS_TGT-gcc dummy.c
readelf -l a.out | grep ': /tools'
```

すべてが正常に処理され、エラーが発生しなければ、最終のコマンドの実行結果として以下が出力されるはずです。

```
[Requesting program interpreter: /tools/lib/ld-linux.so.2]
```

インタープリター名は 64ビットマシンの場合 `/tools/lib64/ld-linux-x86-64.so.2` となります。

出力結果が上とは異なったり、あるいは何も出力されなかったりした場合は、どこかに不備があります。 どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。 解決せずにこの先に進まないでください。

すべてが完了したら、テストファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out
```

注記

次々節にてビルドする Binutils では、ツールチェーンが正しく構築できたかどうかを再度チェックすることになります。 Binutils のビルドに失敗したとしたら、それ以前にインストールしてきた Binutils, GCC, Glibc のいずれかにてビルドがうまくできていないことを意味します。

本パッケージの詳細は 6.9.3.「Glibc の構成」を参照してください。

5.8. Libstdc++-6.3.0

Libstdc++ は標準 C++ ライブラリです。 これは g++ コンパイラーの処理制御を適正に行うために必要となります。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 896 MB

5.8.1. Libstdc++ のインストール

注記

Libstdc++ のソースは GCC に含まれます。 したがってまずは GCC の tarball を伸張（解凍）した上で gcc-6.3.0 ディレクトリに入って作業を進めます。

Libstdc++ のためのディレクトリを新たに生成して移動します。

```
mkdir -v build
cd       build
```

Libstdc++ をコンパイルするための準備をします。

```
../libstdc++-v3/configure           \
    --host=$LFS_TGT                 \
    --prefix=/tools                 \
    --disable-multilib              \
    --disable-nls                   \
    --disable-libstdcxx-threads     \
    --disable-libstdcxx-pch         \
    --with-gxx-include-dir=/tools/$LFS_TGT/include/c++/6.3.0
```

configure オプションの意味

--host=...
利用するクロスコンパイラーを指示するものであり、/usr/bin にあるものではなく、まさに先ほど作り出したものを指定するものです。

--disable-libstdcxx-threads
C スレッドライブラリはまだ生成していないため、C++ スレッドライブラリも生成しないようにします。

--disable-libstdcxx-pch
本スイッチは、既にコンパイルされたインクルードファイルをインストールしないようにします。 これはこの時点では必要ないためです。

--with-gxx-include-dir=/tools/$LFS_TGT/include/c++/6.3.0
C++ コンパイラーが標準インクルードファイルを探すディレクトリを指定します。 通常のビルドにおいてそのディレクトリ情報は、最上位ディレクトリの configure のオプションにて指定します。 ここでの作業では、上のようにして明示的に指定します。

libstdc++ をコンパイルします。

```
make
```

ライブラリをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.17.2.「GCC の構成」を参照してください。

5.9. Binutils-2.27 - 2回め

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 1.1 SBU
必要ディスク容量: 533 MB

5.9.1. Binutils のインストール

ビルドのためのディレクトリを再び生成します。

```
mkdir -v build
cd       build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
CC=$LFS_TGT-gcc                \
AR=$LFS_TGT-ar                 \
RANLIB=$LFS_TGT-ranlib         \
../configure                   \
    --prefix=/tools            \
    --disable-nls              \
    --disable-werror           \
    --with-lib-path=/tools/lib \
    --with-sysroot
```

configure オプションの意味:

CC=$LFS_TGT-gcc AR=$LFS_TGT-ar RANLIB=$LFS_TGT-ranlib
Binutils をネイティブにビルドすることが目的なので、ホストシステムに存在しているクロスコンパイラーや関連ツールは使わず、ビルドしているシステム内のものを用いるように指定します。

--with-lib-path=/tools/lib
configure スクリプトに対して Binutils のコンパイル中でのライブラリパスを指定します。 リンカーに対して /tools/lib ディレクトリを指定するものです。 こうすることでリンカーがホスト上のライブラリを検索しないようにします。

--with-sysroot
sysroot 機能は、特定の共有オブジェクトを必要とする他の共有オブジェクトを、リンカーが見つけ出せるようにする機能です。 その場合には明示的にリンカーのコマンドラインにて、共有オブジェクトを指定する必要があります。コマンドラインでのその指定がない場合には、特定のホストにてパッケージビルドに失敗するものが出てきます。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

次章で行う「再調整」の作業に向けてリンカーを準備します。

```
make -C ld clean
make -C ld LIB_PATH=/usr/lib:/lib
cp -v ld/ld-new /tools/bin
```

make パラメーターの意味:

-C ld clean
サブディレクトリ ld にコンパイル生成されたプログラムをすべて削除します。

-C ld LIB_PATH=/usr/lib:/lib
サブディレクトリ ld の中に生成されるべきプログラムを再生成します。 Makefile ファイル内の変数 LIB_PATH をコマンドラインから与えることで、一時的なツール類の設定を上書き指定し、適切なパスを指示します。 この変数の設定はリンカーに対するデフォルトの検索パスを指定するものであり、次章に向けた準備となります。

本パッケージの詳細は 6.13.2.「Binutils の構成」を参照してください。

5.10. GCC-6.3.0 - 2回め

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 11 SBU
必要ディスク容量: 2.9 GB

5.10.1. GCC のインストール

第1回めの GCC のビルドでは、内部的なシステムヘッダーをインストールしています。 その1つ **limits.h** は、これに対応づくシステムヘッダー **limits.h** を読み込みます。 そのファイルは実際には **/tools/include/limits.h** となります。 しかし1回めの GCC のビルド時には **/tools/include/limits.h** は存在しません。 したがって GCC がインストールする内部ヘッダーは、部分的で自己完結した (self-contained) もののみとなり、システムヘッダーが持つ拡張機能は含まれません。 一時的な libc を構築するならこれは正しかったのですが、この段階での GCC のビルドでは、内部ヘッダーが完全な形のものでなければなりません。 完全な内部ヘッダーを生成するために、GCC ビルドシステムが通常行っている方法と同じようにするための、以下のコマンドを実行します。

```
cat gcc/limitx.h gcc/glimits.h gcc/limity.h > \
  `dirname $($LFS_TGT-gcc -print-libgcc-file-name)`/include-fixed/limits.h
```

もう一度、GCC のデフォルトのダイナミックリンカーの配置ディレクトリを、既にインストールされている **/tools** とします。

```
for file in gcc/config/{linux,i386/linux{,64}}.h
do
  cp -uv $file{,.orig}
  sed -e 's@/lib\(64\)\?\(32\)\?/ld@/tools&@g' \
      -e 's@/usr@/tools@g' $file.orig > $file
  echo '
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1
#undef STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_1 "/tools/lib/"
#define STANDARD_STARTFILE_PREFIX_2 ""' >> $file
  touch $file.orig
done
```

x86_64 上でビルドしている場合は、64ビットライブラリのデフォルトディレクトリ名を「lib」にします。

```
case $(uname -m) in
  x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' \
        -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
  ;;
esac
```

GCC を初めてビルドする際には GMP、MPFR、MPC の各パッケージを必要とします。 tarball を解凍して、所定のディレクトリ名に移動させます。

```
tar -xf ../mpfr-3.1.5.tar.xz
mv -v mpfr-3.1.5 mpfr
tar -xf ../gmp-6.1.2.tar.xz
mv -v gmp-6.1.2 gmp
tar -xf ../mpc-1.0.3.tar.gz
mv -v mpc-1.0.3 mpc
```

専用のディレクトリを再度生成します。

```
mkdir -v build
cd       build
```

GCC のビルドに入る前に、デフォルトの最適化フラグを上書きするような環境変数の設定がないことを確認してください。

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
CC=$LFS_TGT-gcc                                     \
CXX=$LFS_TGT-g++                                    \
AR=$LFS_TGT-ar                                      \
RANLIB=$LFS_TGT-ranlib                              \
../configure                                        \
    --prefix=/tools                                 \
    --with-local-prefix=/tools                      \
    --with-native-system-header-dir=/tools/include \
    --enable-languages=c,c++                        \
    --disable-libstdcxx-pch                         \
    --disable-multilib                              \
    --disable-bootstrap                             \
    --disable-libgomp
```

configure オプションの意味:

--enable-languages=c,c++
C と C++ の両コンパイラーを生成することを指示します。

--disable-libstdcxx-pch
libstdc++ に対してプリコンパイルヘッダー (pre-compiled header; PCH) をビルドしないように指示します。 これを含めてしまうとサイズが増えることになり、そもそも利用する必要がありません。

--disable-bootstrap
GCC のネイティブビルドを行うには、デフォルトでは ”ブートストラップ” ビルドを行ないます。 これは単に GCC をコンパイルするのではなく、数回のコンパイルを繰り返します。 つまり一回めにビルドされたプログラムを使って二回め、三回めのコンパイルを行うものです。 二回め、三回めとコンパイルを繰り返すのは、これによって自分自身を再生成して完璧なものを作り出すためです。 このことによってコンパイルが正確に行われたことを暗に示すことにもなります。 しかし LFS のビルドでは、何度もブートストラップを行う必要のない、手堅い(solid) コンパイラーを作り出します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

最後にシンボリックリンクを作成します。 プログラムやスクリプトの中には gcc ではなく cc を用いるものが結構あります。 シンボリックリンクを作ることで各種のプログラムを汎用的にすることができ、通常 GNU C コンパイラーがインストールされていない多くの UNIX システムでも利用できるものになります。 cc を利用することにすれば、システム管理者がどの C コンパイラーをインストールすべきかを判断する必要がなくなります。

```
ln -sv gcc /tools/bin/cc
```

注意

この時点で、構築したツールチェーンの基本的な（コンパイルやリンクなどの）機能が正しく動作していることを確認する必要があります。 健全性検査（sanity check）を行うために以下を実行してください。

```
echo 'int main(){}' > dummy.c
cc dummy.c
readelf -l a.out | grep ': /tools'
```

問題なく動作した場合はエラーがなかったということで、最後のコマンドから出力される結果は以下のようになるはずです。

```
[Requesting program interpreter: /tools/lib/ld-linux.so.2]
```

ここでダイナミックリンカーのディレクトリが /tools/lib であることを確認してください。 あるいは 64 ビットマシンであれば /tools/lib64 であることを確認してください。

コマンドの出力結果が上と異なっていたり、あるいは何も出力されなかった場合は、何かがおかしいことを意味します。 どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。 解決せずにこの先に進まないでください。 cc ではなく gcc を使って再度健全性検査を行ってみてください。 これで解決したなら /tools/bin/cc のシンボリックリンクが正しくないということです。 正しく生成し直してください。 また環境変数 PATH が正しいかどうかも確認してください。 echo $PATH を実行して、実行パスリストの先頭が /tools/bin であるかどうか確認します。 PATH が間違っていたなら、実はあなたは lfs ユーザーでログインしていないのかもしれませんし 4.4.「環境設定」での作業に間違いがあったのかもしれません。

すべてが終了したらテストファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out
```

本パッケージの詳細は 6.17.2.「GCC の構成」を参照してください。

5.11. Tcl-core-8.6.6

Tcl パッケージはツールコマンド言語（Tool Command Language）を提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 40 MB

5.11.1. Tcl-core のインストール

本パッケージとこれに続く三つのパッケージ（Expect と DejaGNU と Check）は、GCC および Binutils などにおけるテストスイートを実行するのに必要となるためインストールするものです。 テスト目的のためにこれら四つのパッケージをインストールするというのは、少々大げさなことかもしれません。 ただ本質的ではないことであっても、重要なツール類が正常に動作するという確認が得られれば安心できます。 本章ではテストスイートを実行することは必須ではないため、実行しないものとしていますが、それら四つのパッケージは 第6章で行うテストのために必要となるものです。

ここで利用する Tcl パッケージは LFS におけるテストを実施するための最低限必要なバージョンです。 完全なパッケージについては BLFS Tcl procedures を参照してください。

Tcl をコンパイルするための準備をします。

```
cd unix
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
TZ=UTC make test
```

Tcl のテストスイートは、特定のホスト環境において失敗することがありますが、その原因はよく分かっていません。したがってテストスイートの失敗は驚くことではなく、さして重大なことではありません。 *TZ=UTC* はタイムゾーンを協定世界時間（Coordinated Universal Time; UTC）としても知られる時間に設定します。 ただしこれはテストスイートを実行する時だけの設定です。 こうしておけば時刻に関するテストが正しく処理されます。 環境変数 TZ については 第7章にて詳しく説明しています。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

インストールされたライブラリを書き込み可能にします。 こうすることで後にデバッグシンボルを削除できるようにします。

```
chmod -v u+w /tools/lib/libtcl8.6.so
```

Tcl のヘッダーファイルをインストールします。 これらは次にビルドする Expect が必要とするファイルです。

```
make install-private-headers
```

必要となるシンボリックリンクを生成します。

```
ln -sv tclsh8.6 /tools/bin/tclsh
```

5.11.2. Tcl-core の構成

インストールプログラム: tclsh (tclsh8.6 へのリンク), tclsh8.6
インストールライブラリ: libtcl8.6.so, libtclstub8.6.a

概略説明

tclsh8.6	Tcl コマンドシェル
tclsh	tclsh8.6 へのリンク
libtcl8.6.so	Tcl ライブラリ
libtclstub8.6.a	Tcl スタブライブラリ

5.12. Expect-5.45

Expect パッケージは、他のプログラムと対話的に処理を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 4.3 MB

5.12.1. Expect のインストール

Expect の configure スクリプトは、ホストシステムの /usr/local/bin/stty を利用しようとしますが、/bin/stty を利用するように修正します。 これを行うのは、ここで構築しているテストスイートのツール類を、ツールチェーンの最終構築まで正常動作してもらうために必要となるからです。

```
cp -v configure{,.orig}
sed 's:/usr/local/bin:/bin:' configure.orig > configure
```

Expect をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools       \
            --with-tcl=/tools/lib \
            --with-tclinclude=/tools/include
```

configure オプションの意味:

--with-tcl=/tools/lib
Tcl のインストールモジュールを、ホストシステムに存在しているツール類の場所からではなく、一時的ツールを配置したディレクトリから探し出すことを指示します。

--with-tclinclude=/tools/include
Tcl の内部ヘッダーファイルを探し出す場所を指定します。 configure は自動的には Tcl ヘッダーファイルの場所を探し出さないため、これを明示します。

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make test
```

Expect のテストスイートは、特定のホスト環境において失敗することがありますが、その原因はよく分かっていません。 したがってテストスイートの失敗は驚くことではなく、さして重大なことではありません。

パッケージをインストールします。

```
make SCRIPTS="" install
```

make パラメーターの意味:

SCRIPTS=""
Expect の補助的なスクリプトはインストールしないことを指示します。 これらは必要ありません。

5.12.2. Expect の構成

インストールプログラム: expect
インストールライブラリ: libexpect-5.45.so

概略説明

expect スクリプトを通じて他の対話的なプログラムとの処理を行います。

libexpect-5.45.so Tcl 拡張機能を通じて、あるいは（Tcl がない場合に）C や C++ から直接、Expect とのやりとりを行う関数を提供します。

5.13. DejaGNU-1.6

DejaGNU パッケージは、他のプログラムをテストするフレームワークを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.2 MB

5.13.1. DejaGNU のインストール

DejaGNU をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをビルドしてインストールします。

```
make install
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

5.13.2. DejaGNU の構成

インストールプログラム: runtest

概略説明

runtest expect シェルの適正な場所を特定し DejaGNU を実行するためのラッパースクリプト。

5.14. Check-0.10.0

Check は C 言語に対してのユニットテストのフレームワークです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 9.5 MB

5.14.1. Check のインストール

Check をコンパイルするための準備をします。

```
PKG_CONFIG= ./configure --prefix=/tools
```

configure パラメーターの意味:

PKG_CONFIG=
このパラメーターの指定により、configure スクリプトにて pkg-config のオプションが指定されてもすべて無視するようにします。 こうしておかないと、/tools ディレクトリに存在しないライブラリをリンクしようとしてしまうためです。

パッケージをビルドします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

Check のテストスイートには比較的時間を要する点に注意してください。(4 SBU ほど)

パッケージをインストールします。

```
make install
```

5.14.2. Check の構成

インストールプログラム: checkmk
インストールライブラリ: libcheck.{a,so}

概略説明

checkmk Check ユニットテストフレームワークにて利用される、C 言語ユニットテストを生成するための Awk スクリプト。

libcheck.{a,so} テストプログラムから Check を呼び出すための関数を提供します。

5.15. Ncurses-6.0

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 38 MB

5.15.1. Ncurses のインストール

ビルドにあたって gawk が必ず最初に見つかるようにします。

```
sed -i s/mawk// configure
```

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools \
            --with-shared   \
            --without-debug \
            --without-ada   \
            --enable-widec  \
            --enable-overwrite
```

configure オプションの意味

--without-ada
このオプションは Ncurses に対して Ada コンパイラーのサポート機能をビルドしないよう指示します。 この機能はホストシステムでは提供されているかもしれませんが、chroot 環境に入ってしまうと利用できなくなります。

--enable-overwrite
このオプションは Ncurses のヘッダーファイルを /tools/include/ncurses ではなく /tools/include にインストールすることを指示します。 これは他のパッケージが Ncurses のヘッダーファイルを正しく見つけ出せるようにするためです。

--enable-widec
本スイッチは通常のライブラリ（libncurses.so.6.0）ではなくワイド文字対応のライブラリ（libncursesw.so.6.0）をビルドすることを指示します。 ワイド文字対応のライブラリは、マルチバイトロケールと従来の 8ビットロケールの双方に対して利用可能です。 通常のライブラリでは 8ビットロケールに対してしか動作しません。 ワイド文字対応と通常のものとでは、ソース互換があるもののバイナリ互換がありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにはテストスイートがありますが、インストールした後に実行しなければなりません。 テストスイートのためのファイル群はサブディレクトリ test/ 以下に残っています。 詳しいことはそのディレクトリ内にある README ファイルを参照してください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.20.2.「Ncurses の構成」を参照してください。

5.16. Bash-4.4

Bash は Bourne-Again SHell を提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 54 MB

5.16.1. Bash のインストール

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --without-bash-malloc
```

configure オプションの意味:

--without-bash-malloc
このオプションは Bash のメモリ割り当て関数（malloc）を利用しないことを指示します。 この関数はセグメンテーションフォールトが発生する可能性があるものとして知られています。 このオプションをオフにすることで、Bash は Glibc が提供する malloc 関数を用いるものとなり、そちらの方が安定しています。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make tests
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

他のプログラム類がシェルとして sh を用いるものがあるためリンクを作ります。

```
ln -sv bash /tools/bin/sh
```

本パッケージの詳細は 6.33.2.「Bash の構成」を参照してください。

5.17. Bzip2-1.0.6

Bzip2 パッケージはファイル圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。 テキストファイルであれば、これまでよく用いられてきた gzip に比べて bzip2 の方が圧縮率の高いファイルを生成できます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 5.2 MB

5.17.1. Bzip2 のインストール

Bzip2 パッケージには configure がありません。 コンパイルおよびテストを行うには以下を実行します。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make PREFIX=/tools install
```

本パッケージの詳細は 6.18.2.「Bzip2 の構成」を参照してください。

5.18. Coreutils-8.26

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 132 MB

5.18.1. Coreutils のインストール

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --enable-install-program=hostname
```

configure オプションの意味:

`--enable-install-program=hostname`
このオプションは hostname プログラムを生成しインストールすることを指示します。 このプログラムはデフォルトでは生成されません。 そしてこれは Perl のテストスイートを実行するのに必要となります。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes check
```

パラメーター *RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes* は、テストスイートの実行にあたって（CPU パワーとメモリ使用量の観点で）比較的負荷の高いテストを追加で実行することを指示します。 特定のプラットフォームに対してのテスト確認となりますが、一般に Linux 上において支障はありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.50.2.「Coreutils の構成」を参照してください。

5.19. Diffutils-3.5

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 21.5 MB

5.19.1. Diffutils のインストール

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.51.2.「Diffutils の構成」を参照してください。

5.20. File-5.29

File パッケージは、指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 15 MB

5.20.1. File のインストール

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.12.2.「File の構成」を参照してください。

5.21. Findutils-4.6.0

Findutils パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。 このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いものですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 35 MB

5.21.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.53.2.「Findutils の構成」を参照してください。

5.22. Gawk-4.1.4

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 34 MB

5.22.1. Gawk のインストール

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.52.2.「Gawk の構成」を参照してください。

5.23. Gettext-0.19.8.1

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。 各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。 つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 0.9 SBU
必要ディスク容量: 164 MB

5.23.1. Gettext のインストール

ここで構築している一時的なツールに際して、Gettext パッケージからは3つのバイナリをビルドしてインストールするだけで十分です。

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
cd gettext-tools
EMACS="no" ./configure --prefix=/tools --disable-shared
```

configure オプションの意味:

EMACS="no"
特定のホストにて configure スクリプトが Emacs Lisp ファイルを見出せずにハングすることがあるため、これを回避します。

--disable-shared
Gettext の共有ライブラリはこの時点では必要でないため、それらをビルドしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make -C gnulib-lib
make -C intl pluralx.c
make -C src msgfmt
make -C src msgmerge
make -C src xgettext
```

3つのバイナリしかコンパイルしなかったため、その他のライブラリをコンパイルしない限り、テストスイートを成功させることはできません。 したがってテストスイートをこの段階で実行することはお勧めしません。

msgfmt, msgmerge, xgettext の各プログラムをインストールします。

```
cp -v src/{msgfmt,msgmerge,xgettext} /tools/bin
```

本パッケージの詳細は 6.47.2.「Gettext の構成」を参照してください。

5.24. Grep-2.27

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 18 MB

5.24.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.31.2.「Grep の構成」を参照してください。

5.25. Gzip-1.8

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 8.9 MB

5.25.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.57.2.「Gzip の構成」を参照してください。

5.26. M4-1.4.18

M4 パッケージはマクロプロセッサーを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 19 MB

5.26.1. M4 のインストール

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.28.2.「M4 の構成」を参照してください。

5.27. Make-4.2.1

Make パッケージは、パッケージ類をコンパイルするためのプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 12.5 MB

5.27.1. Make のインストール

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools --without-guile
```

configure オプションの意味:

--without-guile
Make-4.2.1 のビルドにおいて Guile ライブラリはリンクしないようにします。 そのライブラリはホストシステム上に存在しているかもしれませんが、次節での chroot 環境では利用できないかもしれません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.61.2.「Make の構成」を参照してください。

5.28. Patch-2.7.5

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。 「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 10.4 MB

5.28.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.62.2.「Patch の構成」を参照してください。

5.29. Perl-5.24.1

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間: 1.3 SBU
必要ディスク容量: 248 MB

5.29.1. Perl のインストール

Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des -Dprefix=/tools -Dlibs=-lm
```

パッケージをビルドします。

```
make
```

Perl にはテストスイートがありますが、次章にてインストールする際に実施するのがよいでしょう。

ユーティリティプログラムやライブラリの中で、特定のものはこの時点でインストールする必要があります。

```
cp -v perl cpan/podlators/scripts/pod2man /tools/bin
mkdir -pv /tools/lib/perl5/5.24.1
cp -Rv lib/* /tools/lib/perl5/5.24.1
```

本パッケージの詳細は 6.40.2.「Perl の構成」を参照してください。

5.30. Sed-4.3

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 10.0 MB

5.30.1. Sed のインストール

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.24.2.「Sed の構成」を参照してください。

5.31. Tar-1.29

Tar パッケージはアーカイブプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 32 MB

5.31.1. Tar のインストール

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.68.2.「Tar の構成」を参照してください。

5.32. Texinfo-6.3

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 99 MB

5.32.1. Texinfo のインストール

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

注記

configure 処理の途中にテストが実行され TestXS_la-TestXS.lo に対してのエラーが示されます。 これは LFS においては関係がないため無視して構いません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.69.2.「Texinfo の構成」を参照してください。

5.33. Util-linux-2.29.1

Util-linux パッケージはさまざまなユーティリティープログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 114 MB

5.33.1. Util-linux のインストール

Util-linux をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools                \
            --without-python               \
            --disable-makeinstall-chown    \
            --without-systemdsystemunitdir \
            PKG_CONFIG=""
```

configure オプションの意味:

--without-python
本スイッチはホストシステムに Python がインストールされていても、これを用いないようにします。 ビルドの際に不要なバインディングを作らないようにするためです。

--disable-makeinstall-chown
本スイッチはインストール中に chown コマンドを利用しないようにします。 /tools ディレクトリへのインストールは不要であり、root によりインストールする必要もなくなります。

--without-systemdsystemunitdir
systemd を利用しているシステムにおいては、systemd に関連するファイルを /tools 内に存在しないディレクトリにインストールしようとします。 本スイッチはそのような不要な処理をなくします。

PKG_CONFIG=""
ホスト上での不要な機能を取り込まないように、環境変数を設定します。 環境変数を設定するこの方法は、LFS の他の節ではコマンド実行前に行っており、やり方が異なります。 これは configure の際に環境変数を設定するという一例を示しているものです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

5.34. Xz-5.2.3

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。 xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 16 MB

5.34.1. Xz のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/tools
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイルが終了しました。 前にも述べたように、この章にて一時的ツールのテストスイートを実行することは必須ではありません。 しかしテストスイートを実行するなら、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

本パッケージの詳細は 6.45.2.「Xz の構成」を参照してください。

5.35. ストリップ

本節に示す作業は必須ではありません。 ただ LFS パーティションの容量が比較的少ない場合には、不要なものは削除することを覚えておきましょう。 ここまでにビルドしてきた実行ファイルやライブラリには、合計で 70 MB ほどの不要なデバッグシンボル情報が含まれています。 それらを取り除くには以下を実行します。

```
strip --strip-debug /tools/lib/*
/usr/bin/strip --strip-unneeded /tools/{,s}bin/*
```

上のコマンド実行ではいくつものファイルがフォーマット不明となって処理がスキップされます。 それらはたいてい、バイナリではなくスクリプトであることを示しています。 またストリップのコマンドはシステム上のものを用い、/tools ディレクトリ内のバイナリモジュールをストリップします。

--strip-unneeded パラメーターは 絶対に ライブラリに対して用いないでください。 もし用いるとスタティックライブラリが破壊され、ツールチェーンを構成するパッケージをすべて作り直さなければならなくなります。

さらに容量を節約するためにドキュメント類を削除します。

```
rm -rf /tools/{,share}/{info,man,doc}
```

この時点において環境変数 $LFS の配下には最低でも 3 GB の空き容量が必要になります。 これは次のフェーズにて Glibc と Gcc をビルドしインストールするためです。 Glibc のビルドとインストールができさえすれば、残りのものもすべてビルド、インストールができます。

5.36. 所有者の変更

注記

本書のこれ以降で実行するコマンドはすべて root ユーザーでログインして実行します。 もう lfs ユーザーは不要です。 root ユーザーの環境にて環境変数 $LFS がセットされていることを今一度確認してください。

$LFS/tools ディレクトリの所有者は今は lfs ユーザーであり、これはホストシステム上に存在するユーザーです。 この $LFS/tools ディレクトリをこのままにしておくということは、そこにあるファイル群が、存在しないアカウントに対するユーザーIDによって所有される形を生み出すことになります。 これは危険なことです。 後にユーザーアカウントが生成され同一のユーザーIDを持ったとすると $LFS/tools の所有者となってしまい、そこにあるファイルすべてを所有することになって、悪意のある操作に利用されてしまいます。

この問題を解消するためには、新しく作り出される LFS システムに lfs ユーザーを作成することが考えられます。 その場合には同一のユーザーID、グループIDとなるように作ります。 もっと良い方法があります。 $LFS/tools ディレクトリの所有者を root ユーザーにすることです。以下のコマンドによりこれを実現します。

```
chown -R root:root $LFS/tools
```

$LFS/tools ディレクトリは LFS システムの構築作業を終えれば削除することができます。 一方これを残しておいて本書と同一バージョンの LFS システムを新たに構築する際に利用することもできます。 $LFS/tools ディレクトリをどのように残すかは読者の皆さんの好みに応じて取り決めてください。

注意

この先の LFS システム構築に向けて一時的なツール類を残しておきたい場合は この時点で バックアップを取っておくのが良いでしょう。 第6章で実施する作業を通じて、今存在している一時的ツールは変更が加えられますので、将来、別のビルド作業を行う際には使えないものとなります。

第III部 LFSシステムの構築

第6章 基本的なソフトウェアのインストール

6.1. はじめに

この章ではビルド環境に入って正式な LFS システムの構築作業を始めます。 chroot によって一時的なミニ Linux システムへ移行し、準備作業を行った上でパッケージ類のインストールを行っていきます。

パッケージ類のインストール作業は簡単なものです。 インストール手順の説明は、たいていは手短に一般的なものだけで済ますこともできます。 ただ誤りの可能性を極力減らすために、個々のインストール手順の説明は十分に行うことにします。 Linux システムがどのようにして動作しているかを学ぶには、個々のパッケージが何のために用いられていて、なぜユーザー（あるいはシステム）がそれを必要としているのかを知ることが重要になります。

コンパイラーには最適化オプションがありますが、これを利用することはお勧めしません。 コンパイラーの最適化を用いればプログラムが若干速くなる場合もありますが、そもそもコンパイルが出来なかったり、プログラムの実行時に問題が発生したりする場合があります。 もしコンパイラーの最適化によってパッケージビルドが出来なかったら、最適化をなしにしてもう一度コンパイルすることで解決するかどうかを確認してください。 最適化を行ってパッケージがコンパイル出来たとしても、コードとビルドツールの複雑な関連に起因してコンパイルが適切に行われないリスクをはらんでいます。 また `-march` オプションや `-mtune` オプションにて指定する値は、本書には明示しておらずテストも行っていませんので注意してください。 これらはツールチェーンパッケージ（Binutils、GCC、Glibc）に影響を及ぼすことがあります。 最適化オプションを用いることによって得られるものがあったとしても、それ以上にリスクを伴うことがしばしばです。 初めて LFS 構築を手がける方は、最適化オプションをなしにすることをお勧めします。 これ以降にビルドしていくツール類は、それでも十分に速く安定して動作するはずです。

本章にてインストールしていくパッケージ類のビルド順は、必ず本書どおりに行ってください。 プログラムはすべて `/tools` ディレクトリを直接参照するような形でビルドしてはなりません。 また同じ理由でパッケージ類を同時並行でビルドしないでください。 特にデュアル CPU マシンにおいて同時にビルドしていくと時間の節約を図ることができますが `/tools` ディレクトリを直接参照するプログラムが出来上がってしまい、このディレクトリが存在しなくなった時にはプログラムが動作しないことになります。

各ページではインストール手順の説明よりも前に、パッケージの内容やそこに何が含まれているかを簡単に説明し、ビルドにどれくらいの時間を要するか、ビルド時に必要となるディスク容量はどれくらいかを示しています。 またインストール手順の最後には、パッケージがインストールするプログラムやライブラリの一覧を示し、それらがどのようなものかを簡単に説明しています。

注記

本章にて導入するパッケージにおいて SBU 値と必要ディスク容量には、テストスイート実施による時間や容量をすべて含んでいます。

6.1.1. ライブラリについて

LFS 編集者は全般にスタティックライブラリは作らないものとしています。 スタティックライブラリが作られたそもそもの目的は、現在の Linux システムにとってはもはや古いものです。 スタティックライブラリをリンクすると障害となることすらあります。 例えばセキュリティ問題を解決するためにライブラリリンクを更新しなければならなくなったら、スタティックライブラリにリンクしていたプログラムはすべて再構築しなければなりません。 したがってスタティックライブラリを使うべきかどうかは、いつも迷うところであり、関連するプログラム（あるいはリンクされるプロシージャ）であってもどちらかに定めなければなりません。

第6章の手順では、スタティックライブラリのインストールはたいてい行わないようにしています。 ただし glibc や gcc においては、一般的なパッケージビルドに必要であるため、スタティックライブラリを利用します。 多くのケースでは configure に対して `--disable-static` を与えることで実現しますが、これができない場合には他の方法を取ります。

ライブラリに関してのより詳細な議論については BLFS ブックの Libraries: Static or shared? を参照してください。

6.2. 仮想カーネルファイルシステムの準備

カーネルが取り扱うさまざまなファイルシステムは、カーネルとの間でやり取りが行われます。 これらのファイルシステムは仮想的なものであり、ディスクを消費するものではありません。 ファイルシステムの内容はメモリ上に保持されます。

ファイルシステムをマウントするディレクトリを以下のようにして生成します。

```
mkdir -pv $LFS/{dev,proc,sys,run}
```

6.2.1. 初期デバイスノードの生成

カーネルがシステムを起動する際には、いくつかのデバイスノードの存在が必要です。 特に console と null です。 これらのデバイスノードはハードディスク上に生成されていなければなりません。 udevd が起動し、また Linux が起動パラメーター *init=/bin/bash* によって起動されれば利用可能となります。 そこで以下のコマンドによりデバイスノードを生成します。

```
mknod -m 600 $LFS/dev/console c 5 1
mknod -m 666 $LFS/dev/null c 1 3
```

6.2.2. /dev のマウントと有効化

各デバイスを /dev に設定する方法としては、/dev ディレクトリに対して tmpfs のような仮想ファイルシステムをマウントすることが推奨されます。 こうすることで各デバイスが検出されアクセスされる際に、その仮想ファイルシステム上にて動的にデバイスを生成する形を取ることができます。 このデバイス生成処理は一般的にはシステム起動時に Udev によって行われます。 今構築中のシステムにはまだ Udev を導入していませんし、再起動も行っていませんので /dev のマウントと有効化は手動で行ないます。 これはホストシステムの /dev ディレクトリに対して、バインドマウントを行うことで実現します。 バインドマウント（bind mount）は特殊なマウント方法の一つで、ディレクトリのミラーを生成したり、他のディレクトリへのマウントポイントを生成したりします。 以下のコマンドにより実現します。

```
mount -v --bind /dev $LFS/dev
```

6.2.3. 仮想カーネルファイルシステムのマウント

残りの仮想カーネルファイルシステムを以下のようにしてマウントします。

```
mount -vt devpts devpts $LFS/dev/pts -o gid=5,mode=620
mount -vt proc proc $LFS/proc
mount -vt sysfs sysfs $LFS/sys
mount -vt tmpfs tmpfs $LFS/run
```

devpts に対するマウントオプションの意味

gid=5
このオプションは、devpts により生成されるデバイスノードを、グループID が 5 となるようにするものです。 この ID は、この後に tty グループにおいて利用します。 ここではグループ名ではなくグループ ID を用いるものとしています。 この理由は、ホストシステムが tty グループに対して異なる ID を利用していることがあるためです。

mode=0620
このオプションは、devpts により生成されるデバイスノードのモードを 0620 にします。（所有ユーザーが読み書き可、グループが書き込み可）前のオプションとともにこのオプションを指定することによって、devpts が生成するデバイスノードが grantpt() の要求を満たすようにします。 これはつまり、Glibc の ヘルパーコマンド pt_chown（デフォルトではインストールされない）が必要ないことを意味します。

ホストシステムによっては /dev/shm が /run/shm へのシンボリックリンクになっているものがあります。 上の作業にて /run tmpfs がマウントされましたが、これはこのディレクトリを生成する必要がある時のみです。

```
if [ -h $LFS/dev/shm ]; then
  mkdir -pv $LFS/$(readlink $LFS/dev/shm)
fi
```

6.3. パッケージ管理

パッケージ管理についての説明を LFS ブックに加えて欲しいとの要望をよく頂きます。 パッケージ管理ツールがあれば、インストールされるファイル類を管理し、パッケージの削除やアップグレードを容易に実現できます。 パッケージ管理ツールでは、バイナリファイルやライブラリファイルだけでなく、設定ファイル類のインストールも取り扱います。 パッケージ管理ツールをどうしたら・・・ いえいえ本節は特定のパッケージ管理ツールを説明するわけでなく、その利用を勧めるものでもありません。 もっと広い意味で、管理手法にはどういったものがあり、どのように動作するかを説明

します。 あなたにとって最適なパッケージ管理がこの中にあるかもしれません。 あるいはそれらをいくつか組み合わせて実施することになるかもしれません。 本節ではパッケージのアップグレードを行う際に発生する問題についても触れます。

LFS や BLFS において、パッケージ管理ツールについて触れていない理由には以下のものがあります。

- 本書の目的は Linux システムがいかに構築されているかを学ぶことです。 パッケージ管理はその目的からはずれてしまいます。
- パッケージ管理についてはいくつもの方法があり、それらには一長一短があります。 ユーザーに対して満足のいくものを選び出すのは困難です。

ヒントプロジェクト（Hints Project）ページに、パッケージ管理についての情報が示されています。 それらが望むものかどうか確認してみてください。

6.3.1. アップグレードに関する問題

パッケージ管理ツールがあれば、各種ソフトウェアの最新版がリリースされた際に容易にアップグレードができます。全般に LFS ブックや BLFS ブックに示されている作業手順に従えば、新しいバージョンへのアップグレードを行っていくことはできます。 以下ではパッケージをアップグレードする際に注意すべき点、特に稼動中のシステムに対して実施するポイントについて説明します。

- Glibc を新しいバージョン（例えば glibc-2.19 から glibc-2.20）にアップグレードする必要が発生した場合は LFS を再構築することが安全です。 必要なパッケージの依存順を知っていれば再構築できるかもしれませんが、これはお勧めしません。
- 共有ライブラリを提供しているパッケージをアップデートする場合で、そのライブラリの名前が変更になった場合は、そのライブラリを動的にリンクしているすべてのパッケージは、新しいライブラリにリンクされるように再コンパイルを行う必要があります。（パッケージのバージョンとライブラリ名との間には相関関係はありません。）例えば foo-1.2.3 というパッケージが共有ライブラリ libfoo.so.1 をインストールするものであるとします。 そして今、新しいバージョン foo-1.2.4 にアップグレードし、共有ライブラリ libfoo.so.2 をインストールするとします。 この例では libfoo.so.1 を動的にリンクいるパッケージがあったとすると、それらはすべて libfoo.so.2 に対してリンクするよう再コンパイルしなければなりません。 古いライブラリに依存しているパッケージすべてを再コンパイルするまでは、そのライブラリを削除するべきではありません。

6.3.2. パッケージ管理手法

以下に一般的なパッケージ管理手法について示します。 パッケージ管理マネージャーを用いる前に、さまざまな方法を検討し、特にそれぞれの欠点も確認してください。

6.3.2.1. すべては頭の中で

そうです。 これもパッケージ管理のやり方の一つです。 いろいろなパッケージに精通していて、どんなファイルがインストールされるか分かっている人もいます。 そんな人はパッケージ管理ツールを必要としません。 あるいはパッケージが更新された際に、システム全体を再構築しようと考えている人なら、やはりパッケージ管理ツールを必要としません。

6.3.2.2. 異なるディレクトリへのインストール

これは最も単純なパッケージ管理のやり方であり、パッケージ管理のためのツールを用いる必要はありません。 個々のパッケージを個別のディレクトリにインストールする方法です。 例えば foo-1.1 というパッケージを /usr/pkg/foo-1.1 ディレクトリにインストールし、この /usr/pkg/foo-1.1 に対するシンボリックリンク /usr/pkg/foo を作成します。 このパッケージの新しいバージョン foo-1.2 をインストールする際には /usr/pkg/foo-1.2 ディレクトリにインストールした上で、先ほどのシンボリックリンクをこのディレクトリを指し示すように置き換えます。

PATH、LD_LIBRARY_PATH、MANPATH、INFOPATH、CPPFLAGS といった環境変数に対しては /usr/pkg/foo ディレクトリを加える必要があるかもしれません。 もっともパッケージによっては、このやり方では管理できないものもあります。

6.3.2.3. シンボリックリンク方式による管理

これは一つ前に示したパッケージ管理テクニックの応用です。 各パッケージは同様にインストールします。 ただし先ほどのようなシンボリックリンクを生成するのではなく /usr ディレクトリ階層の中に各ファイルのシンボリックリンクを生成します。 この方法であれば環境変数を追加設定する必要がなくなります。 シンボリックリンクを自動生成することもできますが、パッケージ管理ツールの中にはこの手法を使って構築されているものもあります。 よく知られているものとして Stow、Epkg、Graft、Depot があります。

インストール時には意図的な指示が必要です。 パッケージにとっては /usr にインストールすることが指定されたものとなりますが、実際には /usr/pkg 配下にインストールされるわけです。 このインストール方法は単純なものではありません。 例えば今 libfoo-1.1 というパッケージをインストールするものとします。 以下のようなコマンドでは、このパッケージを正しくインストールできません。

```
./configure --prefix=/usr/pkg/libfoo/1.1
make
make install
```

インストール自体は動作しますが、このパッケージに依存している他のパッケージは、期待どおりには libfoo を正しくリンクしません。 例えば libfoo をリンクするパッケージをコンパイルする際には /usr/lib/libfoo.so.1 がリンクされると思うかもしれませんが、実際には /usr/pkg/libfoo/1.1/lib/libfoo.so.1 がリンクされることになります。 正しくリンクするためには DESTDIR 変数を使って、パッケージのインストールをうまく仕組む必要があります。 この方法は以下のようにして行います。

```
./configure --prefix=/usr
make
make DESTDIR=/usr/pkg/libfoo/1.1 install
```

多くのパッケージは、たいていはこの手法をサポートしていますが、そうでないものもあります。 この手法を取り入れていないパッケージに対しては、手作業にてインストールすることが必要になります。 またはそういった問題を抱えるパッケージであれば /opt ディレクトリにインストールする方が容易なことかもしれません。

6.3.2.4. タイムスタンプによる管理方法

この方法ではパッケージをインストールするにあたって、あるファイルにタイムスタンプが記されます。 インストールの直後に find コマンドを適当なオプション指定により用いることで、インストールされるすべてのファイルのログが生成されます。 これはタイムスタンプファイルの生成の後に行われます。 この方法を用いたパッケージ管理ツールとして install-log があります。

この方法はシンプルである利点がありますが、以下の二つの欠点があります。 インストールの際に、いずれかのファイルのタイムスタンプが現在時刻でなかった場合、そういったファイルはパッケージ管理ツールが正しく制御できません。 またこの方法は一つのパッケージだけが、その時にインストールされることを前提とします。 例えば二つのパッケージが二つの異なる端末から同時にインストールされるような場合は、ログファイルが適切に生成されません。

6.3.2.5. インストールスクリプトの追跡管理

この方法はインストールスクリプトが実行するコマンドを記録するものです。 これには以下の二種類の手法があります。

環境変数 LD_PRELOAD を使えば、インストール前にあらかじめロードされるライブラリを定めることができます。 パッケージのインストール中には cp、install、mv など、さまざまな実行モジュールにそのライブラリをリンクさせ、ファイルシステムを変更するようなシステムコールを監視することで、そのライブラリがパッケージを追跡管理できるようになります。 この方法を実現するためには、動的リンクする実行モジュールはすべて suid ビット、sgid ビットがオフでなければなりません。 事前にライブラリをロードしておくと、インストール中に予期しない副作用が発生するかもしれません。 したがって、ある程度のテスト確認を行って、パッケージ管理ツールが不具合を引き起こさないこと、しかるべきファイルの記録を取っておくことが必要とされます。

二つめの方法は strace を用いるものです。 これはインストールスクリプトの実行中に発生するシステムコールを記録するものです。

6.3.2.6. パッケージのアーカイブを生成する方法

この方法では、シンボリックリンク方式によるパッケージ管理にて説明したのと同じように、パッケージが個別のディレクトリにインストールされます。 インストールされた後には、インストールファイルを使ってアーカイブが生成されます。 このアーカイブはこの後に、ローカルPCへのインストールに用いられ、他のPCのインストールに利用することもできます。

商用ディストリビューションが採用しているパッケージ管理ツールは、ほとんどがこの方法によるものです。 この方法に従ったパッケージ管理ツールの例に RPM があります。（これは Linux Standard Base Specification が規定しています。）また pkg-utils、Debian の apt、Gentoo の Portage システムがあります。 このパッケージ管理手法を LFS システムに適用するヒント情報が http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/fakeroot.txt にあります。

パッケージファイルにその依存パッケージ情報まで含めてアーカイブ生成することは、非常に複雑となり LFS の範疇を超えるものです。

Slackware は、パッケージアーカイブに対して tar ベースのシステムを利用しています。 他のパッケージ管理ツールはパッケージの依存性を取り扱いますが、このシステムは意図的にこれを行っていません。 Slackware のパッケージ管理に関する詳細は http://www.slackbook.org/html/package-management.html を参照してください。

6.3.2.7. ユーザー情報をベースとする管理方法

この手法は LFS に固有のものであり Matthias Benkmann により考案されました。 ヒントプロジェクト（Hints Project）から入手することが出来ます。 考え方としては、各パッケージを個々のユーザーが共有ディレクトリにインストールします。 パッケージに属するファイル類は、ユーザーIDを確認することで容易に特定出来るようになります。 この手法の特徴や短所については、複雑な話となるため本節では説明しません。 詳しくは http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/more_control_and_pkg_man.txt に示されているヒントを参照してください。

6.3.3. 他システムへの LFS の配置

LFS システムの利点の一つとして、どのファイルもディスク上のどこに位置していても構わないことです。 他のコンピューターに対してビルドした LFS の複製を作ろうとするなら、それが同等のアーキテクチャーであれば容易に実現できます。 つまり tar コマンドを使って LFS のルートディレクトリを含むパーティション（LFS の基本的なビルドの場合、非圧縮で 250MB 程度）をまとめ、これをネットワーク転送か、あるいは CD-ROM を通じて新しいシステムにコピーし、伸張（解凍）するだけです。 この場合でも、設定ファイルはいくらか変更することが必要です。 変更が必要となる設定ファイルは以下のとおりです。 **/etc/hosts**, **/etc/fstab**, **/etc/passwd**, **/etc/group**, **/etc/shadow**, **/etc/ld.so.conf**, **/etc/sysconfig/rc.site**, **/etc/sysconfig/network**, **/etc/sysconfig/ifconfig.eth0**

新しいシステムのハードウェアと元のカーネルに差異があるかもしれないため、カーネルを再ビルドする必要があるでしょう。

注記

類似するアーキテクチャーのシステム間にてコピーを行う際には問題が生じるとの報告があります。 例えばインテルアーキテクチャーに対する命令セットは AMD プロセッサーに対するものと完全に一致しているわけではないため、一方の命令セットが後に他方で動作しなくなることも考えられます。

最後に新システムを起動可能とするために 8.4.「GRUB を用いたブートプロセスの設定」を設定する必要があります。

6.4. Chroot 環境への移行

chroot 環境に入って最終的な LFS システムの構築、インストールを行っていきます。 **root** ユーザーになって以下のコマンドを実行します。 chroot 環境内は、この時点では一時的なツール類のみが利用可能な状態です。

```
chroot "$LFS" /tools/bin/env -i \
    HOME=/root                  \
    TERM="$TERM"                \
    PS1='\u:\w\$ '              \
    PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin:/tools/bin \
    /tools/bin/bash --login +h
```

env コマンドの *-i* パラメーターは、chroot 環境での変数定義をすべてクリアするものです。 そして **HOME**, **TERM**, **PS1**, **PATH** という変数だけここで定義し直します。 *TERM=$TERM* は chroot 環境に入る前と同じ値を **TERM** 変数に与えます。 この設定は vim や less のようなプログラムの処理が適切に行われるために必要となります。 これ以外の変数として **CFLAGS** や **CXXFLAGS** などが必要であれば、ここで定義しておくと良いでしょう。

ここから先は **LFS** 変数は不要となります。 すべての作業は LFS ファイルシステム内で行っていくことになるからです。 起動される Bash シェルは **$LFS** ディレクトリがルート（**/** ディレクトリ）となって動作します。

/tools/bin が **PATH** 変数内の最後に加わっています。 一時的なツール類は、それぞれの正式版がインストールされていくに従って使われなくなります。 これがうまく動作するのは bash の *+h* オプションを用いることによってハッシュ機能をオフにしているからであり、実行モジュールの場所を覚えておく機能を無効にしているからです。

bash のプロンプトに **I have no name!** と表示されますがこれは正常です。 この時点ではまだ **/etc/passwd** を生成していないからです。

注記

本章のこれ以降と次章では、すべてのコマンドを chroot 環境内にて実行することが必要です。 例えばシステムを再起動する場合のように chroot 環境からいったん抜け出した場合には、6.2.2.「/dev のマウントと有効化」と 6.2.3.「仮想カーネルファイルシステムのマウント」にて説明した仮想カーネルファイルシステムがマウントされていることを確認してください。 そして chroot 環境に入り直してからインストール作業を再開してください。

6.5. ディレクトリの生成

LFS ファイルシステムにおけるディレクトリ構成を作り出していきます。 以下のコマンドを実行して標準的なディレクトリを生成します。

```
mkdir -pv /{bin,boot,etc/{opt,sysconfig},home,lib/firmware,mnt,opt}
mkdir -pv /{media/{floppy,cdrom},sbin,srv,var}
install -dv -m 0750 /root
install -dv -m 1777 /tmp /var/tmp
mkdir -pv /usr/{,local/}{bin,include,lib,sbin,src}
mkdir -pv /usr/{,local/}share/{color,dict,doc,info,locale,man}
mkdir -v  /usr/{,local/}share/{misc,terminfo,zoneinfo}
mkdir -v  /usr/libexec
mkdir -pv /usr/{,local/}share/man/man{1..8}

case $(uname -m) in
 x86_64) mkdir -v /lib64 ;;
esac

mkdir -v /var/{log,mail,spool}
ln -sv /run /var/run
ln -sv /run/lock /var/lock
mkdir -pv /var/{opt,cache,lib/{color,misc,locate},local}
```

ディレクトリは標準ではパーミッションモード 755 で生成されますが、すべてのディレクトリをこのままとするのは適当ではありません。 上のコマンド実行ではパーミッションを変更している箇所が二つあります。 一つは root ユーザーのホームディレクトリに対してであり、もう一つはテンポラリディレクトリに対してです。

パーミッションモードを変更している一つめは /root ディレクトリに対して、他のユーザーによるアクセスを制限するためです。 通常のユーザーが持つ、自分自身のホームディレクトリへのアクセス権設定と同じことを行ないます。 二つめのモード変更は /tmp ディレクトリや /var/tmp ディレクトリに対して、どのユーザーも書き込み可能とし、ただし他のユーザーが作成したファイルは削除できないようにします。 ビットマスク 1777 の最上位ビット、いわゆる「スティッキービット (sticky bit)」を用いて実現します。

6.5.1. FHS コンプライアンス情報

本書のディレクトリ構成は標準ファイルシステム構成 (Filesystem Hierarchy Standard; FHS) に基づいています。 (その情報は https://wiki.linuxfoundation.org/en/FHS に示されています。) FHS では、任意のディレクトリとして /usr/local/games や /usr/share/games などを規定しています。 したがって本書では必要なディレクトリのみを作成していくことにします。 他のディレクトリについては、どうぞ自由に取り決めて作成してください。

6.6. 基本的なファイルとリンクの生成

プログラムの中には固定的に他のプログラムへのパスを保持しているものがあります。 そのパスは今の時点ではまだ存在していません。 このようなプログラムを正しく動作させるため、シンボリックリンクをいくつか作成します。 このリンクは本章の作業を通じて各種ソフトウェアをインストールしていくことで、 その実体であるファイルに置き換えられていきます。

```
ln -sv /tools/bin/{bash,cat,echo,pwd,stty} /bin
ln -sv /tools/bin/perl /usr/bin
ln -sv /tools/lib/libgcc_s.so{,.1} /usr/lib
ln -sv /tools/lib/libstdc++.so{,.6} /usr/lib
sed 's/tools/usr/' /tools/lib/libstdc++.la > /usr/lib/libstdc++.la
ln -sv bash /bin/sh
```

各リンクの目的

/bin/bash
bash スクリプトはたいてい /bin/bash として記述されます。

/bin/cat
このパス名は Glibc の configure スクリプトにてハードコーディングされています。

/bin/echo
Glibc のテストスイートの中に /bin/echo を用いているものがあり、これを成功させるためです。

/bin/pwd
特に Glibc などの configure スクリプトにて、このパス名がハードコーディングされています。

/bin/stty
このパス名は Expect にてハードコーディングされています。 したがって Binutils と GCC のテストスイートを成功させるために必要となります。

/usr/bin/perl
perl コマンドに対して Perl スクリプトはたいていこのパス名を用いています。

/usr/lib/libgcc_s.so{,.1}
pthreads ライブラリが正常動作するように Glibc にとって必要となります。

/usr/lib/libstdc++{,.6}
Glibc のテストスイート、例えば GMP における C++ サポートなどにおいて、これを必要とするものがあります。

/usr/lib/libstdc++.la
GCC がインストールされた後には /tools への参照ではなく、/usr/lib/libstdc++.la を必要とします。

/bin/sh
シェルスクリプトはたいてい /bin/sh がハードコーディングされています。

Linux のこれまでの経緯として、マウントされているファイルシステムの情報は /etc/mtab ファイルに保持されています。 最新の Linux であれば、内部的にこのファイルを管理し、ユーザーに対しては /proc ファイルシステムを通じて情報提示しています。 /etc/mtab ファイルの存在を前提としているプログラムが正常動作するように、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv /proc/self/mounts /etc/mtab
```

root ユーザーがログインできるように、またその「root」という名称を認識できるように /etc/passwd ファイルと /etc/group ファイルには該当する情報が登録されている必要があります。

以下のコマンドを実行して /etc/passwd ファイルを生成します。

```
cat > /etc/passwd << "EOF"
root:x:0:0:root:/root:/bin/bash
bin:x:1:1:bin:/dev/null:/bin/false
daemon:x:6:6:Daemon User:/dev/null:/bin/false
messagebus:x:18:18:D-Bus Message Daemon User:/var/run/dbus:/bin/false
nobody:x:99:99:Unprivileged User:/dev/null:/bin/false
EOF
```

root ユーザーに対する本当のパスワードは後に定めます。(「x」は単に場所を設けるために設定しているものです。)

以下のコマンドを実行して /etc/group ファイルを生成します。

```
cat > /etc/group << "EOF"
root:x:0:
bin:x:1:daemon
sys:x:2:
kmem:x:3:
tape:x:4:
tty:x:5:
daemon:x:6:
floppy:x:7:
disk:x:8:
lp:x:9:
dialout:x:10:
audio:x:11:
video:x:12:
utmp:x:13:
usb:x:14:
cdrom:x:15:
adm:x:16:
messagebus:x:18:
systemd-journal:x:23:
input:x:24:
mail:x:34:
nogroup:x:99:
users:x:999:
EOF
```

作成するグループは何かの標準に基づいたものではありません。 一部は本章の Udev の設定に必要となるものですし、一部は既存の Linux ディストリビューションが採用している慣用的なものです。 またテストスイートにて特定のユーザーやグループを必要としているものがあります。 Linux Standard Base (http://www.linuxbase.org 参照) では root グループのグループID (GID) は 0、bin グループの GID は 1 を定めているにすぎません。 他のグループとその GID はシステム管理者が自由に取り決めることができます。 というのも通常のプログラムであれば GID の値に依存することはなく、あくまでグループ名を用いてプログラミングされているからです。

プロンプトに表示される「I have no name!」を正しくするため、新たなシェルを起動します。 第5章にて完全に Glibc をインストールし、/etc/passwd ファイルと /etc/group ファイルを作ったので、ユーザー名とグループ名の名前解決が適切に動作します。

```
exec /tools/bin/bash --login +h
```

ディレクティブ *+h* について触れておきます。 これは bash に対して実行パスの内部ハッシュ機能を利用しないよう指示するものです。 もしこのディレクティブを指定しなかった場合 bash は一度実行したファイルのパスを記憶します。 コンパイルしてインストールした実行ファイルはすぐに利用していくために、本章での作業では *+h* ディレクティブを常に使っていくことにします。

login、agetty、init といったプログラム（あるいは他のプログラム）は、システムに誰がいつログインしたかといった情報を多くのログファイルに記録します。 しかしログファイルがあらかじめ存在していない場合は、ログファイルの出力が行われません。 そこでそのようなログファイルを作成し、適切なパーミッションを与えます。

```
touch /var/log/{btmp,lastlog,faillog,wtmp}
chgrp -v utmp /var/log/lastlog
chmod -v 664  /var/log/lastlog
chmod -v 600  /var/log/btmp
```

/var/log/wtmp ファイルはすべてのログイン、ログアウトの情報を保持します。 /var/log/lastlog ファイルは各ユーザーが最後にログインした情報を保持します。 /var/log/faillog ファイルはログインに失敗した情報を保持します。 /var/log/btmp ファイルは不正なログイン情報を保持します。

注記

/run/utmp ファイルは現在ログインしているユーザーの情報を保持します。 このファイルはブートスクリプトが動的に生成します。

6.7. Linux-4.9.5 API ヘッダー

Linux API ヘッダー (linux-4.9.5.tar.gz 内) は Glibc が利用するカーネル API を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 764 MB

6.7.1. Linux API ヘッダー のインストール

Linux カーネルはアプリケーションプログラミングインターフェース (Application Programming Interface) を、システムの C ライブラリ (LFS の場合 Glibc) に対して提供する必要があります。 これを行うには Linux カーネルのソースに含まれる、さまざまな C ヘッダーファイルを「健全化 (sanitizing)」して利用します。

これより前に一度処理を行っていたとしても、不適切なファイルや誤った依存関係を残さないように、以下を処理します。

```
make mrproper
```

そしてユーザーが利用するカーネルヘッダーファイルをソースから抽出します。 それらはいったん中間的なローカルディレクトリに置かれ、必要な場所にコピーされます。 ターゲットディレクトリに既にあるファイルは削除されてからソースからの抽出処理が行われます。 なおファイルの中にはカーネル開発者が隠しファイルとしているものがあります。 それらは LFS では必要ないため、中間ディレクトリから削除します。

```
make INSTALL_HDR_PATH=dest headers_install
find dest/include \( -name .install -o -name ..install.cmd \) -delete
cp -rv dest/include/* /usr/include
```

6.7.2. Linux API ヘッダー の構成

インストールヘッダー: /usr/include/asm/*.h, /usr/include/asm-generic/*.h, /usr/include/drm/*.h, /usr/include/linux/*.h, /usr/include/misc/*.h, /usr/include/mtd/*.h, /usr/include/rdma/*.h, /usr/include/scsi/*.h, /usr/include/sound/*.h, /usr/include/video/*.h, and /usr/include/xen/*.h
インストールディレクトリ: /usr/include/asm, /usr/include/asm-generic, /usr/include/drm, /usr/include/linux, /usr/include/misc, /usr/include/mtd, /usr/include/rdma, /usr/include/scsi, /usr/include/sound, /usr/include/video, and /usr/include/xen

概略説明

/usr/include/asm/*.h	The Linux API ASM ヘッダーファイル
/usr/include/asm-generic/*.h	The Linux API ASM の汎用的なヘッダーファイル
/usr/include/drm/*.h	The Linux API DRM ヘッダーファイル
/usr/include/linux/*.h	The Linux API Linux ヘッダーファイル
/usr/include/mtd/*.h	The Linux API MTD ヘッダーファイル
/usr/include/rdma/*.h	The Linux API RDMA ヘッダーファイル
/usr/include/scsi/*.h	The Linux API SCSI ヘッダーファイル
/usr/include/sound/*.h	The Linux API Sound ヘッダーファイル
/usr/include/video/*.h	The Linux API Video ヘッダーファイル
/usr/include/xen/*.h	The Linux API Xen ヘッダーファイル

6.8. Man-pages-4.09

Man-pages パッケージは 2,200 以上のマニュアルページを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 26 MB

6.8.1. Man-pages のインストール

Man-pages をインストールするために以下を実行します。

```
make install
```

6.8.2. Man-pages の構成

インストールファイル: さまざまな man ページ

概略説明

man ページ C 言語の関数、重要なデバイスファイル、重要な設定ファイルなどを説明します。

6.9. Glibc-2.24

Glibc パッケージは主要な C ライブラリを提供します。 このライブラリは基本的な処理ルーチンを含むもので、メモリ割り当て、ディレクトリ走査、ファイルのオープン、クローズや入出力、文字列操作、パターンマッチング、算術処理、等々があります。

概算ビルド時間: 17 SBU
必要ディスク容量: 1.4 GB

6.9.1. Glibc のインストール

注記

Glibc ビルドシステムは自らによってビルドされるものであり、コンパイラースペックファイルがたとえ /tools を指し示していたままであっても完璧にビルドされます。 スペックやリンカーは Glibc のインストール後でないと調整できません。 これは Glibc の autoconf テストが失敗するからであり、クリーンビルドを成功させるという目標が達成できないためです。

Glibc のプログラムの中には /var/db ディレクトリに実行データを収容するものがあり、これは FHS に準拠していません。 以下のパッチを適用することで、実行データの収容先を FHS 準拠のディレクトリとします。

```
patch -Np1 -i ../glibc-2.24-fhs-1.patch
```

LSB コンプライアンスに従ったシンボリックリンクを作成します。 また x86_64 に対してはダイナミックローダーが正しく機能するために必要なシンボリックリンクを作成します。

```
case $(uname -m) in
    x86) ln -s ld-linux.so.2 /lib/ld-lsb.so.3
    ;;
    x86_64) ln -s ../lib/ld-linux-x86-64.so.2 /lib64
            ln -s ../lib/ld-linux-x86-64.so.2 /lib64/ld-lsb-x86-64.so.3
    ;;
esac
```

Glibc のドキュメントでは専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

Glibc をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr          \
             --enable-kernel=2.6.32 \
             --enable-obsolete-rpc        \
             libc_cv_slibdir=/lib
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

重要項目

本節における Glibc のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

全般にテストの中には失敗するものがありますが、以下に示すものであれば無視しても構いません。 ビルド結果のテストは以下のようにします。

```
make check
```

テストを実施すると、失敗するものも出てきます。 これは Glibc のテストスイートがホストシステムにある程度依存しているためです。 LFS の当バージョンにおいて発生しがちな問題を以下に示します。

- posix/tst-getaddrinfo4 は、テスト時に必要なネットワークアプリケーションがないため失敗します。 また posix/tst-getaddrinfo5 は特定の CPU アーキテクチャーでは失敗します。
- rt/tst-cputimer1 と rt/tst-cpuclock2 のテストは失敗することが知られています。 失敗の理由は明確ではありません。 ただ処理速度が原因してそれらが発生すると思われます。

- math テストは、Intel プロセッサーや AMD プロセッサーが最新のものではない場合に失敗することがあります。
- nptl/tst-thread-affinity-{pthread,pthread2,sched} テストは失敗しますが、その理由は不明です。
- 上記以外に特定のアーキテクチャーにてテストが失敗することが分かっています。 失敗するのは malloc/tst-malloc-usable, nptl/tst-cleanupx4 です。

支障が出る話ではありませんが Glibc のインストール時には /etc/ld.so.conf ファイルが存在していないとして警告メッセージが出力されます。 これをなくすために以下を実行します。

```
touch /etc/ld.so.conf
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

nscd コマンドに対する設定ファイルや実行ディレクトリをインストールします。

```
cp -v ../nscd/nscd.conf /etc/nscd.conf
mkdir -pv /var/cache/nscd
```

システムを各種の言語に対応させるためのロケールをインストールします。 テストスイートにおいてロケールは必要ではありませんが、将来的にはロケールがないことによって、重要なテストを逃してしまうかもしれません。

各ロケールは localedef プログラムを使ってインストールします。 例えば以下に示す一つめの localedef では、キャラクターセットには依存しないロケール定義 /usr/share/i18n/locales/cs_CZ とキャラクターマップ定義 /usr/share/i18n/charmaps/UTF-8.gz とを結合させて /usr/lib/locale/locale-archive ファイルにその情報を付け加えます。 以下のコマンドは、テストを成功させるために必要となる最低限のロケールをインストールするものです。

```
mkdir -pv /usr/lib/locale
localedef -i cs_CZ -f UTF-8 cs_CZ.UTF-8
localedef -i de_DE -f ISO-8859-1 de_DE
localedef -i de_DE@euro -f ISO-8859-15 de_DE@euro
localedef -i de_DE -f UTF-8 de_DE.UTF-8
localedef -i en_GB -f UTF-8 en_GB.UTF-8
localedef -i en_HK -f ISO-8859-1 en_HK
localedef -i en_PH -f ISO-8859-1 en_PH
localedef -i en_US -f ISO-8859-1 en_US
localedef -i en_US -f UTF-8 en_US.UTF-8
localedef -i es_MX -f ISO-8859-1 es_MX
localedef -i fa_IR -f UTF-8 fa_IR
localedef -i fr_FR -f ISO-8859-1 fr_FR
localedef -i fr_FR@euro -f ISO-8859-15 fr_FR@euro
localedef -i fr_FR -f UTF-8 fr_FR.UTF-8
localedef -i it_IT -f ISO-8859-1 it_IT
localedef -i it_IT -f UTF-8 it_IT.UTF-8
localedef -i ja_JP -f EUC-JP ja_JP
localedef -i ru_RU -f KOI8-R ru_RU.KOI8-R
localedef -i ru_RU -f UTF-8 ru_RU.UTF-8
localedef -i tr_TR -f UTF-8 tr_TR.UTF-8
localedef -i zh_CN -f GB18030 zh_CN.GB18030
```

上に加えて、あなたの国、言語、キャラクターセットを定めるためのロケールをインストールしてください。

必要に応じて glibc-2.24/localedata/SUPPORTED に示されるすべてのロケールを同時にインストールしてください。(そこには上のロケールも含め、すべてのロケールが列記されています。) 以下のコマンドによりそれを実現します。 ただしこれには相当な処理時間を要します。

```
make localedata/install-locales
```

さらに必要なら glibc-2.24/localedata/SUPPORTED ファイルに示されていない特殊なロケールは localedef コマンドを使って生成、インストールを行ってください。

6.9.2. Glibc の設定

6.9.2.1. nsswitch.conf の追加

/etc/nsswitch.conf ファイルを作成しておく必要があります。 Glibc はデフォルトでは、このファイルが無い場合にネットワーク環境が正しく動作しません。

以下のコマンドを実行して /etc/nsswitch.conf ファイルを生成します。

```
cat > /etc/nsswitch.conf << "EOF"
# Begin /etc/nsswitch.conf

passwd: files
group: files
shadow: files

hosts: files dns
networks: files

protocols: files
services: files
ethers: files
rpc: files

# End /etc/nsswitch.conf
EOF
```

6.9.2.2. タイムゾーンデータの追加

以下によりタイムゾーンデータをインストールし設定します。

```
tar -xf ../../tzdata2016j.tar.gz

ZONEINFO=/usr/share/zoneinfo
mkdir -pv $ZONEINFO/{posix,right}

for tz in etcetera southamerica northamerica europe africa antarctica  \
          asia australasia backward pacificnew systemv; do
    zic -L /dev/null   -d $ZONEINFO       -y "sh yearistype.sh" ${tz}
    zic -L /dev/null   -d $ZONEINFO/posix -y "sh yearistype.sh" ${tz}
    zic -L leapseconds -d $ZONEINFO/right -y "sh yearistype.sh" ${tz}
done

cp -v zone.tab zone1970.tab iso3166.tab $ZONEINFO
zic -d $ZONEINFO -p America/New_York
unset ZONEINFO
```

zic コマンドの意味

zic -L /dev/null ...
これは、うるう秒を含まない posix タイムゾーンデータを生成します。 これらは zoneinfo や zoneinfo/posix に収容するものとして適切なものです。 zoneinfo へは POSIX 準拠のタイムゾーンデータを含めることが必要であり、こうしておかないと数々のテストスイートにてエラーが発生してしまいます。 組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合があり、posix ディレクトリを設けなければ 1.9 MB もの容量を節約できます。 ただしアプリケーションやテストスイートによっては、エラーが発生するかもしれません。

zic -L leapseconds ...
これは、うるう秒を含んだ正しいタイムゾーンデータを生成します。 組み込みシステムなどでは容量の制約が厳しいため、タイムゾーンデータはあまり更新したくない場合や、さほど気にかけない場合もあります。 right ディレクトリを省略することにすれば 1.9MB の容量を節約することができます。

zic ... -p ...
これは posixrules ファイルを生成します。 ここでは New York を用います。 POSIX では、日中の保存時刻として US ルールに従うことを規程しているためです。

ローカルなタイムゾーンの設定を行う 1 つの方法として、ここでは以下のスクリプトを実行します。

```
tzselect
```

地域情報を設定するためにいくつか尋ねられるのでそれに答えます。 このスクリプトはタイムゾーン名を表示します。(例えば America/Edmonton などです。) /usr/share/zoneinfo ディレクトリにはさらに Canada/Eastern や EST5EDT のようなタイムゾーンもあります。 これらはこのスクリプトでは認識されませんが、利用することは可能です。

以下のコマンドにより /etc/localtime ファイルを生成します。

```
cp -v /usr/share/zoneinfo/<xxx> /etc/localtime
```

<xxx> の部分は設定するタイムゾーンの名前（例えば Canada/Eastern など）に置き換えてください。

6.9.2.3. ダイナミックローダー の設定

デフォルトにおいてダイナミックリンカー（/lib/ld-linux.so.2）は /lib ディレクトリと /usr/lib ディレクトリを検索しにいきます。 これに従って、他のプログラムが実行される際に必要となるダイナミックライブラリがリンクされます。 もし /lib や /usr/lib 以外のディレクトリにライブラリファイルがあるなら /etc/ld.so.conf ファイルに記述を追加して、ダイナミックローダーがそれらを探し出せるようにしておくことが必要です。 追加のライブラリが配置されるディレクトリとしては /usr/local/lib ディレクトリと /opt/lib ディレクトリという二つがよく利用されます。 ダイナミックローダーの検索パスとして、それらのディレクトリを追加します。

以下のコマンドを実行して /etc/ld.so.conf ファイルを新たに生成します。

```
cat > /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Begin /etc/ld.so.conf
/usr/local/lib
/opt/lib

EOF
```

必要がある場合には、ダイナミックローダーに対する設定として、他ディレクトリにて指定されるファイルをインクルードするようにもできます。 通常は、そのファイル内の 1 行に、必要となるライブラリパスを記述します。 このような設定を利用する場合には以下のようなコマンドを実行します。

```
cat >> /etc/ld.so.conf << "EOF"
# Add an include directory
include /etc/ld.so.conf.d/*.conf

EOF
mkdir -pv /etc/ld.so.conf.d
```

6.9.3. Glibc の構成

インストールプログラム:	catchsegv, gencat, getconf, getent, iconv, iconvconfig, ldconfig, ldd, lddlibc4, locale, localedef, makedb, mtrace, nscd, pldd, rpcgen, sln, sotruss, sprof, tzselect, xtrace, zdump, zic
インストールライブラリ:	ld-2.24.so, libBrokenLocale.{a,so}, libSegFault.so, libanl.{a,so}, libc.{a,so}, libc_nonshared.a, libcidn.so, libcrypt.{a,so}, libdl.{a,so}, libg.a, libieee.a, libm.{a,so}, libmcheck.a, libmemusage.so, libnsl.{a,so}, libnss_compat.so, libnss_dns.so, libnss_files.so, libnss_hesiod.so, libnss_nis.so, libnss_nisplus.so, libpthread.{a,so}, libpthread_nonshared.a, libresolv.{a,so}, librpcsvc.a, librt.{a,so}, libthread_db.so, libutil.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/arpa, /usr/include/bits, /usr/include/gnu, /usr/include/net, /usr/include/netash, /usr/include/netatalk, /usr/include/netax25, /usr/include/neteconet, /usr/include/netinet, /usr/include/netipx, /usr/include/netiucv, /usr/include/netpacket, /usr/include/netrom, /usr/include/netrose, /usr/include/nfs, /usr/include/protocols, /usr/include/rpc, /usr/include/rpcsvc, /usr/include/sys, /usr/lib/audit, /usr/lib/gconv, /usr/lib/locale, /usr/libexec/getconf, /usr/share/i18n, /usr/share/zoneinfo, /var/cache/nscd, /var/lib/nss_db

概略説明

catchsegv	プログラムがセグメンテーションフォールトにより停止した時に、スタックトレースを生成するために利用します。
gencat	メッセージカタログを生成します。
getconf	ファイルシステムに固有の変数に設定された値を表示します。
getent	管理データベースから設定項目を取得します。
iconv	キャラクターセットを変換します。

iconvconfig	高速ロードができる iconv モジュール設定ファイルを生成します。
ldconfig	プログラム実行時におけるダイナミックリンカーのリンクを設定します。
ldd	指定したプログラムまたは共有ライブラリが必要としている共有ライブラリを表示します。
lddlibc4	オブジェクトファイルを使って ldd コマンドを補助します。[訳註：意味不明]
locale	現在のロケールに対するさまざまな情報を表示します。
localedef	ロケールの設定をコンパイルします。
makedb	テキストを入力として単純なデータベースを生成します。
mtrace	メモリトレースファイル（memory trace file）を読み込んで解釈します。 そして可読可能な書式で出力します。
nscd	一般的なネームサービスへの変更要求のキャッシュを提供するデーモン。
pldd	稼動中のプロセスにて利用されている、動的共有オブジェクト（dynamic shared objects）を一覧出力します。
rpcgen	リモートプロシジャーコール（Remote Procedure Call; RPC）を実装するための C 言語コードを生成します。
sln	スタティックなリンクを行う ln プログラム。
sotruss	指定されたコマンドの共有ライブラリ内のプロシジャーコールをトレースします。
sprof	共有オブジェクトのプロファイリングデータを読み込んで表示します。
tzselect	ユーザーに対してシステムの設置地域を問合せ、対応するタイムゾーンの記述を表示します。
xtrace	プログラム内にて現在実行されている関数を表示することで、そのプログラムの実行状況を追跡します。
zdump	タイムゾーンをダンプします。
zic	タイムゾーンコンパイラー。
ld-2.24.so	共有ライブラリのためのヘルパープログラム。
libBrokenLocale	Glibc が内部で利用するもので、異常が発生しているプログラムを見つけ出します。(例えば Motif アプリケーションなど）詳しくは glibc-2.24/locale/broken_cur_max.c に書かれたコメントを参照してください。
libSegFault	セグメンテーションフォールトのシグナルハンドラー。 catchsegv が利用します。
libanl	非同期の名前解決（asynchronous name lookup）ライブラリ。
libc	主要な C ライブラリ。
libcidn	Glibc が内部的に利用するもので getaddrinfo() 関数によって国際化ドメイン名（internationalized domain names）を取り扱います。
libcrypt	暗号化ライブラリ。
libdl	ダイナミックリンクのインターフェースライブラリ。
libg	関数を全く含まないダミーのライブラリ。 かつては g++ のランタイムライブラリであったものです。
libieee	このモジュールをリンクすると、数学関数におけるエラー制御方法を IEEE（the Institute of Electrical and Electronic Engineers）が定義するものに従うようになります。 デフォルトは POSIX.1 エラー制御方法です。
libm	数学ライブラリ。
libmcheck	このライブラリにリンクした場合、メモリ割り当てのチェック機能を有効にします。
libmemusage	memusage コマンドが利用するもので、プログラムのメモリ使用に関する情報を収集します。
libnsl	ネットワークサービスライブラリ。
libnss	NSS（Name Service Switch）ライブラリ。 ホスト、ユーザー名、エイリアス、サービス、プロトコルなどの名前解決を行う関数を提供します。
libpthread	POSIX スレッドライブラリ。
libresolv	インターネットドメインネームサーバーに対しての、パケットの生成、送信、解析を行う関数を提供します。
librpcsvc	さまざまな RPC サービスを実現する関数を提供します。

librt	POSIX.1b リアルタイム拡張（Realtime Extension）にて既定されている、インターフェースをほぼ網羅した関数を提供します。
libthread_db	マルチスレッドプログラム用のデバッガーを構築するための有用な関数を提供します。
libutil	数多くの Unix ユーティリティにて利用される「標準」関数を提供します。

6.10. ツールチェーンの調整

最終的な C ライブラリがこれまでに構築できました。 ここでツールチェーンの調整を行います。 これを行うことで、新たに生成したプログラムが新たに生成したライブラリにリンクされます。

まず /tools ディレクトリにあるリンカーのバックアップをとっておき、第5章にて作成した調整済みリンカーに置き換えます。 /tools/$(uname -m)-pc-linux-gnu/bin ディレクトリにあるリンカーに対してのシンボリックリンクも正しく生成しておきます。

```
mv -v /tools/bin/{ld,ld-old}
mv -v /tools/$(uname -m)-pc-linux-gnu/bin/{ld,ld-old}
mv -v /tools/bin/{ld-new,ld}
ln -sv /tools/bin/ld /tools/$(uname -m)-pc-linux-gnu/bin/ld
```

次に GCC スペックファイルを修正し、新しいダイナミックリンカーを指し示すようにします。 単純に 「/tools」 という記述を取り除けば、ダイナミックリンカーへの正しい参照となります。 またスペックファイルを修正することで GCC がヘッダーファイル、および Glibc の起動ファイルを適切に探し出せるようになります。 以下の sed によりこれを実現します。

```
gcc -dumpspecs | sed -e 's@/tools@@g'                   \
    -e '/\*startfile_prefix_spec:/{n;s@.*@/usr/lib/ @}' \
    -e '/\*cpp:/{n;s@$@ -isystem /usr/include@}' >      \
    `dirname $(gcc --print-libgcc-file-name)`/specs
```

スペックファイルの内容を実際に確認して、今変更した内容が正しく反映されていることを確認しておいてください。

この時点において、調整したツールチェーンの基本的な（コンパイルやリンクなどの）機能が正しく動作していることを確認する必要があります。 これを行うために以下の健全性検査を実行します。

```
echo 'int main(){}' > dummy.c
cc dummy.c -v -Wl,--verbose &> dummy.log
readelf -l a.out | grep ': /lib'
```

問題なく動作するはずで、最後のコマンドから出力される結果は以下のようになるはずです。（ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
[Requesting program interpreter: /lib64/ld-linux-x86-64.so.2]
```

ダイナミックリンカーのディレクトリは、今度は /lib となっているはずです。

注記

32ビットシステムでは /lib/ld-linux.so.2 になります。

ここで起動ファイルが正しく用いられていることを確認します。

```
grep -o '/usr/lib.*/crt[1in].*succeeded' dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになるはずです。

```
/usr/lib/../lib/crt1.o succeeded
/usr/lib/../lib/crti.o succeeded
/usr/lib/../lib/crtn.o succeeded
```

コンパイラーが正しいヘッダーファイルを読み取っているかどうかを検査します。

```
grep -B1 '^ /usr/include' dummy.log
```

上のコマンドは以下の出力を返します。

```
#include <...> search starts here:
 /usr/include
```

次に、新たなリンカーが正しいパスを検索して用いられているかどうかを検査します。

```
grep 'SEARCH.*/usr/lib' dummy.log |sed 's|; |\n|g'
```

'-linux-gnu' を含んだパスは無視すれば、最後のコマンドの出力は以下となるはずです。

```
SEARCH_DIR("/usr/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
```

次に libc が正しく用いられていることを確認します。

```
grep "/lib.*/libc.so.6 " dummy.log
```

最後のコマンドの出力は以下のようになるはずです。

```
attempt to open /lib/libc.so.6 succeeded
```

最後に GCC が正しくダイナミックリンカーを用いているかを確認します。

```
grep found dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになるはずです。（ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
found ld-linux-x86-64.so.2 at /lib/ld-linux-x86-64.so.2
```

出力結果が上と異なっていたり、出力が全く得られなかったりした場合は、何かが根本的に間違っているということです。 どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。 最もありがちな理由は、スペックファイルの修正を誤っていることです。 問題を残したままこの先には進まないでください。

すべてが正しく動作したら、テストに用いたファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out dummy.log
```

6.11. Zlib-1.2.11

Zlib パッケージは、各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 5.2 MB

6.11.1. Zlib のインストール

Zlib をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

共有ライブラリは /lib に移す必要があります。 またそれに合わせて /usr/lib にある .so ファイルを再生成する必要があります。

```
mv -v /usr/lib/libz.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libz.so) /usr/lib/libz.so
```

6.11.2. Zlib の構成

インストールライブラリ: libz.{a,so}

概略説明

libz 各種プログラムから呼び出される、圧縮、伸張（解凍）を行う関数を提供します。

6.12. File-5.29

File パッケージは、指定されたファイルの種類を決定するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 15 MB

6.12.1. File のインストール

File をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.12.2. File の構成

インストールプログラム: file
インストールライブラリ: libmagic.so

概略説明

file 指定されたファイルの種類判別を行います。 処理にあたってはいくつかのテスト、すなわちファイルシステムテスト、マジックナンバーテスト、言語テストを行います。

libmagic マジックナンバーによりファイル判別を行うルーチンを含みます。 file プログラムがこれを利用しています。

6.13. Binutils-2.27

Binutils パッケージは、リンカーやアセンブラーなどのようにオブジェクトファイルを取り扱うツール類を提供します。

概算ビルド時間: 2.5 SBU
必要ディスク容量: 488 MB

6.13.1. Binutils のインストール

PTY が chroot 環境内にて正しく作動しているかどうかを確認するために、以下の簡単なテストを実行します。

```
expect -c "spawn ls"
```

上のコマンドは以下を出力するはずです。

```
spawn ls
```

上のような出力ではなく、以下のような出力メッセージが含まれていたら、PTY の動作が適切に構築できていないことを示しています。 Binutils や GCC のテストスイートを実行する前に、この症状は解消しておく必要があります。

```
The system has no more ptys.
Ask your system administrator to create more.
```

Binutils のドキュメントによると Binutils のビルドにあたっては専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

Binutils をコンパイルするための準備をします。

```
../configure --prefix=/usr    \
             --enable-plugins \
             --enable-shared  \
             --disable-werror \
             --with-system-zlib
```

configure パラメーターの意味:

--enable-plugins
リンカーに対してプラグインサポートを有効にします。

--with-system-zlib
本パッケージに含まれる zlib をビルドするのではなく、既にインストール済の zlib を用いるようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make tooldir=/usr
```

make パラメーターの意味:

tooldir=/usr
通常 tooldir（実行ファイルが最終的に配置されるディレクトリ）は `$(exec_prefix)/$(target_alias)` に設定されています。 x86_64 マシンでは `/usr/x86_64-unknown-linux-gnu` となります。 LFS は自分で設定を定めていくシステムですから `/usr` ディレクトリ配下に CPU ターゲットを特定するディレクトリを設ける必要がありません。 `$(exec_prefix)/$(target_alias)` というディレクトリ構成は、クロスコンパイル環境において必要となるものです。（例えばパッケージをコンパイルするマシンが Intel であり、そこから PowerPC マシン用の実行コードを生成するような場合です。）

重要項目

本節における Binutils のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

コンパイル結果をテストします。

```
make -k check
```

パッケージをインストールします。

```
make tooldir=/usr install
```

6.13.2. Binutils の構成

インストールプログラム: addr2line, ar, as, c++filt, elfedit, gprof, ld, ld.bfd, nm, objcopy, objdump, ranlib, readelf, size, strings, strip
インストールライブラリ: libbfd.{a,so}, libopcodes.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/lib/ldscripts

概略説明

addr2line　指定された実行モジュール名とアドレスに基づいて、プログラム内のアドレスをファイル名と行番号に変換します。 これは実行モジュール内のデバッグ情報を利用します。 特定のアドレスがどのソースファイルと行番号に該当するかを確認するものです。

ar　アーカイブの生成、修正、抽出を行います。

as　gcc の出力結果をアセンブルして、オブジェクトファイルとして生成するアセンブラー。

c++filt　リンカーから呼び出されるもので C++ と Java のシンボルを複合（demangle）し、オーバーロード関数が破壊されることを回避します。

elfedit　ELF ファイルの ELF ヘッダーを更新します。

gprof　コールグラフ（call graph）のプロファイルデータを表示します。

ld　複数のオブジェクトファイルやアーカイブファイルから、一つのファイルを生成するリンカー。 データの再配置やシンボル参照情報の結合を行います。

ld.bfd　ld へのハードリンク。

nm　指定されたオブジェクトファイル内のシンボル情報を一覧表示します。

objcopy　オブジェクトファイルの変換を行います。

objdump　指定されたオブジェクトファイルの各種情報を表示します。 さまざまなオプションを用いることで特定の情報表示が可能です。 表示される情報は、コンパイル関連ツールを開発する際に有用なものです。

ranlib　アーカイブの内容を索引として生成し、それをアーカイブに保存します。 索引は、アーカイブのメンバーによって定義されるすべてのシンボルの一覧により構成されます。 アーカイブのメンバーとは再配置可能なオブジェクトファイルのことです。

readelf　ELF フォーマットのバイナリファイルの情報を表示します。

size　指定されたオブジェクトファイルのセクションサイズと合計サイズを一覧表示します。

strings　指定されたファイルに対して、印字可能な文字の並びを出力します。 文字は所定の長さ（デフォルトでは 4文字）以上のものが対象となります。 オブジェクトファイルの場合デフォルトでは、初期化セクションとロードされるセクションからのみ文字列を抽出し出力します。 これ以外の種類のファイルの場合は、ファイル全体が走査されます。

strip　オブジェクトファイルからデバッグシンボルを取り除きます。

libbfd　バイナリファイルディスクリプター（Binary File Descriptor）ライブラリ。

libopcodes　opcodes（オペレーションコード; プロセッサー命令を「認識可能なテキスト」として表現したもの）を取り扱うライブラリ。 このライブラリは objdump のような、ビルド作業に用いるユーティリティプログラムが利用しています。

6.14. GMP-6.1.2

GMP パッケージは数値演算ライブラリを提供します。 このライブラリには任意精度演算（arbitrary precision arithmetic）を行う有用な関数が含まれます。

概算ビルド時間: 1.2 SBU
必要ディスク容量: 59 MB

6.14.1. GMP のインストール

注記

32 ビット x86 CPU にて環境構築する際に、64 ビットコードを扱う CPU 環境であって かつ CFLAGS を指定していると、本パッケージの configure スクリプトは 64 ビット用の処理を行い失敗します。 これを回避するには、以下のように処理してください。

```
ABI=32 ./configure ...
```

GMP をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --enable-cxx     \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/gmp-6.1.2
```

configure オプションの意味:

--enable-cxx
C++ サポートを有効にします。

--docdir=/usr/share/doc/gmp-6.1.2
ドキュメントのインストール先を適切に設定します。

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

重要項目

本節における GMP のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

テストを実行します。

```
make check 2>&1 | tee gmp-check-log
```

注意

gmp のコードはビルドするプロセッサー向けに高度に最適化されます。 このためプロセッサーを特定したコードが実はシステム性能を的確に制御できないことも起こりえます。 それはテストにおいてエラーを引き起こしたり、gmp を利用する他のアプリケーションにおいて ”Illegal instruction” というエラーとして発生したりすることがあります。 そういった場合は gmp の再ビルドが必要であり、その際にはオプション --build=x86_64-unknown-linux-gnu をつける必要があります。

190個のテストが完了することを確認してください。 テスト結果は以下のコマンドにより確認することができます。

```
awk '/# PASS:/{total+=$3} ; END{print total}' gmp-check-log
```

パッケージと HTML ドキュメントをインストールします。

```
make install
make install-html
```

6.14.2. GMP の構成

インストールライブラリ: libgmp.so, libgmpxx.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/gmp-6.1.2

概略説明

libgmp 精度演算関数（precision math functions）を提供します。

libgmpxx C++ 用の精度演算関数を提供します。

6.15. MPFR-3.1.5

MPFR パッケージは倍精度演算（multiple precision）の関数を提供します。

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 45 MB

6.15.1. MPFR のインストール

MPFR をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr        \
            --disable-static     \
            --enable-thread-safe \
            --docdir=/usr/share/doc/mpfr-3.1.5
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

重要項目

本節における MPFR のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

すべてのテストが正常に完了していることを確認してください。

```
make check
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
make install-html
```

6.15.2. MPFR の構成

インストールライブラリ: libmpfr.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/mpfr-3.1.5

概略説明

libmpfr 倍精度演算の関数を提供します。

6.16. MPC-1.0.3

MPC パッケージは複素数演算を可能とするライブラリを提供するものです。 高い精度と適切な丸め（rounding）を実現します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 17 MB

6.16.1. MPC のインストール

MPC をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/mpc-1.0.3
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
make install-html
```

6.16.2. MPC の構成

インストールライブラリ: libmpc.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/mpc-1.0.3

概略説明

libmpc 複素数による演算関数を提供します。

6.17. GCC-6.3.0

GCC パッケージは C コンパイラーや C++ コンパイラーなどの GNU コンパイラーコレクションを提供します。

概算ビルド時間: 79 SBU（テスト込み）
必要ディスク容量: 3.3 GB

6.17.1. GCC のインストール

x86_64 上でビルドしている場合は、64ビットライブラリのデフォルトディレクトリ名を「lib」にします。

```
case $(uname -m) in
  x86_64)
    sed -e '/m64=/s/lib64/lib/' \
        -i.orig gcc/config/i386/t-linux64
  ;;
esac
```

GCC のドキュメントによると GCC のビルドにあたっては、専用のビルドディレクトリを作成することが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd       build
```

GCC をコンパイルするための準備をします。

```
SED=sed                               \
../configure --prefix=/usr            \
             --enable-languages=c,c++ \
             --disable-multilib       \
             --disable-bootstrap      \
             --with-system-zlib
```

他のプログラミング言語は、また別の依存パッケージなどを要しますが、現時点では準備できていません。 GCC がサポートする他のプログラム言語の構築方法については BLFS ブック の説明を参照してください。

Configure パラメーターの意味:

`SED=sed`
ハードコーディングされているパスを /tools/bin/sed とするために、環境変数を設定します。

`--with-system-zlib`
このオプションはシステムに既にインストールされている Zlib ライブラリをリンクすることを指示するものであり、内部にて作成されるライブラリを用いないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

重要項目

本節における GCC のテストスイートは極めて重要なものです。 したがってどのような場合であっても必ず実行してください。

GCC テストスイートの中で、スタックを使い果たすものがあります。 そこでテスト実施にあたり、スタックサイズを増やします。

```
ulimit -s 32768
```

コンパイル結果をテストします。 エラーが発生しても停止しないようにします。

```
make -k check
```

テスト結果を確認するために以下を実行します。

```
../contrib/test_summary
```

テスト結果の概略のみ確認したい場合は、出力結果をパイプ出力して **`grep -A7 Summ`** を実行してください。

テスト結果については http://www.linuxfromscratch.org/lfs/build-logs/development/ と http://gcc.gnu.org/ml/gcc-testresults/ にある情報と比較することができます。

テストに失敗することがありますが、これを回避することはできません。 GCC の開発者はこの問題を認識していますが、まだ解決していない状況です。 特に今行っているように root ユーザーにてテストを実施すると libstdc++ に関するテストが5つ失敗します。 上記の URL に示されている結果と大きく異なっていなかったら、問題はありませんので先に進んでください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

FHS の求めるところに応じてシンボリックリンクを作成します。 これは慣例によるものです

```
ln -sv ../usr/bin/cpp /lib
```

パッケージの多くは C コンパイラーとして cc を呼び出しています。 これに対応するため、以下のシンボリックリンクを作成します。

```
ln -sv gcc /usr/bin/cc
```

リンク時の最適化（Link Time Optimization; LTO）によりプログラム構築できるように、シンボリックリンクを作ります。

```
install -v -dm755 /usr/lib/bfd-plugins
ln -sfv ../../libexec/gcc/$(gcc -dumpmachine)/6.3.0/liblto_plugin.so \
        /usr/lib/bfd-plugins/
```

最終的なツールチェーンが出来上がりました。 ここで再びコンパイルとリンクが正しく動作することを確認することが必要です。 そこで本節の初めの方で実施した健全性テストをここでも実施します。

```
echo 'int main(){}' > dummy.c
cc dummy.c -v -Wl,--verbose &> dummy.log
readelf -l a.out | grep ': /lib'
```

問題なく動作するはずで、最後のコマンドから出力される結果は以下のようになるはずです。（ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
[Requesting program interpreter: /lib64/ld-linux-x86-64.so.2]
```

ここで起動ファイルが正しく用いられていることを確認します。

```
grep -o '/usr/lib.*/crt[1in].*succeeded' dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになるはずです。

```
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/6.3.0/../../../../lib/crt1.o succeeded
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/6.3.0/../../../../lib/crti.o succeeded
/usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/6.3.0/../../../../lib/crtn.o succeeded
```

作業しているマシンアーキテクチャーによっては、上の結果が微妙に異なるかもしれません。 その違いは、たいていは /usr/lib/gcc の次のディレクトリ名にあります。 注意すべき重要な点は gcc が crt*.o という三つのファイルを /usr/lib 配下から探し出しているということです。

コンパイラーが正しいヘッダーファイルを読み取っているかどうかを検査します。

```
grep -B4 '^ /usr/include' dummy.log
```

上のコマンドは以下の出力を返します。

```
#include <...> search starts here:
 /usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/6.3.0/include
 /usr/local/include
 /usr/lib/gcc/x86_64-pc-linux-gnu/6.3.0/include-fixed
 /usr/include
```

もう一度触れておきますが、プラットフォームの「三つの組（target triplet)」の次にくるディレクトリ名は CPU アーキテクチャーにより異なる点に注意してください。

注記

GCC のバージョン 4.3.0 では limits.h ファイルを無条件に include-fixed ディレクトリにインストールします。 したがってそのディレクトリは存在していなければなりません。

次に、新たなリンカーが正しいパスを検索して用いられているかどうかを検査します。

```
grep 'SEARCH.*/usr/lib' dummy.log |sed 's|; |\n|g'
```

'-linux-gnu' を含んだパスは無視すれば、最後のコマンドの出力は以下となるはずです。

```
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-pc-linux-gnu/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib64")
SEARCH_DIR("/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/lib64")
SEARCH_DIR("/usr/x86_64-pc-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

32ビットシステムではディレクトリが多少異なります。 以下は i686 マシンでの出力例です。

```
SEARCH_DIR("/usr/i686-pc-linux-gnu/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib32")
SEARCH_DIR("/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/lib32")
SEARCH_DIR("/usr/i686-pc-linux-gnu/lib")
SEARCH_DIR("/usr/local/lib")
SEARCH_DIR("/lib")
SEARCH_DIR("/usr/lib");
```

次に libc が正しく用いられていることを確認します。

```
grep "/lib.*/libc.so.6 " dummy.log
```

最後のコマンドの出力は以下のようになるはずです。

```
attempt to open /lib/libc.so.6 succeeded
```

最後に GCC が正しくダイナミックリンカーを用いているかを確認します。

```
grep found dummy.log
```

上のコマンドの出力は以下のようになるはずです。（ダイナミックリンカーの名前はプラットフォームによって違っているかもしれません。）

```
found ld-linux-x86-64.so.2 at /lib/ld-linux-x86-64.so.2
```

出力結果が上と異なっていたり、出力が全く得られなかったりした場合は、何かが根本的に間違っているということです。 どこに問題があるのか調査、再試行を行って解消してください。 最もありがちな理由は、スペックファイルの修正を誤っていることです。 問題を残したままこの先には進まないでください。

すべてが正しく動作したら、テストに用いたファイルを削除します。

```
rm -v dummy.c a.out dummy.log
```

最後に誤ったディレクトリにあるファイルを移動します。

```
mkdir -pv /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
mv -v /usr/lib/*gdb.py /usr/share/gdb/auto-load/usr/lib
```

6.17.2. GCC の構成

インストールプログラム:	c++, cc (gcc へのリンク), cpp, g++, gcc, gcc-ar, gcc-nm, gcc-ranlib, gcov
インストールライブラリ:	libasan.{a,so}, libatomic.{a,so}, libgcc.a, libgcc_eh.a, libgcc_s.so, libgcov.a, libgomp.{a,so}, libiberty.a, libitm.{a,so}, liblto_plugin.so, libquadmath.{a,so}, libssp.{a,so}, libssp_nonshared.a, libstdc++.{a,so}, libsupc++.a, libtsan.{a,so}
インストールディレクトリ:	/usr/include/c++, /usr/lib/gcc, /usr/libexec/gcc, /usr/share/gcc-6.3.0

概略説明

c++	C++ コンパイラー
cc	C コンパイラー
cpp	C プリプロセッサー。 コンパイラーがこれを利用して、ソース内に記述された #include、#define や同じようなステートメントを展開します。
g++	C++ コンパイラー
gcc	C コンパイラー
gcc-ar	ar に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。 このプログラムは「リンク時の最適化（link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。 デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-nm	nm に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。 このプログラムは「リンク時の最適化（link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。 デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcc-ranlib	ranlib に関連するラッパーであり、コマンドラインへのプラグインを追加します。 このプログラムは「リンク時の最適化（link time optimization)」機能を付与する場合にのみ利用されます。 デフォルトのビルドオプションでは有効にはなりません。
gcov	カバレッジテストツール。 プログラムを解析して、最適化が最も効果的となるのはどこかを特定します。
libasan	アドレスサニタイザー（Address Sanitizer）のランタイムライブラリ。
libgcc	gcc のランタイムサポートを提供します。
libgcov	GCC のプロファイリングを有効にした場合にこのライブラリがリンクされます。
libgomp	C/C++ や Fortran において、マルチプラットフォームでの共有メモリ並行プログラミング（multi-platform shared-memory parallel programming）を行うための、GNU による OpenMP API インプリメンテーションです。
libiberty	以下に示すような数多くの GNU プログラムが利用する処理ルーチンを提供します。 getopt、obstack、 strerror、 strtol、 strtoul
liblto_plugin	GCC のリンク時における最適化（Link Time Optimization; LTO）プラグイン。 コンパイルユニット間での最適化を実現します。
libquadmath	GCC の4倍精度数値演算（Quad Precision Math）ライブラリ API
libssp	GCC のスタック破壊を防止する（stack-smashing protection）機能をサポートするルーチンを提供します。
libstdc++	標準 C++ ライブラリ
libsupc++	C++ プログラミング言語のためのサポートルーチンを提供します。
libtsan	スレッドサニタイザー（Thread Sanitizer）のランタイムライブラリ。

6.18. Bzip2-1.0.6

Bzip2 パッケージはファイル圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。 テキストファイルであれば、これまでよく用いられてきた gzip に比べて bzip2 の方が圧縮率の高いファイルを生成できます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.9 MB

6.18.1. Bzip2 のインストール

本パッケージのドキュメントをインストールするためにパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../bzip2-1.0.6-install_docs-1.patch
```

以下のコマンドによりシンボリックリンクを相対的なものとしてインストールします。

```
sed -i 's@\(ln -s -f \)$(PREFIX)/bin/@\1@' Makefile
```

man ページのインストール先を正しいディレクトリに修正します。

```
sed -i "s@(PREFIX)/man@(PREFIX)/share/man@g" Makefile
```

Bzip2 をコンパイルするための準備をします。

```
make -f Makefile-libbz2_so
make clean
```

make パラメーターの意味:

-f Makefile-libbz2_so
このパラメーターは Bzip2 のビルドにあたって通常の Makefile ファイルではなく Makefile-libbz2_so ファイルを利用することを指示します。 これはダイナミックライブラリ libbz2.so ライブラリをビルドし、Bzip2 の各種プログラムをこれにリンクします。

パッケージのコンパイルとテストを行います。

```
make
```

パッケージをインストールします。

```
make PREFIX=/usr install
```

共有化された bzip2 実行モジュールを /bin ディレクトリにインストールします。 また必要となるシンボリックリンクを生成し不要なものを削除します。

```
cp -v bzip2-shared /bin/bzip2
cp -av libbz2.so* /lib
ln -sv ../../lib/libbz2.so.1.0 /usr/lib/libbz2.so
rm -v /usr/bin/{bunzip2,bzcat,bzip2}
ln -sv bzip2 /bin/bunzip2
ln -sv bzip2 /bin/bzcat
```

6.18.2. Bzip2 の構成

インストールプログラム: bunzip2 (bzip2 へのリンク), bzcat (bzip2 へのリンク), bzcmp (bzdiff へのリンク), bzdiff, bzegrep (bzgrep へのリンク), bzfgrep (bzgrep へのリンク), bzgrep, bzip2, bzip2recover, bzless (bzmore へのリンク), bzmore
インストールライブラリ: libbz2.{a,so}
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/bzip2-1.0.6

概略説明

bunzip2 bzip2 で圧縮されたファイルを解凍します。
bzcat 解凍結果を標準出力に出力します。
bzcmp bzip2 で圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
bzdiff bzip2 で圧縮されたファイルに対して diff を実行します。

bzegrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
bzfgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
bzgrep	bzip2 で圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
bzip2	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）とハフマン符号化法を用いてファイル圧縮を行います。圧縮率は、従来用いられてきた「Lempel-Ziv」アルゴリズムによるもの、例えば gzip コマンドによるものに比べて高いものです。
bzip2recover	壊れた bzip2 ファイルの復旧を試みます。
bzless	bzip2 で圧縮されたファイルに対して less を実行します。
bzmore	bzip2 で圧縮されたファイルに対して more を実行します。
libbz2	ブロックソート法（バロウズ-ホイラー変換）による可逆的なデータ圧縮を提供するライブラリ。

6.19. Pkg-config-0.29.1

pkg-config パッケージは configure や make による処理を通じて、インクルードパスやライブラリパスを提供するツールです。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 28 MB

6.19.1. Pkg-config のインストール

Pkg-config をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr              \
            --with-internal-glib       \
            --disable-compile-warnings \
            --disable-host-tool        \
            --docdir=/usr/share/doc/pkg-config-0.29.1
```

configure オプションの意味:

--with-internal-glib
これは pkg-config が内包しているバージョンの glib を利用するようにします。 LFS においては Glib をインストールせず利用できないからです。

--disable-compile-warnings
GCC 6 を用いてビルドする際、ビルドが失敗しないように、コンパイラーフラグを利用しないようにします。

--disable-host-tool
本オプションは、pkg-config プログラムに対しての不要なハードリンクを生成しないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.19.2. Pkg-config の構成

インストールプログラム: pkg-config
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/pkg-config-0.29.1

概略説明

pkg-config 指定されたライブラリやパッケージに対するメタ情報を返します。

6.20. Ncurses-6.0

Ncurses パッケージは、端末に依存しない、文字ベースのスクリーン制御を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 39 MB

6.20.1. Ncurses のインストール

configure では制御できないため、以下によりスタティックライブラリをインストールしないようにします。

```
sed -i '/LIBTOOL_INSTALL/d' c++/Makefile.in
```

Ncurses をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr           \
            --mandir=/usr/share/man \
            --with-shared           \
            --without-debug         \
            --without-normal        \
            --enable-pc-files       \
            --enable-widec
```

configure オプションの意味:

--enable-widec
本スイッチは通常のライブラリ（libncurses.so.6.0）ではなくワイド文字対応のライブラリ（libncursesw.so.6.0）をビルドすることを指示します。 ワイド文字対応のライブラリは、マルチバイトロケールと従来の 8ビットロケールの双方に対して利用可能です。 通常のライブラリでは 8ビットロケールに対してしか動作しません。 ワイド文字対応と通常のものとでは、ソース互換があるもののバイナリ互換がありません。

--enable-pc-files
本スイッチは pkg-config 用の .pc ファイルを生成しインストールすることを指示します。

--without-normal
本スイッチはたいていのスタティックライブラリをビルド、インストールしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありますが、パッケージをインストールした後でないと実行できません。 テストスイートのためのファイル群はサブディレクトリ test/ 以下に残っています。 詳しいことはそのディレクトリ内にある README ファイルを参照してください。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

共有ライブラリを /lib ディレクトリに移動します。 これらはここにあるべきものです。

```
mv -v /usr/lib/libncursesw.so.6* /lib
```

ライブラリを移動させたので、シンボリックリンク先が存在しないことになります。 そこでリンクを再生成します。

```
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libncursesw.so) /usr/lib/libncursesw.so
```

アプリケーションによっては、ワイド文字対応ではないライブラリをリンカーが探し出すよう求めるものが多くあります。 そのようなアプリケーションに対しては、以下のようなシンボリックリンクやリンカースクリプトを作り出して、ワイド文字対応のライブラリにリンクさせるよう仕向けます。

```
for lib in ncurses form panel menu ; do
    rm -vf                    /usr/lib/lib${lib}.so
    echo "INPUT(-l${lib}w)" > /usr/lib/lib${lib}.so
    ln -sfv ${lib}w.pc        /usr/lib/pkgconfig/${lib}.pc
done
```

最後に古いアプリケーションにおいて、ビルド時に -lcurses を指定するものがあるため、これもビルド可能なものにします。

```
rm -vf                     /usr/lib/libcursesw.so
echo "INPUT(-lncursesw)" > /usr/lib/libcursesw.so
ln -sfv libncurses.so      /usr/lib/libcurses.so
```

必要なら Ncurses のドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v       /usr/share/doc/ncurses-6.0
cp -v -R doc/* /usr/share/doc/ncurses-6.0
```

注記

ここまでの作業手順では、ワイド文字対応ではない Ncurses ライブラリは生成しませんでした。 ソースからコンパイルして構築するパッケージなら、実行時にそのようなライブラリにリンクするものはないからであり、バイナリコードのアプリケーションで非ワイド文字対応のものは Ncurses 5 にリンクされています。 バイナリコードしかないアプリケーションを取り扱う場合、あるいは LSB 対応を要する場合で、それがワイド文字対応ではないライブラリを必要とするなら、以下のコマンドによりそのようなライブラリを生成してください。

```
make distclean
./configure --prefix=/usr    \
            --with-shared    \
            --without-normal \
            --without-debug  \
            --without-cxx-binding \
            --with-abi-version=5
make sources libs
cp -av lib/lib*.so.5* /usr/lib
```

6.20.2. Ncurses の構成

インストールプログラム: captoinfo (tic へのリンク), clear, infocmp, infotocap (tic へのリンク), ncursesw6-config, reset (tset へのリンク), tabs, tic, toe, tput, tset

インストールライブラリ: libcursesw.so (libncursesw.so へのシンボリックリンクおよびリンカースクリプト), libformw.so, libmenuw.so, libncursesw.so, libncurses++w.a, libpanelw.so, これらに加えてワイド文字対応ではない通常のライブラリでその名称から ”w” を取り除いたもの。

インストールディレクトリ: /usr/share/tabset, /usr/share/terminfo, /usr/share/doc/ncurses-6.0

概略説明

captoinfo	termcap の記述を terminfo の記述に変換します。
clear	画面消去が可能ならこれを行います。
infocmp	terminfo の記述どうしを比較したり出力したりします。
infotocap	terminfo の記述を termcap の記述に変換します。
ncursesw6-config	ncurses の設定情報を提供します。
reset	端末をデフォルト設定に初期化します。
tabs	端末上のタブストップの設定をクリアしたり設定したりします。
tic	terminfo の定義項目に対するコンパイラーです。 これはソース形式の terminfo ファイルをバイナリ形式に変換し、ncurses ライブラリ内の処理ルーチンが利用できるようにします。 terminfo ファイルは特定端末の特性に関する情報が記述されるものです。
toe	利用可能なすべての端末タイプを一覧表示します。 そこでは端末名と簡単な説明を示します。
tput	端末に依存する機能設定をシェルが利用できるようにします。 また端末のリセットや初期化、あるいは長い端末名称の表示も行います。
tset	端末の初期化に利用します。
libcursesw	libncursesw へのリンク。

libncursesw	さまざまな方法により端末画面上に文字列を表示するための関数を提供します。 これらの関数を用いた具体例として、カーネルの make menuconfig の実行によって表示されるメニューがあります。
libformw	フォームを実装するための関数を提供します。
libmenuw	メニューを実装するための関数を提供します。
libpanelw	パネルを実装するための関数を提供します。

6.21. Attr-2.4.47

attr パッケージは、ファイルシステム上のオブジェクトに対しての拡張属性を管理するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.3 MB

6.21.1. Attr のインストール

ドキュメントを収容するディレクトリ名にバージョンをつけるようにします。

```
sed -i -e 's|/@pkg_name@|&-@pkg_version@|' include/builddefs.in
```

man ページ パッケージによって既にインストールされた man ページを、ここで再インストールされないようにします。

```
sed -i -e "/SUBDIRS/s|man[25]||g" man/Makefile
```

Attr をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --bindir=/bin \
            --disable-static
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストは、ext2, ext3, ext4 のような拡張属性をサポートしているファイルシステム上にて実施する必要があります。 また同時並行のテスト（-j オプションに 1以上を指定した場合）では失敗します。 テストを実施するには以下を実行します。

```
make -j1 tests root-tests
```

パッケージをインストールします。

```
make install install-dev install-lib
chmod -v 755 /usr/lib/libattr.so
```

共有ライブラリは /lib に移動させます。 これにより /usr/lib にある .so ファイルを再生成します。

```
mv -v /usr/lib/libattr.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libattr.so) /usr/lib/libattr.so
```

6.21.2. Attr の構成

インストールプログラム: attr, getfattr, setattr
インストールライブラリ: libattr.so
インストールディレクトリ: /usr/include/attr, /usr/share/doc/attr-2.4.47

概略説明

attr ファイルシステム上のオブジェクトに対して、属性を拡張します。
getfattr ファイルシステム上のオブジェクトに対して、拡張属性の情報を取得します。
setattr ファイルシステム上のオブジェクトに対して、拡張属性の情報を設定します。
libattr 拡張属性を制御するライブラリ関数を提供します。

6.22. Acl-2.2.52

Acl パッケージは、アクセスコントロールリスト（Access Control Lists）を管理するユーティリティーを提供します。 これはファイルやディレクトリに対して、きめ細かく詳細にアクセス権限を設定するものとして利用されます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.8 MB

6.22.1. Acl のインストール

ドキュメントを収容するディレクトリ名にバージョンをつけるようにします。

```
sed -i -e 's|/@pkg_name@|&-@pkg_version@|' include/builddefs.in
```

不適切なテストを修正します。

```
sed -i "s:| sed.*::g" test/{sbits-restore,cp,misc}.test
```

長いグループ名に対して getfacl -e が segfault を起こすため、これを修正します。

```
sed -i -e "/TABS-1;/a if (x > (TABS-1)) x = (TABS-1);" \
    libacl/__acl_to_any_text.c
```

Acl をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --bindir=/bin    \
            --disable-static \
            --libexecdir=/usr/lib
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

Acl のテストは、Acl のライブラリによって Coreutils をビルドした後に、アクセス制御がサポートされたファイルシステム上にて実施する必要があります。 テスト実施が必要である場合は、後に生成する Coreutils のビルドが終わってから、再び本パッケージに戻って make -jl tests を実行してください。

パッケージをインストールします。

```
make install install-dev install-lib
chmod -v 755 /usr/lib/libacl.so
```

共有ライブラリは /lib に移動させます。 これにより /usr/lib にある .so ファイルを再生成します。

```
mv -v /usr/lib/libacl.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libacl.so) /usr/lib/libacl.so
```

6.22.2. Acl の構成

インストールプログラム: chacl, getfacl, setacl
インストールライブラリ: libacl.so
インストールディレクトリ: /usr/include/acl, /usr/share/doc/acl-2.2.52

概略説明

chacl ファイルまたはディレクトリに対するアクセスコントロールリストを設定します。

getfacl ファイルアクセスコントロールリストを取得します。

setacl ファイルアクセスコントロールリストを設定します。

libacl アクセスコントロールリスト（Access Control Lists）を制御するライブラリ関数を提供します。

6.23. Libcap-2.25

Libcap パッケージは、Linux カーネルにおいて利用される POSIX 1003.1e 機能へのユーザー空間からのインターフェースを実装します。 この機能は、強力な root 権限機能を他の権限へと分散します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 1.3 MB

6.23.1. Libcap のインストール

スタティックライブラリをインストールしないようにします。

```
sed -i '/install.*STALIBNAME/d' libcap/Makefile
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make RAISE_SETFCAP=no lib=lib prefix=/usr install
chmod -v 755 /usr/lib/libcap.so
```

make オプションの意味

RAISE_SETFCAP=no
このパラメーターは setcap が自分を利用しないようにします。 このことにより、カーネルやファイルシステムが拡張属性をサポートしていなくても、インストールエラーが発生しないようにします。

lib=lib
このパラメーターは x86_64 においてライブラリを `$prefix/lib64` ではなく `$prefix/lib` にインストールします。 x86 においては何も効果はありません。

共有ライブラリは `/lib` に移動させます。 これにより `/usr/lib` にある `.so` ファイルを再生成します。

```
mv -v /usr/lib/libcap.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libcap.so) /usr/lib/libcap.so
```

6.23.2. Libcap の構成

インストールプログラム: capsh, getcap, getpcaps, setcap
インストールライブラリ: libcap.so

概略説明

capsh 拡張属性サポートについて制御するためのシェルラッパー。
getcap ファイルの拡張属性を検査します。
getpcaps 指定されたプロセスの拡張属性を表示します。
libcap POSIX 1003.1e 拡張属性を制御するライブラリ関数を提供します。
setcap ファイルの拡張属性を設定します。

6.24. Sed-4.3

Sed パッケージはストリームエディターを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 10.7 MB

6.24.1. Sed のインストール

はじめに LFS 環境にて問題となる箇所を修正し、失敗するテストを削除します。

```
sed -i 's/usr/tools/'       build-aux/help2man
sed -i 's/panic-tests.sh//' Makefile.in
```

Sed をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --bindir=/bin
```

パッケージをコンパイルし HTML ドキュメントを生成します。

```
make
make html
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージとドキュメントをインストールします。

```
make install
install -d -m755           /usr/share/doc/sed-4.3
install -m644 doc/sed.html /usr/share/doc/sed-4.3
```

6.24.2. Sed の構成

インストールプログラム: sed
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/sed-4.3

概略説明

sed　テキストファイルを一度の処理でフィルタリングし変換します。

6.25. Shadow-4.2.1

Shadow パッケージはセキュアなパスワード管理を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 42 MB

6.25.1. Shadow のインストール

注記

もっと強力なパスワードを利用したい場合は http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/cracklib.html にて示している Cracklib パッケージを参照してください。 Cracklib パッケージは Shadow パッケージよりも前にインストールします。 その場合 Shadow パッケージの configure スクリプトでは *--with-libcrack* パラメーターをつけて実行する必要があります。

groups コマンドとその man ページをインストールしないようにします。 これは Coreutils パッケージにて、より良いバージョンが提供されているからです。 また man ページ にてインストールされる man ページはインストールしないようにします。

```
sed -i 's/groups$(EXEEXT) //' src/Makefile.in
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/groups\.1 / /'   {} \;
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/getspnam\.3 / /' {} \;
find man -name Makefile.in -exec sed -i 's/passwd\.5 / /'   {} \;
```

パスワード暗号化に関して、デフォルトの crypt 手法ではなく、より強力な SHA-512 手法を用いることにします。 こうしておくと 8文字以上のパスワード入力が可能となります。 またメールボックスを収めるディレクトリとして Shadow ではデフォルトで /var/spool/mail ディレクトリを利用していますが、これは古いものであるため /var/mail ディレクトリに変更します。

```
sed -i -e 's@#ENCRYPT_METHOD DES@ENCRYPT_METHOD SHA512@' \
       -e 's@/var/spool/mail@/var/mail@' etc/login.defs
```

注記

Cracklib のサポートを含めて Shadow をビルドする場合は以下を実行します。

```
sed -i 's@DICTPATH.*@DICTPATH\t/lib/cracklib/pw_dict@' etc/login.defs
```

LFS のグループファイルと整合が取れるように、デフォルトの useradd を修正します。

```
sed -i 's/1000/999/' etc/useradd
```

Shadow をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --sysconfdir=/etc --with-group-name-max-length=32
```

configure オプションの意味

--with-group-name-max-length=32
ユーザー名とグループ名の最大文字数を 32 とします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

不適切なディレクトリにインストールされるプログラムを移動させます。

```
mv -v /usr/bin/passwd /bin
```

6.25.2. Shadow の設定

このパッケージには、ユーザーやグループの追加、修正、削除、そのパスワードの設定、変更、その他の管理操作を行うユーティリティが含まれます。 パスワードのシャドウイング（password shadowing）というものが何を意味するのか、その詳細についてはこのパッケージのソース内にある **doc/HOWTO** を参照してください。 Shadow によるサポートを利用する場合、パスワード認証を必要とするプログラム（ディスプレイマネージャー、FTP プログラム、POP3、デーモン、など）は Shadow に準拠したものでなければなりません。 つまりそれらのプログラムが、シャドウ化された（shadowed）パスワードを受け入れて動作しなければならないということです。

Shadow によるパスワードの利用を有効にするために、以下のコマンドを実行します。

```
pwconv
```

また Shadow によるグループパスワードを有効にするために、以下を実行します。

```
grpconv
```

Shadow の useradd コマンドに対する通常の設定には、注意すべき点があります。 まず useradd コマンドによりユーザーを生成する場合のデフォルトの動作では、ユーザー名と同じグループを自動生成します。 ユーザーID（UID）とグループID（GID）は 1000 以上が割り当てられます。 useradd コマンドの利用時に特にパラメータを与えなければ、追加するユーザーのグループは新たな固有グループが生成されることになります。 この動作が不適当であれば useradd コマンドの実行時に *-g* パラメーターを利用することが必要です。 デフォルトで適用されるパラメーターは **/etc/default/useradd** ファイルに定義されています。 このファイルのパラメーター定義を必要に応じて書き換えてください。

/etc/default/useradd のパラメーター説明

GROUP=1000
このパラメーターは /etc/group ファイルにて設定されるグループIDの先頭番号を指定します。 必要なら任意の数値に設定することもできます。 useradd コマンドは既存の UID 値、GID 値を再利用することはありません。 このパラメーターによって定義された数値が実際に指定された場合、この値以降で利用可能な値が利用されます。 また useradd コマンドの実行時に、パラメーター *-g* を利用せず、かつグループID 1000 のグループが存在していなかった場合は、以下のようなメッセージが出力されます。 **useradd: unknown GID 1000**（"GID 1000 が不明です"）このメッセージは無視することができます。 この場合グループIDには 1000 が利用されます。

CREATE_MAIL_SPOOL=yes
このパラメーターは useradd コマンドの実行によって、追加されるユーザー用のメールボックスに関するファイルが生成されます。 useradd コマンドは、このファイルのグループ所有者を **mail**（グループID 0660）に設定します。 メールボックスに関するファイルを生成したくない場合は、以下のコマンドを実行します。

```
sed -i 's/yes/no/' /etc/default/useradd
```

6.25.3. root パスワードの設定

root ユーザーのパスワードを設定します。

```
passwd root
```

6.25.4. Shadow の構成

インストールプログラム: chage, chfn, chgpasswd, chpasswd, chsh, expiry, faillog, gpasswd, groupadd, groupdel, groupmems, groupmod, grpck, grpconv, grpunconv, lastlog, login, logoutd, newgidmap, newgrp, newuidmap, newusers, nologin, passwd, pwck, pwconv, pwunconv, sg (newgrp へのリンク), su, useradd, userdel, usermod, vigr (vipw へのリンク), vipw
インストールディレクトリ: /etc/default

概略説明

chage ユーザーのパスワード変更を行うべき期間を変更します。
chfn ユーザーのフルネームや他の情報を変更します。
chgpasswd グループのパスワードをバッチモードにて更新します。
chpasswd ユーザーのパスワードをバッチモードにて更新します。
chsh ユーザーのデフォルトのログインシェルを変更します。

expiry	現時点でのパスワード失効に関する設定をチェックし更新します。
faillog	ログイン失敗のログを調査します。 ログインの失敗を繰り返すことでアカウントがロックされる際の、最大の失敗回数を設定します。 またその失敗回数をリセットします。
gpasswd	グループに対してメンバーや管理者を追加、削除します。
groupadd	指定した名前でグループを生成します。
groupdel	指定された名前のグループを削除します。
groupmems	スーパーユーザー権限を持たなくても、自分自身のグループのメンバーリストを管理可能とします。
groupmod	指定されたグループの名前や GID を修正します。
grpck	グループファイル /etc/group と /etc/gshadow の整合性を確認します。
grpconv	通常のグループファイルから Shadow グループファイルを生成、更新します。
grpunconv	/etc/gshadow ファイルを元に /etc/group ファイルを更新し /etc/gshadow ファイルを削除します。
lastlog	全ユーザーの中での最新ログインの情報、または指定ユーザーの最新ログインの情報を表示します。
login	ユーザーのログインを行います。
logoutd	ログオン時間とポートに対する制限を実施するためのデーモン。
newgidmap	ユーザー空間における gid マッピングを設定します。
newgrp	ログインセッション中に現在の GID を変更します。
newuidmap	ユーザー空間における uid マッピングを設定します。
newusers	ユーザーアカウントの情報を生成または更新します。
nologin	ユーザーアカウントが利用不能であることをメッセージ表示します。 利用不能なユーザーアカウントに対するデフォルトシェルとして利用することを意図しています。
passwd	ユーザーアカウントまたはグループアカウントに対するパスワードを変更します。
pwck	パスワードファイル /etc/passwd と /etc/shadow の整合性を確認します。
pwconv	通常のパスワードファイルを元に shadow パスワードファイルを生成、更新します。
pwunconv	/etc/shadow ファイルを元に /etc/passwd ファイルを更新し /etc/shadow を削除します。
sg	ユーザーの GID を指定されたグループにセットした上で、指定されたコマンドを実行します。
su	ユーザー ID とグループ ID を変更してシェルを実行します。
useradd	指定した名前で新たなユーザーを生成します。 あるいは新規ユーザーのデフォルトの情報を更新します。
userdel	指定されたユーザーアカウントを削除します。
usermod	指定されたユーザーのログイン名、UID (User Identification)、利用シェル、初期グループ、ホームディレクトリなどを変更します。
vigr	/etc/group ファイル、あるいは /etc/gshadow ファイルを編集します。
vipw	/etc/passwd ファイル、あるいは /etc/shadow ファイルを編集します。

6.26. Psmisc-22.21

Psmisc パッケージは稼動中プロセスの情報表示を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 4.0 MB

6.26.1. Psmisc のインストール

Psmisc をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

killall プログラムと fuser プログラムを、FHS が規定しているディレクトリに移動します。

```
mv -v /usr/bin/fuser   /bin
mv -v /usr/bin/killall /bin
```

6.26.2. Psmisc の構成

インストールプログラム: fuser, killall, peekfd, prtstat, pstree, pstree.xll (pstree へのリンク)

概略説明

fuser	指定されたファイルまたはファイルシステムを利用しているプロセスのプロセス ID (PID) を表示します。
killall	プロセス名を用いてそのプロセスを終了 (kill) させます。 指定されたコマンドを起動しているすべてのプロセスに対してシグナルが送信されます。
peekfd	PID を指定することによって、稼動中のそのプロセスのファイルディスクリプターを調べます。
prtstat	プロセスに関する情報を表示します。
pstree	稼働中のプロセスをツリー形式で表示します。
pstree.xll	pstree と同じです。 ただし終了時には確認画面が表示されます。

6.27. Iana-Etc-2.30

Iana-Etc パッケージはネットワークサービスやプロトコルのためのデータを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 2.3 MB

6.27.1. Iana-Etc のインストール

以下のコマンドを実行します。 これは IANA が提供している生のデータを正しい書式のデータとして変換し /etc/protocols ファイルと /etc/services ファイルとして生成します。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.27.2. Iana-Etc の構成

インストールファイル: /etc/protocols, /etc/services

概略説明

/etc/protocols TCP/IP により利用可能なさまざまな DARPA インターネットプロトコル (DARPA Internet protocols) を記述しています。

/etc/services インターネットサービスを分かりやすく表現した名称と、その割り当てポートおよびプロトコルの種類の対応情報を提供します。

6.28. M4-1.4.18

M4 パッケージはマクロプロセッサーを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 31 MB

6.28.1. M4 のインストール

M4 をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

test-update-copyright.sh は失敗しますが無視して構いません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.28.2. M4 の構成

インストールプログラム: m4

概略説明

m4 指定されたファイル内のマクロ定義を展開して、そのコピーを生成します。 マクロ定義には埋め込み (built-in) マクロとユーザー定義マクロがあり、いくらでも引数を定義することができます。 マクロ定義の展開だけでなく m4 には以下のような埋め込み関数があります。 指定ファイルの読み込み、Unix コマンド実行、整数演算処理、テキスト操作、再帰処理などです。 m4 プログラムはコンパイラーのフロントエンドとして利用することができ、それ自体でマクロプロセッサーとして用いることもできます。

6.29. Bison-3.0.4

Bison パッケージは構文解析ツールを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 32 MB

6.29.1. Bison のインストール

Bison をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/bison-3.0.4
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストに関連しては bison と flex の間に循環的な依存があります。 テストが必要な場合は次節に示す flex をインストールした後に make check を実行します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.29.2. Bison の構成

インストールプログラム: bison, yacc
インストールライブラリ: liby.a
インストールディレクトリ: /usr/share/bison

概略説明

bison 構文規則の記述に基づいて、テキストファイルの構造を解析するプログラムを生成します。 Bison は Yacc (Yet Another Compiler Compiler) の互換プログラムです。

yacc bison のラッパースクリプト。 yacc プログラムがあるなら bison を呼び出さずに yacc を実行します。 *-y* オプションが指定された時は bison を実行します。

liby Yacc 互換の関数として yyerror 関数と main 関数を含むライブラリです。 このライブラリはあまり使い勝手の良いものではありません。 ただし POSIX ではこれが必要になります。

6.30. Flex-2.6.3

Flex パッケージは、字句パターンを認識するプログラムを生成するユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 31 MB

6.30.1. Flex のインストール

実行モジュールに --help オプションを指定した場合には man ページを生成するプログラム help2man が存在していることが前提となっています。 しかし現時点においてこのプログラムは存在していません。 そこで環境変数を用いて man ページの生成工程を回避することにします。 以下により Flex をコンパイルするための準備をします。

```
HELP2MAN=/tools/bin/true \
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/flex-2.6.3
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。(約 0.5 SBU)

```
make check
```

cxx_restart というテストだけは失敗します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

プログラムの中には flex コマンドが用いられず、その前身である lex コマンドを実行しようとするものがあります。 そういったプログラムへ対応するために lex という名のシンボリックリンクを生成します。 このリンクが lex のエミュレーションモードとして flex を呼び出します。

```
ln -sv flex /usr/bin/lex
```

6.30.2. Flex の構成

インストールプログラム: flex, flex++ (flex へのリンク), lex (flex へのリンク)
インストールライブラリ: libfl.so, libfl_pic.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/flex-2.6.3

概略説明

flex テキスト内のパターンを認識するためのプログラムを生成するツール。 これは多彩なパターン検索の規則構築を可能とします。 これを利用することで特別なプログラムの生成が不要となります。

flex++ flex の拡張。 C++ コードやクラスの生成に利用されます。 これは flex へのシンボリックリンクです。

lex lex のエミュレーションモードとして flex を実行するスクリプト。

libfl flex ライブラリ。

6.31. Grep-2.27

Grep パッケージはファイル内の検索を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 28 MB

6.31.1. Grep のインストール

Grep をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --bindir=/bin
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.31.2. Grep の構成

インストールプログラム: egrep, fgrep, grep

概略説明

egrep 拡張正規表現 (extended regular expression) にマッチした行を表示します。
fgrep 固定文字列の一覧にマッチした行を表示します。
grep 基本的な正規表現に合致した行を出力します。

6.32. Readline-7.0

Readline パッケージは、コマンドラインの編集や履歴管理を行うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 14 MB

6.32.1. Readline のインストール

Readline を再インストールすると、それまでの古いライブラリは <ライブラリ名>.old というファイル名でコピーされます。 これは普通は問題ないことですが ldconfig によるリンクに際してエラーを引き起こすことがあります。 これを避けるため以下の二つの sed コマンドを実行します。

```
sed -i '/MV.*old/d' Makefile.in
sed -i '/{OLDSUFF}/c:' support/shlib-install
```

Readline をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/readline-7.0
```

パッケージをコンパイルします。

```
make SHLIB_LIBS=-lncurses
```

make オプションの意味:

SHLIB_LIBS=-lncurses
このオプションにより Readline を libncurses ライブラリ（その実体は libncursesw ライブラリ）にリンクします。

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make SHLIB_LIBS=-lncurses install
```

スタティックライブラリを適切なディレクトリに移動し、シンボリックリンクを適正にします。

```
mv -v /usr/lib/lib{readline,history}.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libreadline.so) /usr/lib/libreadline.so
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libhistory.so ) /usr/lib/libhistory.so
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
install -v -m644 doc/*.{ps,pdf,html,dvi} /usr/share/doc/readline-7.0
```

6.32.2. Readline の構成

インストールライブラリ: libhistory.so, libreadline.so
インストールディレクトリ: /usr/include/readline, /usr/share/readline, /usr/share/doc/readline-7.0

概略説明

libhistory 入力履歴を適切に再現するためのユーザーインターフェースを提供します。

libreadline コマンドラインインターフェースを提供しているさまざまなコマンドにおいて、適切なインターフェースを提供します。

6.33. Bash-4.4

Bash は Bourne-Again SHell を提供します。

概算ビルド時間: 1.8 SBU
必要ディスク容量: 50 MB

6.33.1. Bash のインストール

Bash をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr                      \
            --docdir=/usr/share/doc/bash-4.4 \
            --without-bash-malloc              \
            --with-installed-readline
```

configure オプションの意味:

--with-installed-readline
このオプションは Bash が持つ独自の readline ライブラリではなく、既にインストールした readline ライブラリを用いることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストスィートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれた箇所まで読み飛ばしてください。

テストを実施するにあたっては nobody ユーザーによるソースツリーへの書き込みを可能とします。

```
chown -Rv nobody .
```

nobody ユーザーでテストを実行します。

```
su nobody -s /bin/bash -c "PATH=$PATH make tests"
```

パッケージをインストールします。 そして実行モジュールを /bin へ移動します。

```
make install
mv -vf /usr/bin/bash /bin
```

新たにコンパイルした bash プログラムを実行します。(この時点までに実行されていたものが置き換えられます。)

```
exec /bin/bash --login +h
```

注記

ここで指定しているパラメーターは、対話形式のログインシェルとして、またハッシュ機能を無効にして bash プロセスを起動します。 これにより新たに構築するプログラム類は構築後すぐに利用できることになります。

6.33.2. Bash の構成

インストールプログラム: bash, bashbug, sh (bash へのリンク)
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/bash-4.4

概略説明

bash 広く活用されているコマンドインタープリター。 処理実行前には、指示されたコマンドラインをさまざまに展開したり置換したりします。 この機能があるからこそ、インタープリター機能を強力なものにしています。

bashbug bash に関連したバグ報告を、標準書式で生成しメール送信することを補助するシェルスクリプトです。

sh bash プログラムへのシンボリックリンク。 sh として起動された際には、かつてのバージョンである sh の起動時の動作と、出来るだけ同じになるように振舞います。 同時に POSIX 標準に適合するよう動作します。

6.34. Bc-1.06.95

Bc パッケージは、任意精度（arbitrary precision）の演算処理言語を提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 3.6 MB

6.34.1. Bc のインストール

はじめにメモリーリークに関する修正を行います。

```
patch -Np1 -i ../bc-1.06.95-memory_leak-1.patch
```

Bc をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr           \
            --with-readline         \
            --mandir=/usr/share/man \
            --infodir=/usr/share/info
```

configure オプションの意味

--with-readline
このオプションは、本パッケージにて提供される readline ライブラリではなく、既にシステムにインストールされている readline ライブラリを用いることを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

bc をテストする場合は以下のコマンドを実行します。 その際には相当量の出力が行われますから、ファイルにリダイレクトしておくとよいでしょう。 テストのうちいくつかのテスト（12,144 個のうちの10個）では、最終デジットに対する丸め（roundoff）に関するエラーが発生します。

```
echo "quit" | ./bc/bc -l Test/checklib.b
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.34.2. Bc の構成

インストールプログラム: bc, dc

概略説明

bc　コマンドラインから実行する計算機（calculator）です。
dc　逆ポーランド（reverse-polish）記法による計算機です。

6.35. Libtool-2.4.6

Libtool パッケージは GNU 汎用ライブラリをサポートするスクリプトを提供します。 これは複雑な共有ライブラリをラップして一貫した可搬性を実現します。

概算ビルド時間: 2.0 SBU
必要ディスク容量: 43 MB

6.35.1. Libtool のインストール

Libtool をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。(約 11.0 SBU)

```
make check
```

LFS ビルド環境下では５つのテストが失敗します。 これはパッケージ間の相互依存のためです。 automake をインストールした後に再テストすれば、全テストが成功します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.35.2. Libtool の構成

インストールプログラム: libtool, libtoolize
インストールライブラリ: libltdl.so
インストールディレクトリ: /usr/include/libltdl, /usr/share/libtool

概略説明

libtool 汎用的なライブラリ構築支援サービスを提供します。
libtoolize パッケージに対して libtool によるサポートを加える標準的手法を提供します。
libltdl dlopen を行うライブラリの複雑さを隠蔽します。

6.36. GDBM-1.12

GDBM パッケージは GNU データベースマネージャーを提供します。 これは拡張性のあるハッシングなど、従来の UNIX dbm と同様のデータベース機能を実現するライブラリです。 このライブラリにより、キーデータペアの収容、キーによるデータ検索と抽出、キーに基づいたデータ削除などを行うことができます。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 8.8 MB

6.36.1. GDBM のインストール

GDBM をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr \
            --disable-static \
            --enable-libgdbm-compat
```

configure オプションの意味:

`--enable-libgdbm-compat`
このオプションは libgdbm 互換ライブラリをビルドすることを指示します。 LFS パッケージではない他のパッケージでは、かつての古い DBM ルーチンを必要とするものがあるかもしれません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.36.2. GDBM の構成

インストールプログラム: gdbm_dump, gdbm_load, gdbmtool
インストールライブラリ: libgdbm.so, libgdbm_compat.so

概略説明

gdbm_dump GDBM データベースをファイルにダンプします。
gdbm_load GDBM のダンプファイルからデータベースを再生成します。
gdbmtool GDBM データベースをテストし修復します。
libgdbm ハッシュデータベースを取り扱う関数を提供します。
libgdbm_compat 古い DBM 関数を含んだ互換ライブラリ。

6.37. Gperf-3.1

Gperf は、キーセットに基づいて完全なハッシュ関数の生成を実現します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 5.4 MB

6.37.1. Gperf のインストール

Gperf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/gperf-3.1
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

同時実行によるテスト（-j オプションを 1 より大きくした場合）ではテストに失敗します。 ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make -j1 check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.37.2. Gperf の構成

インストールプログラム: gperf
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/gperf-3.1

概略説明

gperf キーセットに基づいて、完全なハッシュ関数を生成します。

6.38. Expat-2.2.0

Expat パッケージは XML を解析するためのストリーム指向 (stream oriented) な C ライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 6.1 MB

6.38.1. Expat のインストール

Expat をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --disable-static
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
install -v -dm755 /usr/share/doc/expat-2.2.0
install -v -m644 doc/*.{html,png,css} /usr/share/doc/expat-2.2.0
```

6.38.2. Expat の構成

インストールプログラム: xmlwf
インストールライブラリ: libexpat.so
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/expat-2.2.0

概略説明

xmlwf XML ドキュメントが整形されているかどうかをチェックするユーティリティです。

libexpat XML を処理する API 関数を提供します。

6.39. Inetutils-1.9.4

Inetutils パッケージはネットワーク制御を行う基本的なプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 27 MB

6.39.1. Inetutils のインストール

Inetutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr        \
            --localstatedir=/var \
            --disable-logger     \
            --disable-whois      \
            --disable-rcp        \
            --disable-rexec      \
            --disable-rlogin     \
            --disable-rsh        \
            --disable-servers
```

configure オプションの意味:

--disable-logger
このオプションは logger プログラムをインストールしないようにします。 このプログラムはシステムログデーモンに対してメッセージ出力を行うスクリプトにて利用されます。 ここでこれをインストールしないのは、後に Util-linux パッケージにおいて、より最新のバージョンをインストールするためです。

--disable-whois
このオプションは whois のクライアントプログラムをインストールしないようにします。 このプログラムはもはや古いものです。 より良い whois プログラムのインストール手順については BLFS ブックにて説明しています。

*--disable-r**
これらのパラメーターは、セキュリティの問題により用いるべきではない古いプログラムを作らないようにします。古いプログラムによる機能は BLFS ブックにて示す openssh でも提供されています。

--disable-servers
このオプションは Inetutils パッケージに含まれるさまざまなネットワークサーバーをインストールしないようにします。 これらのサーバーは基本的な LFS システムには不要なものと考えられます。 サーバーの中には本質的にセキュアでないものがあり、信頼のあるネットワーク内でのみしか安全に扱うことができないものもあります。 サーバーの多くは、これに代わる他の適切なものが存在します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

テストの中で libls.sh だけは失敗します。 これは特定のプログラムへのパスがハードコーディングされているためです。 第6章を終えた後であればすべてのテストが成功します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

/usr がアクセス不能であっても各種プログラムが実行できるように、それらを移動させます。

```
mv -v /usr/bin/{hostname,ping,ping6,traceroute} /bin
mv -v /usr/bin/ifconfig /sbin
```

6.39.2. Inetutils の構成

インストールプログラム: dnsdomainname, ftp, ifconfig, hostname, ping, ping6, talk, telnet, tftp, traceroute

概略説明

dnsdomainname	システムの DNS ドメイン名を表示します。
ftp	ファイル転送プロトコル（file transfer protocol）に基づくプログラム。
hostname	ホスト名の表示または設定を行います。
ifconfig	ネットワークインターフェースを管理します。
ping	エコーリクエスト（echo-request）パケットを送信し、返信にどれだけ要したかを表示します。
ping6	IPv6 ネットワーク向けの ping
talk	他ユーザーとのチャットに利用します。
telnet	TELNET プロトコルインターフェース。
tftp	軽量なファイル転送プログラム。(trivial file transfer program)
traceroute	処理起動したホストからネットワーク上の他のホストまで、送出したパケットの経由ルートを追跡します。 その合間に検出されたすべての hops（= ゲートウェイ）も表示します。

6.40. Perl-5.24.1

Perl パッケージは Perl 言語 (Practical Extraction and Report Language) を提供します。

概算ビルド時間: 6.2 SBU
必要ディスク容量: 245 MB

6.40.1. Perl のインストール

Perl の設定ファイルが /etc/hosts ファイルを参照するので、まずはこのファイルを生成します。 このファイルはテストスイートを実行する際にも利用されます。

```
echo "127.0.0.1 localhost $(hostname)" > /etc/hosts
```

ここでビルドするバージョンの Perl は Compress::Raw::Zlib モジュールと Compress::Raw::Bzip2 モジュールをビルドします。 デフォルトではビルドの際にそれらのソースを内部的にコピーします。 以下のコマンドは、既にインストールされているライブラリを用いるようにします。

```
export BUILD_ZLIB=False
export BUILD_BZIP2=0
```

Perl のビルド設定を完全に制御したい場合は、以下のコマンドから「-des」オプションを取り除くことで手作業により操作を進めます。 Perl が自動的に判別するデフォルト設定に従うので良いのであれば、以下のコマンドにより Perl をコンパイルするための準備をします。

```
sh Configure -des -Dprefix=/usr                \
                  -Dvendorprefix=/usr          \
                  -Dman1dir=/usr/share/man/man1 \
                  -Dman3dir=/usr/share/man/man3 \
                  -Dpager="/usr/bin/less -isR"  \
                  -Duseshrplib
```

configure オプションの意味:

-Dvendorprefix=/usr
このオプションは各種の perl モジュールをどこにインストールするかを指定します。

-Dpager="/usr/bin/less -isR"
このオプションは more プログラムでなく less プログラムが利用されるようにします。

-Dman1dir=/usr/share/man/man1 -Dman3dir=/usr/share/man/man3
まだ Groff をインストールしていないので Configure スクリプトが Perl の man ページを必要としないと判断してしまいます。 このオプションを指定することによりその判断を正します。

-Duseshrplib
Perl モジュールの中で必要とされる共有ライブラリ libperl をビルドします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。(約 2.5 SBU)

```
make -k test
```

注記

zlib を利用しているテストの中には失敗するものが出てきます。 これは同時配布される zlib ではなくシステムにインストール済の zlib を利用することが原因です。

パッケージはインストールしクリーンアップします。

```
make install
unset BUILD_ZLIB BUILD_BZIP2
```

6.40.2. Perl の構成

インストールプログラム:	c2ph, corelist, cpan, enc2xs, encguess, h2ph, h2xs, instmodsh, json_pp, libnetcfg, perl, perl5.24.1 (perl へのハードリンク), perlbug, perldoc, perlivp, perlthanks (perlbug へのハードリンク), piconv, pl2pm, pod2html, pod2man, pod2text, pod2usage, podchecker, podselect, prove, pstruct (hard c2ph へのハードリンク), ptar, ptardiff, ptargrep, shasum, splain, xsubpp, zipdetails
インストールライブラリ:	ここでは列記できないほどの数多くのライブラリ
インストールディレクトリ:	/usr/lib/perl5

概略説明

c2ph	cc -g -S によって生成されるような C 言語構造体をダンプします。
corelist	Module::CoreList に対するコマンドラインフロントエンド。
cpan	コマンドラインから CPAN (Comprehensive Perl Archive Network) との通信を行います。
enc2xs	Unicode キャラクターマッピングまたは Tcl エンコーディングファイルから、Perl の Encode 拡張モジュールを構築します。
encguess	複数ファイルのエンコーディングを調査します。
h2ph	C 言語のヘッダーファイル .hを Perl のヘッダーファイル .ph に変換します。
h2xs	C 言語のヘッダーファイル .h を Perl 拡張 (Perl extension) に変換します。
instmodsh	インストールされている Perl モジュールを調査するシェルスクリプト。 インストールされたモジュールから tarball を作ることもできます。
json_pp	特定の入出力フォーマット間でデータを変換します。
libnetcfg	Perl モジュール libnet の設定に利用します。
perl	C 言語、sed、awk、sh の持つ機能を寄せ集めて出来上がった言語。
perl5.24.1	perl へのハードリンク。
perlbug	Perl およびそのモジュールに関するバグ報告を生成して、電子メールを送信します。
perldoc	pod フォーマットのドキュメントを表示します。 pod フォーマットは Perl のインストールツリーあるいは Perl スクリプト内に埋め込まれています。
perlivp	Perl Installation Verification Procedure のこと。 Perl とライブラリが正しくインストールできているかを調べるものです。
perlthanks	感謝のメッセージ (Thank you messages) を電子メールで Perl 開発者に送信します。
piconv	キャラクターエンコーディングを変換する iconv の Perl バージョン。
pl2pm	Perl4 の .pl ファイルを Perl5 の .pm モジュールファイルへの変換を行うツール。
pod2html	pod フォーマットから HTML フォーマットに変換します。
pod2man	pod データを *roff の入力ファイル形式に変換します。
pod2text	pod データをアスキーテキスト形式に変換します。
pod2usage	ファイル内に埋め込まれた pod ドキュメントから使用方法の記述部分を表示します。
podchecker	pod 形式の文書ファイルに対して文法をチェックします。
podselect	pod ドキュメントに対して指定したセクションを表示します。
prove	Test::Harness モジュールのテストを行うコマンドラインツール。
pstruct	cc -g -S によって生成されるような C 言語構造体をダンプします。
ptar	Perl で書かれた tar 相当のプログラム。
ptardiff	アーカイブの抽出前後を比較する Perl プログラム。
ptargrep	tar アーカイブ内のファイルに対してパターンマッチングを適用するための Perl プログラム。
shasum	SHA チェックサム値を表示またはチェックします。
splain	Perl スクリプトの警告エラーの診断結果を詳細 (verbose) に出力するために利用します。
xsubpp	Perl の XS コードを C 言語コードに変換します。
zipdetails	Zip ファイルの内部構造に関する情報を出力します。

6.41. XML::Parser-2.44

XML::Parser モジュールは James Clark 氏による XML パーサー Expat への Perl インターフェースです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 2.0 MB

6.41.1. XML::Parser のインストール

XML::Parser をコンパイルするための準備をします。

```
perl Makefile.PL
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make test
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.41.2. XML::Parser の構成

インストールモジュール: Expat.so

概略説明

Expat Perl Expat インターフェースを提供します。

6.42. Intltool-0.51.0

Intltool パッケージは、プログラムソースファイルから翻訳対象の文字列を抽出するために利用する国際化ツールです。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 1.5 MB

6.42.1. Intltool のインストール

perl-5.22 以降にて発生する警告メッセージを修正します。

```
sed -i 's:\\\${:\\\$\\{:' intltool-update.in
```

Intltool をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
install -v -Dm644 doc/I18N-HOWTO /usr/share/doc/intltool-0.51.0/I18N-HOWTO
```

6.42.2. Intltool の構成

インストールプログラム: intltool-extract, intltool-merge, intltool-prepare, intltool-update, intltoolize
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/intltool-0.51.0, /usr/share/intltool

概略説明

intltoolize	パッケージに対して intltool を利用できるようにします。
intltool-extract	gettext が読み込むことの出来るヘッダーファイルを生成します。
intltool-merge	翻訳された文字列を様々な種類のファイルにマージします。
intltool-prepare	pot ファイルを更新し、翻訳ファイルにマージします。
intltool-update	po テンプレートファイルを更新し、翻訳ファイルにマージします。

6.43. Autoconf-2.69

Autoconf パッケージは、ソースコードを自動的に設定するシェルスクリプトの生成を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下（テスト込みで約 3.5 SBU）
必要ディスク容量: 17.5 MB

6.43.1. Autoconf のインストール

Autoconf をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

このテストはおよそ 3.5 SBU ほど要します。 テストの中において Automake を利用するものはスキップされます。 すべてのテストを網羅したいなら、Automake をインストールした後に、再度テストを実行することが必要です。 なお libtool-2.4.3 以降では2つのテストが失敗します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.43.2. Autoconf の構成

インストールプログラム: autoconf, autoheader, autom4te, autoreconf, autoscan, autoupdate, ifnames
インストールディレクトリ: /usr/share/autoconf

概略説明

autoconf ソースコードを提供するソフトウェアパッケージを自動的に設定する（configure する）シェルスクリプトを生成します。 これにより数多くの Unix 互換システムへの適用を可能とします。 生成される設定 (configure) スクリプトは独立して動作します。 つまりこれを実行するにあたっては autoconf プログラムを必要としません。

autoheader C言語の #define 文を configure が利用するためのテンプレートファイルを生成するツール。

autom4te M4 マクロプロセッサーに対するラッパー。

autoreconf autoconf と automake のテンプレートファイルが変更された時に、自動的に autoconf、autoheader、aclocal、automake、gettextize、libtoolize を無駄なく適正な順で実行します。

autoscan ソフトウェアパッケージに対する configure.in ファイルの生成をサポートします。 ディレクトリツリー内のソースファイルを調査して、共通的な可搬性に関わる問題を見出します。 そして configure.scan ファイルを生成して、そのパッケージの configure.in ファイルの雛形として提供します。

autoupdate configure.in ファイルにおいて、かつての古い autoconf マクロが利用されている場合に、それを新しいマクロに変更します。

ifnames ソフトウェアパッケージにおける configure.in ファイルの記述作成をサポートします。 これはそのパッケージが利用する C プリプロセッサーの条件ディレクティブの識別子を出力します。 可搬性を考慮した構築ができている場合は、本プログラムが configure スクリプトにおいて何をチェックするべきかを決定してくれます。 また autoscan によって生成された configure.in ファイルでの過不足を調整する働きもします。

6.44. Automake-1.15

Automake パッケージは Autoconf が利用する Makefile などを生成するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下（テスト込みで約 7.8 SBU）
必要ディスク容量: 110 MB

6.44.1. Automake のインストール

perl-5.22 以降にて発生する警告メッセージを修正します。

```
sed -i 's:/\\\${:/\\\$\\{:' bin/automake.in
```

Automake をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --docdir=/usr/share/doc/automake-1.15
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストの中に flex ライブラリへの誤ったバージョンへのリンクがなされているものがいくつかあります。 ここでは一時的にこの問題を解消します。 また make のオプションとして -j4 を加えることで、テスト処理を早めます。 たとえただ一つのプロセッサーしか持たないシステムであっても、個々のテストにて内部遅延があるためです。 テストは以下を実行します。

```
sed -i "s:./configure:LEXLIB=/usr/lib/libfl.a &:" t/lex-{clean,depend}-cxx.sh
make -j4 check
```

テストが失敗するものが3つあります。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.44.2. Automake の構成

インストールプログラム: aclocal, aclocal-1.15 (aclocal へのハードリンク), automake, automake-1.15 (automake へのハードリンク)
インストールディレクトリ: /usr/share/aclocal-1.15, /usr/share/automake-1.15, /usr/share/doc/automake-1.15

概略説明

aclocal — configure.in ファイルの内容に基づいて aclocal.m4 ファイルを生成します。

aclocal-1.15 — aclocal へのハードリンク。

automake — Makefile.am ファイルから Makefile.in ファイルを自動生成するツール。 パッケージ内のすべての Makefile.in ファイルを作るには、このプログラムをトップディレクトリから実行します。 configure.in ファイルを調べて、適切な Makefile.am ファイルを検索します。 そして対応する Makefile.in ファイルを生成します。

automake-1.15 — automake へのハードリンク。

6.45. Xz-5.2.3

Xz パッケージは、ファイルの圧縮、伸張（解凍）を行うプログラムを提供します。 これは lzma フォーマットおよび新しい xz 圧縮フォーマットを取り扱います。 xz コマンドによりテキストファイルを圧縮すると、従来の gzip コマンドや bzip2 コマンドに比べて、高い圧縮率を実現できます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 15 MB

6.45.1. Xz のインストール

Xz をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/xz-5.2.3
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。 重要なファイルはすべて適切なディレクトリに配置します。

```
make install
mv -v   /usr/bin/{lzma,unlzma,lzcat,xz,unxz,xzcat} /bin
mv -v /usr/lib/liblzma.so.* /lib
ln -svf ../../lib/$(readlink /usr/lib/liblzma.so) /usr/lib/liblzma.so
```

6.45.2. Xz の構成

インストールプログラム: lzcat (xz へのリンク), lzcmp (xzdiff へのリンク), lzdiff (xzdiff へのリンク), lzegrep (xzgrep へのリンク), lzfgrep (xzgrep へのリンク), lzgrep (xzgrep へのリンク), lzless (xzless へのリンク), lzma (xz へのリンク), lzmadec, lzmainfo, lzmore (xzmore へのリンク), unlzma (xz へのリンク), unxz (xz へのリンク), xz, xzcat (xz へのリンク), xzcmp (xzdiff へのリンク), xzdec, xzdiff, xzegrep (xzgrep へのリンク), xzfgrep (xzgrep へのリンク), xzgrep, xzless, xzmore
インストールライブラリ: liblzma.so
インストールディレクトリ: /usr/include/lzma, /usr/share/doc/xz-5.2.3

概略説明

lzcat ファイルを伸張（解凍）し標準出力へ出力します。
lzcmp LZMA 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
lzdiff LZMA 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
lzegrep LZMA 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
lzfgrep LZMA 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
lzgrep LZMA 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
lzless LZMA 圧縮されたファイルに対して less を実行します。
lzma LZMA フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
lzmadec LZMA 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。
lzmainfo LZMA 圧縮されたファイルのヘッダーに保持されている情報を表示します。
lzmore LZMA 圧縮されたファイルに対して more を実行します。
unlzma LZMA フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
unxz XZ フォーマットされたファイルを伸張（解凍）します。
xz XZ フォーマットによりファイルの圧縮と伸張（解凍）を行います。
xzcat ファイルの伸張（解凍）を行い標準出力へ出力します。

xzcmp　　XZ 圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。

xzdec　　XZ 圧縮されたファイルを高速に伸張（解凍）するコンパクトなプログラムです。

xzdiff　　XZ 圧縮されたファイルに対して diff を実行します。

xzegrep　　XZ 圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。

xzfgrep　　XZ 圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。

xzgrep　　XZ 圧縮されたファイルに対して grep を実行します。

xzless　　XZ 圧縮されたファイルに対して less を実行します。

xzmore　　XZ 圧縮されたファイルに対して more を実行します。

liblzma　　Lempel-Ziv-Markov のチェーンアルゴリズムを利用し、損失なくブロックソートによりデータ圧縮を行う機能を提供するライブラリです。

6.46. Kmod-23

Kmod パッケージは、カーネルモジュールをロードするためのライブラリやユーティリティーを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 10.3 MB

6.46.1. Kmod のインストール

Kmod をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr          \
            --bindir=/bin          \
            --sysconfdir=/etc      \
            --with-rootlibdir=/lib \
            --with-xz              \
            --with-zlib
```

configure オプションの意味:

--with-xz, --with-zlib
これらのオプションは、Kmod が圧縮されたカーネルモジュールを取り扱えるようにするものです。

--with-rootlibdir=/lib
このオプションは、他のライブラリに関連するファイルが適切なディレクトリに配置されるようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

本パッケージにあるテストスイートは、LFS の chroot 環境下にて動作させることができません。 最低でも git が必要であり、git リポジトリ配下でテストしないと失敗するものがあります。

パッケージインストールし、Module-Init-Tools パッケージとの互換性を保つためにシンボリックリンクを生成します。 Module-Init-Tools パッケージは、これまで Linux カーネルモジュールを取り扱っていたものです。

```
make install

for target in depmod insmod lsmod modinfo modprobe rmmod; do
  ln -sfv ../bin/kmod /sbin/$target
done

ln -sfv kmod /bin/lsmod
```

6.46.2. Kmod の構成

インストールプログラム: depmod (kmod へのリンク), insmod (kmod へのリンク), kmod, lsmod (kmod へのリンク), modinfo (kmod へのリンク), modprobe (kmod へのリンク), rmmod (kmod へのリンク)
インストールライブラリ: libkmod.so

概略説明

depmod 存在しているモジュール内に含まれるシンボル名に基づいて、モジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) を生成します。 これは modprobe が、必要なモジュールを自動的にロードするために利用します。
insmod 稼動中のカーネルに対してロード可能なモジュールをインストールします。
kmod カーネルモジュールのロード、アンロードを行います。
lsmod その時点でロードされているモジュールを一覧表示します。
modinfo カーネルモジュールに関連付いたオブジェクトファイルを調べて、出来る限りの情報を表示します。
modprobe depmod によってモジュールの依存関係を記述したファイル (dependency file) が生成されます。 これを使って関連するモジュールを自動的にロードします。
rmmod 稼動中のカーネルからモジュールをアンロードします。

libkmod　このライブラリは、カーネルモジュールのロード、アンロードを行う他のプログラムが利用します。

6.47. Gettext-0.19.8.1

Gettext パッケージは国際化を行うユーティリティを提供します。 各種プログラムに対して NLS (Native Language Support) を含めてコンパイルすることができます。 つまり各言語による出力メッセージが得られることになります。

概算ビルド時間: 3.6 SBU
必要ディスク容量: 199 MB

6.47.1. Gettext のインストール

Gettext をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr    \
            --disable-static \
            --docdir=/usr/share/doc/gettext-0.19.8.1
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするなら (3 SBU 程度の処理時間を要しますが) 以下を実行します。

```
make check
```

依存パッケージが存在していないために 9つのテストは失敗します。

パッケージをインストールします。

```
make install
chmod -v 0755 /usr/lib/preloadable_libintl.so
```

6.47.2. Gettext の構成

インストールプログラム: autopoint, envsubst, gettext, gettext.sh, gettextize, msgattrib, msgcat, msgcmp, msgcomm, msgconv, msgen, msgexec, msgfilter, msgfmt, msggrep, msginit, msgmerge, msgunfmt, msguniq, ngettext, recode-sr-latin, xgettext
インストールライブラリ: libasprintf.so, libgettextlib.so, libgettextpo.so, libgettextsrc.so, preloadable_libintl.so
インストールディレクトリ: /usr/lib/gettext, /usr/share/doc/gettext-0.19.8.1, /usr/share/gettext

概略説明

autopoint — Gettext 標準のインフラストラクチャーファイル (infrastructure file) をソースパッケージ内にコピーします。
envsubst — 環境変数をシェル書式の文字列として変換します。
gettext — メッセージカタログ内の翻訳文を参照し、メッセージをユーザーの利用言語に変換します。
gettext.sh — 主に gettext におけるシェル関数ライブラリとして機能します。
gettextize — パッケージの国際化対応を始めるにあたり、標準的な Gettext 関連ファイルを、指定されたパッケージのトップディレクトリにコピーします。
msgattrib — 翻訳カタログ内のメッセージの属性に応じて、そのメッセージを抽出します。 またメッセージの属性を操作します。
msgcat — 指定された .po ファイルを連結します。
msgcmp — 二つの .po ファイルを比較して、同一の msgid による文字定義が両者に含まれているかどうかをチェックします。
msgcomm — 指定された .po ファイルにて共通のメッセージを検索します。
msgconv — 翻訳カタログを別のキャラクターエンコーディングに変換します。
msgen — 英語用の翻訳カタログを生成します。
msgexec — 翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してコマンドを適用します。
msgfilter — 翻訳カタログ内の翻訳文すべてに対してフィルター処理を適用します。
msgfmt — 翻訳カタログからバイナリメッセージカタログを生成します。

msggrep	指定された検索パターンに合致する、あるいは指定されたソースファイルに属する翻訳カタログの全メッセージを出力します。
msginit	新規に .po ファイルを生成します。 その時にはユーザーの環境設定に基づいてメタ情報を初期化します。
msgmerge	二つの翻訳ファイルを一つにまとめます。
msgunfmt	バイナリメッセージカタログを翻訳テキストに逆コンパイルします。
msguniq	翻訳カタログ中に重複した翻訳がある場合にこれを統一します。
ngettext	出力メッセージをユーザーの利用言語に変換します。 特に複数形のメッセージを取り扱います。
recode-sr-latin	セルビア語のテキストに対し、キリル文字からラテン文字にコード変換します。
xgettext	指定されたソースファイルから、翻訳対象となるメッセージ行を抽出して、翻訳テンプレートとして生成します。
libasprintf	autosprintf クラスを定義します。 これは C++ プログラムにて利用できる C 言語書式の出力ルーチンを生成するものです。 <string> 文字列と <iostream> ストリームを利用します。
libgettextlib	さまざまな Gettext プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
libgettextpo	.po ファイルの出力に特化したプログラムを構築する際に利用します。 Gettext が提供する標準的なアプリケーション（msgcomm、msgcmp、msgattrib、msgen）などでは処理出来ないものがある場合に、このライブラリを利用します。
libgettextsrc	さまざまな Gettext プログラムが利用している共通的ルーチンを提供するプライベートライブラリです。 これは一般的な利用を想定したものではありません。
preloadable_libintl	LD_PRELOAD が利用するライブラリ。 翻訳されていないメッセージを収集（log）する libintl をサポートします。

6.48. Procps-ng-3.3.12

Procps-ng パッケージはプロセス監視を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 14 MB

6.48.1. Procps-ng のインストール

procps-ng をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr                            \
            --exec-prefix=                           \
            --libdir=/usr/lib                        \
            --docdir=/usr/share/doc/procps-ng-3.3.12 \
            --disable-static                         \
            --disable-kill
```

configure オプションの意味

--disable-kill
本スイッチは kill コマンドをビルドしないようにします。 このコマンドは util-linux パッケージにてインストールされます。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

LFS においてテストスイートを実行するには多少の修正が必要です。 tty デバイスを利用しないスクリプトが1つ失敗するため、これを除外することにします。 テストスイートを実行するために、以下のコマンドを実行します。

```
sed -i -r 's|(pmap_initname)\\\$|\1|' testsuite/pmap.test/pmap.exp
make check
```

ps に関するテストが1つ失敗します。 しかしこれは第6章をすべて終えてから実行すれば成功します。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

/usr がマウントされていない場合でも重要なライブラリが識別されるように、それらの収容ディレクトリを移動させます。

```
mv -v /usr/lib/libprocps.so.* /lib
ln -sfv ../../lib/$(readlink /usr/lib/libprocps.so) /usr/lib/libprocps.so
```

6.48.2. Procps-ng の構成

インストールプログラム: free, pgrep, pidof, pkill, pmap, ps, pwdx, slabtop, sysctl, tload, top, uptime, vmstat, w, watch
インストールライブラリ: libprocps.so
インストールディレクトリ: /usr/include/proc, /usr/share/doc/procps-ng-3.3.12

概略説明

free 物理メモリ、スワップメモリの双方において、メモリの使用量、未使用量を表示します。
pgrep プロセスの名前などの属性によりプロセスを調べます。
pidof 指定されたプログラムの PID を表示します。
pkill プロセスの名前などの属性によりプロセスに対してシグナルを送信します。
pmap 指定されたプロセスのメモリマップを表示します。
ps 現在実行中のプロセスを一覧表示します。
pwdx プロセスが実行されているカレントディレクトリを表示します。
slabtop リアルタイムにカーネルのスラブキャッシュ（slab cache）情報を詳細に示します。

sysctl	システム稼動中にカーネル設定を修正します。
tload	システムの負荷平均（load average）をグラフ化して表示します。
top	CPU をより多く利用しているプロセスの一覧を表示します。 これはリアルタイムにプロセッサーの動作状況を逐次表示します。
uptime	システムの稼動時間、ログインユーザー数、システム負荷平均（load average）を表示します。
vmstat	仮想メモリの統計情報を表示します。 そこではプロセス、メモリ、ページング、ブロック入出力（Input/Output; IO)、トラップ、CPU 使用状況を表示します。
w	どのユーザーがログインしていて、どこから、そしていつからログインしているかを表示します。
watch	指定されたコマンドを繰り返し実行します。 そしてその出力結果の先頭の一画面分を表示します。 出力結果が時間の経過とともにどのように変わるかを確認することができます。
libprocps	本パッケージのほとんどのプログラムが利用している関数を提供します。

6.49. E2fsprogs-1.43.3

E2fsprogs パッケージは ext2 ファイルシステムを扱うユーティリティを提供します。これは同時に ext3、ext4 ジャーナリングファイルシステムもサポートします。

概算ビルド時間: 2.1 SBU
必要ディスク容量: 54 MB

6.49.1. E2fsprogs のインストール

E2fsprogs パッケージは、ソースディレクトリ内にサブディレクトリを作ってビルドすることが推奨されています。

```
mkdir -v build
cd build
```

E2fsprogs をコンパイルするための準備をします。

```
LIBS=-L/tools/lib                    \
CFLAGS=-I/tools/include              \
PKG_CONFIG_PATH=/tools/lib/pkgconfig \
../configure --prefix=/usr           \
             --bindir=/bin           \
             --with-root-prefix=""   \
             --enable-elf-shlibs     \
             --disable-libblkid      \
             --disable-libuuid       \
             --disable-uuidd         \
             --disable-fsck
```

環境変数と configure オプションの意味:

PKG_CONFIG_PATH, LIBS, CFLAGS
これらのオプションは、既にビルドした 5.33.「Util-linux-2.29.1」 パッケージを使って E2fsprogs をビルドできるようにするものです。

--with-root-prefix="" and *--bindir=/bin*
e2fsck などのプログラムは、極めて重要なものです。 例えば /usr ディレクトリがマウントされていない時であっても、そういったプログラムは動作しなければなりません。 それらは /lib ディレクトリや /sbin ディレクトリに置かれるべきものです。 もしこのオプションの指定がなかったら、プログラムが /usr ディレクトリにインストールされてしまいます。

--enable-elf-shlibs
このオプションは、本パッケージ内のプログラムが利用する共有ライブラリを生成します。

*--disable-**
このオプションは libuuid ライブラリ、libblkid ライブラリ、uuidd デーモン、fsck ラッパーをいずれもビルドせずインストールしないようにします。 これらは Util-Linux パッケージによって、より最新のものがインストールされています。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

テストスイートを実行するにはまずライブラリへのリンクを作成する必要があります。 テストプログラムが参照するライブラリを /tools/lib 内のライブラリとするためです。 そしてコンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
ln -sfv /tools/lib/lib{blk,uu}id.so.1 lib
make LD_LIBRARY_PATH=/tools/lib check
```

E2fsprogs にて行われるテストの中には 256 MB のメモリ割り当てを行うものがあります。 この容量を確保できるだけの RAM がない場合は、十分なスワップ領域が利用可能であることを確認してください。 スワップ領域の生成と有効化については 2.5.「ファイルシステムの生成」と 2.7.「新しいパーティションのマウント」を参照してください。

実行モジュール、ドキュメント、共有ライブラリをインストールします。

```
make install
```

スタティックライブラリとヘッダーファイルをインストールします。

```
make install-libs
```

スタティックライブラリへの書き込みを可能とします。 これは後にデバッグシンボルを取り除くために必要となります。

```
chmod -v u+w /usr/lib/{libcom_err,libe2p,libext2fs,libss}.a
```

本パッケージは gzip 圧縮された.info ファイルをインストールしますが、共通的な dir を更新しません。 そこで以下のコマンドにより gzip ファイルを解凍した上で dir ファイルを更新します。

```
gunzip -v /usr/share/info/libext2fs.info.gz
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/libext2fs.info
```

必要なら、以下のコマンドを実行して追加のドキュメントをインストールします。

```
makeinfo -o      doc/com_err.info ../lib/et/com_err.texinfo
install -v -m644 doc/com_err.info /usr/share/info
install-info --dir-file=/usr/share/info/dir /usr/share/info/com_err.info
```

6.49.2. E2fsprogs の構成

インストールプログラム:	badblocks, chattr, compile_et, debugfs, dumpe2fs,e2freefrag, e2fsck, e2image, e2label, e2undo, e4defrag, filefrag, fsck.ext2, fsck.ext3, fsck.ext4, fsck.ext4dev, logsave, lsattr, mk_cmds, mke2fs, mkfs.ext2, mkfs.ext3, mkfs.ext4, mkfs.ext4dev, mklost+found, resize2fs, tune2fs
インストールライブラリ:	libcom_err.so, libe2p.so, libext2fs.so, libss.so
インストールディレクトリ:	/usr/include/e2p, /usr/include/et, /usr/include/ext2fs, /usr/include/ss, /usr/share/et, /usr/share/ss

概略説明

badblocks	デバイス（通常はディスクパーティション）の不良ブロックを検索します。
chattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を変更します。 ext2 ファイルシステムのジャーナリング版である ext3 ファイルシステムにおいても変更を行います。
compile_et	エラーテーブルコンパイラー。 これはエラーコード名とメッセージの一覧を、com_err ライブラリを利用する C ソースコードとして変換するものです。
debugfs	ファイルシステムデバッガー。 これは ext2 ファイルシステムの状態を調査し変更することができます。
dumpe2fs	指定されたデバイス上にあるファイルシステムについて、スーパーブロックの情報とブロックグループの情報を表示します。
e2freefrag	フリースペースのフラグメント情報を表示します。
e2fsck	ext2 ファイルシステムと ext3 ファイルシステムをチェックし、必要なら修復を行うことができます。
e2image	ext2 ファイルシステムの重要なデータをファイルに保存します。
e2label	指定されたデバイス上にある ext2 ファイルシステムのラベルを表示または変更します。
e2undo	デバイス上にある ext2/ext3/ext4 ファイルシステムの undo ログを再実行します。 これは e2fsprogs プログラムが処理に失敗した際に undo を行うこともできます。
e4defrag	ext4 ファイルシステムにたいするオンラインのデフラグプログラム。
filefrag	特定のファイルがどのようにデフラグ化しているかを表示します。
fsck.ext2	デフォルトでは ext2 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext3	デフォルトでは ext3 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext4	デフォルトでは ext4 ファイルシステムをチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
fsck.ext4dev	デフォルトでは ext4 ファイルシステムの開発版をチェックします。 これは e2fsck へのハードリンクです。
logsave	コマンドの出力結果をログファイルに保存します。
lsattr	ext2 ファイルシステム上のファイル属性を一覧表示します。

mk_cmds	コマンド名とヘルプメッセージの一覧を、サブシステムライブラリ libss を利用する C ソースコードとして変換するものです。
mke2fs	指定されたデバイス上に ext2 ファイルシステム、または ext3 ファイルシステムを生成します。
mkfs.ext2	デフォルトでは ext2 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mkfs.ext3	デフォルトでは ext3 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mkfs.ext4	デフォルトでは ext4 ファイルシステムを生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mkfs.ext4dev	デフォルトでは ext4 ファイルシステム開発版を生成します。 これは mke2fs へのハードリンクです。
mklost+found	ext2 ファイルシステム上に lost+found ディレクトリを作成します。 これはそのディレクトリ内にあらかじめディスクブロックを割り当てておくことにより e2fsck コマンド処理を軽減させます。
resize2fs	ext2 ファイルシステムを拡張または縮小するために利用します。
tune2fs	ext2 ファイルシステム上にて調整可能なシステムパラメータを調整します。
libcom_err	共通的なエラー表示ルーチン。
libe2p	以下のコマンド dumpe2fs、chattr、lsattr が利用します。
libext2fs	ユーザーレベルのプログラムが ext2 ファイルシステムを操作可能とするためのルーチンを提供します。
libss	debugfs コマンドが利用します。

6.50. Coreutils-8.26

Coreutils パッケージはシステムの基本的な特性を表示したり設定したりするためのユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 2.6 SBU
必要ディスク容量: 168 MB

6.50.1. Coreutils のインストール

POSIX では Coreutils により生成されるプログラムは、マルチバイトロケールであっても、文字データを正しく取り扱うことを求めています。 以下のパッチは標準に準拠することと、国際化処理に関連するバグを解消することを行います。

```
patch -Np1 -i ../coreutils-8.26-i18n-1.patch
```

注記

このパッチには以前は多くのバグがありました。 新たなバグを発見したら、Coreutils の開発者に報告する前に、このパッチを適用せずにバグが再現するかどうかを確認してください。

Coreutils をコンパイルするための準備をします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 ./configure \
            --prefix=/usr            \
            --enable-no-install-program=kill,uptime
```

configure オプションの意味:

FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1
この環境変数は root ユーザーによりパッケージをビルドできるようにします。

--enable-no-install-program=kill,uptime
指定のプログラムは、後に他のパッケージからインストールするため Coreutils からはインストールしないことを指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1 make
```

テストスイートを実行しない場合は「パッケージをインストールします。」と書かれたところまで読み飛ばしてください。

テストスイートを実行します。 まずは root ユーザーに対するテストを実行します。

```
make NON_ROOT_USERNAME=nobody check-root
```

ここからのテストは nobody ユーザーにより実行します。 ただしいくつかのテストでは、複数のグループに属するユーザーを必要とします。 そのようなテストを確実に実施するために、一時的なグループを作って nobody ユーザーがそれに属するようにします。

```
echo "dummy:x:1000:nobody" >> /etc/group
```

特定のファイルのパーミッションを変更して root ユーザー以外でもコンパイルとテストができるようにします。

```
chown -Rv nobody .
```

テストを実行します。 **su** 環境において PATH に /tools/bin が含まれていることを確認してください。

```
su nobody -s /bin/bash \
          -c "PATH=$PATH make RUN_EXPENSIVE_TESTS=yes check"
```

test-getlogin テストは仮想端末上では失敗します。 しかし X 端末では成功します。

一時的に作成したグループを削除します。

```
sed -i '/dummy/d' /etc/group
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

FHS が規定しているディレクトリにプログラムを移します。

```
mv -v /usr/bin/{cat,chgrp,chmod,chown,cp,date,dd,df,echo} /bin
mv -v /usr/bin/{false,ln,ls,mkdir,mknod,mv,pwd,rm} /bin
mv -v /usr/bin/{rmdir,stty,sync,true,uname} /bin
mv -v /usr/bin/chroot /usr/sbin
mv -v /usr/share/man/man1/chroot.1 /usr/share/man/man8/chroot.8
sed -i s/\"1\"/\"8\"/1 /usr/share/man/man8/chroot.8
```

LFS-ブートスクリプトパッケージにあるスクリプトでは、head、 sleep、 nice に依存しているものがあります。 ブート処理の初期段階においては /usr ディレクトリは認識されないため、上のプログラムはルートパーティションに移す必要があります。

```
mv -v /usr/bin/{head,sleep,nice,test,[} /bin
```

6.50.2. Coreutils の構成

インストールプログラム: [, base32, base64, basename, cat, chcon, chgrp, chmod, chown, chroot, cksum, comm, cp, csplit, cut, date, dd, df, dir, dircolors, dirname, du, echo, env, expand, expr, factor, false, fmt, fold, groups, head, hostid, id, install, join, link, ln, logname, ls, md5sum, mkdir, mkfifo, mknod, mktemp, mv, nice, nl, nohup, nproc, numfmt, od, paste, pathchk, pinky, pr, printenv, printf, ptx, pwd, readlink, realpath, rm, rmdir, runcon, seq, shalsum, sha224sum, sha256sum, sha384sum, sha512sum, shred, shuf, sleep, sort, split, stat, stdbuf, stty, sum, sync, tac, tail, tee, test, timeout, touch, tr, true, truncate, tsort, tty, uname, unexpand, uniq, unlink, users, vdir, wc, who, whoami, yes
インストールライブラリ: libstdbuf.so
インストールディレクトリ: /usr/libexec/coreutils

概略説明

base32 base32 規格（RFC 4648）に従ってデータのエンコード、デコードを行います。

base64 base64 規格（RFC 3548）に従ってデータのエンコード、デコードを行います。

basename ファイル名からパス部分と指定されたサフィックスを取り除きます。

cat 複数ファイルを連結して標準出力へ出力します。

chcon ファイルやディレクトリに対してセキュリティコンテキスト（security context）を変更します。

chgrp ファイルやディレクトリのグループ所有権を変更します。

chmod 指定されたファイルのパーミッションを、指定されたモードに変更します。 モードは、変更内容を表す文字表現か、8進数表現を用いることができます。

chown ファイルやディレクトリの所有者またはグループを変更します。

chroot 指定したディレクトリを / ディレクトリとみなしてコマンドを実行します。

cksum 指定された複数のファイルについて、CRC（Cyclic Redundancy Check; 巡回冗長検査）チェックサム値とバイト数を表示します。

comm ソート済の二つのファイルを比較して、一致しない固有の行と一致する行を三つのカラムに分けて出力します。

cp ファイルをコピーします。

csplit 指定されたファイルを複数の新しいファイルに分割します。 分割は指定されたパターンか行数により行います。 そして分割後のファイルにはバイト数を出力します。

cut 指定されたフィールド位置や文字位置によってテキスト行を部分的に取り出します。

date 指定された書式により現在時刻を表示します。 またはシステム日付を設定します。

dd 指定されたブロックサイズとブロック数によりファイルをコピーします。 変換処理を行うことができます。

df マウントされているすべてのファイルシステムに対して、ディスクの空き容量（使用量）を表示します。 あるいは指定されたファイルを含んだファイルシステムについてのみの情報を表示します。

dir 指定されたディレクトリの内容を一覧表示します。(ls コマンドに同じ。)

dircolors 環境変数 LS_COLOR にセットするべきコマンドを出力します。 これは ls がカラー設定を行う際に利用します。

dirname	ファイル名から、ディレクトリ名以外のサフィックスを取り除きます。
du	カレントディレクトリ、指定ディレクトリ（サブディレクトリを含む)、指定された個々のファイルについて、それらが利用しているディスク使用量を表示します。
echo	指定された文字列を表示します。
env	環境設定を変更してコマンドを実行します。
expand	タブ文字を空白文字に変換します。
expr	表現式を評価します。
factor	指定された整数値すべてに対する素因数（prime factor）を表示します。
false	何も行わず処理に失敗します。これは常に失敗を意味するステータスコードを返して終了します。
fmt	指定されたファイル内にて段落を整形します。
fold	指定されたファイル内の行を折り返します。
groups	ユーザーの所属グループを表示します。
head	指定されたファイルの先頭10行（あるいは指定された行数）を表示します。
hostid	ホスト識別番号（16進数）を表示します。
id	現在のユーザーあるいは指定されたユーザーについて、有効なユーザーID、グループID、所属グループを表示します。
install	ファイルコピーを行います。その際にパーミッションモードを設定し、可能なら所有者やグループも設定します。
join	2つのファイル内にて共通項を持つ行を結合します。
link	指定された名称により、ファイルへのハードリンクを生成します。
ln	ファイルに対するハードリンク、あるいはソフトリンク（シンボリックリンク）を生成します。
logname	現在のユーザーのログイン名を表示します。
ls	指定されたディレクトリ内容を一覧表示します。
md5sum	MD5 (Message Digest 5) チェックサム値を表示、あるいはチェックします。
mkdir	指定された名前のディレクトリを生成します。
mkfifo	指定された名前の FIFO (First-In, First-Out) を生成します。 これは UNIX の用語で ”名前付きパイプ (named pipe)” とも呼ばれます。
mknod	指定された名前のデバイスノードを生成します。 デバイスノードはキャラクター型特殊ファイル (character special file)、ブロック特殊ファイル (block special file)、FIFO です。
mktemp	安全に一時ファイルを生成します。 これはスクリプト内にて利用されます。
mv	ファイルあるいはディレクトリを移動、名称変更します。
nice	スケジューリング優先度を変更してプログラムを実行します。
nl	指定されたファイル内の行を数えます。
nohup	ハングアップに関係なくコマンドを実行します。 その出力はログファイルにリダイレクトされます。
nproc	プロセスが利用可能なプロセスユニット (processing unit) の数を表示します。
numfmt	記述された文字列と数値を互いに変換します。
od	ファイル内容を 8進数または他の書式でダンプします。
paste	指定された複数ファイルを結合します。 その際には各行を順に並べて結合し、その間をタブ文字で区切ります。
pathchk	ファイル名が有効で移植可能であるかをチェックします。
pinky	軽量な finger クライアント。 指定されたユーザーに関する情報を表示します。
pr	ファイルを印刷するために、ページ番号を振りカラム整形を行います。
printenv	環境変数の内容を表示します。
printf	指定された引数を指定された書式で表示します。 C 言語の printf 関数に似ています。
ptx	指定されたファイル内のキーワードに対して整列済インデックス (permuted index) を生成します。
pwd	現在の作業ディレクトリ名を表示します。
readlink	指定されたシンボリックリンクの対象を表示します。
realpath	解析されたパスを表示します。

rm	ファイルまたはディレクトリを削除します。
rmdir	ディレクトリが空である時にそのディレクトリを削除します。
runcon	指定されたセキュリティコンテキストでコマンドを実行します。
seq	指定された範囲と増分に従って数値の並びを表示します。
shalsum	160 ビットの SHA1 (Secure Hash Algorithm 1) チェックサム値を表示またはチェックします。
sha224sum	224 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha256sum	256 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha384sum	384 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
sha512sum	512 ビットの SHA1 チェックサム値を表示またはチェックします。
shred	指定されたファイルに対して、複雑なパターンデータを繰り返し上書きすることで、データ復旧を困難なものにします。
shuf	テキスト行を入れ替えます。
sleep	指定時間だけ停止します。
sort	指定されたファイル内の行をソートします。
split	指定されたファイルを、バイト数または行数を指定して分割します。
stat	ファイルやファイルシステムのステータスを表示します。
stdbuf	本コマンド実行により、標準ストリームに対するバッファリング操作を変更します。
stty	端末回線の設定や表示を行います。
sum	指定されたファイルのチェックサムやブロック数を表示します。
sync	ファイルシステムのバッファを消去します。 変更のあったブロックは強制的にディスクに書き出し、スーパーブロック (super block) を更新します。
tac	指定されたファイルを逆順にして連結します。
tail	指定されたファイルの最終の10行（あるいは指定された行数）を表示します。
tee	標準入力を読み込んで、標準出力と指定ファイルの双方に出力します。
test	ファイルタイプの比較やチェックを行います。
timeout	指定時間内だけコマンドを実行します。
touch	ファイルのタイムスタンプを更新します。 そのファイルに対するアクセス時刻、更新時刻を現在時刻にするものです。 そのファイルが存在しなかった場合はゼロバイトのファイルを新規生成します。
tr	標準入力から読み込んだ文字列に対して、変換、圧縮、削除を行います。
true	何も行わず処理に成功します。これは常に成功を意味するステータスコードを返して終了します。
truncate	ファイルを指定されたサイズに縮小または拡張します。
tsort	トポロジカルソート (topological sort) を行います。 指定されたファイルの部分的な順序に従って並び替えリストを出力します。
tty	標準入力に接続された端末のファイル名を表示します。
uname	システム情報を表示します。
unexpand	空白文字をタブ文字に変換します。
uniq	連続する同一行を一行のみ残して削除します。
unlink	指定されたファイルを削除します。
users	現在ログインしているユーザー名を表示します。
vdir	ls -l と同じ。
wc	指定されたファイルの行数、単語数、バイト数を表示します。 複数ファイルが指定された場合はこれに加えて合計も出力します。
who	誰がログインしているかを表示します。
whoami	現在有効なユーザーIDに関連づいているユーザー名を表示します。
yes	処理が停止されるまで繰り返して「y」または指定文字を出力します。
libstdbuf	stdbuf が利用するライブラリ。

6.51. Diffutils-3.5

Diffutils パッケージはファイルやディレクトリの差分を表示するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 30 MB

6.51.1. Diffutils のインストール

ロケールファイルをインストールするように修正します。

```
sed -i 's:= @mkdir_p@:= /bin/mkdir -p:' po/Makefile.in.in
```

Diffutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

test-update-copyright.sh は失敗しますが無視して構いません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.51.2. Diffutils の構成

インストールプログラム: cmp, diff, diff3, sdiff

概略説明

cmp 二つのファイルを比較して、どこが異なるか、あるいは何バイト異なるかを示します。
diff 二つのファイルまたは二つのディレクトリを比較して、ファイル内のどの行に違いがあるかを示します。
diff3 三つのファイルの各行を比較します。
sdiff 二つのファイルを結合して対話的に結果を出力します。

6.52. Gawk-4.1.4

Gawk パッケージはテキストファイルを操作するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.3 SBU
必要ディスク容量: 35 MB

6.52.1. Gawk のインストール

Gawk をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v /usr/share/doc/gawk-4.1.4
cp    -v doc/{awkforai.txt,*.{eps,pdf,jpg}} /usr/share/doc/gawk-4.1.4
```

6.52.2. Gawk の構成

インストールプログラム: awk (gawk へのリンク), gawk, gawk-4.1.4, igawk
インストールライブラリ: filefuncs.so, fnmatch.so, fork.so, inplace.so, ordchr.so, readdir.so, readfile.so, revoutput.so, revtwoway.so, rwarray.so, testext.so, time.so
インストールディレクトリ: /usr/lib/gawk, /usr/libexec/awk, /usr/share/awk, /usr/share/doc/gawk-4.1.4

概略説明

awk gawk へのリンク。
gawk テキストファイルを操作するプログラム。 これは awk の GNU インプリメンテーションです。
gawk-4.1.4 gawk へのハードリンク。
igawk gawk に対してファイルをインクルードする機能を付与します。

6.53. Findutils-4.6.0

Findutils パッケージはファイル検索を行うプログラムを提供します。 このプログラムはディレクトリツリーを再帰的に検索したり、データベースの生成、保守、検索を行います。（データベースによる検索は再帰的検索に比べて処理速度は速いものですが、データベースが最新のものに更新されていない場合は信頼できない結果となります。）

概算ビルド時間: 1.6 SBU
必要ディスク容量: 48 MB

6.53.1. Findutils のインストール

Findutils をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --localstatedir=/var/lib/locate
```

configure オプションの意味:

--localstatedir
locate データベースの場所を FHS コンプライアンスが定めているディレクトリ /var/lib/locate に変更します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするなら以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

LFS ブートスクリプトパッケージでは、いくつかのスクリプトが find を利用しています。 /usr ディレクトリはブート処理の初めでは認識できないため、このプログラムはルートパーティションに置く必要があります。 同じく updatedb スクリプトは明示的なパスを修正する必要があります。

```
mv -v /usr/bin/find /bin
sed -i 's|find:=${BINDIR}|find:=/bin|' /usr/bin/updatedb
```

6.53.2. Findutils の構成

インストールプログラム: code, find, locate, oldfind, updatedb, xargs

概略説明

code　かつて利用されていたコマンドで locate データベースを生成します。 これは frcode の前身です。

find　指定された条件に合致するファイルを、指定されたディレクトリツリー内から検索します。

locate　ファイル名データベースを検索して、指定された文字列を含むもの、または検索パターンに合致するものを表示します。

oldfind　find の古い版であり、find とは異なるアルゴリズムを用いています。

updatedb　locate データベースを更新します。 これはすべてのファイルシステムを検索します。（検索非対象とする設定がない限りは、マウントされているすべてのファイルシステムを対象とします。）そして検索されたファイル名をデータベースに追加します。

xargs　指定されたコマンドに対してファイル名の一覧を受け渡して実行します。

6.54. Groff-1.22.3

Groff パッケージはテキストを処理して整形するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 82 MB

6.54.1. Groff のインストール

Groff はデフォルトの用紙サイズを設定する環境変数 PAGE を参照します。 米国のユーザーであれば *PAGE=letter* と設定するのが適当です。 その他のユーザーなら *PAGE=A4* とするのが良いかもしれません。 このデフォルト用紙サイズはコンパイルにあたって設定されます。 「A4」なり「letter」なりの値は /etc/papersize ファイルにて設定することも可能です。

Groff をコンパイルするための準備をします。

```
PAGE=<paper_size> ./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.54.2. Groff の構成

インストールプログラム: addftinfo, afmtodit, chem, eqn, eqn2graph, gdiffmk, glilypond, gperl, gpinyin, grap2graph, grn, grodvi, groff, groffer, grog, grolbp, grolj4, gropdf, grops, grotty, hpftodit, indxbib, lkbib, lookbib, mmroff, neqn, nroff, pdfmom, pdfroff, pfbtops, pic, pic2graph, post-grohtml, preconv, pre-grohtml, refer, roff2dvi, roff2html, roff2pdf, roff2ps, roff2text, roff2x, soelim, tbl, tfmtodit, troff
インストールディレクトリ: /usr/lib/groff, /usr/share/doc/groff-1.22.3, /usr/share/groff

概略説明

addftinfo troff のフォントファイルを読み込んで groff システムが利用する付加的なフォントメトリック情報を追加します。

afmtodit groff と grops が利用するフォントファイルを生成します。

chem 化学構造図（chemical structure diagrams）を生成するための Groff プロセッサー。

eqn troff の入力ファイル内に埋め込まれている記述式をコンパイルして troff が解釈できるコマンドとして変換します。

eqn2graph troff の EQN（数式）を、刈り込んだ（crop した）イメージに変換します。

gdiffmk groff、nroff、troff の入力ファイルを比較して、その差異を出力します。

glilypond lilypond 言語で書かれたシートミュージック（sheet music）を groff 言語に変換します。

gperl groff プリプロセッサーであり groff ファイルへの perl コード追加を行います。

gpinyin groff プリプロセッサーであり groff ファイルへの中国語発音 Pinyin 追加を行います。

grap2graph grap ダイアグラムを、刈り込んだ（crop した）ビットマップイメージに変換します。

grn gremlin 図を表すファイルを処理するための groff プリプロセッサー。

grodvi TeX の dvi フォーマットを生成するための groff ドライバープログラム。

groff groff 文書整形システムのためのフロントエンド。 通常は troff プログラムを起動し、指定されたデバイスに適合したポストプロセッサーを呼び出します。

groffer groff ファイルや man ページを X 上や TTY 端末上に表示します。

grog 入力ファイルを読み込んで、印刷時には groff コマンドオプションのどれが必要かを推定します。 コマンドオプションは -e、-man、-me、-mm、-ms、-p、-s のいずれかです。 そしてそのオプションを含んだ groff コマンドを表示します。

grolbp	Canon CAPSL プリンター（LBP-4 または LBP-8 シリーズのレーザープリンター）に対する groff ドライバープログラム。
grolj4	HP LaserJet 4 プリンターにて利用される PCL5 フォーマットの出力を生成する groff のドライバープログラム。
gropdf	GNU troff の出力を PDF に変換します。
grops	GNU troff の出力を PostScript に変換します。
grotty	GNU troff の出力を、タイプライター風のデバイスに適した形式に変換します。
hpftodit	HP のタグ付けが行われたフォントメトリックファイルから、groff -Tlj4 コマンドにて利用されるフォントファイルを生成します。
indxbib	指定されたファイル内に示される参考文献データベース（bibliographic database）に対しての逆引きインデックス（inverted index）を生成します。 これは refer、lookbib、lkbib といったコマンドが利用します。
lkbib	指定されたキーを用いて参考文献データベースを検索し、合致したすべての情報を表示します。
lookbib	（標準入力が端末であれば）標準エラー出力にプロンプトを表示して、標準入力から複数のキーワードを含んだ一行を読み込みます。 そして指定されたファイルにて示される参考文献データベース内に、そのキーワードが含まれるかどうかを検索します。 キーワードが含まれるものを標準出力に出力します。入力がなくなるまでこれを繰り返します。
mmroff	groff 用の単純なプリプロセッサー。
neqn	数式を ASCII（American Standard Code for Information Interchange）形式で出力します。
nroff	groff を利用して nroff コマンドをエミュレートするスクリプト。
pdfmom	groff 関連ラッパー。mom マクロによるファイルから PDF を生成します。
pdfroff	groff を利用して pdf 文書ファイルを生成します。
pfbtops	.pfb フォーマットの PostScript フォントを ASCII フォーマットに変換します。
pic	troff または TeX の入力ファイル内に埋め込まれた図の記述を、troff または TeX が処理できるコマンドの形式に変換します。
pic2graph	PIC ダイアグラムを、刈り込んだ（crop した）イメージに変換します。
post-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
preconv	入力ファイルのエンコーディングを GNU troff が取り扱うものに変換します。
pre-grohtml	GNU troff の出力を HTML に変換します。
refer	ファイル内容を読み込んで、そのコピーを標準出力へ出力します。 ただし引用文を表す .[と .] で囲まれた行、および引用文をどのように処理するかを示したコマンドを意味する .R1 と .R2 で囲まれた行は、コピーの対象としません。
roff2dvi	roff ファイルを DVI フォーマットに変換します。
roff2html	roff ファイルを HTML フォーマットに変換します。
roff2pdf	roff ファイルを PDF フォーマットに変換します。
roff2ps	roff ファイルを ps ファイルに変換します。
roff2text	roff ファイルをテキストファイルに変換します。
roff2x	roff ファイルを他のフォーマットに変換します。
soelim	入力ファイルを読み込んで .so ファイル　の形式で記述されている行を、記述されている ファイルだけに置き換えます。
tbl	troff 入力ファイル内に埋め込まれた表の記述を troff が処理できるコマンドの形式に変換します。
tfmtodit	コマンド groff -Tdvi を使ってフォントファイルを生成します。
troff	Unix の troff コマンドと高い互換性を持ちます。 通常は groff コマンドを用いて本コマンドが起動されます。 groff コマンドは、プリプロセッサー、ポストプロセッサーを、適切な順で適切なオプションをつけて起動します。

6.55. GRUB-2.02~beta3

GRUB パッケージは GRand Unified Bootloader を提供します。

概算ビルド時間: 0.8 SBU
必要ディスク容量: 142 MB

6.55.1. GRUB のインストール

GRUB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr          \
            --sbindir=/sbin        \
            --sysconfdir=/etc      \
            --disable-efiemu       \
            --disable-werror
```

configure オプションの意味

--disable-werror
本オプションは、最新の flex によって警告が出力されても、ビルドを成功させるために指定します。

--disable-efiemu
このオプションは LFS にとって不要な機能やテストプログラムをビルドしないようにします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

GRUB を使ってシステムのブート起動設定を行う方法については 8.4.「GRUB を用いたブートプロセスの設定」で説明しています。

6.55.2. GRUB の構成

インストールプログラム: grub-bios-setup, grub-editenv, grub-file, grub-fstest, grub-glue-efi, grub-install, grub-kbdcomp, grub-macbless, grub-menulst2cfg, grub-mkconfig, grub-mkimage, grub-mklayout, grub-mknetdir, grub-mkpasswd-pbkdf2, grub-mkrelpath, grub-mkrescue, grub-mkstandalone, grub-ofpathname, grub-probe, grub-reboot, grub-render-label, grub-script-check, grub-set-default, grub-sparc64-setup, grub-syslinux2cfg
インストールディレクトリ: /usr/lib/grub, /etc/grub.d, /usr/share/grub, boot/grub (grub-install が初めに起動される時)

概略説明

grub-bios-setup grub-install に対するヘルパープログラム。
grub-editenv 環境ブロック (environment block) を編集するツール。
grub-file Checks if FILE is of the specified type.
grub-fstest ファイルシステムドライバーをデバッグするツール。
grub-glue-efi ia32 および amd64 の EFI イメージを処理し Apple フォーマットに従って結合します。
grub-install 指定したドライブに GRUB をインストールします。
grub-kbdcomp xkb レイアウトを GRUB が認識できる他の書式に変換するスクリプト。
grub-macbless Mac-style bless on HFS or HFS+ files
grub-menulst2cfg GRUB Legacy の `menu.lst`を GRUB 2 にて利用される `grub.cfg` に変換します。
grub-mkconfig GRUB の設定ファイルを生成します。
grub-mkimage GRUB のブートイメージ (bootable image) を生成します。

grub-mklayout	GRUB のキーボードレイアウトファイルを生成します。
grub-mknetdir	GRUB のネットブートディレクトリを生成します。
grub-mkpasswd-pbkdf2	ブートメニューにて利用する、PBKDF2 により暗号化されたパスワードを生成します。
grub-mkrelpath	システムのパスをルートからの相対パスとします。
grub-mkrescue	フロッピーディスクや CDROM/DVD 用の GRUB のブートイメージを生成します。
grub-mkstandalone	スタンドアロンイメージを生成します。
grub-ofpathname	GRUB デバイスのパスを出力するヘルパープログラム。
grub-probe	指定されたパスやデバイスに対するデバイス情報を検証（probe）します。
grub-reboot	デフォルトのブートメニューを設定します。 これは次にブートした時だけ有効なものです。
grub-render-label	Apple Mac に対して Apple .disk_label を提供します。
grub-script-check	GRUB の設定スクリプトにおける文法をチェックします。
grub-set-default	デフォルトのブートメニューを設定します。
grub-sparc64-setup	grub-setup に対するヘルパープログラム。
grub-syslinux2cfg	syslinux の設定ファイルを grub.cfg フォーマットに変換します。

6.56. Less-481

Less パッケージはテキストファイルビューアーを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 3.5 MB

6.56.1. Less のインストール

Less をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --sysconfdir=/etc
```

configure オプションの意味:

--sysconfdir=/etc
本パッケージによって作成されるプログラムが /etc ディレクトリにある設定ファイルを参照するように指示します。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.56.2. Less の構成

インストールプログラム: less, lessecho, lesskey

概略説明

less ファイルビューアーまたはページャー。 指示されたファイルの内容を表示します。 表示中にはスクロール、文字検索、移動が可能です。

lessecho Unix システム上のファイル名において * や ? といったメタ文字 (meta-characters) を展開するために必要となります。

lesskey less におけるキー割り当てを設定するために利用します。

6.57. Gzip-1.8

Gzip パッケージはファイルの圧縮、伸長（解凍）を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 19 MB

6.57.1. Gzip のインストール

Gzip をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

ルートファイルシステム上に置くべきプログラムを移動させます。

```
mv -v /usr/bin/gzip /bin
```

6.57.2. Gzip の構成

インストールプログラム: gunzip, gzexe, gzip, uncompress (gunzip へのハードリンク), zcat, zcmp, zdiff, zegrep, zfgrep, zforce, zgrep, zless, zmore, znew

概略説明

gunzip	gzip により圧縮されたファイルを解凍します。
gzexe	自動解凍形式の実行ファイルを生成します。
gzip	Lempel-Ziv (LZ77) 方式により指定されたファイルを圧縮します。
uncompress	圧縮されたファイルを解凍します。
zcat	gzip により圧縮されたファイルを解凍して標準出力へ出力します。
zcmp	gzip により圧縮されたファイルに対して cmp を実行します。
zdiff	gzip により圧縮されたファイルに対して diff を実行します。
zegrep	gzip により圧縮されたファイルに対して egrep を実行します。
zfgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して fgrep を実行します。
zforce	指定されたファイルが gzip により圧縮されている場合に、強制的に拡張子 .gz を付与します。 こうすることで gzip は再度の圧縮を行わないようになります。 これはファイル転送によってファイル名が切り詰められてしまった場合に活用することができます。
zgrep	gzip により圧縮されたファイルに対して grep を実行します。
zless	gzip により圧縮されたファイルに対して less を実行します。
zmore	gzip により圧縮されたファイルに対して more を実行します。
znew	compress フォーマットの圧縮ファイルを gzip フォーマットのファイルとして再圧縮します。 つまり .Z から .gz への変換を行います。

6.58. IPRoute2-4.9.0

IPRoute2 パッケージは IPV4 ベースの基本的または応用的ネットワーク制御を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 11 MB

6.58.1. IPRoute2 のインストール

本パッケージにて提供している arpd プログラムは LFS では取り扱わない Berkeley DB に依存しています。 したがって arpd プログラムはインストールしません。 ただし arpd プログラムに対応するドキュメントファイルやディレクトリはインストールされてしまいます。 これをインストールしないように、以下のコマンドを実行します。 arpd プログラムを必要とする場合は BLFS ブックの http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/server/databases.html#db に示される Berkeley DB の構築手順に従ってください。

```
sed -i /ARPD/d Makefile
sed -i 's/arpd.8//' man/man8/Makefile
rm -v doc/arpd.sgml
```

http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/iptables.html に必要となるモジュールをここではビルドしないこととします。

```
sed -i 's/m_ipt.o//' tc/Makefile
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

本パッケージには有効なテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make DOCDIR=/usr/share/doc/iproute2-4.9.0 install
```

6.58.2. IPRoute2 の構成

インストールプログラム: bridge, ctstat (lnstat へのリンク), genl, ifcfg, ifstat, ip, lnstat, nstat, routef, routel, rtacct, rtmon, rtpr, rtstat (lnstat へのリンク), ss, tc
インストールディレクトリ: /etc/iproute2, /usr/lib/tc, /usr/share/doc/iproute2-4.9.0,

概略説明

bridge ネットワークブリッジを設定します。

ctstat 接続ステータスの表示ユーティリティ。

genl 汎用的な netlink ユーティリティフロントエンド。

ifcfg ip コマンドに対するシェルスクリプトラッパー。 http://www.skbuff.net/iputils/ にて提供されている iputils パッケージの arping プログラムと rdisk プログラムを利用します。

ifstat インターフェースの統計情報を表示します。 インターフェースによって送受信されたパケット量が示されます。

ip 主となる実行モジュールで、複数の機能性を持ちます。
ip link <デバイス名> はデバイスのステータスを参照し、またステータスの変更を行います。
ip addr はアドレスとその属性を参照し、新しいアドレスの追加、古いアドレスの削除を行います。
ip neighbor は、隣接ルーター (neighbor) の割り当てや属性を参照し、隣接ルーターの項目追加や古いものの削除を行います。
ip rule は、ルーティングポリシー (routing policy) を参照し、変更を行います。
ip route は、ルーティングテーブル (routing table) を参照し、ルーティングルール (routing table rule) を変更します。
ip tunnel は、IP トンネル (IP tunnel) やその属性を参照し、変更を行います。
ip maddr は、マルチキャストアドレス (multicast address) やその属性を参照し、変更を行います。
ip mroute は、マルチキャストルーティング (multicast routing) の設定、変更、削除を行います。
ip monitor は、デバイスの状態、アドレス、ルートを継続的に監視します。

lnstat　Linux のネットワーク統計情報を提供します。 これはかつての rtstat プログラムを汎用的に機能充足を図ったプログラムです。

nstat　ネットワーク統計情報を表示します。

routef　ip route のコンポーネント。 これはルーティングテーブルをクリアします。

routel　ip route のコンポーネント。 これはルーティングテーブルの一覧を表示します。

rtacct　/proc/net/rt_acct の内容を表示します。

rtmon　ルート監視ユーティリティー。

rtpr　ip -o コマンドにより出力される内容を読みやすい形に戻します。

rtstat　ルートステータスの表示ユーティリティー。

ss　netstat コマンドと同じ。 アクティブな接続を表示します。

tc　トラフィック制御プログラム (Traffic Controlling Executable)。 これは QOS (Quality Of Service) と COS (Class Of Service) を実装するプログラムです。
tc qdisc は、キューイング規則 (queueing discipline) の設定を行います。
tc class は、キューイング規則スケジューリング (queueing discipline scheduling) に基づくクラスの設定を行います。
tc estimator は、ネットワークフローを見積もります。
tc filter は、QOS/COS パケットのフィルタリング設定を行います。
tc policy は、QOS/COS ポリシーの設定を行います。

6.59. Kbd-2.0.4

Kbd パッケージは、キーテーブル（key-table）ファイル、コンソールフォント、キーボードユーティリティを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 29 MB

6.59.1. Kbd のインストール

バックスペース（backspace）キーとデリート（delete）キーは Kbd パッケージのキーマップ内では一貫した定義にはなっていません。 以下のパッチは i386 用のキーマップについてその問題を解消します。

```
patch -Np1 -i ../kbd-2.0.4-backspace-1.patch
```

パッチを当てればバックスペースキーの文字コードは 127 となり、デリートキーはよく知られたエスケープコードを生成することになります。

不要なプログラム resizecons とその man ページを削除します。（今はもう存在しない svgalib がビデオモードファイルを提供するために利用していたものであり、普通は setfont コマンドがコンソールサイズを適切に設定します。）

```
sed -i 's/\(RESIZECONS_PROGS=\)yes/\1no/g' configure
sed -i 's/resizecons.8 //' docs/man/man8/Makefile.in
```

Kbd をコンパイルするための準備をします。

```
PKG_CONFIG_PATH=/tools/lib/pkgconfig ./configure --prefix=/usr --disable-vlock
```

configure オプションの意味:

--disable-vlock
このオプションは vlock ユーティリティーをビルドしないようにします。 そのユーティリティーは PAM ライブラリが必要ですが、chroot 環境では利用することができません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

注記

ベラルーシ語のような言語において Kbd パッケージは正しいキーマップを提供せず、ISO-8859-5 エンコーディングで CP1251 キーマップであるものとして扱われます。 そのような言語ユーザーは個別に正しいキーマップをダウンロードして設定する必要があります。

必要ならドキュメントをインストールします。

```
mkdir -v       /usr/share/doc/kbd-2.0.4
cp -R -v docs/doc/* /usr/share/doc/kbd-2.0.4
```

6.59.2. Kbd の構成

インストールプログラム: chvt, deallocvt, dumpkeys, fgconsole, getkeycodes, kbdinfo, kbd_mode, kbdrate, loadkeys, loadunimap, mapscrn, openvt, psfaddtable (psfxtable へのリンク), psfgettable (psfxtable へのリンク), psfstriptable (psfxtable へのリンク), psfxtable, setfont, setkeycodes, setleds, setmetamode, setvtrgb, showconsolefont, showkey, unicode_start, unicode_stop
インストールディレクトリ: /usr/share/consolefonts, /usr/share/consoletrans, /usr/share/keymaps, /usr/share/doc/kbd-2.0.4, /usr/share/unimaps

概略説明

chvt	現在表示されている仮想端末を切り替えます。
deallocvt	未使用の仮想端末への割り当てを開放します。
dumpkeys	キーボード変換テーブル（keyboard translation table）の情報をダンプします。
fgconsole	アクティブな仮想端末数を表示します。
getkeycodes	カーネルのスキャンコード-キーコード（scancode-to-keycode）マッピングテーブルを表示します。
kbdinfo	コンソール状態に関しての情報を取得します。
kbd_mode	キーボードモードの表示または設定を行います。
kbdrate	キーボードのリピート速度（repeat rate）と遅延時間（delay rate）を設定します。
loadkeys	キーボード変換テーブル（keyboard translation tables）をロードします。
loadunimap	カーネルのユニコード-フォント（unicode-to-font）マッピングテーブルをロードします。
mapscrn	かつてのプログラムです。 これはユーザー定義の文字マッピングテーブルをコンソールドライバーにロードするために利用します。 現在では setfont を利用します。
openvt	新しい仮想端末（virtual terminal; VT）上でプログラムを起動します。
psfaddtable	Unicode キャラクターテーブルをコンソールフォントに追加します。
psfgettable	コンソールフォントから埋め込まれた Unicode キャラクターテーブルを抽出します。
psfstriptable	コンソールフォントから埋め込められた Unicode キャラクターテーブルを削除します。
psfxtable	コンソールフォント用のユニコード文字テーブルを取り扱います。
setfont	EGA（Enhanced Graphic Adapter）フォントや VGA（Video Graphics Array）フォントを変更します。
setkeycodes	カーネルのスキャンコード-キーコード（scancode-to-keycode）マッピングテーブルの項目をロードします。 キーボード上に特殊キーがある場合に利用します。
setleds	キーボードフラグや LED（Light Emitting Diode）を設定します。
setmetamode	キーボードのメタキー（meta-key）設定を定義します。
setvtrgb	仮想端末すべてに対してコンソールのカラーマップを設定します。
showconsolefont	現在設定されている EGA/VGA コンソールスクリーンフォントを表示します。
showkey	キーボード上にて押下されたキーのスキャンコード、キーコード、ASCII コードを表示します。
unicode_start	キーボードとコンソールをユニコードモードにします。 キーマップファイルが ISO-8859-1 エンコーディングで書かれている場合にのみこれを利用します。 他のエンコーディングの場合、このプログラムの出力結果は正しいものになりません。
unicode_stop	キーボードとコンソールをユニコードモードから戻します。

6.60. Libpipeline-1.4.1

Libpipeline パッケージは、サブプロセスのパイプラインを柔軟かつ便利に取り扱うライブラリを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU
必要ディスク容量: 7.9 MB

6.60.1. Libpipeline のインストール

Libpipeline をコンパイルするための準備をします。

```
PKG_CONFIG_PATH=/tools/lib/pkgconfig ./configure --prefix=/usr
```

configure オプションの意味:

PKG_CONFIG_PATH
この環境変数は 5.14.「Check-0.10.0」にて構築したテストライブラリのメタデータを収容するディレクトリを指定するものです。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

ビルド結果をテストする場合は以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.60.2. Libpipeline の構成

インストールライブラリ: libpipeline.so

概略説明

libpipeline このライブラリは、サブプロセス間のパイプラインを安全に構築するために利用されます。

6.61. Make-4.2.1

Make パッケージは、パッケージ類をコンパイルするためのプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.6 SBU
必要ディスク容量: 12.6 MB

6.61.1. Make のインストール

Make をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.61.2. Make の構成

インストールプログラム: make

概略説明

make パッケージの構成要素に対して、どれを(再)コンパイルするかを自動判別し、対応するコマンドを実行します。

6.62. Patch-2.7.5

Patch パッケージは「パッチ」ファイルを適用することにより、ファイルの修正、生成を行うプログラムを提供します。 「パッチ」ファイルは diff プログラムにより生成されます。

概算ビルド時間: 0.2 SBU
必要ディスク容量: 19.7 MB

6.62.1. Patch のインストール

Patch をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.62.2. Patch の構成

インストールプログラム: patch

概略説明

patch パッチファイルに従って対象ファイルを修正します。 パッチファイルは通常 diff コマンドによって修正前後の違いが列記されているものです。 そのような違いを対象ファイルに適用することで patch はパッチを適用したファイルを生成します。

6.63. Sysklogd-1.5.1

Sysklogd パッケージは、例えばカーネルが異常発生時に出力するログのような、システムログメッセージを取り扱うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 0.6 MB

6.63.1. Sysklogd のインストール

特定の条件において klogd がセグメンテーションフォールトを起こすため、この問題を修正します。 また古いプログラム構造を修正します。

```
sed -i '/Error loading kernel symbols/{n;n;d}' ksym_mod.c
sed -i 's/union wait/int/' syslogd.c
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make BINDIR=/sbin install
```

6.63.2. Sysklogd の設定

以下を実行して /etc/syslog.conf ファイルを生成します。

```
cat > /etc/syslog.conf << "EOF"
# Begin /etc/syslog.conf

auth,authpriv.* -/var/log/auth.log
*.*;auth,authpriv.none -/var/log/sys.log
daemon.* -/var/log/daemon.log
kern.* -/var/log/kern.log
mail.* -/var/log/mail.log
user.* -/var/log/user.log
*.emerg *

# End /etc/syslog.conf
EOF
```

6.63.3. Sysklogd の構成

インストールプログラム: klogd, syslogd

概略説明

klogd カーネルメッセージを受け取り出力するシステムデーモン。

syslogd システムプログラムが出力するログ情報を出力します。 出力されるログ情報には少なくとも処理日付、ホスト名が出力されます。 また通常はプログラム名も出力されます。 ただこれはログ出力デーモンがどれだけ信頼のおけるものであるかに依存する情報です。

6.64. Sysvinit-2.88dsf

Sysvinit パッケージは、システムの起動、実行、シャットダウンを制御するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 1.1 MB

6.64.1. Sysvinit のインストール

まず他のパッケージによりインストールされるプログラムを取り除いたり、出力メッセージの明確化、警告メッセージの修正などを行うパッチを適用します。

```
patch -Np1 -i ../sysvinit-2.88dsf-consolidated-1.patch
```

パッケージをコンパイルします。

```
make -C src
```

このパッケージにテストスイートはありません。

パッケージをインストールします。

```
make -C src install
```

6.64.2. Sysvinit の構成

インストールプログラム: bootlogd, fstab-decode, halt, init, killall5, poweroff (halt へのリンク), reboot (halt へのリンク), runlevel, shutdown, telinit (init へのリンク)

概略説明

bootlogd ブート時のメッセージをログファイルに出力します。

fstab-decode fstab 形式の (fstab-encoded の) 引数とともにコマンドを実行します。

halt ランレベルが既に 0 ではない通常の起動状態の場合に shutdown をオプション *-h* をつけて実行します。 そしてカーネルに対してシステム停止を指示します。 システムが停止される状況は /var/log/wtmp ファイルに記録されます。

init カーネルがハードウェアを初期化した後に、最初に起動するプロセスです。 ブート処理がこのプロセスに引き継がれ、設定ファイルにて指定されたプロセスをすべて起動していきます。

killall5 プロセスすべてに対してシグナルを送信します。 ただし自分のセッション内の起動プロセスは除きます。 つまり本コマンドを実行した親シェルは停止しません。

poweroff カーネルに対してシステムの停止を指示し、コンピューターの電源を切ります。(halt を参照してください。)

reboot カーネルに対してシステムの再起動を指示します。(halt を参照してください。)

runlevel 現在のランレベルと直前のランレベルを表示します。 最新のランレベルは /var/run/utmp ファイルに記録されています。

shutdown システムの終了を安全に行います。 その際にはプロセスすべてへのシグナル送信を行い、ログインユーザーへの通知も行います。

telinit init に対してランレベルの変更を指示します。

6.65. Eudev-3.2.1

Eudev パッケージはデバイスノードを動的に生成するプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 77 MB

6.65.1. Eudev のインストール

はじめにテストスクリプトを修正します。

```
sed -r -i 's|/usr(/bin/test)|\1|' test/udev-test.pl
```

そしてビルド失敗の原因となる不要な行を削除します。

```
sed -i '/keyboard_lookup_key/d' src/udev/udev-builtin-keyboard.c
```

Eudev バイナリにライブラリのディレクトリがハードコーディングされないように処置します。

```
cat > config.cache << "EOF"
HAVE_BLKID=1
BLKID_LIBS="-lblkid"
BLKID_CFLAGS="-I/tools/include"
EOF
```

Eudev をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr           \
            --bindir=/sbin          \
            --sbindir=/sbin         \
            --libdir=/usr/lib       \
            --sysconfdir=/etc       \
            --libexecdir=/lib       \
            --with-rootprefix=      \
            --with-rootlibdir=/lib  \
            --enable-manpages       \
            --disable-static        \
            --config-cache
```

パッケージをコンパイルします。

```
LIBRARY_PATH=/tools/lib make
```

テスト時に必要となるディレクトリを生成します。その一部はインストールの際にも利用します。

```
mkdir -pv /lib/udev/rules.d
mkdir -pv /etc/udev/rules.d
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make LD_LIBRARY_PATH=/tools/lib check
```

パッケージをインストールします。

```
make LD_LIBRARY_PATH=/tools/lib install
```

LFS 環境にて有用なカスタムルールやサポートファイルをインストールします。

```
tar -xvf ../udev-lfs-20140408.tar.bz2
make -f udev-lfs-20140408/Makefile.lfs install
```

6.65.2. Eudev の設定

ハードウェアデバイスに関する情報は、/etc/udev/hwdb.d ディレクトリおよび /usr/lib/udev/hwdb.d ディレクトリに収容されています。 Eudev はこの情報をとりまとめて、バイナリデータベース /etc/udev/hwdb.bin を作成しています。 このデータベース初期化は以下により実現します。

```
LD_LIBRARY_PATH=/tools/lib udevadm hwdb --update
```

このコマンドはハードウェア情報が更新された際には必ず実行してください。

6.65.3. Eudev の構成

インストールプログラム: udevadm, udevd
インストールライブラリ: libudev.so
インストールディレクトリ: /etc/udev, /lib/udev, /usr/share/doc/udev-20140408

概略説明

udevadm 汎用的な udev 管理ツール。 udevd デーモンの制御、Udev データベースからの情報提供、uevent 監視、uevent 完了待機、Udev 設定のテスト、指定デバイスへの uevent 起動などを行います。

udevd ネットリンクソケット上の udevent を検出するデーモンであり、デバイスを生成しそのイベントに応じた外部プログラムを実行します。

libudev udev デバイス情報へのインターフェースライブラリ。

/etc/udev Udev の設定ファイル、デバイスのパーミッション、デバイス名に対するルールを設定します。

6.66. Util-linux-2.29.1

Util-linux パッケージは、さまざまなユーティリティプログラムを提供します。 ファイルシステム、コンソール、パーティション、カーネルメッセージなどを取り扱うユーティリティです。

概算ビルド時間: 1.0 SBU
必要ディスク容量: 158 MB

6.66.1. FHS コンプライアンス情報

FHS では adjtime ファイルの配置場所として /etc ディレクトリではなく /var/lib/hwclock ディレクトリを推奨しています。 hwclock プログラムが利用するディレクトリをまず生成します。

```
mkdir -pv /var/lib/hwclock
```

6.66.2. Util-linux のインストール

Util-linux をコンパイルするための準備をします。

```
./configure ADJTIME_PATH=/var/lib/hwclock/adjtime   \
            --docdir=/usr/share/doc/util-linux-2.29.1 \
            --disable-chfn-chsh  \
            --disable-login      \
            --disable-nologin    \
            --disable-su         \
            --disable-setpriv    \
            --disable-runuser    \
            --disable-pylibmount \
            --disable-static     \
            --without-python     \
            --without-systemd    \
            --without-systemdsystemunitdir
```

--disable と --without のオプションは、LFS では必要のないパッケージ、あるいは他のパッケージのインストールによって不整合となったパッケージに対して出力される警告をなくします。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

必要なら root ユーザー以外にて、以下のようにテストスイートを実行します。

警告

root ユーザーによりテストスイートを実行すると、システムに悪影響を及ぼすことがあります。 テストスイートを実行するためには、カーネルオプション CONFIG_SCSI_DEBUG が現環境にて有効であり、かつモジュールとしてビルドされていなければなりません。 カーネルに組み込んでいるとブートできません。 またテストを完全に実施するには BLFS での各種パッケージのインストールも必要になります。 テストが必要であるなら、LFS システムを完成した後に、再起動したシステムにて以下を実行します。

```
bash tests/run.sh --srcdir=$PWD --builddir=$PWD
```

```
chown -Rv nobody .
su nobody -s /bin/bash -c "PATH=$PATH make -k check"
```

注記

上において tests/ts/ipcs/limits2 というテストは、ホストが最新のカーネルを用いている場合に失敗します。 この失敗は無視して構いません。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

6.66.3. Util-linux の構成

インストールプログラム: addpart, agetty, blkdiscard, blkid, blockdev, cal, cfdisk, chcpu, chrt, col, colcrt, colrm, column, ctrlaltdel, delpart, dmesg, eject, fallocate, fdformat, fdisk, findfs, findmnt, flock, fsck, fsck.cramfs, fsck.minix, fsfreeze, fstrim, getopt, hexdump, hwclock, i386, ionice, ipcmk, ipcrm, ipcs, isosize, kill, last, lastb (last へのリンク), ldattach, linux32, linux64, logger, look, losetup, lsblk, lscpu, lsipc, lslocks, lslogins, mcookie, mesg, mkfs, mkfs.bfs, mkfs.cramfs, mkfs.minix, mkswap, more, mount, mountpoint, namei, nsenter, partx, pg, pivot_root, prlimit, raw, readprofile, rename, renice, resizepart, rev, rtcwake, script, scriptreplay, setarch, setsid, setterm, sfdisk, sulogin, swaplabel, swapoff (swapon へのリンク), swapon, switch_root, tailf, taskset, ul, umount, uname26, unshare, utmpdump, uuidd, uuidgen, wall, wdctl, whereis, wipefs, x86_64, zramctl

インストールライブラリ: libblkid.so, libfdisk.so, libmount.so, libsmartcols.so, libuuid.so

インストールディレクトリ: /usr/include/blkid, /usr/include/libfdisk, /usr/include/libmount, /usr/include/libsmartcols, /usr/include/uuid, /usr/share/doc/util-linux-2.29.1, /var/lib/hwclock

概略説明

addpart Linux カーネルに対して新しいパーティションの情報を通知します。

agetty tty ポートを開いてログイン名の入力を受け付けます。 そして login プログラムを起動します。

blkdiscard デバイス上のセクターを取り除きます。

blkid ブロックデバイスの属性を見つけて表示するためのコマンドラインユーティリティ。

blockdev コマンドラインからブロックデバイスの ioctl の呼び出しを行います。

cal 簡単なカレンダーを表示します。

cfdisk 指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。

chcpu CPU の状態を変更します。

chrt リアルタイムプロセスの属性を操作します。

col 逆改行 (resverse line feeds) を取り除きます。

colcrt 性能が不十分な端末のために nroff の出力結果から重ね書き (overstriking) や半改行 (half-lines) を取り除きます。

colrm 指定されたカラムを取り除きます。

column 指定されたファイルの内容を複数カラムに整形します。

ctrlaltdel ハードリセットまたはソフトリセットを行うために Ctrl+Alt+Del キー押下時の機能を設定します。

delpart Linux カーネルに対してパーティションが削除されているかどうかを確認します。

dmesg カーネルのブートメッセージをダンプします。

eject リムーバブルメディアをイジェクトします。

fallocate ファイルのための領域を事前割り当てします。

fdformat フロッピーディスクの低レベル (low-level) フォーマットを行います。

fdisk 指定されたデバイスのパーティションテーブルを操作します。

findfs ファイルシステムに対するラベルまたは UUID (Universally Unique Identifier) を使ってファイルシステムを検索します。

findmnt libmount ライブラリに対するコマンドラインインターフェース。 mountinfo, fstab, mtab の各ファイルに対しての処理を行います。

flock ファイルロックを取得して、ロックしたままコマンドを実行します。

fsck ファイルシステムのチェックを行い、必要に応じて修復を行います。

fsck.cramfs 指定されたデバイス上の Cramfs ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。

fsck.minix 指定されたデバイス上の Minix ファイルシステムに対して一貫性検査 (consistency check) を行います。

fsfreeze カーネルドライバー制御における FIFREEZE/FITHAW ioctl に対する単純なラッパープログラム。

fstrim	マウントされたファイルシステム上にて、利用されていないブロックを破棄します。
getopt	指定されたコマンドラインのオプション引数を解析します。
hexdump	指定されたファイルを 16進数書式または他の指定された書式でダンプします。
hwclock	システムのハードウェアクロックを読み取ったり設定したりします。 このハードウェアクロックはリアルタイムクリック (Real-Time Clock; RTC) または BIOS (Basic Input-Output System) クロックとも呼ばれます。
i386	setarch へのシンボリックリンク。
ionice	プログラムに対する I/O スケジュールクラスとスケジュール優先度を取得または設定します。
ipcmk	さまざまな IPC リソースを生成します。
ipcrm	指定された IPC (Inter-Process Communication) リソースを削除します。
ipcs	IPC のステータス情報を提供します。
isosize	iso9660 ファイルシステムのサイズを表示します。
kill	プロセスに対してシグナルを送信します。
last	ユーザーの最新のログイン（ログアウト）の情報を表示します。 これは /var/log/wtmp ファイルの終わりから調べているものです。 またシステムブート、シャットダウン、ランレベルの変更時の情報も示します。
lastb	ログインに失敗した情報を表示します。 これは /var/log/btmp に記録されています。
ldattach	シリアル回線 (serial line) に対して回線規則 (line discipline) を割り当てます。
linux32	setarch へのシンボリックリンク。
linux64	setarch へのシンボリックリンク。
logger	指定したメッセージをシステムログに出力します。
look	指定された文字列で始まる行を表示します。
losetup	ループデバイス (loop device) の設定と制御を行います。
lsblk	ブロックデバイスのすべて、あるいは指定されたものの情報を、木構造のような形式で一覧表示します。
lscpu	CPU アーキテクチャーの情報を表示します。
lsipc	システムに搭載されている IPC 機能の情報を表示します。
lslocks	ローカルのシステムロックを一覧表示します。
lslogins	ユーザー、グループ、システムアカウントの情報を一覧表示します。
mcookie	xauth のためのマジッククッキー (128ビットのランダムな16進数値) を生成します。
mesg	現在のユーザーの端末に対して、他のユーザーがメッセージ送信できるかどうかを制御します。
mkfs	デバイス上にファイルシステムを構築します。 (通常はハードディスクパーティションに対して行います。)
mkfs.bfs	SCO (Santa Cruz Operations) の bfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.cramfs	cramfs ファイルシステムを生成します。
mkfs.minix	Minix ファイルシステムを生成します。
mkswap	指定されたデバイスまたはファイルをスワップ領域として初期化します。
more	テキストを一度に一画面分だけ表示するフィルタープログラム。
mount	ファイルシステムツリー内の特定のディレクトリを、指定されたデバイス上のファイルシステムに割り当てます。
mountpoint	ディレクトリがマウントポイントであるかどうかをチェックします。
namei	指定されたパスに存在するシンボリックリンクを表示します。
nsenter	他プロセスの名前空間にてプログラムを実行します。
partx	カーネルに対して、ディスク上にパーティションが存在するか、何番が存在するかを伝えます。
pg	テキストファイルを一度に一画面分表示します。
pivot_root	指定されたファイルシステムを、現在のプロセスに対する新しいルートファイルシステムにします。
prlimit	プロセスが利用するリソースの限界値を取得または設定します。
raw	Linux の raw キャラクターデバイスをブロックデバイスにバインドします。

readprofile	カーネルのプロファイリング情報を読み込みます。
rename	指定されたファイルの名称を変更します。
renice	実行中のプロセスの優先度を変更します。
resizepart	Linux カーネルに対してパーティションのリサイズを指示します。
rev	指定されたファイル内の行の並びを入れ替えます。
rtcwake	指定された起動時刻までの間、システムをスリープ状態とするモードを指定します。
script	端末セッション上での出力結果の写し（typescript）を生成します。
scriptreplay	タイミング情報（timing information）を利用して、出力結果の写し（typescript）を再生します。
setarch	新しいプログラム環境にて、表示されるアーキテクチャーを変更します。 また設定フラグ（personality flag）の設定も行います。
setsid	新しいセッションで指定されたプログラムを実行します。
setterm	端末の属性を設定します。
sfdisk	ディスクパーティションテーブルを操作します。
sulogin	root ユーザーでのログインを行います。 通常は init が起動するもので、システムがシングルユーザーモードで起動する際に利用されます。
swaplabel	スワップエリアの UUID とラベルを変更します。
swapoff	ページングまたはスワッピングに利用しているデバイスまたはファイルを無効にします。
swapon	ページングまたはスワッピングに利用しているデバイスまたはファイルを有効にします。 また現在利用されているデバイスまたはファイルを一覧表示します。
switch_root	別のファイルシステムを、マウントツリーのルートとして変更します。
tailf	ログファイルの更新を監視します。 ログファイルの最終の10行が表示され、ログファイルに新たに書き込みが行われると表示更新します。
taskset	プロセスの CPU 親和性（affinity）を表示または設定します。
ul	使用中の端末にて、アンダースコア文字を、エスケープシーケンスを用いた下線文字に変換するためのフィルター。
umount	システムのファイルツリーからファイルシステムを切断します。
uname26	setarch へのシンボリックリンク。
unshare	上位の名前空間とは異なる名前空間にてプログラムを実行します。
utmpdump	指定されたログインファイルの内容を分かりやすい書式で表示します。
uuidd	UUID ライブラリから利用されるデーモン。 時刻情報に基づく UUID を、安全にそして一意性を確保して生成します。
uuidgen	新しい UUID を生成します。 生成される UUID は当然、他に生成されている UUID とは異なり、自他システムでも過去現在にわたってもユニークなものです。
wall	ファイルの内容、あるいはデフォルトでは標準入力から入力された内容を、現在ログインしている全ユーザーの端末上に表示します。
wdctl	ハードウェアの watchdog ステータスを表示します。
whereis	指定されたコマンドの実行モジュール、ソース、man ページの場所を表示します。
wipefs	ファイルシステムのシグニチャーをデバイスから消去します。
x86_64	setarch へのシンボリックリンク。
zramctl	zram（compressed ram disk）デバイスを初期化し制御するためのプログラム。
libblkid	デバイスの識別やトークンの抽出を行う処理ルーチンを提供します。
libfdisk	パーティションテーブルを操作する処理ルーチンを提供します。
libmount	ブロックデバイスのマウントとアンマウントに関する処理ルーチンを提供します。
libsmartcols	タブラー形式（tabular form）による画面出力を補助する処理ルーチンを提供します。
libuuid	ローカルシステム内だけに限らずアクセスされるオブジェクトに対して、一意性が保証された識別子を生成する処理ルーチンを提供します。

6.67. Man-DB-2.7.6.1

Man-DB パッケージは man ページを検索したり表示したりするプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.4 SBU
必要ディスク容量: 30 MB

6.67.1. Man-DB のインストール

Man-DB をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr                         \
            --docdir=/usr/share/doc/man-db-2.7.6.1 \
            --sysconfdir=/etc                     \
            --disable-setuid                      \
            --enable-cache-owner=bin              \
            --with-browser=/usr/bin/lynx          \
            --with-vgrind=/usr/bin/vgrind         \
            --with-grap=/usr/bin/grap
```

configure オプションの意味:

--disable-setuid
これは man プログラムが man ユーザーに対して setuid を実行しないようにします。

--enable-cache-owner=bin
システムワイドなキャッシュファイルの所有ユーザーを bin とします。

--with-...
この三つのオプションはデフォルトで利用するプログラムを指定します。 lynx はテキストベースの Web ブラウザーです。(BLFS でのインストール手順を参照してください。) vgrind はプログラムソースを Groff の入力形式に変換します。 grap は Groff 文書においてグラフを組版するために利用します。 vgrind と grap は man ページを見るだけであれば必要ありません。 これらは LFS や BLFS には含まれません。 もし利用したい場合は LFS の構築を終えた後に自分でインストールしてください。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには、以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

存在しないユーザーへの参照を削除します。

```
sed -i "s:man root:root root:g" /usr/lib/tmpfiles.d/man-db.conf
```

6.67.2. LFS における英語以外のマニュアルページ

以下に示す表は /usr/share/man/<ll> 配下にインストールされる man ページとそのエンコーディングを示します。 Man-DB は man ページが UTF-8 エンコーディングかどうかを正しく認識します。

表 6.1. 8 ビット man ページのキャラクターエンコーディング

言語 (コード)	エンコーディング	言語 (コード)	エンコーディング
デンマーク語 (da)	ISO-8859-1	クロアチア語 (hr)	ISO-8859-2
ドイツ語 (de)	ISO-8859-1	ハンガリー語 (hu)	ISO-8859-2
英語 (en)	ISO-8859-1	日本語 (ja)	EUC-JP
スペイン語 (es)	ISO-8859-1	韓国語 (ko)	EUC-KR

言語（コード）	エンコーディング	言語（コード）	エンコーディング
エストニア語（et）	ISO-8859-1	リトアニア語（lt）	ISO-8859-13
フィンランド語（fi）	ISO-8859-1	ラトビア語（lv）	ISO-8859-13
フランス語（fr）	ISO-8859-1	マケドニア語（mk）	ISO-8859-5
アイルランド語（ga）	ISO-8859-1	ポーランド語（pl）	ISO-8859-2
ガリシア語（gl）	ISO-8859-1	ルーマニア語（ro）	ISO-8859-2
インドネシア語（id）	ISO-8859-1	ロシア語（ru）	KOI8-R
アイスランド語（is）	ISO-8859-1	スロバキア語（sk）	ISO-8859-2
イタリア語（it）	ISO-8859-1	スロベニア語（sl）	ISO-8859-2
ノルウェー語 ブークモール（Norwegian Bokmal; nb）	ISO-8859-1	セルビア Latin（sr@latin）	ISO-8859-2
オランダ語（nl）	ISO-8859-1	セルビア語（sr）	ISO-8859-5
ノルウェー語 ニーノシュク（Norwegian Nynorsk; nn）	ISO-8859-1	トルコ語（tr）	ISO-8859-9
ノルウェー語（no）	ISO-8859-1	ウクライナ語（uk）	KOI8-U
ポルトガル語（pt）	ISO-8859-1	ベトナム語（vi）	TCVN5712-1
スウェーデン語（sv）	ISO-8859-1	中国語 簡体字（Simplified Chinese）（zh_CN）	GBK
ベラルーシ語（be）	CP1251	中国語 簡体字（Simplified Chinese），シンガポール（zh_SG）	GBK
ブルガリア語（bg）	CP1251	中国語 繁体字（Traditional Chinese），香港（zh_HK）	BIG5HKSCS
チェコ語（cs）	ISO-8859-2	中国語 繁体字（Traditional Chinese）（zh_TW）	BIG5
ギリシア語（el）	ISO-8859-7		

注記

上に示されていない言語によるマニュアルページはサポートされません。

6.67.3. Man-DB の構成

インストールプログラム: accessdb, apropos（whatis へのリンク）, catman, lexgrog, man, mandb, manpath, whatis
インストールライブラリ: libman.so, libmandb.so
インストールディレクトリ: /usr/lib/man-db, /usr/lib/tmpfiles.d, /usr/libexec/man-db, /usr/share/doc/man-db-2.7.6.1

概略説明

accessdb　whatis データベースの内容をダンプして読みやすい形で出力します。
apropos　whatis データベースを検索して、指定した文字列を含むシステムコマンドの概略説明を表示します。
catman　フォーマット済マニュアルページを生成、更新します。
lexgrog　指定されたマニュアルページについて、一行のサマリー情報を表示します。
man　指定されたマニュアルページを整形して表示します。
mandb　whatis データベースを生成、更新します。
manpath　$MANPATH の内容を表示します。 あるいは（$MANPATH が設定されていない場合は）man.conf 内の設定とユーザー設定に基づいて適切な検索パスを表示します。
whatis　whatis データベースを検索して、指定されたキーワードを含むシステムコマンドの概略説明を表示します。

libman　man に対しての実行時のサポート機能を提供します。
libmandb　man に対しての実行時のサポート機能を提供します。

6.68. Tar-1.29

Tar パッケージはアーカイブプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 2.2 SBU
必要ディスク容量: 40 MB

6.68.1. Tar のインストール

Tar をコンパイルするための準備をします。

```
FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1  \
./configure --prefix=/usr \
            --bindir=/bin
```

configure オプションの意味:

FORCE_UNSAFE_CONFIGURE=1
このオプションは、mknod に対するテストを root ユーザーにて実行するようにします。 一般にこのテストを root ユーザーで実行することは危険なこととされますが、ここでは部分的にビルドしたシステムでテストするものであるため、オーバーライドすることで支障はありません。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするために以下を実行します。(約 1 SBU)

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
make -C doc install-html docdir=/usr/share/doc/tar-1.29
```

6.68.2. Tar の構成

インストールプログラム: tar
インストールディレクトリ: /usr/share/doc/tar-1.29

概略説明

tar アーカイブの生成、アーカイブからのファイル抽出、アーカイブの内容一覧表示を行います。 アーカイブは tarball とも呼ばれます。

6.69. Texinfo-6.3

Texinfo パッケージは info ページへの読み書き、変換を行うプログラムを提供します。

概算ビルド時間: 0.5 SBU
必要ディスク容量: 108 MB

6.69.1. Texinfo のインストール

Texinfo をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr --disable-static
```

configure パラメーターの意味:

--disable-static
上のようにして処理した場合にトップレベルの configure スクリプトは、認識不能なオプションであると示してきます。 しかしこのオプションは XSParagraph の configure スクリプトにおいて認識されます。 そして /usr/lib/texinfo 内にスタティックライブラリ XSParagraph.a を生成しないようになります。

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make check
```

パッケージをインストールします。

```
make install
```

必要なら TeX システムに属するコンポーネント類をインストールします。

```
make TEXMF=/usr/share/texmf install-tex
```

make パラメーターの意味:

TEXMF=/usr/share/texmf
Makefile 変数である TEXMF に TeX ツリーのルートディレクトリを設定します。 これは後に TeX パッケージをインストールするための準備です。

ドキュメントシステム Info は、 メニュー項目の一覧を単純なテキストファイルに保持しています。 そのファイルは /usr/share/info/dir にあります。 残念ながら数々のパッケージの Makefile は、既にインストールされている info ページとの同期を取る処理を行わない場合があります。 /usr/share/info/dir の再生成を必要とするなら、以下のコマンドを実行してこれを実現します。

```
pushd /usr/share/info
rm -v dir
for f in *
  do install-info $f dir 2>/dev/null
done
popd
```

6.69.2. Texinfo の構成

インストールプログラム: info, install-info, makeinfo (texi2any へのリンク), pdftexi2dvi, pod2texi, texi2any, texi2dvi, texi2pdf, texindex
インストールライブラリ: XSParagraph.so
インストールディレクトリ: /usr/share/texinfo, /usr/lib/texinfo

概略説明

info info ページを見るために利用します。 これは man ページに似ていますが、単に利用可能なコマンドラインオプションを説明するだけのものではなく、おそらくはもっと充実しています。 例えば man bison と info bison を比較してみてください。

install-info	info ページをインストールします。 info 索引ファイルにある索引項目も更新します。
makeinfo	指定された Texinfo ソースファイルを Info ページ、プレーンテキスト、HTML ファイルに変換します。
pdftexi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。
pod2texi	Pod フォーマットを Texinfo フォーマットに変換します。
texi2any	Texinfo のソースファイルを他のさまざまなフォーマットに変換します。
texi2dvi	指定された Texinfo ドキュメントファイルを、デバイスに依存しない印刷可能なファイルに変換します。
texi2pdf	指定された Texinfo ドキュメントファイルを PDF (Portable Document Format) ファイルに変換します。
texindex	Texinfo 索引ファイルの並び替えを行います。

6.70. Vim-8.0.069

Vim パッケージは強力なテキストエディターを提供します。

概算ビルド時間: 1.0 SBU
必要ディスク容量: 109 MB

Vim の代替ソフトウェア

もし Emacs、Joe、Nano など他のエディターを用いたい場合は http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/editors.html に示される手順に従ってインストールしてください。

6.70.1. Vim のインストール

設定ファイル vimrc がインストールされるデフォルトディレクトリを /etc に変更します。

```
echo '#define SYS_VIMRC_FILE "/etc/vimrc"' >> src/feature.h
```

Vim をコンパイルするための準備をします。

```
./configure --prefix=/usr
```

パッケージをコンパイルします。

```
make
```

コンパイル結果をテストするには以下を実行します。

```
make -j1 test
```

このテストスイートは数多くのバイナリデータを端末画面上に出力します。 これは端末画面の設定によっては問題を引き起こします。 これを避けるには出力をリダイレクトしてログファイルに出力するようにしてください。 テストが成功すれば、最後に "ALL DONE" と表示されます。

パッケージをインストールします。

```
make install
```

たいていのユーザーは vim ではなく vi を使うようです。 vi を入力しても vim が実行されるように、実行モジュールに対するシンボリックリンクを作成します。 さらに指定された言語による man ページへのシンボリックリンクも作成します。

```
ln -sv vim /usr/bin/vi
for L in  /usr/share/man/{,*/}man1/vim.1; do
    ln -sv vim.1 $(dirname $L)/vi.1
done
```

デフォルトでは Vim のドキュメントが /usr/share/vim にインストールされます。 以下のようなシンボリックリンクを生成することで /usr/share/doc/vim-8.0.069 へアクセスしてもドキュメントが参照できるようにし、他のパッケージが配置するドキュメントの場所と整合を取ります。

```
ln -sv ../vim/vim80/doc /usr/share/doc/vim-8.0.069
```

LFS システムに対して X ウィンドウシステムをインストールする場合 X のインストールの後で Vim を再コンパイルする必要があります。 Vim には GUI 版があり X や他のライブラリがインストールされていて 初めて構築できるためです。 この作業の詳細については Vim のドキュメントと BLFS ブックの http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/postlfs/vim.html に示されている Vim のインストール説明のページを参照してください。

6.70.2. Vim の設定

デフォルトで vim は Vi 非互換モード (vi-incompatible mode) で起動します。 他のエディターを使ってきたユーザーにとっては、よく分からないものかもしれません。 以下の設定における「nocompatible」(非互換) は、Vi の新しい機能を利用することを意味しています。 もし「compatible」(互換) モードに変更したい場合は、この設定ファイルの冒頭にて行っておくことが必要です。 このモード設定は他の設定を置き換えるものとなることから、まず初めに行っておかなければならないものだからです。 以下のコマンドを実行して vim の設定ファイルを生成します。

```
cat > /etc/vimrc << "EOF"
" Begin /etc/vimrc

set nocompatible
set backspace=2
set mouse=r
syntax on
if (&term == "iterm") || (&term == "putty")
  set background=dark
endif


" End /etc/vimrc
EOF
```

set nocompatible と設定しておくと vi 互換モードでの動作に比べて有用な動作となります。(これがデフォルトになっています。) その設定の記述から「no」の文字を取り除けば、旧来の vi コマンドの動作となります。 *set backspace=2* を設定しておくと、行を超えてもバックスペースキーによる編集が可能となります。 またインデントが自動的に行われ、コマンド起動時には自動的に挿入モードとなります。 *syntax on* パラメーターを指定すれば vim の文法ハイライト (syntax highlighting) 機能が有効になります。 *set mouse=r* を指定すると chroot 環境やリモート接続時であってもマウスによるテキスト選択が適切になります。 最後にある if 文は、*set background=dark* を指定した場合に、特定の端末エミュレーター上において vim が背景色を誤って認識しないようにするためのものです。 エミュレーターの背景色が黒色であった場合に、より適切なハイライトが実現できます。

この他に利用できるオプションについては、以下のコマンドを実行することで出力される説明を参照してください。

```
vim -c ':options'
```

注記

Vim がインストールするスペルファイル (spell files) はデフォルトでは英語に対するものだけです。 必要とする言語のスペルファイルをインストールするなら ftp://ftp.vim.org/pub/vim/runtime/spell/ から、特定の言語、エンコーディングによる *.spl ファイル、またオプションとして *.sug ファイルをダウンロードしてください。 そしてそれらのファイルを /usr/share/vim/vim80/spell/ ディレクトリに保存してください。

スペルファイルを利用するには /etc/vimrc ファイルにて、例えば以下のような設定が必要になります。

```
set spelllang=en,ru
set spell
```

詳しくは、上で説明した URL にて提供されている README ファイルを参照してください。

6.70.3. Vim の構成

インストールプログラム: ex (vim へのリンク), rview (vim へのリンク), rvim (vim へのリンク), vi (vim へのリンク), view (vim へのリンク), vim, vimdiff (vim へのリンク), vimtutor, xxd

インストールディレクトリ: /usr/share/vim

概略説明

ex vim を ex モードで起動します。

rview view の機能限定版。 シェルは起動できず、サスペンドも行うことはできません。

rvim vim の機能限定版。 シェルは起動できず、サスペンドも行うことはできません。

vi	vim へのリンク。
view	vim を読み込み専用モード（read-only mode）で起動します。
vim	エディター。
vimdiff	vim により、同一ファイルにおける２つまたは３つの版を同時に編集し、差異を表示します。
vimtutor	vim の基本的なキー操作とコマンドについて教えてくれます。
xxd	指定されたファイルの内容を 16進数ダンプとして変換します。 逆の変換も行うことができるため、バイナリパッチにも利用されます。

6.71. デバッグシンボルについて

プログラムやライブラリの多くは、デフォルトではデバッグシンボルを含めてコンパイルされています。（gcc の *-g* オプションが用いられています。）デバッグ情報を含めてコンパイルされたプログラムやライブラリは、デバッグ時にメモリアドレスが参照できるだけでなく、処理ルーチンや変数の名称も知ることができます。

しかしそういったデバッグ情報は、プログラムやライブラリのファイルサイズを極端に大きくします。 以下にデバッグシンボルが占める割合の例を示します。

- デバッグシンボルを含んだ bash の実行ファイル： 1200 KB
- デバッグシンボルを含まない bash の実行ファイル： 480 KB
- デバッグシンボルを含んだ Glibc と GCC の関連ファイル（**/lib** と **/usr/lib**）: 87 MB
- デバッグシンボルを含まない Glibc と GCC の関連ファイル: 16MB

利用するコンパイラーや C ライブラリの違いによって、生成されるファイルのサイズは異なります。 デバッグシンボルを含む、あるいは含まないサイズを比較した場合、その差は 2倍から 5倍の違いがあります。

プログラムをデバッグするユーザーはそう多くはありません。 デバッグシンボルを削除すればディスク容量はかなり節減できます。 次節ではプログラムやライブラリからデバッグシンボルを取り除く（strip する）方法を示します。

6.72. 再度のストリップ

対象ユーザーがプログラマーではなく、プログラム類をデバッグするような使い方をしないのであれば、実行ファイルやライブラリに含まれるデバッグシンボルを削除しても構いません。 そうすれば 90 MB ものサイズ削減を図ることができます。 たとえデバッグできなくなっても困らないはずです。

以下に示すコマンドは、いとも簡単なものです。 ただし入力つづりは簡単に間違いやすいので、もし誤った入力をするとシステムを利用不能にしてしまいます。 したがって strip コマンドを実行する前に、現時点の LFS システムのバックアップを取っておくことをお勧めします。

ストリップを実行する前には、ストリップしようとしている実行ファイルが実行中でないことを十分確認してください。 また 6.4.「Chroot 環境への移行」に示したコマンドにより chroot 環境に入っているかどうか定かでない場合は、いったんログアウトしてください。

```
logout
```

再度 chroot 環境に入ります。

```
chroot $LFS /tools/bin/env -i            \
    HOME=/root TERM=$TERM PS1='\u:\w\$ ' \
    PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin   \
    /tools/bin/bash --login
```

以下により実行バイナリやライブラリを安全にストリップします。

```
/tools/bin/find /usr/lib -type f -name \*.a \
   -exec /tools/bin/strip --strip-debug {} ';'

/tools/bin/find /lib /usr/lib -type f -name \*.so* \
   -exec /tools/bin/strip --strip-unneeded {} ';'

/tools/bin/find /{bin,sbin} /usr/{bin,sbin,libexec} -type f \
    -exec /tools/bin/strip --strip-all {} ';'
```

ファイルフォーマットが認識できないファイルがいくつも警告表示されますが、無視して構いません。 この警告は、処理したファイルが実行モジュールではなくスクリプトファイルであることを示しています。

6.73. 仕切り直し

テストを通じて生成された不要なファイル等を削除します。

```
rm -rf /tmp/*
```

それまで入っていた chroot 環境からいったん抜け出て、以下の chroot コマンドにより入り直します。

```
chroot "$LFS" /usr/bin/env -i              \
    HOME=/root TERM="$TERM" PS1='\u:\w\$ ' \
    PATH=/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin     \
    /bin/bash --login
```

上を実行するのは /tools ディレクトリがもう必要ないからです。 ですから /tools ディレクトリが一切無くてよいなら削除しても構いません。

注記

/tools ディレクトリを削除すると、ツールチェーンのテストに用いていた Tcl、Expect、DejaGNU も削除することになります。 後々これらのプログラムを用いるなら、再度コンパイルとインストールを行う必要があります。 BLFS ブックにてその手順を説明しているので http://www.linuxfromscratch.org/blfs/ を参照してください。

仮想カーネルファイルシステムを、手動により、あるいはリブートによりアンマウントした場合は chroot 環境に入る前にそれらがマウントされていることを確認してください。 その作業手順は6.2.2.「/dev のマウントと有効化」と6.2.3.「仮想カーネルファイルシステムのマウント」で説明しています。

これまでのパッケージビルドにて、縮退テスト（regressoin tests）を実現するために生成していたスタティックライブラリがいくらか残っています。 これは binutils, bzip2, e2fsprogs, flex, libtool, zlib から作られたものです。 もし不要なら以下により削除します。

```
rm -f /usr/lib/lib{bfd,opcodes}.a
rm -f /usr/lib/libbz2.a
rm -f /usr/lib/lib{com_err,e2p,ext2fs,ss}.a
rm -f /usr/lib/libltdl.a
rm -f /usr/lib/libfl.a
rm -f /usr/lib/libfl_pic.a
rm -f /usr/lib/libz.a
```

第7章 システム設定

7.1. はじめに

Linux システムの起動時には実行されるタスクがいくつかあります。 実質的および仮想的なファイルシステムのマウント、デバイスの初期化、スワップ有効化、ファイルシステムの整合チェック、スワップパーティションなどのマウント、システムクロックの設定、ネットワーク起動、システムデーモンの起動、そしてユーザー指定によるタスクの起動です。 この処理過程は適正な順序により実行されることが必要ですが、同時に出来るだけ速く処理されることも必要になります。

7.1.1. System V

System V は古くからあるブートシステムであり、Unix や Unix ライクである Linux において 1983年頃より活用されています。 小さなプログラム init があり、これが login のような基本的なプログラムを（getty を通じて）設定しスクリプトを実行します。 そのスクリプトは通常 rc と命名され、他のスクリプトの実行を制御します。 こうしてシステムの初期化を行うタスクが処理されます。

init プログラムは **/etc/inittab** ファイルにより制御されます。 そしてユーザーが設定可能なランレベルを設定します。

```
0 — 停止（halt）
1 — シングルユーザーモード
2 — マルチユーザー、ネットワークなし
3 — フルマルチユーザーモード
4 — ユーザー定義
5 — フルマルチユーザーモード、ディスプレイマネージャーあり
6 — 再起動（reboot）
```

通常のデフォルトランレベルは 3 か 5 です。

長所

- 確立されていて、十分に理解されているシステムであること。
- 容易にカスタマイズ可能であること。

短所

- 起動が遅いこと。 中程度の処理性能による LFS システムの場合、最初のカーネルメッセージの出力からログインプロンプトまでの処理時間は 8 から 12 秒程度。 ログイン後のネットワーク接続の確立に 2 秒ほど要する。
- 起動タスクがすべて順番に行われること。 これは前項にも関係する。 ファイルシステムのチェックなどの処理に処理遅延があったとすると、起動処理全体の処理時間を遅らせることになる。
- コントロールグループ（control groups; cgroups）やユーザーごとの適正なスケジュール共有といった、最新機能には直接対応していないこと。
- スクリプト追加にあたっては手作業を要し、固定的な順序を考慮しないといけないこと。

7.2. LFS-ブートスクリプト-20150222

LFS-ブートスクリプトパッケージは LFS システムの起動、終了時に利用するスクリプトを提供します。 システム起動方法のカスタマイズに必要な設定や手順については以降の節で説明します。

概算ビルド時間: 0.1 SBU 以下
必要ディスク容量: 244 KB

7.2.1. LFS ブートスクリプト のインストール

パッケージをインストールします。

```
make install
```

7.2.2. LFS ブートスクリプト の構成

インストールスクリプト: checkfs, cleanfs, console, functions, halt, ifdown, ifup, localnet, modules, mountfs, mountvirtfs, network, rc, reboot, sendsignals, setclock, ipv4-static, swap, sysctl, sysklogd, template, udev, udev_retry
インストールディレクトリ: /etc/rc.d, /etc/init.d (シンボリックリンク), /etc/sysconfig, /lib/services, /lib/lsb (シンボリックリンク)

概略説明

checkfs ファイルシステムがマウントされる前にその整合性をチェックします。(ただしジャーナルファイルシステムとネットワークベースのファイルシステムは除きます。)

cleanfs リブートの際に不要となるファイルを削除します。 例えば /var/run/ ディレクトリや /var/lock/ ディレクトリの配下にあるファイルです。 /var/run/utmp ファイルは再生成されます。 また /etc/nologin、/fastboot、/forcefsck がおそらく存在しており、これらは削除されます。

console 必要となるキーボードレイアウトに対しての正しいキーマップテーブルをロードします。 同時にスクリーンフォントもセットします。

functions 共通的な関数を提供します。 例えばエラーやステータスのチェックなどであり、これはブートスクリプトの多くが利用します。

halt システムを停止します。

ifdown ネットワークデバイスを停止します。

ifup ネットワークデバイスを初期化します。

localnet システムのホスト名とローカルループバックデバイスを設定します。

modules /etc/sysconfig/modules にて一覧設定されているカーネルモジュールをロードします。 その際には引数が指定され利用されます。

mountfs ファイルシステムをすべてマウントします。 ただし noauto が設定されているものやネットワークベースのファイルシステムは除きます。

mountvirtfs 仮想カーネルファイルシステムをマウントします。 例えば proc などです。

network ネットワークカードなどのネットワークインターフェースを設定します。 そして (可能であれば) デフォルトゲートウェイを設定します。

rc ランレベルを制御するマスタースクリプト。 他のブートスクリプトを一つずつ実行します。 その際には実行されるシンボリックの名前によって実行順序を決定します。

reboot システムを再起動します。

sendsignals システムが再起動または停止する前に、プロセスすべてが停止していることを確認します。

setclock ハードウェアクロックが UTC 時刻に設定されていなければ、カーネルクロックをローカル時刻としてリセットします。

ipv4-static ネットワークインターフェースに対して固定 IP (Internet Protocol) アドレスを割り当てるために必要となる機能を提供します。

swap スワップファイルやスワップパーティションを有効または無効にします。

sysctl /etc/sysctl.conf ファイルが存在している場合、実行中のカーネルに対してシステム設定値をロードします。

sysklogd システムログデーモンおよびカーネルログデーモンの起動と停止を行います。

template	他のデーモン用としてブートスクリプトを生成するためのテンプレート。
udev	/dev ディレクトリを準備して Udev を起動します。
udev_retry	Udev の uevent が失敗した場合にこれを再実行します。 そして必要に応じて、生成されたルールファイルを /run/udev から /etc/udev/rules.d へコピーします。

7.3. デバイスとモジュールの扱いについて

第6章にて eudev のビルドを通じて Udev パッケージをインストールしました。 このパッケージがどのように動作するかの詳細を説明する前に、デバイスを取り扱うかつての方法について順を追って説明していきます。

Linux システムは一般に、スタティックなデバイス生成方法を採用していました。 この方法では /dev のもとに膨大な量の（場合によっては何千にもおよぶ）デバイスノードが生成されます。 現実に存在するハードウェアデバイスが存在するかどうかに関わらずです。 これは MAKEDEV スクリプトを通じて生成されます。 このスクリプトからは mknod プログラムが呼び出されますが、その呼び出しは、この世に存在するありとあらゆるデバイスのメジャー/マイナー番号を用いて行われます。

Udev による方法では、カーネルが検知したデバイスだけがデバイスノードとなります。 デバイスノードはシステムが起動するたびに生成されることになるので、 devtmpfs ファイルシステム上に保存されます。（devtmpfs は仮想ファイルシステムであり、メモリ上に置かれます。）デバイスノードの情報はさほど多くないので、消費するメモリ容量は無視できるほど少ないものです。

7.3.1. 開発経緯

2000年2月に新しいファイルシステム devfs がカーネル 2.3.46 に導入され、2.4系の安定版カーネルにて利用できるようになりました。 このファイルシステムはカーネルのソース内に含まれ実現されていましたが、デバイスを動的に生成するこの手法は、主要なカーネル開発者の十分な支援は得られませんでした。

devfs が採用した手法で問題になるのは、主にデバイスの検出、生成、命名の方法です。 特にデバイスの命名方法がおそらく最も重大な問題です。 一般的に言えることとして、デバイス名が変更可能であるならデバイス命名の規則はシステム管理者が考えることであって、特定の開発者に委ねるべきことではありません。 また devfs にはその設計に起因した競合の問題があるため、根本的にカーネルを修正しなければ解消できる問題ではありません。 そこで長い間、保守されることがなかったために非推奨（deprecated）として位置づけられ、最終的に 2006年6月にはカーネルから取り除かれました。

開発版の 2.5 系カーネルと、後にリリースされた安定版のカーネル 2.6 系を経て、新しい仮想ファイルシステム sysfs が登場しました。 sysfs が実現したのは、システムのハードウェア設定をユーザー空間のプロセスとして表に出したことです。 ユーザー空間での設定を可視化したことによって devfs が為していたことを、ユーザー空間にて開発することが可能になったわけです。

7.3.2. Udev の実装

7.3.2.1. Sysfs ファイルシステム

sysfs ファイルシステムについては上で簡単に触れました。 sysfs はどのようにしてシステム上に存在するデバイスを知るのか、そしてどのデバイス番号を用いるべきなのか。 そこが知りたいところです。 カーネルに直接組み込まれて構築されたドライバーの場合は、対象のオブジェクトをカーネルが検出し、そのオブジェクトを sysfs（内部的には devtmpfs）に登録します。 モジュールとしてコンパイルされたドライバーの場合は、その登録がモジュールのロード時に行われます。 sysfs ファイルシステムが（/sys に）マウントされると、ドライバーによって sysfs に登録されたデータは、ユーザー空間のプロセスと（デバイスノードの修正を含む）さまざまな処理を行う udevd にて利用可能となります。

7.3.2.2. デバイスノードの生成

デバイスファイルはカーネルによって、devtmpfs ファイルシステム上に作り出されます。 デバイスノードを登録しようとするドライバーは（デバイスコア経由で）devtmpfs を通じて登録を行います。 devtmpfs のインスタンスが /dev 上にマウントされると、デバイスノードには固定的な名称、パーミッション、所有者の情報が設定され生成されます。

この後にカーネルは udevd に対して uevent を送信します。 udevd は、/etc/udev/rules.d, /lib/udev/rules.d, /run/udev/rules.d の各ディレクトリ内にあるファイルの設定ルールに従って、デバイスノードに対するシンボリックリンクを生成したり、パーミッション、所有者、グループの情報を変更したり、内部的な udevd データベースの項目を修正したりします。

上の三つのディレクトリ内にて指定されるルールは番号づけされており、三つのディレクトリの内容は一つにまとめられます。 デバイスノードの生成時に udevd がそのルールを見つけ出せなかった時は、devtmpfs が利用される際の初期のパーミッションと所有者の情報のままとなります。

7.3.2.3. モジュールのロード

モジュールとしてコンパイルされたデバイスドライバーの場合、デバイス名の別名が作り出されています。 その別名は modinfo プログラムを使えば確認することができます。 そしてこの別名は、モジュールがサポートするバス固有の識別子に関連づけられます。 例えば snd-fm801 ドライバーは、ベンダーID 0x1319 とデバイスID 0x0801 の PCI ドライバーをサポートします。 そして「pci:v00001319d00000801sv*sd*bc04sc01i*」というエイリアスがあります。 たいていのデバイスでは、sysfs を通じてドライバーがデバイスを扱うものであり、ドライバーのエイリアスをバスドライバーが提供します。 /sys/bus/pci/devices/0000:00:0d.0/modalias ファイルならば「pci:v00001319d00000801sv00001319sd00001319bc04sc01i00」という文字列を含んでいるはずです。 Udev が提供するデフォルトの生成規則によって udevd から /sbin/modprobe が呼び出されることになり、その際には uevent に関する環境変数 MODALIAS の設定内容が利用されます。（この環境変数の内容は sysfs 内の modalias ファイルの内容と同じはずです。）そしてワイルドカードが指定されているならそれが展開された上で、エイリアス文字列に合致するモジュールがすべてロードされることになります。

上の例で forte ドライバーがあったとすると、snd-fm801 の他にそれもロードされてしまいます。 これは古いものでありロードされて欲しくないものです。 不要なドライバーのロードを防ぐ方法については後述しているので参照してください。

カーネルは、ネットワークプロトコル、ファイルシステム、NLS サポートといった各種モジュールも、要求に応じてロードすることもできます。

7.3.2.4. ホットプラグ可能な/ダイナミックなデバイスの扱い

USB (Universal Serial Bus) で MP3 プレイヤーを接続しているような場合、カーネルは現在そのデバイスが接続されているということを認識しており、uevent が生成済の状態にあります。 その uevent は上で述べたように udevd が取り扱うことになります。

7.3.3. モジュールロードとデバイス生成の問題

自動的にデバイスが生成される際には、いくつか問題が発生します。

7.3.3.1. カーネルモジュールが自動的にロードされない問題

Udev がモジュールをロードできるためには、バス固有のエイリアスがあって、バスドライバーが sysfs に対して適切なエイリアスを提供していることが必要です。 そうでない場合は、別の手段を通じてモジュールのロードを仕組まなければなりません。 Linux-4.9.5 においての Udev は、INPUT、IDE、PCI、USB、SCSI、SERIO、FireWire の各デバイスに対するドライバーをロードします。 それらのデバイスドライバーが適切に構築されているからです。

目的のデバイスドライバーが Udev に対応しているかどうかは、modinfo コマンドに引数としてモジュール名を与えて実行します。 /sys/bus ディレクトリ配下にあるそのデバイス用のディレクトリを見つけ出して、modalias ファイルが存在しているかどうかを見ることで分かります。

sysfs に modalias ファイルが存在しているなら、そのドライバーはデバイスをサポートし、デバイスとの直接のやり取りが可能であることを表します。 ただしエイリアスを持っていなければ、それはドライバーのバグです。 その場合は Udev に頼ることなくドライバーをロードするしかありません。 そしてそのバグが解消されるのを待つしかありません。

/sys/bus ディレクトリ配下の対応するディレクトリ内に modalias ファイルがなかったら、これはカーネル開発者がそのバス形式に対する modalias のサポートをまだ行っていないことを意味します。 Linux-4.9.5 では ISA バスがこれに該当します。 最新のカーネルにて解消されることを願うしかありません。

Udev は snd-pcm-oss のような「ラッパー (wrapper)」ドライバーや loop のような、現実のハードウェアに対するものではないドライバーは、ロードすることができません。

7.3.3.2. カーネルモジュールが自動的にロードされず Udev もロードしようとしない問題

「ラッパー (wrapper)」モジュールが単に他のモジュールの機能を拡張するだけのものであるなら（例えば snd-pcm-oss は snd-pcm の機能拡張を行うもので、OSS アプリケーションに対してサウンドカードを利用可能なものにするだけのものであるため）modprobe の設定によってラッパーモジュールを先にロードし、その後でラップされるモジュールがロードされるようにします。 これは以下のように /etc/modprobe.d/<filename>.conf ファイル内にて「softdep」の記述行を加えることで実現します。

```
softdep snd-pcm post: snd-pcm-oss
```

「softdep」コマンドは pre: を付与することもでき、あるいは pre: と post: の双方を付与することもできます。 その記述方法や機能に関する詳細は man ページ modprobe.d(5) を参照してください。

問題のモジュールがラッパーモジュールではなく、単独で利用できるものであれば、 modules ブートスクリプトを編集して、システム起動時にこのモジュールがロードされるようにします。 これは /etc/sysconfig/modules ファイルにて、そのモジュール名を単独の行に記述することで実現します。 この方法はラッパーモジュールに対しても動作しますが、この場合は次善策となります。

7.3.3.3. Udev が不必要なモジュールをロードする問題

不必要なモジュールはこれをビルドしないことにするか、あるいは /etc/modprobe.d/blacklist.conf ファイルにブラックリスト（blacklist）として登録してください。 例えば forte モジュールをブラックリストに登録するには以下のようにします。

```
blacklist forte
```

ブラックリストに登録されたモジュールは modprobe コマンドを使えば手動でロードすることもできます。

7.3.3.4. Udev が不正なデバイスを生成する、または誤ったシンボリックリンクを生成する問題

デバイス生成規則が意図したデバイスに合致していないと、この状況が往々にして起こります。 例えば生成規則の記述が不十分であった場合、SCSI ディスク（本来望んでいるデバイス）と、それに対応づいたものとしてベンダーが提供する SCSI ジェネリックデバイス（これは誤ったデバイス）の両方に生成規則が合致してしまいます。 記述されている生成規則を探し出して正確に記述してください。 その際には udevadm info コマンドを使って情報を確認してください。

7.3.3.5. Udev 規則が不審な動きをする問題

この問題は、一つ前に示したものが別の症状となって現れたものかもしれません。 そのような理由でなく、生成規則が正しく sysfs の属性を利用しているのであれば、それはカーネルの処理タイミングに関わる問題であって、カーネルを修正すべきものです。 今の時点では、該当する sysfs の属性の利用を待ち受けるような生成規則を生成し、/etc/udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules ファイルにそれを追加することで対処できます。（/etc/udev/rules.d/10-wait_for_sysfs.rules ファイルがなければ新規に生成します。）もしこれを実施してうまくいった場合は LFS 開発メーリングリストにお知らせください。

7.3.3.6. Udev がデバイスを生成しない問題

ここでは以下のことを前提としています。 まずドライバーがカーネル内に静的に組み入れられて構築されているか、あるいは既にモジュールとしてロードされていること。 そして Udev が異なった名前のデバイスを生成していないことです。

Udev がデバイスノード生成のために必要となる情報を知るためには、カーネルドライバーが sysfs に対して属性データを提供していなければなりません。 これはカーネルツリーの外に配置されるサードパーティ製のドライバーであれば当たり前のことです。 したがって /lib/udev/devices において、適切なメジャー、マイナー番号を用いた静的なデバイスノードを生成してください。（カーネルのドキュメント devices.txt またはサードパーティベンダーが提供するドキュメントを参照してください。）この静的デバイスノードは、udev によって /dev にコピーされます。

7.3.3.7. 再起動後にデバイスの命名順がランダムに変わってしまう問題

これは Udev の設計仕様に従って発生するもので、uevent の扱いとモジュールのロードが平行して行われるためです。 このために命名順が予期できないものになります。 これを「固定的に」することはできません。 ですからカーネルがデバイス名を固定的に定めるようなことを求めるのではなく、シンボリックリンクを用いた独自の生成規則を作り出して、そのデバイスの固定的な属性を用いた固定的な名前を用いる方法を取ります。 固定的な属性とは例えば、Udev によってインストールされるさまざまな *_id という名のユーティリティが出力するシリアル番号などです。 設定例については 7.4.「デバイスの管理」や 7.5.「全般的なネットワークの設定」を参照してください。

7.3.4. 参考情報

さらに参考になるドキュメントが以下のサイトにあります：

- devfs のユーザー空間での実装方法 http://www.kroah.com/linux/talks/ols_2003_udev_paper/Reprint-Kroah-Hartman-OLS2003.pdf
- sysfs ファイルシステム http://www.kernel.org/pub/linux/kernel/people/mochel/doc/papers/ols-2005/mochel.pdf

7.4. デバイスの管理

7.4.1. ネットワークデバイス

Udev はデフォルトにおいて、ネットワークデバイスの名前づけを、ファームウェア/BIOS データや物理的特性、つまりバス、スロット、MACアドレスに基づいて取り決めます。 このような命名規則とする目的は、複数のネットワークデバイスの命名を正確に行うためであり、検出した順番に命名することがないようにするためです。 例えば Intel 製と Realtek 製の二つのネットワークカードを持つコンピューターにおいて、 Intel 製が eth0、Realtek 製が eth1 となったとします。 システムを再起動した際には、番号割り振りが逆転することもあります。

新たな命名スキーマでは、ネットワークデバイス名が例えば enp5s0 や wlp3s0 といったものになります。 もしこの命名規則を望まない場合は、従来の命名規則とすることもできます。 またはカスタムスキーマを定義することもできます。

7.4.1.1. カーネルコマンドラインによる持続的命名の回避

従来の命名スキーマ、例えば eth0、eth1 といったものは、カーネルコマンドラインに **net.ifnames=0** を加えることで利用できます。 この設定は、イーサネットデバイスをただ一つしか持たないシステムでは適正なものとなります。 一方ラップトップでは、eth0 と wlan0 といった複数のイーサネット接続が利用されることが多いものです。 カーネルコマンドラインは GRUB の設定ファイルにて設定できます。 詳しくは8.4.4.「GRUB 設定ファイルの生成」を参照してください。

7.4.1.2. Udev カスタムルールの生成

命名スキーマは Udev カスタムルールを生成することによってカスタマイズが可能です。 Udev には初期ルールを生成するスクリプトが含まれています。 このルールを生成するには以下を実行します。

```
bash /lib/udev/init-net-rules.sh
```

そして /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules ファイルを参照し、どういった名前によりネットワークデバイスが定められているかを確認します。

```
cat /etc/udev/rules.d/70-persistent-net.rules
```

注記

ネットワークカードに対して手動で MAC アドレスを割り当てた場合、あるいは Qemu や Xen のような仮想環境における場合においては、ネットワークルールファイルが生成されないことがあります。 これはアドレスの割り当てが確定されないためです。 こういった場合は本方法を利用することはできません。

このファイルの先頭にはコメントが数行あり、続いてそれぞれの NIC に対する行があります。 NIC ごとの記述では一行めがコメントで、そのハードウェア ID が記されています。（PCI カードである場合、PCI ベンダとデバイス ID が記述されます。）またドライバーが検出できている場合には、カッコ書きでドライバー名も示されます。 ハードウェア ID もドライバー名も、インターフェースに対して与えられる名称とは無関係で、単に分かりやすくするために記されているにすぎません。 二行めは Udev ルールであり、その NIC を定め、名称を割り当てている記述です。

Udev ルールはいくつかのキー項目で構成され、それぞれがカンマで区切られるか、場合によっては空白文字で区切られています。 このキー項目とその内容は以下のようになります。

- SUBSYSTEM=="net" - ネットワークカードではないデバイスは無視することを指示します。
- ACTION=="add" - uevent の add イベントではないものは無視することを指示します。（uevent の ”remove” イベントや ”change” イベントも発生しますが、これらはネットワークインターフェースの名前を変更するものではありません。）
- DRIVERS=="?*" - Udev に対して VLAN やブリッジサブインターフェース（bridge sub-interfaces）を無視することを指示します。（サブインターフェースにはドライバーがないためです。）サブインターフェースに名前が割り当てられたとすると、親デバイスの名前と衝突してしまうため、サブインターフェースの名前割り当てはスキップされます。
- ATTR{address} - このキーの値は NIC の MAC アドレスを表します。
- ATTR{type}=="1" - 特定のワイヤレスドライバーでは複数の仮想インターフェースが生成されますが、そのうちの主となるインターフェースにのみルールが合致するようにします。 二つめ以降のインターフェースに対する処理は、VLAN やブリッジサブインターフェースがスキップされるのと同じくスキップされます。 名前割り当てが行われてしまうと名前衝突を起こすためです。
- NAME - Udev がインターフェースに対して割り当てる名前をキーの値として指定します。

NAME に定義される値が重要です。 どのネットワークカードにどんな名前が割り当てられているかをよく確認してください。 そして以下において設定ファイルを生成する際には NAME に定義されている名称を利用してください。

7.4.2. CD-ROM のシンボリックリンク

後にインストールしていくソフトウェア（例えばメディアプレーヤーなど）では、/dev/cdrom や /dev/dvd といったシンボリックリンクを必要とするものがあります。 これらはそれぞれ CD-ROM、DVD-ROM を指し示しています。 こういったシンボリックリンクは /etc/fstab ファイルに設定しておくのが便利です。 Udev が提供するスクリプトファイルで、ルールファイル（rules files）を生成するものがあります。 そのルールファイルは、各デバイスの性能に応じてシンボリックファイルを構成します。 もっともこのスクリプトファイルを利用する際には、二つ存在する動作モードのいずれを用いるかを決めなければなりません。

一つは「パス（by-path)」モードです。 これは USB デバイスやファームウェアデバイスに対してデフォルトで利用されます。 これによって作り出されるルールは CD や DVD デバイスに対して物理パスが用いられます。 二つめは「ID（by-id)」モードです。 デフォルトで IDE や SCSI デバイスに利用されます。 このモードで作り出されるルールは CD や DVD デバイス自身が持つ識別文字列が用いられます。 パスは Udev の path_id スクリプトによって決定します。 一方、識別文字列は ata_id プログラムまたは scsi_id プログラムによってハードウェアから読み出されます。 ata_id、scsi_id のいずれであるかは、そのデバイスによって決まります。

二つの方法にはそれぞれに利点があります。 どちらの方法が適切であるかは、デバイスがどのように変更されるかによります。 デバイスに対する物理パス（そのデバイスが接続しているポートやスロット）を変更したい場合、例えば IDE ポートや USB コネクタを切り替えたいような場合、「ID（by-id)」モードを使うべきです。 一方、デバイスの識別文字列を変えたい場合、つまりデバイスが故障したために、同等の性能の新しいデバイスを同一コネクタに接続しようとする場合は、「パス（by-path)」モードを使うべきです。

いずれの変更の可能性もあるならば、より変更の可能性の高いケースに従ってモードを選ぶべきです。

重要項目

外部接続のデバイス（例えば USB 接続の CD ドライブなど）はパス（by-path）モードを用いるべきではありません。 そのようなデバイスは接続するたびに外部ポートが新しくなり、物理パスが変わってしまうためです。 こういった外部接続のデバイスを物理パスで認識させ Udev ルールを構成した場合は、あらゆるデバイスがこの問題を抱えることになります。 これは CD や DVD ドライブだけに限った話ではありません。

Udev スクリプトが利用しているキーの値を確認したい場合は /sys ディレクトリ配下を確認します。 例えば CD-ROM デバイスについては /sys/block/hdd を確認します。 そして以下のようなコマンドを実行します。

```
udevadm test /sys/block/hdd
```

出力結果には *_id というプログラム名を示した行がたくさん表示されます。 「ID（by-id)」モードは ID_SERIAL 値が存在して空でなければこれを利用します。 そうでない時は ID_MODEL と ID_REVISION を利用します。 「パス（by-path)」モードは ID_PATH の値を利用します。

デフォルトモードが利用状況に合わない場合は、/etc/udev/rules.d/83-cdrom-symlinks.rules ファイルに対して以下のように修正を行います。 *mode* の部分は「by-id」か「by-path」に置き換えます。

```
sed -i -e 's/"write_cd_rules"/"write_cd_rules mode"/' \
    /etc/udev/rules.d/83-cdrom-symlinks.rules
```

ここでルールファイルやシンボリックリンクを作成する必要はありません。 この時点ではホストの /dev ディレクトリに対して LFS システムに向けてのバインドマウント（bind-mounted）を行っており、ホスト上にシンボリックリンクが存在していると仮定しているからです。 ルールファイルとシンボリックリンクは LFS システムを初めてブートした時に生成されます。

もっとも CD-ROM デバイスが複数あると、ブート時に生成されるシンボリックリンクが、ホスト利用時に指し示されていたものとは異なる場合が発生します。 デバイスの検出順は予測できないものだからです。 LFS システムを初めて起動した時の割り当ては、たぶん固定的に行われるはずです。 つまりこのことは、ホストシステムと LFS システムの双方で、シンボリックリンクが同じデバイスを指し示すことが必要である場合にのみ問題となります。 これが必要であるなら、生成されている /etc/udev/rules.d/70-persistent-cd.rules ファイルを起動後に調査して（おそらくは編集して）割り当てられたシンボリックリンクが望むものになっているかどうかを確認してください。

7.4.3. 重複するデバイスの取り扱い方

7.3.「デバイスとモジュールの扱いについて」で説明したように、/dev 内に同一機能を有するデバイスがあったとすると、その検出順は本質的にランダムです。 例えば USB 接続のウェブカメラと TV チューナーがあったとして、/dev/video0 がウェブカメラを、また /dev/video1 がチューナーをそれぞれ参照していたとしても、システム起動後はその順が逆になることがあります。 サウンドカードやネットワークカードを除いた他のハードウェアであれば、Udev ルール

を適切に記述することで、固定的なシンボリックリンクを作り出すことができます。 ネットワークカードについては、別途 7.5.「全般的なネットワークの設定」にて説明しています。 またサウンドカードの設定方法は BLFS にて説明しています。

利用しているデバイスに上の問題の可能性がある場合（お使いの Linux ディストリビューションではそのような問題がなかったとしても）/sys/class ディレクトリや /sys/block ディレクトリ配下にある対応ディレクトリを探してください。 ビデオデバイスであれば /sys/class/video4linux/videoX といったディレクトリです。 そしてそのデバイスを一意に特定する識別情報を確認してください。（通常はベンダー名、プロダクトID、シリアル番号などです。）

```
udevadm info -a -p /sys/class/video4linux/video0
```

シンボリックリンクを生成するルールを作ります。

```
cat > /etc/udev/rules.d/83-duplicate_devs.rules << "EOF"

# Persistent symlinks for webcam and tuner
KERNEL=="video*", ATTRS{idProduct}=="1910", ATTRS{idVendor}=="0d81", \
    SYMLINK+="webcam"
KERNEL=="video*", ATTRS{device}=="0x036f", ATTRS{vendor}=="0x109e", \
    SYMLINK+="tvtuner"

EOF
```

こうしたとしても /dev/video0 と /dev/video1 はチューナーとウェブカメラのいずれかをランダムに指し示すことに変わりありません。（したがって直接このデバイス名を使ってはなりません。）しかしシンボリックリンク /dev/tvtuner と /dev/webcam は常に正しいデバイスを指し示すようになります。

7.5. 全般的なネットワークの設定

本節はネットワークカードを設定する場合にのみ作業を行っていきます。

ネットワークカードを利用しないのであれば、ネットワークカードに関する設定は、おそらくすべて不要なはずです。 そのような場合は、ランレベルディレクトリ（/etc/rc.d/rc*.d）から、シンボリックリンク network を削除してください。 これは 7.2.「LFS-ブートスクリプト-20150222」 にてブートスクリプトをインストールした後に行ってください。

7.5.1. ネットワークインターフェースに対する設定ファイルの生成

どのネットワークインターフェースが起動したり停止したりするかは /etc/sysconfig/ ディレクトリ配下のファイルの指定によります。 このディレクトリには、設定を行ないたい各ネットワークインターフェースに対するファイル ifconfig.xyz を準備します。 この「xyz」はネットワークカードインターフェースに対する名称（例えば eth0 など）です。 このファイルにはネットワークインターフェースの属性、つまり IP アドレスやサブネットマスクなどを定義します。 ファイルベース名は ifconfig とすることが必要です。

注記

前節に示した手順を実施しなかった場合、Udev は、システムの物理的な特性に従った enp2s1 などのような名称をネットワークカードインターフェースに割り当てます。 インタフェース名がよく分からない場合は、システム起動直後に常に ip link を実行してください。 繰り返しますが ifconfig.xyz という名称はネットワークカードインターフェースを示す正しい名称（つまり ifconfig.enp2s1 や ifconfig.eth0）としなければなりません。 これを行っていない場合には、システム起動時にネットワークインターフェースが初期化されないことになります。

以下のコマンドは、eth0 デバイスに対して固定 IP アドレスを設定するファイルを生成する例です。

```
cd /etc/sysconfig/
cat > ifconfig.eth0 << "EOF"
ONBOOT=yes
IFACE=eth0
SERVICE=ipv4-static
IP=192.168.1.2
GATEWAY=192.168.1.1
PREFIX=24
BROADCAST=192.168.1.255
EOF
```

各変数の値は各ファイルごとに適切なものに設定してください。

ONBOOT 変数を「yes」に設定した場合、システム起動時に System V ネットワークスクリプトがネットワークインターフェースカード（network interface card; NIC）を起動します。 「yes」以外に設定すると、ネットワークスクリプトからの NIC の起動がなくなり、NIC は自動では起動しなくなります。 ネットワークインターフェースは ifup や ifdown といったコマンドを使って、起動や停止を行うことができます。

IFACE 変数は、インターフェース名を定義します。 例えば eth0 といったものです。 これはネットワークデバイスの設定を行うすべてのファイルにて必要な定義です。

SERVICE 変数はIP アドレスの取得方法を指定します。 LFS-ブートスクリプトは IP アドレス割り当て方法をモジュール化しています。 そして /lib/services/ ディレクトリに追加でファイルを生成すれば、他の IP アドレス割り当て方法をとることもできます。 通常は DHCP（Dynamic Host Configuration Protocol）において利用されるものです。 これについては BLFS ブックにて説明しています。

GATEWAY 変数は、デフォルトゲートウェイが存在するならその IP アドレスを指定します。 存在しない場合は、の変数設定を行っている一行をコメントにします。

PREFIX 変数はサブネットマスクにて用いられるビット数を指定します。 IP アドレスの各オクテット（octet）は 8 ビットで構成されます。 例えばサブネットマスクが 255.255.255.0 である場合、ネットワーク番号（network number）を特定するには最初の三つのオクテット（24ビット）が用いられることを意味します。 もし 255.255.255.240 であるなら、最初の 28 ビットということになります。 24 ビットを超えるプレフィックスは、通常は DSL やケーブルを用いたインターネットサービスプロバイダー（Internet Service Provider; ISP）がよく利用しています。 上の例（PREFIX=24）では、サブネットマスクは 255.255.255.0 となります。 PREFIX 変数の値は、ネットワーク環境に応じて変更してください。 これが省略された場合は、デフォルトの 24 が用いられます。

より詳しくは ifup の man ページを参照してください。

7.5.2. /etc/resolv.conf ファイルの生成

インターネットへの接続を行う場合には、ドメイン名サービス（domain name service; DNS）による名前解決を必要とします。 これによりインターネットドメイン名を IP アドレスに、あるいはその逆の変換を行います。 これを行うには ISP やネットワーク管理者が指定する DNS サーバーの割り振り IP アドレスを /etc/resolv.conf ファイルに設定します。 以下のコマンドによりこのファイルを生成します。

```
cat > /etc/resolv.conf << "EOF"
# Begin /etc/resolv.conf

domain <Your Domain Name>
nameserver <IP address of your primary nameserver>
nameserver <IP address of your secondary nameserver>

# End /etc/resolv.conf
EOF
```

domain ステートメントは省略するか、search ステートメントで代用することが可能です。 詳しくは resolv.conf の man ページを参照してください。

<IP address of the nameserver>（ネームサーバーの IP アドレス）の部分には、DNS が割り振る適切な IP アドレスを記述します。 IP アドレスの設定は複数行う場合もあります。(代替構成を必要とするなら二次サーバーを設けることでしょう。）一つのサーバーのみで十分な場合は、二つめの nameserver の行は削除します。 ローカルネットワークにおいてはルーターの IP アドレスを設定することになるでしょう。

注記

Google Public IPv4 DNS アドレスは 8.8.8.8 と 8.8.4.4 です。

7.5.3. ホスト名の設定

システム起動時には /etc/hostname が参照されてシステムのホスト名が決定されます。

以下のコマンドを実行することで /etc/hostname ファイルを生成するとともに、ホスト名を設定します。

```
echo "<lfs>" > /etc/hostname
```

<lfs> の部分は、各システムにおいて定めたい名称に置き換えてください。 ここでは完全修飾ドメイン名（Fully Qualified Domain Name; FQDN）は指定しないでください。 その情報は /etc/hosts ファイルにて行います。

7.5.4. /etc/hosts ファイルの設定

IPアドレス、完全修飾ドメイン名（Fully Qualified Domain Name; FQDN)、エイリアスの各設定を /etc/hosts ファイルにて行います。 その文法は以下のようになります。

```
IP_address myhost.example.org aliases
```

インターネットに公開されていないコンピューターである場合（つまり登録ドメインであったり、あらかじめ IP アドレスが割り当てられていたりする場合。 普通のユーザーはこれを持ちません。）IP アドレスはプライベートネットワーク IP アドレスの範囲で指定します。 以下がそのアドレス範囲です。

```
Private Network Address Range      Normal Prefix
10.0.0.1 - 10.255.255.254           8
172.x.0.1 - 172.x.255.254           16
192.168.y.1 - 192.168.y.254         24
```

x は 16 から 31、y は 0 から 255 の範囲の数値です。

IP アドレスの例は 192.168.1.1 となります。 また FQDN の例としては lfs.example.org となります。

ネットワークカードを用いない場合でも FQDN の記述は行ってください。 特定のプログラムが動作する際に必要となることがあるからです。

以下のようにして /etc/hosts ファイルを生成します。

```
cat > /etc/hosts << "EOF"
# Begin /etc/hosts (network card version)

127.0.0.1 localhost
<192.168.1.1> <HOSTNAME.example.org> [alias1] [alias2 ...]

# End /etc/hosts (network card version)
EOF
```

<192.168.1.1> や *<HOSTNAME.example.org>* の部分は利用状況に応じて書き換えてください。（ネットワーク管理者から IP アドレスを指定されている場合や、既存のネットワーク環境に接続する場合など。）. エイリアスの記述は省略しても構いません。

ネットワークカードを設定しない場合は、以下のようにして /etc/hosts ファイルを生成します。

```
cat > /etc/hosts << "EOF"
# Begin /etc/hosts (no network card version)

127.0.0.1 <HOSTNAME.example.org> <HOSTNAME> localhost

# End /etc/hosts (no network card version)
EOF
```

7.6. System V ブートスクリプトの利用と設定

7.6.1. System V ブートスクリプトはどのようにして動くのか

Linux では SysVinit という特別なブート機能があり ランレベル（run-levels）という考え方に基づいています。 ランレベルの扱いはシステムによって異なりますので、ある Linux において動作しているからといって LFS においても全く同じように動くわけではありません。 LFS では独自の方法でこれを取り入れることにします。 ただし標準として受け入れられるような方法を取ります。

SysVinit（これ以降は「init」と表現します）はランレベルという仕組みにより動作します。 ランレベルには7つのレベル（0 から 6）があります。（実際にはランレベルはそれ以上あるのですが、特殊な場合であって普通は利用されません。 詳しくは **init(8)** を参照してください。）各レベルは、コンピューターの起動時における処理動作に対応づいており、デフォルトのランレベルは 3 となっています。 ランレベルの詳細を以下に説明します。

```
0: コンピューターの停止
1: シングルユーザーモード
2: マルチユーザーモード、ネットワークなし
3: マルチユーザーモード、ネットワークあり
4: 将来の拡張用として予約されています。 3 と同じものとして扱われます。
5: 4 と同様。通常（X の xdm や KDE の kdm のような）GUI ログインに用いられます。
6: コンピューターの再起動
```

7.6.2. Sysvinit の設定

カーネルの初期化にあたって最初に起動するプログラムは、コマンドラインから指定されるものか、あるいはデフォルトでは init です。 このプログラムは初期設定ファイル **/etc/inittab** を読み込みます。 そのファイルは以下のようにして生成します。

```
cat > /etc/inittab << "EOF"
# Begin /etc/inittab

id:3:initdefault:

si::sysinit:/etc/rc.d/init.d/rc S

l0:0:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 0
l1:S1:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 1
l2:2:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 2
l3:3:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 3
l4:4:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 4
l5:5:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 5
l6:6:wait:/etc/rc.d/init.d/rc 6

ca:12345:ctrlaltdel:/sbin/shutdown -t1 -a -r now

su:S016:once:/sbin/sulogin

1:2345:respawn:/sbin/agetty --noclear tty1 9600
2:2345:respawn:/sbin/agetty tty2 9600
3:2345:respawn:/sbin/agetty tty3 9600
4:2345:respawn:/sbin/agetty tty4 9600
5:2345:respawn:/sbin/agetty tty5 9600
6:2345:respawn:/sbin/agetty tty6 9600

# End /etc/inittab
EOF
```

この初期化ファイルに関することは inittab の man ページにて説明されています。 LFS において重要となるコマンドは rc です。 初期化ファイルは rc コマンドに対してスクリプトの実行を指示します。 実行されるスクリプトは **/etc/rc.d/rcS.d** ディレクトリにて S で始まるスクリプトです。 そしてその後に **/etc/rc.d/rc?.d** ディレクトリにて、同じく S で始まるスクリプトも実行されます。 ここで ? は、初期化を行う際の数値を示します。

扱いやすさを考慮して、rc スクリプトは **/lib/lsb/init-functions** ディレクトリにあるライブラリ群を読み込む形にしています。 このライブラリは、さらにオプションで設定ファイル **/etc/sysconfig/rc.site** を読み込みます。本節以降に説明している、各種の設定ファイルにおけるパラメーターは、上のファイルにて設定することもできます。 上のファイルは、システム上のパラメーターを 1 つのファイルに集約して設定できるようになっています。

デバッグがしやすいように、各ライブラリの関数スクリプトは、すべて **/run/var/bootlog** にログを出力するようになっています。 **/run** ディレクトリは tmpfs であることから、**/run/var/bootlog** ファイルはブート前後にて恒常的なファイルではありません。 ただしブート処理の最後には、恒常的なファイルである **/var/log/boot.log** に情報が出力されます。

7.6.2.1. ランレベルの変更

ランレベルを変更するには init ***<runlevel>*** を実行します。 *<runlevel>* はランレベルを示す数字です。 例えばコンピューターを再起動するには init 6 コマンドを実行します。 これは reboot コマンドのエイリアスとなっています。 同様に init 0 は halt のエイリアスです。

/etc/rc.d ディレクトリの配下には複数のサブディレクトリがあります。 そのディレクトリ名は rc?.d のようになっています。(? はランレベルの数字を表します。)また rcsysinit.d というサブディレクトリもあります。 それらサブディレクトリ内には数多くのシンボリックリンクがあります。 シンボリックリンクの先頭一文字には K や S が用いられ、続いて二桁の数値文字がつけられています。 K はサービスの停止(kill)、S はサービスの起動(start)を意味します。 二桁の数字はスクリプトの起動順を定めるもので、00 から 99 までが割振られ、小さな数字から順に実行されます。 init コマンドによってランレベルが変更される時は、そのランレベルに応じて必要なサービスが起動するか停止することになります。

スクリプトファイルは /etc/rc.d/init.d ディレクトリにあります。 実際の処理はここにあるファイルが用いられます。 これらに対してはシンボリックリンクが用意されています。 サービスの起動(S で始まる)と停止(K で始まる)を行うシンボリックリンクは /etc/rc.d/init.d ディレクトリにあるスクリプトを指し示しています。 このようにしているのは、各スクリプトが *start*、 *stop*、 *restart*、 *reload*、 *status* といったさまざまなパラメーターにより呼び出されるためです。 K の名前を持つシンボリックリンクが起動されるということは *stop* パラメーターをつけて該当するスクリプトが実行されるということです。 同様に S の名前を持つシンボリックリンクが起動されるということは *start* パラメーターをつけて呼び出されるということになります。

上の説明には例外があります。 rc0.d ディレクトリと rc6.d ディレクトリにある、S で始まるシンボリックリンクはサービスを何も起動させません。 *stop* パラメーターが与えられ、何らかのサービスを停止します。 ユーザーがシステムを再起動したり停止したりする際には、サービスを起動させる必要はないわけで、システムを停止するだけで済むからです。

スクリプトに対するパラメーターは以下のとおりです。

start
サービスを起動します。

stop
サービスを停止します。

restart
サービスをいったん停止し再起動します。

reload
サービスの設定ファイルを更新します。 設定ファイルが変更されたものの、サービスの再起動は必要ではない場合に利用します。

status
サービスがどの PID 値で動いているかを表示します。

ブート機能を動作させる方法は自由に取り決めて設定して構いません。 このシステムはつまるところあなた自身のシステムだからです。 上に示したファイル類はブート機能を定めた一例に過ぎません。

7.6.3. Udev ブートスクリプト

初期起動スクリプト /etc/rc.d/init.d/udev は udevd を起動し、カーネルにより既に生成されている "コールドプラグ"のデバイスをすべて稼動させます。 そしてすべてのルールが起動完了するのを待ちます。 このスクリプトは /sbin/hotplug のデフォルトから uevent ハンドラーを取り除きます。 この時点でカーネルは、他の実行モジュールを呼び出す必要がないからです。 そのかわりに、udevdは、カーネルが起動する uevent をネットリンクソケット(netlink socket)上で待ち受けます。

初期起動スクリプト /etc/rc.d/init.d/udev_retry は、サブシステムに対するイベントの再起動を行ないます。 そのサブシステムとはファイルシステムに依存するもので、mountfs が実行されるまでマウントされません。(特に /usr や /var がこれに該当します。)mountfs スクリプトの後にこのスクリプトが実行されるので、(イベントが再起動されるものであれば)二度目には成功します。 このスクリプトは /etc/sysconfig/udev_retry ファイルにより設定が可能で、コメントを除く記述項目はすべてサブシステム名を表わし、二度目の起動時のリトライ対象となります。(デバイスのサブシステムを知るには udevadm info --attribute-walk <device> を実行します。 ここで <device> は、/dev や /sys から始まる絶対パスであり /dev/sr0 や /sys/class/rtc などを表します。)

7.6.3.1. モジュールのロード

モジュールとしてコンパイルされたデバイスドライバーの場合、デバイス名の別名が作り出されています。 その別名は modinfo プログラムを使えば確認することができます。 そしてこの別名は、モジュールがサポートするバス固有の識別子に関連づけられます。 例えば snd-fm801 ドライバーは、ベンダーID 0x1319 とデバイスID 0x0801

の PCI ドライバーをサポートします。 そして「pci:v00001319d00000801sv*sd*bc04sc01i*」というエイリアスがあります。 たいていのデバイスでは、sysfs を通じてドライバーがデバイスを扱うものであり、ドライバーのエイリアスをバスドライバーが提供します。 /sys/bus/pci/devices/0000:00:0d.0/modalias ファイルならば「pci:v00001319d00000801sv00001319sd00001319bc04sc01i00」という文字列を含んでいるはずです。 Udev が提供するデフォルトの生成規則によって udevd から /sbin/modprobe が呼び出されることになり、その際には uevent に関する環境変数 MODALIAS の設定内容が利用されます。（この環境変数の内容は sysfs 内の modalias ファイルの内容と同じはずです。）そしてワイルドカードが指定されているならそれが展開された上で、エイリアス文字列に合致するモジュールがすべてロードされることになります。

上の例で forte ドライバーがあったとすると、snd-fm801 の他にそれもロードされてしまいます。 これは古いものでありロードされて欲しくないものです。 不要なドライバーのロードを防ぐ方法については後述しているので参照してください。

カーネルは、ネットワークプロトコル、ファイルシステム、NLS サポートといった各種モジュールも、要求に応じてロードすることもできます。

7.6.3.2. ホットプラグ可能な/ダイナミックなデバイスの扱い

USB (Universal Serial Bus) で MP3 プレイヤーを接続しているような場合、カーネルは現在そのデバイスが接続されているということを認識しており、uevent が生成済の状態にあります。 その uevent は上で述べたように udevd が取り扱うことになります。

7.6.4. システムクロックの設定

setclock スクリプトはハードウェアクロックから時刻を読み取ります。 ハードウェアクロックは BIOS クロック、あるいは CMOS (Complementary Metal Oxide Semiconductor) クロックとしても知られているものです。 ハードウェアクロックが UTC に設定されていると setclock スクリプトは /etc/localtime ファイルを参照して、ハードウェアクロックの示す時刻をローカル時刻に変換します。 /etc/localtime ファイルは hwclock プログラムに対して、ユーザーがどのタイムゾーンに位置するかを伝えます。 ハードウェアクロックが UTC に設定されているかどうかを知る方法はないので、手動で設定を行う必要があります。

setclock スクリプトは udev によって起動されます。この時というのはブート時であり、カーネルがハードウェアを検出する時です。 停止パラメータを与えて手動でこのスクリプトを実行することもできます。 その場合 CMOS クロックに対してシステム時刻が保存されます。

ハードウェアクロックが UTC に設定されているかどうか忘れた場合は **hwclock --localtime --show** を実行すれば確認できます。 このコマンドにより、ハードウェアクロックに基づいた現在時刻が表示されます。 その時刻が手元の時計と同じ時刻であれば、ローカル時刻として設定されているわけです。 一方それがローカル時刻でなかった場合は、おそらくは UTC に設定されているからでしょう。 hwclock によって示された時刻からタイムゾーンに応じた一定時間を加減してみてください。 例えばタイムゾーンが MST であった場合、これは GMT -0700 なので、7時間を加えればローカル時刻となります。

ハードウェアクロックが UTC 時刻として設定されていない場合は、以下に示す変数 UTC の値を *0*（ゼロ）にしてください。

以下のコマンドを実行して /etc/sysconfig/clock ファイルを新規に作成します。

```
cat > /etc/sysconfig/clock << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/clock

UTC=1

# Set this to any options you might need to give to hwclock,
# such as machine hardware clock type for Alphas.
CLOCKPARAMS=

# End /etc/sysconfig/clock
EOF
```

LFS において時刻の取り扱い方を示した分かりやすいヒントが http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/time.txt にあります。 そこではタイムゾーン、UTC、環境変数 TZ などについて説明しています。

注記

CLOCKPARAMS と UTC パラメーターは /etc/sysconfig/rc.site ファイルにて設定することもできます。

7.6.5. Linux コンソールの設定

この節ではブートスクリプト console の設定方法について説明します。 このスクリプトはキーボードマップ、コンソールフォント、カーネルログレベルを設定します。 非アスキー文字（例えば著作権、ポンド記号、ユーロ記号など）を使わず、キーボードが US 配列であるなら、本節は読み飛ばしてください。 console ブートスクリプトの設定ファイルが存在しない場合（あるいはこれと同等の設定が rc.site にない場合）は、このスクリプトは何も行いません。

console スクリプトは、設定情報を /etc/sysconfig/console ファイルから読み込みます。 まずは利用するキーボードマップとスクリーンフォントを定めます。 さまざまな言語に応じた設定方法については http://www.tldp.org/HOWTO/HOWTO-INDEX/other-lang.html を参照してください。 よく分からない場合は /usr/share/keymaps ディレクトリや /usr/share/consolefonts ディレクトリを見て、正しいキーマップとスクリーンフォントを探してください。 マニュアルページ loadkeys(1) と setfont(8) を見て、これらのプログラムに対する適切な引数を決定してください。

/etc/sysconfig/console ファイルの各行には、変数 = ”値” という記述を行います。 そして変数には以下に示すものが利用可能です。

LOGLEVEL
: この変数は、コンソールに出力されるカーネルメッセージのログレベルを指定するもので dmesg コマンドにより設定されます。 有効な設定値は ”1”（メッセージ出力なし）から ”8” まであり、デフォルトは ”7” です。

KEYMAP
: この変数は loadkeys プログラムに対する引数を指定します。 このプログラムは「it」などのキーマップをロードします。 この変数がセットされていない場合、ブートスクリプトは loadkeys プログラムを実行せず、デフォルトのカーネルキーマップが用いられます。 キーマップによっては同一名に対して重複した定義を持つものもあります。（cz とその変形が qwerty/ と qwertz/ にあり、es は olpc/ と qwerty/ に、trf は fgGIod/ と qwerty/ にあります）こういった場合には、適切なキーマップがロードされるように、親ディレクトリを必ず指定する必要があります（qwerty/es など）。

KEYMAP_CORRECTIONS
: この変数は（あまり利用されませんが）loadkeys プログラムを二度目に呼び出す際の引数を指定します。 普通のキーマップでは十分な設定にならない時の微調整を行うために利用します。 例えばユーロ記号がキーマップの中に含まれておらずこれを付け加える場合には、この変数に対して「euro2」を設定します。

FONT
: この変数は setfont プログラムへの引数を指定します。 一般にこの変数にはフォント名、「-m」、アプリケーションキャラクターマップ（application character map）を順に指定します。 例えばフォントとして 「lat1-16」、アプリケーションキャラクターマップとして「8859-1」を指定する場合、この変数には「lat1-16 -m 8859-1」を設定します。（これは米国にて適当な設定となります。）UTF-8 モードの場合、カーネルは UTF-8 キーマップ内の 8 ビットキーコードを変換するためにアプリケーションキャラクターマップを利用します。 したがって ”-m” パラメーターには、キーマップ内キーコードのエンコーディングを指定する必要があります。

UNICODE
: コンソールを UTF-8 モードにするには、この変数を「1」、「yes」、「true」のいずれかに指定します。 UTF-8 ベースのロケールであればこの設定を行います。 そうでないロケールにおいて設定するのは不適切です。

LEGACY_CHARSET
: キーボードレイアウトの多くに対して、Kbd パッケージは標準的な Unicode キーマップを提供していません。 この変数にて UTF-8 ではないキーマップのエンコーディングが指定されていたら console ブートスクリプトは利用可能な UTF-8 キーマップに変換します。

以下はいくつかの設定例です。

- Unicode を用いない設定では、普通は KEYMAP 変数と FONT 変数のみを定めます。 例えばポーランド語の設定であれば以下のようになります。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

KEYMAP="pl2"
FONT="lat2a-16 -m 8859-2"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 上で述べたように、普通のキーマップの設定に対して多少の修正を必要とする場合もあります。 以下の例はドイツ語のキーマップにユーロ記号を加える例です。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

KEYMAP="de-latin1"
KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
FONT="lat0-16 -m 8859-15"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 以下は Unicode を用いたブルガリア語の設定例です。 通常のキーマップが存在しているものと仮定しています。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="bg_bds-utf8"
FONT="LatArCyrHeb-16"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 上の例においては 512 個のグリフを持つ LatArCyrHeb-16 フォントを利用しています。 この場合、フレームバッファーを利用していなければ Linux コンソール上に鮮やかな色づけを行うことは出来なくなります。 フレームバッファーがない状態で文字フォントを変更することなく色づけを適切に行いたい場合は、以下に示すように 256 個のグリフを持った、この言語に固有のフォントを用いる方法もあります。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="bg_bds-utf8"
FONT="cyr-sun16"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- 以下の例では ISO-8859-15 から UTF-8 へのキーマップ変換の自動化（keymap autoconversion）を指定し、Unicode におけるデッドキー（dead keys）を有効にするものです。

```
cat > /etc/sysconfig/console << "EOF"
# Begin /etc/sysconfig/console

UNICODE="1"
KEYMAP="de-latin1"
KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
LEGACY_CHARSET="iso-8859-15"
FONT="LatArCyrHeb-16 -m 8859-15"

# End /etc/sysconfig/console
EOF
```

- キーマップにデッドキー（dead keys）を持つものがあります。 そのキー自身は文字を意味するものではなく、次のキー入力による文字に対するアクセント記号をつける目的のものなどです。 または複合的な入力規則を定義するもの、例えば「Ctrl+.、A、E を入力することで Æ を得るもの」があります。 Linux-4.9.5 ではキーマップに応じてデッドキーや複合的な入力規則を解釈します。 ただしこれが正しく動作するのは、元の文字がマルチバイトではない場合に限ります。 このような欠点は西欧のキーマップでは問題にはなりません。 アクセント記号なら、アクセント記号がついていない ASCII 文字を使ったり、ASCII 文字を二つ使って工夫したりするからです。 しかし UTF-8 モードでは問題になります。 例えばギリシャ語にて「alpha」の文字の上にアクセント記号を付けたい場合が問題です。 これを解決するには、一つには UTF-8 の利用を諦めることであり、もう一つは X ウィンドウシステムを使うことで、そのような入力処理の制約を解消することです。

- 中国語、日本語、韓国語などを利用する場合 Linux コンソールにはそれらの文字を表示できません。 この言語を利用するユーザーは X ウィンドウシステムを使ってください。 そこで用いるフォントは、必要となるコード範囲の文字を有しており、入力メソッドも用意されています。(例えば SCIM は数多くの言語入力をサポートしています。)

注記

/etc/sysconfig/console ファイルは Linux のテキストコンソール上の言語設定を行うだけです。 X ウィンドウシステム、SSH セッション、シリアルコンソールでのキーボードレイアウトや端末フォントの設定とは無関係です。 それらに対しては、上に列記した最後の二項目における制約は適用されません。

7.6.6. ブート時のファイル生成

ブート時にファイルを生成したいときがあります。 例えば /tmp/.ICE-unix ディレクトリが必要であったとします。 これは /etc/sysconfig/createfiles スクリプトに設定を行うことで実現できます。 このファイルの書式は、デフォルト設定ファイル内にコメントとして埋め込まれているので参照してください。

7.6.7. Sysklogd スクリプトの設定

sysklogd スクリプトは System V の一連の初期化に際して syslogd プログラムを起動します。 オプション *-m 0* により実行され、syslogd がデフォルトで 20分おきにログファイルに対して周期的にタイムスタンプを書き込む機能を無効にします。 この機能を有効にしたい場合は /etc/sysconfig/rc.site ファイルを新たに作るか既存のものを編集して、SYSKLOGD_PARMS 変数を必要な値に設定してください。 例えばすべてのパラメーターを無効にする場合は、変数値をヌル値とします。

```
SYSKLOGD_PARMS=
```

詳しくは **man syslogd** を入力して man ページを参照してください。

7.6.8. rc.site ファイル

オプションファイル /etc/sysconfig/rc.site は、System V の各ブートスクリプトにて自動的に設定される内容を含んでいます。 /etc/sysconfig/ ディレクトリにおける hostname, console, clock の各ファイルにて値の設定を行うこともできます。 関係する変数が、これらのファイルと rc.site の双方に存在する場合、スクリプトにて指定されたファイル内の値が優先されます。

rc.site では、起動時におけるその他の機能をカスタマイズするためのパラメーターも含まれています。 変数 IPROMPT を設定すると、起動するブートスクリプトを選択することができます。 この他のオプションについては、このファイル内にてコメントとして記述されています。 このファイルのデフォルト版は以下のとおりです。

```
# rc.site
# Optional parameters for boot scripts.

# Distro Information
# These values, if specified here, override the defaults
#DISTRO="Linux From Scratch" # The distro name
#DISTRO_CONTACT="lfs-dev@linuxfromscratch.org" # Bug report address
#DISTRO_MINI="LFS" # Short name used in filenames for distro config

# Define custom colors used in messages printed to the screen

# Please consult `man console_codes` for more information
# under the "ECMA-48 Set Graphics Rendition" section
#
# Warning: when switching from a 8bit to a 9bit font,
# the linux console will reinterpret the bold (1;) to
# the top 256 glyphs of the 9bit font.  This does
# not affect framebuffer consoles

# These values, if specified here, override the defaults
#BRACKET="\\033[1;34m" # Blue
#FAILURE="\\033[1;31m" # Red
#INFO="\\033[1;36m"    # Cyan
#NORMAL="\\033[0;39m"  # Grey
#SUCCESS="\\033[1;32m" # Green
```

```
#WARNING="\\033[1;33m" # Yellow

# Use a colored prefix
# These values, if specified here, override the defaults
#BMPREFIX="     "
#SUCCESS_PREFIX="${SUCCESS}  *  ${NORMAL}"
#FAILURE_PREFIX="${FAILURE}*****${NORMAL}"
#WARNING_PREFIX="${WARNING} *** ${NORMAL}"

# Manually seet the right edge of message output (characters)
# Useful when resetting console font during boot to override
# automatic screen width detection
#COLUMNS=120

# Interactive startup
#IPROMPT="yes" # Whether to display the interactive boot prompt
#itime="3"    # The amount of time (in seconds) to display the prompt

# The total length of the distro welcome string, without escape codes
#wlen=$(echo "Welcome to ${DISTRO}" | wc -c )
#welcome_message="Welcome to ${INFO}${DISTRO}${NORMAL}"

# The total length of the interactive string, without escape codes
#ilen=$(echo "Press 'I' to enter interactive startup" | wc -c )
#i_message="Press '${FAILURE}I${NORMAL}' to enter interactive startup"

# Set scripts to skip the file system check on reboot
#FASTBOOT=yes

# Skip reading from the console
#HEADLESS=yes

# Write out fsck progress if yes
#VERBOSE_FSCK=no

# Speed up boot without waiting for settle in udev
#OMIT_UDEV_SETTLE=y

# Speed up boot without waiting for settle in udev_retry
#OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE=yes

# Skip cleaning /tmp if yes
#SKIPTMPCLEAN=no

# For setclock
#UTC=1
#CLOCKPARAMS=

# For consolelog (Note that the default, 7=debug, is noisy)
#LOGLEVEL=7

# For network
#HOSTNAME=mylfs

# Delay between TERM and KILL signals at shutdown
#KILLDELAY=3

# Optional sysklogd parameters
#SYSKLOGD_PARMS="-m 0"

# Console parameters
```

```
#UNICODE=1
#KEYMAP="de-latin1"
#KEYMAP_CORRECTIONS="euro2"
#FONT="lat0-16 -m 8859-15"
#LEGACY_CHARSET=
```

7.6.8.1. ブートおよびシャットダウンスクリプトのカスタマイズ

LFS のブートスクリプト類により、システムの起動および終了が適正に行われます。 ただし rc.site ファイルにおいては改善の余地があって、処理性能を向上させたり出力メッセージを調整したりすることができます。 種々の設定は、上に示した /etc/sysconfig/rc.site ファイルへの変更により実現します。

- ブートスクリプト udev の起動中には udev settle の呼び出しが行われます。 ただこの呼び出しは特定の場合において必要となるものであり、それはシステム上に存在するデバイスに依存します。 単純なパーティション設定を行っていて、またイーサネットカードを 1 つのみ利用している場合には、ブート時に上のコマンドを実行する必要はないかもしれません。 このコマンドの実行をスキップする場合は、変数の設定として OMIT_UDEV_SETTLE=y を記述します。
- ブートスクリプト udev_retry も同様に、デフォルトで udev settle を実行します。 このコマンドはデフォルトでは、/var ディレクトリが個別にマウントされている時にのみ必要となります。 それはクロックが /var/lib/hwclock/adjtime ファイルを必要とするためです。 これ以外にも udev の処理を待つことが必要になるケースがありますが、本当に必要になることはまれです。 変数の設定として OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE=y を行えば、コマンドをスキップすることができます。
- デフォルトにおいてファイルシステムのチェックは、何も表示されることなく処理が行われるので、処理が遅延して行われているかのように見えます。 fsck による出力を有効とするには、変数の設定を VERBOSE_FSCK=y とします。
- 再起動時にはファイルシステムのチェック、つまり fsck の実行を完全に行う必要はないと考えられる場合もあります。 そうであるなら、ファイル /fastboot を生成するか、/sbin/shutdown -f -r now というコマンドを実行します。 一方、ファイルシステムのチェックを必ず行うのであれば、ファイル /forcefsck を生成するか、shutdown コマンドの実行において *-f* ではなく *-F* というパラメーターをつける方法があります。

  変数の設定として FASTBOOT=y を行えば、ブート時において fsck を実行しないようにすることができます。 この設定を恒常的に行うことは推奨されません。
- 通常 /tmp ディレクトリ内にあるファイルは、ブート時にすべて削除されます。 ファイル数やディレクトリ数が膨大になっていた場合は、ブート処理が極端に時間を要することにもなります。 変数の設定 SKIPTMPCLEAN=y を行うと、ファイルの削除が行われなくなります。
- シャットダウン時には init プログラムが稼働中のプログラム（agetty など）に対して TERM シグナルを送信し、一定時間（デフォルトでは3秒）待ちます。 そして各プロセスに対して KILL シグナルを送信して再度待ちます。 各プロセスが自身のスクリプト内にてシャットダウンしないようであれば sendsignals スクリプトにて上の処理が繰り返されます。 init が起動するまでの時間は、パラメーターにより制御することができます。 例えば init の遅延を無くす場合は、シャットダウンまたはリブート時のコマンドに -t0 パラメーターを与えます。（つまり /sbin/shutdown -t0 -r now といったコマンド実行とします。）sendsignals スクリプトの遅延を無くすには、パラメーターの設定を KILLDELAY=0 とします。

7.7. Bash シェルの初期起動ファイル

シェルプログラムである /bin/bash（これ以降は単に「シェル」と表現します）は、初期起動ファイルをいくつも利用して環境設定を行います。 個々のファイルにはそれぞれに目的があり、ログインや対話環境をさまざまに制御します。 /etc ディレクトリにあるファイルは一般にグローバルな設定を行います。 これに対応づいたファイルがユーザーのホームディレクトリにある場合は、グローバルな設定を上書きします。

対話型ログインシェルは /bin/login プログラムを利用して /etc/passwd ファイルを読み込み、ログインが成功することで起動します。 同じ対話型でも非ログインシェルの場合は [prompt]$/bin/bash のようなコマンドラインからの入力を経て起動します。 非対話型のシェルはシェルスクリプト動作中に実行されます。 非対話型であるのは、スクリプトの実行の最中にユーザーからの入力を待つことがないためです。

より詳しい情報は info bash の Bash Startup Files and Interactive Shells の節を参照してください。

/etc/profile ファイルと ~/.bash_profile ファイルは、対話型のログインシェルとして起動した時に読み込まれます。

本節の終わりに示す /etc/profile ファイルは言語を設定するために必要となる環境変数を定義します。 これを設定することによって以下の内容が定められます。

- プログラムの出力結果を指定した言語で得ることができます。
- キャラクターを英字、数字、その他のクラスに分類します。 この設定は、英語以外のロケールにおいて、コマンドラインに非アスキー文字が入力された場合に bash が正しく入力を受け付けるために必要となります。
- 各国ごとに正しくアルファベット順が並ぶようにします。
- 適切なデフォルト用紙サイズを設定します。
- 通貨、日付、時刻を正しい書式で出力するように設定します。

以下において *<ll>* と示しているものは、言語を表す２文字の英字（例えば 「en」）に、また *<CC>* は、国を表す２文字の英字（例えば 「GB」）にそれぞれ置き換えてください。 *<charmap>* は、選択したロケールに対応したキャラクターマップ（charmap）に置き換えてください。 オプションの修飾子として「@euro」といった記述もあります。

以下のコマンドを実行すれば Glibc が取り扱うロケールを一覧で見ることができます。

```
locale -a
```

キャラクターマップにはエイリアスがいくつもあります。 例えば「ISO-8859-1」は「iso8859-1」や「iso88591」として記述することもできます。 ただしアプリケーションによってはエイリアスを正しく取り扱うことができないものがあります。（「UTF-8」 の場合、「UTF-8」と書かなければならず、これを「utf8」としてはならない場合があります。）そこでロケールに対する正規の名称を選ぶのが最も無難です。 正規の名称は以下のコマンドを実行すれば分かります。 ここで *<locale name>* は locale -a コマンドの出力から得られたロケールを指定します。（本書の例では「en_GB.iso88591」としています。）

```
LC_ALL=<locale name> locale charmap
```

「en_GB.iso88591」ロケールの場合、上のコマンドの出力は以下となります。

```
ISO-8859-1
```

出力された結果が「en_GB.ISO-8859-1」に対するロケール設定として用いるべきものです。 こうして探し出したロケールは動作確認しておくことが重要です。 Bash の起動ファイルに記述するのはその後です。

```
LC_ALL=<locale name> locale language
LC_ALL=<locale name> locale charmap
LC_ALL=<locale name> locale int_curr_symbol
LC_ALL=<locale name> locale int_prefix
```

上のコマンドを実行すると、言語名やロケールに応じたキャラクターエンコーディングが出力されます。 また通貨や各国ごとの国際電話番号プレフィックスも出力されます。 コマンドを実行した際に以下のようなメッセージが表示されたら、第6章にてロケールをインストールしていないか、あるいはそのロケールが Glibc のデフォルトのインストールではサポートされていないかのいずれかです。

```
locale: Cannot set LC_* to default locale: No such file or directory
```

このエラーが発生したら localedef コマンドを使って、目的とするロケールをインストールするか、別のロケールを選ぶ必要があります。 これ以降の説明では Glibc がこのようなエラーを生成していないことを前提に話を進めます。

LFS には含まれない他のパッケージにて、指定したロケールをサポートしていないものがあります。 例えば X ライブラリ（X ウィンドウシステムの一部）では、内部ファイルに指定されたキャラクターマップ名に合致しないロケールを利用した場合に、以下のようなメッセージを出力します。

```
Warning: locale not supported by Xlib, locale set to C
```

Xlib ではキャラクターマップはたいてい、英大文字とダッシュ記号を用いて表現されます。 例えば ”iso88591” ではなく ”ISO-8859-1” となります。 ロケール設定におけるキャラクターマップ部分を取り除いてみれば、適切なロケール設定を見出すことができます。 これはまた locale charmap コマンドを使って、設定を変えてみてロケールを指定してみれば確認できます。 例えば ”de_DE.ISO-8859-15@euro” という設定を ”de_DE@euro” に変えてみて Xlib がそのロケールを認識するかどうか確認してみてください。

これ以外のパッケージでも、パッケージが求めるものとは異なるロケール設定がなされた場合に、適切に処理されないケースがあります。（そして必ずしもエラーメッセージが表示されない場合もあります。）そういったケースでは、利用している Linux ディストリビューションがどのようにロケール設定をサポートしているかを調べてみると、有用な情報が得られるかもしれません。

適切なロケール設定が決まったら /etc/profile ファイルを生成します。

```
cat > /etc/profile << "EOF"
# Begin /etc/profile

export LANG=<ll>_<CC>.<charmap><@modifiers>

# End /etc/profile
EOF
```

ロケール設定の「C」(デフォルト)と「en_US」(米国の英語利用ユーザーに推奨)は異なります。 「C」は US-ASCII 7 ビットキャラクターセットを用います。 もし最上位ビットがセットされたキャラクターがあれば不適当なものとして取り扱います。 例えば ls コマンドにおいてクエスチョン記号が表示されることがあるのはこのためです。 また Mutt や Pine などにより電子メールが送信される際に、そういった文字は RFC には適合しないメールとして送信されます。 送信された文字は「不明な 8ビット (unknown 8-bit)」として示されます。 そこで 8ビット文字を必要としない場合には「C」ロケールを指定してください。

UTF-8 ベースのロケールは、プログラムによってはサポートしていないものもあります。 この問題については http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/introduction/locale-issues.html にて説明しており、可能なものは解決を図っていこうとしているところです。

7.8. /etc/inputrc ファイルの生成

inputrc ファイルは Readline ライブラリに対する設定ファイルです。 この Readline ライブラリは、ユーザーが端末から文字列入力を行う際の編集機能を提供するものです。 キーボード入力内容は所定の処理動作に変換され解釈されます。 Readline ライブラリは Bash をはじめとする各種シェルや他の多くのアプリケーションにおいて利用されています。

ユーザー固有の機能を必要となるのはまれなので、以下の /etc/inputrc ファイルによって、ログインユーザーすべてに共通するグローバルな定義を生成します。 各ユーザーごとにこのデフォルト定義を上書きする必要が出てきた場合は、ユーザーのホームディレクトリに .inputrc ファイルを生成して、修正マップを定義することもできます。

inputrc ファイルの設定方法については info bash により表示される Readline Init File の節に詳しい説明があります。 info readline にも有用な情報があります。

以下はグローバルな inputrc ファイルの一般的な定義例です。 コメントをつけて各オプションを説明しています。 コメントはコマンドと同一行に記述することはできません。 以下のコマンドを実行してこのファイルを生成します。

```
cat > /etc/inputrc << "EOF"
# Begin /etc/inputrc
# Modified by Chris Lynn <roryo@roryo.dynup.net>

# Allow the command prompt to wrap to the next line
set horizontal-scroll-mode Off

# Enable 8bit input
set meta-flag On
set input-meta On

# Turns off 8th bit stripping
set convert-meta Off

# Keep the 8th bit for display
set output-meta On

# none, visible or audible
set bell-style none

# All of the following map the escape sequence of the value
# contained in the 1st argument to the readline specific functions
"\eOd": backward-word
"\eOc": forward-word

# for linux console
"\e[1~": beginning-of-line
"\e[4~": end-of-line
"\e[5~": beginning-of-history
"\e[6~": end-of-history
"\e[3~": delete-char
"\e[2~": quoted-insert

# for xterm
"\eOH": beginning-of-line
"\eOF": end-of-line

# for Konsole
"\e[H": beginning-of-line
"\e[F": end-of-line

# End /etc/inputrc
EOF
```

7.9. /etc/shells ファイルの生成

shells ファイルには、システム上でのログインシェルを記述します。 各アプリケーションはこのファイルを参照して、シェルが適切であるかどうかを判別します。 各シェルの指定は 1 行で行い、そのシェルのパスを記述します。 パスはルートディレクトリ（/）を基準として記述します。

例えば一般ユーザーが自身のアカウントに対するログインシェルを chsh にしようとした場合、chsh が shells ファイルを参照します。 シェルコマンド名が記述されていなければ、その一般ユーザーはログインシェルの変更が出来ません。

例えば GDM は /etc/shells ファイルが参照できない時には対話インターフェースの設定が出来ません。 また FTP デーモンなどは、このファイルに記述されていないシェルを用いてのユーザーアクセスを拒否するのが通常です。 こういったアプリケーションのためにこのファイルが必要となります。

```
cat > /etc/shells << "EOF"
# Begin /etc/shells

/bin/sh
/bin/bash

# End /etc/shells
EOF
```

第8章 LFS システムのブート設定

8.1. はじめに

ここからは LFS システムをブート可能にしていきます。 この章では fstab ファイルを作成し、LFS システムのカーネルを構築します。 また GRUB のブートローダーをインストールして LFS システムの起動時にブートローダーを選択できるようにします。

8.2. /etc/fstab ファイルの生成

/etc/fstab ファイルは、種々のプログラムがファイルシステムのマウント状況を確認するために利用するファイルです。 ファイルシステムがデフォルトでどこにマウントされ、それがどういう順序であるか、マウント前に（整合性エラーなどの）チェックを行うかどうか、という設定が行われます。 新しいファイルシステムに対する設定は以下のようにして生成します。

```
cat > /etc/fstab << "EOF"
# Begin /etc/fstab

# file system  mount-point  type     options             dump  fsck
#                                                              order

/dev/<xxx>     /            <fff>    defaults            1     1
/dev/<yyy>     swap         swap     pri=1               0     0
proc           /proc        proc     nosuid,noexec,nodev 0     0
sysfs          /sys         sysfs    nosuid,noexec,nodev 0     0
devpts         /dev/pts     devpts   gid=5,mode=620      0     0
tmpfs          /run         tmpfs    defaults            0     0
devtmpfs       /dev         devtmpfs mode=0755,nosuid    0     0

# End /etc/fstab
EOF
```

<xxx>、 <yyy>、 <fff> の部分はシステムに合わせて正しい記述に書き換えてください。 例えば sda2、sda5、ext4 といったものです。 上のファイルの6行分の記述内容の詳細は man 5 fstab により確認してください。

MS-DOS や Windows において利用されるファイルシステム（例えば vfat、ntfs、smbfs、cifs、iso9660、udf）では、ファイル名称内に用いられた非アスキー文字を正しく認識させるために、マウントオプションとして「iocharset」を指定することが必要となります。 オプションに設定する値は利用するロケールとすることが必要で、カーネルが理解できる形でなければなりません。 またこれを動作させるために、対応するキャラクタセット定義（File systems ->Native Language Support にあります）をカーネルに組み入れるか、モジュールとしてビルドすることが必要です。 vfat や smbfs ファイルシステムを用いるなら、さらに「codepage」オプションも必要です。 このオプションには、国情報に基づいて MS-DOS にて用いられるコードページ番号をセットします。 例えば USB フラッシュドライブをマウントし ru_RU.KOI8-R をセットするユーザーであれば /etc/fstab ファイルの設定は以下のようになります。

```
noauto,user,quiet,showexec,iocharset=koi8r,codepage=866
```

ru_RU.UTF-8 をセットするなら以下のように変わります。

```
noauto,user,quiet,showexec,iocharset=utf8,codepage=866
```

注記

後者の設定では、カーネルが以下のようなメッセージを出力します。

```
FAT: utf8 is not a recommended IO charset for FAT filesystems,
    filesystem will be case sensitive!
```

否定的な設定を勧めるメッセージですが、これは無視して構いません。 「iocharset」オプションに他の設定を行ったとしても UTF-8 ロケールでは結局はファイル名の表示を正しく処理できないためです。

ファイルシステムによっては codepage と iocharset のデフォルト値をカーネルにおいて設定することもできます。 カーネルにおいて対応する設定は「Default NLS Option」(CONFIG_NLS_DEFAULT)、「Default Remote NLS Option」(CONFIG_SMB_NLS_DEFAULT)、「Default codepage for FAT」(CONFIG_FAT_DEFAULT_CODEPAGE)、「Default iocharset for FAT」(CONFIG_FAT_DEFAULT_IOCHARSET) です。 なお ntfs ファイルシステムに対しては、カーネルのコンパイル時に設定する項目はありません。

特定のハードディスクにおいて ext3 ファイルシステムでの電源供給不足時の信頼性を向上させることができます。 これは /etc/fstab での定義においてマウントオプション barrier=1 を指定します。 ハードディスクがこのオプションをサポートしているかどうかは hdparm を実行することで確認できます。 例えば以下のコマンドを実行します。

```
hdparm -I /dev/sda | grep NCQ
```

何かが出力されたら、このオプションがサポートされていることを意味します。

論理ボリュームマネージャー (Logical Volume Management; LVM) に基づいたパーティションでは barrier オプションは利用できません。

8.3. Linux-4.9.5

Linux パッケージは Linux カーネルを提供します。

概算ビルド時間: 4.4 - 66.0 SBU（一般的には 6 SBU 程度）
必要ディスク容量: 960 - 4250 MB（一般的には 1100 MB 程度）

8.3.1. カーネル のインストール

カーネルの構築は、カーネルの設定、コンパイル、インストールの順に行っていきます。 本書が行っているカーネル設定の方法以外については、カーネルソースツリー内にある README ファイルを参照してください。

コンパイルするための準備として以下のコマンドを実行します。

```
make mrproper
```

これによりカーネルソースが完全にクリーンなものになります。 カーネル開発チームは、カーネルコンパイルするなら、そのたびにこれを実行することを推奨しています。 tar コマンドにより伸張しただけのソースではクリーンなものにはなりません。

メニュー形式のインターフェースによりカーネルを設定します。 カーネルの設定方法に関する一般的な情報が http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/kernel-configuration.txt にあるので参照してください。 BLFS では LFS が取り扱わない各種パッケージに対して、必要となるカーネル設定項目を説明しています。 http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/longindex.html#kernel-config-index を参照してください。 さらに詳しくカーネルの構築や設定を説明している http://www.kroah.com/lkn/ もあります。

注記

カーネル設定を行うにあたって、分かりやすいやり方として make defconfig を実行する方法があります。これを実行することで基本的な設定がなされ、現在のシステム構成が考慮された、より良い設定が得られるかもしれません。

以下の機能項目についての有効無効を確認してください。 不適切である場合にはシステムが正常動作しなかったり起動できなかったりするかもしれません。

```
Device Drivers  --->
  Generic Driver Options  --->
   [ ] Support for uevent helper [CONFIG_UEVENT_HELPER]
   [*] Maintain a devtmpfs filesystem to mount at /dev [CONFIG_DEVTMPFS]
```

システムに特定の機能性が必要になれば、それだけ多くのオプションが必要となります。 例えば BLFS パッケージにて必要となるオプションについては BLFS Index of Kernel Settings (http://www.linuxfromscratch.org/blfs/view/svn/longindex.html#kernel-config-index) を参照してください。

注記

ホストシステムが UEFI を利用している場合は、上の 'make defconfig' によって EFI に関連するカーネルオプションが自動的に追加されます。

LFS のカーネルを UEFI を利用したホストシステム環境内からブートする場合は本オプションを指定する必要があります。

```
Processor type and features  --->
   [*]   EFI stub support  [CONFIG_EFI_STUB]
```

LFS 環境にて UEFI を取り扱う詳細な方法は lfs-uefi.txt ヒント http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/lfs-uefi.txt に示されているので参照してください。

上の設定項目の説明

Support for uevent helper
本項目を有効にすることで、デバイス管理を Udev/Eudev により行ないます。

Maintain a devtmpfs
本項目は、カーネルにより事前登録される自動化デバイスノードを生成します。 これは Udev が動作していなくても行われます。 Udev はその上で起動し、パーミッション管理やシンボリックリンクの追加を行います。 Udev/Eudev を利用する場合には本項目を有効にすることが必要です。

```
make menuconfig
```

追加する make 環境変数の意味:

LANG=<host_LANG_value> LC_ALL=
これはホストのロケール設定を指示するものです。 この設定は UTF-8 での表示設定がされたテキストコンソールにて menuconfig の ncurses による行表示を適切に行うために必要となります。
<host_LANG_value> の部分は、ホストの $LANG 変数の値に置き換えてください。 $LC_ALL あるいは $LC_CTYPE の値を設定することもできます。

上のコマンドではなく、状況によっては make oldconfig を実行することが適当な場合もあります。 詳細についてはカーネルソース内の README ファイルを参照してください。

カーネル設定は行わずに、ホストシステムにあるカーネル設定ファイル .config をコピーして利用することもできます。 そのファイルが存在すればの話です。 その場合は linux-4.9.5 ディレクトリにそのファイルをコピーしてください。 もっともこのやり方はお勧めしません。 設定項目をメニューから探し出して、カーネル設定を一から行っていくことが望ましいことです。

最新のカーネルでの out of memory 問題を修正します。

```
sed -e '/sk_sndbuf/s/u32/int/' \
    -e '/sk_rcvbuf/s/u32/int/' \
    -i.bak net/core/sock.c
```

カーネルイメージとモジュールをコンパイルします。

```
make
```

カーネルモジュールを利用する場合 /etc/modprobe.d ディレクトリ内での設定を必要とします。 モジュールやカーネル設定に関する情報は 7.3.「デバイスとモジュールの扱いについて」や linux-4.9.5/Documentation ディレクトリにあるカーネルドキュメントを参照してください。 また modprobe.d(5) も有用です。

カーネル設定においてモジュールを利用することにした場合、モジュールをインストールします。

```
make modules_install
```

カーネルのコンパイルが終わったら、インストールの完了に向けてあと少し作業を行います。 /boot ディレクトリにいくつかのファイルをコピーします。

注意

ホストシステムが独立した /boot パーティションを用いている場合はファイルをそこにコピーします。 これを簡単に行うために、作業前に /boot をホストの /mnt/lfs/boot にバインドしておく方法があります。 ホストシステム の root ユーザーとなって以下を実行します。

```
mount --bind /boot /mnt/lfs/boot
```

カーネルイメージへのパスは、利用しているプラットフォームによってさまざまです。 そのファイル名は、好みにより自由に変更して構いません。 ただし vmlinuz という語は必ず含めてください。 これにより、次節で説明するブートプロセスを自動的に設定するために必要なことです。 以下のコマンドは x86 アーキテクチャーの場合の例です。

```
cp -v arch/x86/boot/bzImage /boot/vmlinuz-4.9.5-lfs-SVN-20170122
```

System.map はカーネルに対するシンボルファイルです。 このファイルはカーネル API の各関数のエントリポイントをマッピングしています。 同様に実行中のカーネルのデータ構成のアドレスを保持します。 このファイルは、カーネルに問題があった場合にその状況を調べる手段として利用できます。 マップファイルをインストールするには以下を実行します。

```
cp -v System.map /boot/System.map-4.9.5
```

カーネル設定ファイル .config は、上で実行した make menuconfig によって生成されます。 このファイル内には、今コンパイルしたカーネルの設定項目の情報がすべて保持されています。 将来このファイルを参照する必要が出てくるかもしれないため、このファイルを保存しておきます。

```
cp -v .config /boot/config-4.9.5
```

Linux カーネルのドキュメントをインストールします。

```
install -d /usr/share/doc/linux-4.9.5
cp -r Documentation/* /usr/share/doc/linux-4.9.5
```

カーネルのソースディレクトリは所有者が root ユーザーになっていません。 我々は chroot 環境内の root ユーザーとなってパッケージを展開してきましたが、展開されたファイル類はパッケージ開発者が用いていたユーザー ID、グループ ID が適用されています。 このことは普通はあまり問題になりません。 というのもパッケージをインストールした後のソースファイルは、たいていは削除するからです。 一方 Linux のソースファイルは、削除せずに保持しておくことがよく行われます。 このことがあるため開発者の用いたユーザーIDが、インストールしたマシン内の誰かの ID に割り当たった状態となりえます。 その人はカーネルソースを自由に書き換えてしまう権限を持つことになるわけです。

注記

カーネルの設定は、BLFS をインストールしていくにつれて、設定を更新していかなければならないことが多々あります。 一般にパッケージのソースは削除することが通常ですが、カーネルのソースに関しては、カーネルをもう一度新たにインストールするなら、削除しなくて構いません。

カーネルのソースファイルを保持しておくつもりなら linux-4.9.5 ディレクトリにおいて chown -R 0:0 を実行しておいてください。 これによりそのディレクトリの所有者は root ユーザーとなります。

警告

カーネルを説明する書の中には、カーネルのソースディレクトリに対してシンボリックリンク /usr/src/linux の生成を勧めているものがあります。 これはカーネル 2.6 系以前におけるものであり LFS システム上では生成してはなりません 。 ベースとなる LFS システムを構築し、そこに新たなパッケージを追加していこうとした際に、そのことが問題となるからです。

警告

さらに include ディレクトリ（/usr/include）にあるヘッダーファイルは、必ず Glibc のコンパイルによって得られるものでなければなりません。 つまり 6.7.「Linux-4.9.5 API ヘッダー」 によってインストールされた、健全化（sanitizing）したものです。 したがって生のカーネルヘッダーや他のカーネルにて健全化されたヘッダーによって上書きされてしまうのは避けなければなりません。

8.3.2. Linux モジュールのロード順の設定

たいていの場合 Linux モジュールは自動的にロードされます。 しかし中には特定の指示を必要とするものもあります。 モジュールをロードするプログラム、modprobe または insmod は、そのような指示を行う目的で /etc/modprobe.d/usb.conf を利用します。 USB ドライバー（ehci_hcd, ohci_hcd, uhci_hcd）がモジュールとしてビルドされていた場合には、それらを正しい順でロードしなければならず、そのために /etc/modprobe.d/usb.conf ファイルが必要となります。 ehci_hcd は ohci_hcd や uhci_hcd よりも先にロードしなければなりません。 これを行わないとブート時に警告メッセージが出力されます。

以下のコマンドを実行して /etc/modprobe.d/usb.conf ファイルを生成します。

```
install -v -m755 -d /etc/modprobe.d
cat > /etc/modprobe.d/usb.conf << "EOF"
# Begin /etc/modprobe.d/usb.conf

install ohci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i ohci_hcd ; true
install uhci_hcd /sbin/modprobe ehci_hcd ; /sbin/modprobe -i uhci_hcd ; true

# End /etc/modprobe.d/usb.conf
EOF
```

8.3.3. Linux の構成

インストールファイル: config-4.9.5, vmlinuz-4.9.5-lfs-SVN-20170122, System.map-4.9.5
インストールディレクトリ: /lib/modules, /usr/share/doc/linux-4.9.5

概略説明

config-4.9.5	カーネルの設定をすべて含みます。
vmlinuz-4.9.5-lfs-SVN-20170122	Linux システムのエンジンです。 コンピューターを起動した際には、オペレーティングシステム内にて最初にロードされるものです。 カーネルはコンピューターのハードウェアを構成するあらゆるコンポーネントを検知して初期化します。 そしてそれらのコンポーネントをツリー階層のファイルとして、ソフトウェアが利用できるようにします。 ただひとつの CPU からマルチタスクを処理するマシンとして、あたかも多数のプログラムが同時稼動しているように仕向けます。
System.map-4.9.5	アドレスとシンボルのリストです。 カーネル内のすべての関数とデータ構成のエントリポイントおよびアドレスを示します。

8.4. GRUB を用いたブートプロセスの設定

8.4.1. はじめに

警告

GRUB の設定を誤ってしまうと、CD-ROM のような他のデバイスからもブートできなくなってしまいます。 読者の LFS システムをブート可能とするためには、本節の内容は必ずしも必要ではありません。 読者が利用している現在のブートローダー、例えば Grub-Legacy, GRUB2, LILO などの設定を修正することが必要かもしれません。

コンピューターが利用不能に（ブート不能に）なってしまうこともあります。 そんな事態に備えてコンピューターを「復旧（resucue)」するブートディスクの生成を必ず行ってください。 ブートデバイスを用意していない場合は作成してください。 以降に示す手順を実施するために、必要に応じて BLFS ブックを参照し libisoburn にある **xorriso** をインストールしてください。

```
cd /tmp
grub-mkrescue --output=grub-img.iso
xorriso -as cdrecord -v dev=/dev/cdrw blank=as_needed grub-img.iso
```

注記

UEFI ((Unified Extensible Firmware Interface) モードを有効にしたホストにて LFS をビルドする場合は、前節で説明した CONFIG_EFI_STUB を有効にしてカーネルをビルドする必要があります。 しかし LFS は GRUB2 にそのような機能がなくても起動できます。 これを為すには、ホストシステムの UEFI モードやセキュアブート機能は無効にする必要があります。 詳しくは http://www.linuxfromscratch.org/hints/downloads/files/lfs-uefi.txt を参照してください。

8.4.2. GRUB の命名規則

GRUB ではドライブやパーティションに対して (hdn,m) といった書式の命名法を採用しています。 n はハードドライブ番号、m はパーティション番号を表します。 ハードドライブ番号はゼロから数え始めます。 一方パーティション番号は、基本パーティションであれば 1 から、拡張パーティションであれば 5 から数え始めます。 かつてのバージョンでは共にゼロから数え始めていましたが、今はそうではないので注意してください。 例えば sda1 は GRUB では (hd0,1) と表記され、sdb3 は (hd1,3) と表記されます。 Linux システムでの取り扱いとは違って GRUB では CD-ROM ドライブをハードドライブとしては扱いません。 例えば CD が hdb であり、2 番めのハードドライブが hdc であった場合、2 番めのハードドライブは (hd1) と表記されます。

8.4.3. 設定作業

GRUB は、ハードディスク上の最初の物理トラックにデータを書き出します。 この領域は、どのファイルシステムにも属していません。 ここに配置されているプログラムは、ブートパーティションにある GRUB モジュールにアクセスします。 モジュールのデフォルト位置は /boot/grub/ です。

ブートパーティションをどこにするかは各人に委ねられていて、それによって設定方法が変わります。 推奨される1つの手順としては、ブートパーティションとして独立した小さな (100MB 程度のサイズの) パーティションを設けることです。 こうしておくと、この後に LFS であろうが商用ディストリビューションであろうが、システム導入する際に同一のブートファイルを利用することが可能です。 つまりどのようなブートシステムからでもアクセスが可能となります。 この方法をとるなら、新たなパーティションをマウントした上で、現在 /boot ディレクトリにある全ファイルを (例えば前節にてビルドした Linux カーネルも) 新しいパーティションに移動させる必要があります。 そしていったんパーティションをアンマウントし、再度 /boot としてマウントしなおすことになります。 これを行った後は/etc/fstab を適切に書き換えてください。

現時点での LFS パーティションでも問題なく動作します。 ただし複数システムを取り扱うための設定は、より複雑になります。

ここまでの情報に基づいて、ルートパーティションの名称を (あるいはブートパーティションを別パーティションとするならそれも含めて) 決定します。 以下では例として、ルートパーティション (あるいは別立てのブートパーティション) が sda2 であるとします。

以下を実行して GRUB ファイル類を /boot/grub にインストールし、ブートトラックを構築します。

警告

以下に示すコマンドを実行すると、現在のブートローダーを上書きします。 上書きするのが不適当であるならコマンドを実行しないでください。 例えばマスターブートレコード (Master Boot Record; MBR) を管理するサードパーティ製のブートマネージャーソフトウェアを利用している場合などがこれに該当します。

```
grub-install /dev/sda
```

8.4.4. GRUB 設定ファイルの生成

/boot/grub/grub.cfg ファイルを生成します。

```
cat > /boot/grub/grub.cfg << "EOF"
# Begin /boot/grub/grub.cfg
set default=0
set timeout=5

insmod ext2
set root=(hd0,2)

menuentry "GNU/Linux, Linux 4.9.5-lfs-SVN-20170122" {
        linux   /boot/vmlinuz-4.9.5-lfs-SVN-20170122 root=/dev/sda2 ro
}
EOF
```

注記

GRUB にとってカーネルファイル群は、配置されるパーティションからの相対位置となります。 したがって /boot パーティションを別に作成している場合は、上記の linux の行から /boot の記述を取り除いてください。 また set root 行でのブートパーティションの指定も、正しく設定する必要があります。

GRUB は大変強力なプログラムであり、ブート処理に際しての非常に多くのオプションを提供しています。 これにより、各種デバイス、オペレーティングシステム、パーティションタイプに幅広く対応しています。 さらにカスタマイズのためのオプションも多く提供されていて、グラフィカルなスプラッシュ画面、サウンド、マウス入力などについてカスタマイズが可能です。 オプションの細かな説明は、ここでの手順説明の範囲を超えるため割愛します。

注意

grub-mkconfig というコマンドは、設定ファイルを自動的に生成するものです。 このコマンドは /etc/grub.d/ にある一連のスクリプトを利用しており、それまでに設定していた内容は失われることになります。 その一連のスクリプトは、ソースコードを提供しない Linux ディストリビューションにて用いられるのが主であるため、LFS では推奨されません。 商用 Linux ディストリビューションをインストールする場合には、それらのスクリプトを実行する、ちょうど良い機会となるはずです。 こういった状況ですから、grub.cfg のバックアップは忘れずに行うようにしてください。

第9章 作業終了

9.1. 作業終了

できました！ LFS システムのインストール終了です。 あなたの輝かしいカスタムメイドの Linux システムが完成したことでしょう。

/etc/lfs-release というファイルをここで作成することにします。 このファイルを作っておけば、どのバージョンの LFS をインストールしたのか、すぐに判別できます。（もしあなたが質問を投げた時には、我々もすぐに判別できることになります。）以下のコマンドによりこのファイルを生成します。

```
echo SVN-20170122 > /etc/lfs-release
```

またもう一つのファイルを生成することにします。 これは Linux Standards Base (LSB) の観点で、あなたのシステムがどのような状況にあるかを示すものです。 これを作成するために以下のコマンドを実行します。

```
cat > /etc/lsb-release << "EOF"
DISTRIB_ID="Linux From Scratch"
DISTRIB_RELEASE="SVN-20170122"
DISTRIB_CODENAME="<your name here>"
DISTRIB_DESCRIPTION="Linux From Scratch"
EOF
```

'DISTRIB_CODENAME' に対する設定は、あなたのシステムを特定できるように適切に書き換えてください。

9.2. ユーザー登録

これにより本書の作業は終了です。 LFS ユーザー登録を行ってカウンターを取得しますか？ 以下のページ http://www.linuxfromscratch.org/cgi-bin/lfscounter.php にて、初めて構築した LFS のバージョンと氏名を登録して下さい。

それではシステムの再起動を行ないましょう。

9.3. システムの再起動

ソフトウェアのインストールがすべて完了しました。 ここでコンピューターを再起動しますが、いくつか注意しておいて下さい。 本書を通じて構築したシステムは最小限のものです。 これ以降にさまざまなことを繰り広げていくには、機能が不足しているはずです。 もうしばらくは今までと同じように chroot 環境を利用して BLFS ブックからいくつかのパッケージをインストールしていきましょう。 その後のリブートにより新しい LFS システムを起動すれば、より一層、満足できる環境を得ることになるはずです。 以下はその際の構築例です。

- Lynx のようなテキストブラウザーをインストールしておけば、仮想端末からでも BLFS ブックを簡単に参照しながらパッケージビルド作業を進めることができます。
- GPM パッケージをインストールすれば、仮想端末内にてコピーペースト操作を行うことができます。
- ネットワーク環境内にて固定 IP アドレスを用いることが適当ではない場合は、dhcpcd パッケージや dhcp パッケージのクライアントモジュール部分を利用することが考えられます。
- sudo をインストールすれば、ルートユーザー以外であっても、パッケージビルドとインストールを容易に行うことができます。
- 利用しやすい GUI 操作を通じてリモート接続を行いたい場合は openssh とその依存パッケージである openssl をインストールします。
- インターネット経由により簡単にファイル取得を行うために wget をインストールします。
- ハードディスクドライブに GUID パーティションテーブル (GPT) があるなら、gptfdisk または parted が有用なものとなります。
- 最後に、以下に示す種々の設定ファイルが適切であるかどうかを確認します。
  - /etc/bashrc
  - /etc/dircolors
  - /etc/fstab
  - /etc/hosts
  - /etc/inputrc

- /etc/profile
- /etc/resolv.conf
- /etc/vimrc
- /root/.bash_profile
- /root/.bashrc
- /etc/sysconfig/network
- /etc/sysconfig/ifconfig.eth0

さあよろしいですか。 新しくインストールした LFS システムの再起動を行いましょう。 まずは chroot 環境から抜けます。

```
logout
```

仮想ファイルシステムをアンマウントします。

```
umount -v $LFS/dev/pts
umount -v $LFS/dev
umount -v $LFS/run
umount -v $LFS/proc
umount -v $LFS/sys
```

LFS ファイルシステムもアンマウントします。

```
umount -v $LFS
```

複数のパーティションを生成していた場合は、以下のようにして複数パーティションをアンマウントします。 メインのパーティションのアンマウントはその後に行います。

```
umount -v $LFS/usr
umount -v $LFS/home
umount -v $LFS
```

以下のようにしてシステムを再起動します。

```
shutdown -r now
```

これまでの作業にて GRUB ブートローダーが設定されているはずです。 そのメニューには LFS SVN-20170122 を起動するためのメニュー項目があるはずです。

再起動が無事行われ LFS システムを使うことができます。 必要に応じてさらなるソフトウェアをインストールしていってください。

9.4. 今度は何?

本書をお読み頂き、ありがとうございます。 本書が皆さんにとって有用なものとなり、システムの構築方法について十分に学んで頂けたものと思います。

LFS システムをインストールしたら「次は何を？」とお考えになるかもしれません。 その質問に答えるために以下に各種の情報をまとめます。

- 保守

  あらゆるソフトウェアにおいて、バグやセキュリティの情報は日々報告されています。 LFS システムはソースコードからコンパイルしていますので、そのような報告を見逃さずにおくことは皆さんの仕事となります。 そのような報告をオンラインで提供する情報の場がありますので、いくつかを以下に示しましょう。

  - CERT (Computer Emergency Response Team)

    CERT にはメーリングリストがあり、数々のオペレーティングシステムやアプリケーションにおけるセキュリティ警告を公開しています。 購読に関する情報は http://www.us-cert.gov/cas/signup.html を参照してください。

  - バグトラック (Bugtraq)

    バグトラックは、完全公開のコンピューターセキュリティに関するメーリングリストです。 これは新たに発見されたセキュリティに関する問題を公開しています。 また時には、その問題を解消するフィックス情報も提供してくれます。 購読に関する情報は http://www.securityfocus.com/archive を参照してください。

- Beyond Linux From Scratch

  Beyond Linux From Scratch ブックは、LFS ブックが取り扱うソフトウェアの範囲を超えて、数多くのソフトウェアをインストールする手順を示しています。 BLFS プロジェクトは以下にあります。http://www.linuxfromscratch.org/blfs/.

- LFS ヒント (LFS Hints)

  LFS ヒントは有用なドキュメントを集めたものです。 LFS コミュニティのボランティアによって投稿されたものです。 それらのヒントは http://www.linuxfromscratch.org/hints/list.html にて参照することができます。

- メーリングリスト

  皆さんにも参加して頂ける LFS メーリングリストがあります。 何かの助けが必要になったり、最新の開発を行いたかったり、あるいはプロジェクトに貢献したいといった場合に、参加して頂くことができます。 詳しくは 第1章 - メーリングリストを参照してください。

- Linux ドキュメントプロジェクト (The Linux Documentation Project; TLDP)

  Linux ドキュメントプロジェクトの目指すことは Linux のドキュメントに関わる問題を共同で取り組むことです。 TLDP ではハウツー (HOWTO)、ガイド、man ページを数多く提供しています。 以下のサイトにあります。 http://www.tldp.org/

第IV部 付録

付録 A. 略語と用語

日本語訳情報

本節における日本語訳は、訳語が一般的に普及していると思われるものは、その訳語とカッコ書き内に原語を示します。 逆に訳語に適当なものがないと思われるものは、無理に訳出せず原語だけを示すことにします。 この判断はあくまで訳者によるものであるため、不適切・不十分な個所についてはご指摘ください。

ABI	アプリケーション バイナリ インターフェース (Application Binary Interface)
ALFS	Automated Linux From Scratch
API	アプリケーション プログラミング インターフェース (Application Programming Interface)
ASCII	American Standard Code for Information Interchange
BIOS	ベーシック インプット/アウトプット システム; バイオス (Basic Input/Output System)
BLFS	Beyond Linux From Scratch
BSD	Berkeley Software Distribution
chroot	ルートのチェンジ (change root)
CMOS	シーモス (Complementary Metal Oxide Semiconductor)
COS	Class Of Service
CPU	中央演算処理装置 (Central Processing Unit)
CRC	巡回冗長検査 (Cyclic Redundancy Check)
CVS	Concurrent Versions System
DHCP	ダイナミック ホスト コンフィギュレーション プロトコル (Dynamic Host Configuration Protocol)
DNS	ドメインネームサービス (Domain Name Service)
EGA	Enhanced Graphics Adapter
ELF	Executable and Linkable Format
EOF	ファイルの終端 (End of File)
EQN	式 (equation)
ext2	second extended file system
ext3	third extended file system
ext4	fourth extended file system
FAQ	よく尋ねられる質問 (Frequently Asked Questions)
FHS	ファイルシステム階層標準 (Filesystem Hierarchy Standard)
FIFO	ファーストイン、ファーストアウト (First-In, First Out)
FQDN	完全修飾ドメイン名 (Fully Qualified Domain Name)
FTP	ファイル転送プロトコル (File Transfer Protocol)
GB	ギガバイト (gigabytes)
GCC	GNU コンパイラー コレクション (GNU Compiler Collection)
GID	グループ識別子 (Group Identifier)
GMT	グリニッジ標準時 (Greenwich Mean Time)
HTML	ハイパーテキスト マークアップ 言語 (Hypertext Markup Language)
IDE	Integrated Drive Electronics
IEEE	Institute of Electrical and Electronic Engineers
IO	入出力 (Input/Output)
IP	インターネット プロトコル (Internet Protocol)
IPC	プロセス間通信 (Inter-Process Communication)
IRC	インターネット リレー チャット (Internet Relay Chat)
ISO	国際標準化機構 (International Organization for Standardization)

ISP	インターネット サービス プロバイダー (Internet Service Provider)
KB	キロバイト (kilobytes)
LED	発光ダイオード (Light Emitting Diode)
LFS	Linux From Scratch
LSB	Linux Standard Base
MB	メガバイト (megabytes)
MBR	マスター ブート レコード (Master Boot Record)
MD5	Message Digest 5
NIC	ネットワーク インターフェース カード (Network Interface Card)
NLS	Native Language Support
NNTP	Network News Transport Protocol
NPTL	Native POSIX Threading Library
OSS	Open Sound System
PCH	プリコンパイル済みヘッダー (Pre-Compiled Headers)
PCRE	Perl Compatible Regular Expression
PID	プロセス識別子 (Process Identifier)
PTY	仮想端末 (pseudo terminal)
QOS	クオリティ オブ サービス (Quality Of Service)
RAM	ランダム アクセス メモリ (Random Access Memory)
RPC	リモート プロシージャ コール (Remote Procedure Call)
RTC	リアルタイムクロック (Real Time Clock)
SBU	標準ビルド時間 (Standard Build Unit)
SCO	サンタ クルズ オペレーション社 (The Santa Cruz Operation)
SHA1	Secure-Hash Algorithm 1
TLDP	The Linux Documentation Project
TFTP	Trivial File Transfer Protocol
TLS	スレッド ローカル ストレージ (Thread-Local Storage)
UID	ユーザー識別子 (User Identifier)
umask	user file-creation mask
USB	ユニバーサル シリアル バス (Universal Serial Bus)
UTC	協定世界時 (Coordinated Universal Time)
UUID	汎用一意識別子 (Universally Unique Identifier)
VC	仮想コンソール (Virtual Console)
VGA	ビデオ グラフィックス アレー (Video Graphics Array)
VT	仮想端末 (Virtual Terminal)

付録 B. 謝辞

Linux From Scratch プロジェクトへ貢献して下さった以下の方々および組織団体に感謝致します。

- Gerard Beekmans <gerard@linuxfromscratch.org> - LFS 構築者、LFS プロジェクトリーダー
- Matthew Burgess <matthew@linuxfromscratch.org> - LFS プロジェクトリーダー、LFS テクニカルライター/編集者
- Bruce Dubbs <bdubbs@linuxfromscratch.org> - LFS リリース管理者、LFS テクニカルライター/編集者
- Jim Gifford <jim@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- Bryan Kadzban <bryan@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター
- Randy McMurchy <randy@linuxfromscratch.org> - BLFS プロジェクトリーダー、LFS 編集者
- DJ Lucas <dj@linuxfromscratch.org> - LFS、BLFS 編集者
- Ken Moffat <ken@linuxfromscratch.org> - LFS、CLFS 編集者
- Ryan Oliver <ryan@linuxfromscratch.org> - CLFS プロジェクト共同リーダー
- この他に数多くの方々にも協力頂きました。 皆さまには LFS や BLFS などのメーリングリストにて、提案、ブック内容のテスト、バグ報告、作業指示、パッケージインストールの経験談などを通じて、本ブック製作にご協力頂きました。

翻訳者

- Manuel Canales Esparcia <macana@macana-es.com> - スペインの LFS 翻訳プロジェクト
- Johan Lenglet <johan@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト; 2008年まで
- Jean-Philippe Mengual <jmengual@linuxfromscratch.org> - フランスの LFS 翻訳プロジェクト; 2008年以降、現在
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ポルトガルの LFS 翻訳プロジェクト
- Thomas Reitelbach <tr@erdfunkstelle.de> - ドイツの LFS 翻訳プロジェクト

ミラー管理者

北米のミラー

- Scott Kveton <scott@osuosl.org> - lfs.oregonstate.edu ミラー
- William Astle <lost@l-w.net> - ca.linuxfromscratch.org ミラー
- Eujon Sellers <jpolen@rackspace.com> - lfs.introspeed.com ミラー
- Justin Knierim <tim@idge.net> - lfs-matrix.net ミラー

南米のミラー

- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - lfsmirror.lfs-es.info ミラー
- Luis Falcon <Luis Falcon> - torredehanoi.org ミラー

ヨーロッパのミラー

- Guido Passet <guido@primerelay.net> - nl.linuxfromscratch.org ミラー
- Bastiaan Jacques <baafie@planet.nl> - lfs.pagefault.net ミラー
- Sven Cranshoff <sven.cranshoff@lineo.be> - lfs.lineo.be ミラー
- Scarlet Belgium - lfs.scarlet.be ミラー
- Sebastian Faulborn <info@aliensoft.org> - lfs.aliensoft.org ミラー
- Stuart Fox <stuart@dontuse.ms> - lfs.dontuse.ms ミラー
- Ralf Uhlemann <admin@realhost.de> - lfs.oss-mirror.org ミラー
- Antonin Sprinzl <Antonin.Sprinzl@tuwien.ac.at> - at.linuxfromscratch.org ミラー
- Fredrik Danerklint <fredan-lfs@fredan.org> - se.linuxfromscratch.org ミラー
- Franck <franck@linuxpourtous.com> - lfs.linuxpourtous.com ミラー
- Philippe Baque <baque@cict.fr> - lfs.cict.fr ミラー

- Vitaly Chekasin <gyouja@pilgrims.ru> - lfs.pilgrims.ru ミラー
- Benjamin Heil <kontakt@wankoo.org> - lfs.wankoo.org ミラー

アジアのミラー

- Satit Phermsawang <satit@wbac.ac.th> - lfs.phayoune.org ミラー
- Shizunet Co.,Ltd. <info@shizu-net.jp> - lfs.mirror.shizu-net.jp ミラー
- Init World <http://www.initworld.com/> - lfs.initworld.com ミラー

オーストラリアのミラー

- Jason Andrade <jason@dstc.edu.au> - au.linuxfromscratch.org ミラー

以前のプロジェクトチームメンバー

- Christine Barczak <theladyskye@linuxfromscratch.org> - LFS ブック編集者
- Archaic <archaic@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター/編集者、HLFS プロジェクトリーダー、BLFS 編集者、ヒントプロジェクトとパッチプロジェクトの管理者
- Nathan Coulson <nathan@linuxfromscratch.org> - LFS-ブートスクリプトの管理者
- Timothy Bauscher
- Robert Briggs
- Ian Chilton
- Jeroen Coumans <jeroen@linuxfromscratch.org> - ウェブサイト開発者、FAQ 管理者
- Manuel Canales Esparcia <manuel@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS/HLFS の XML と XSL の管理者
- Alex Groenewoud - LFS テクニカルライター
- Marc Heerdink
- Jeremy Huntwork <jhuntwork@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS LiveCD 管理者
- Mark Hymers
- Seth W. Klein - FAQ 管理者
- Nicholas Leippe <nicholas@linuxfromscratch.org> - Wiki 管理者
- Anderson Lizardo <lizardo@linuxfromscratch.org> - ウェブサイトのバックエンドスクリプトの管理者
- Dan Nicholson <dnicholson@linuxfromscratch.org> - LFS/BLFS 編集者
- Alexander E. Patrakov <alexander@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、LFS 国際化に関する編集者、LFS Live CD 管理者
- Simon Perreault
- Scot Mc Pherson <scot@linuxfromscratch.org> - LFS NNTP ゲートウェイ管理者
- Greg Schafer <gschafer@zip.com.au> - LFS テクニカルライター、次世代 64 ビット機での構築手法の開発者
- Jesse Tie-Ten-Quee - LFS テクニカルライター
- James Robertson <jwrober@linuxfromscratch.org> - Bugzilla 管理者
- Tushar Teredesai <tushar@linuxfromscratch.org> - BLFS ブック編集者、ヒントプロジェクト・パッチプロジェクトのリーダー
- Jeremy Utley <jeremy@linuxfromscratch.org> - LFS テクニカルライター、Bugzilla 管理者、LFS-ブートスクリプト管理者
- Zack Winkles <zwinkles@gmail.com> - LFS テクニカルライター

付録 C. パッケージの依存関係

LFS にて構築するパッケージはすべて、他のいくつかのパッケージに依存していて、それらがあって初めて適切にインストールができます。 パッケージの中には互いに依存し合っているものもあります。 つまり一つめのパッケージが二つめのパッケージに依存しており、二つめが実は一つめのパッケージにも依存しているような例です。 こういった依存関係があることから LFS においてパッケージを構築する順番は非常に重要なものとなります。 本節は LFS にて構築する各パッケージの依存関係を示すものです。

ビルドするパッケージの個々には、3種類あるいは4種類の依存関係を示しています。 1つめは対象パッケージをコンパイルしてビルドするために必要となるパッケージです。 2つめは一つめのものに加えて、テストスイートを実行するために必要となるパッケージです。 3つめは対象パッケージをビルドし、最終的にインストールするために必要となるパッケージです。 たいていの場合、それらのパッケージに含まれているスクリプトが、実行モジュールへのパスを固定的に取り扱っています。 所定の順番どおりにパッケージのビルドを行わないと、最終的にインストールされるシステムにおいて、スクリプトの中に /tools/bin/[実行モジュール] といったパスが含まれてしまうことになりかねません。 これは明らかに不適切なことです。

依存関係として4つめに示すのは任意のパッケージであり LFS では説明していないものです。 しかし皆さんにとっては有用なパッケージであるはずです。 それらのパッケージは、さらに別のパッケージを必要としていたり、互いに依存し合っていることがあります。 そういった依存関係があるため、それらをインストールする場合には、LFS をすべて仕上げた後に再度 LFS 内のパッケージを再構築する方法をお勧めします。 再インストールに関しては、たいていは BLFS にて説明しています。

acl

インストール依存パッケージ: Attr, Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Automake, Diffutils, Findutils, Libtool
事前インストールパッケージ: Coreutils, Sed, Tar, Vim
任意依存パッケージ: なし

attr

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Automake, Diffutils, Findutils, Libtool
事前インストールパッケージ: Acl, Libcap
任意依存パッケージ: なし

Autoconf

インストール依存パッケージ: Bash, Coreutils, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Automake, Diffutils, Findutils, GCC, Libtool
事前インストールパッケージ: Automake
任意依存パッケージ: Emacs

Automake

インストール依存パッケージ: Autoconf, Bash, Coreutils, Gettext, Grep, M4, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Binutils, Bison, Bzip2, DejaGNU, Diffutils, Expect, Findutils, Flex, GCC, Gettext, Gzip, Libtool, Tar
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Bash

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Readline, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Shadow
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: Xorg

Bc

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Readline
テストスイート依存パッケージ: Gawk
事前インストールパッケージ: Linux カーネル
任意依存パッケージ: なし

Binutils

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, File, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Perl, Sed, Texinfo, Zlib
テストスイート依存パッケージ: DejaGNU, Expect
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Bison

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Perl, Sed
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Findutils, Flex
事前インストールパッケージ: Kbd, Tar
任意依存パッケージ: Doxygen（テストスイート用）

Bzip2

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make, Patch
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Check

インストール依存パッケージ: GCC, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Coreutils

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, Make, Patch, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, E2fsprogs, Findutils, Shadow, Util-linux
事前インストールパッケージ: Bash, Diffutils, Findutils, Man-DB, Eudev
任意依存パッケージ: Perl Expect と IO:Tty モジュール（テストスイート用）

DejaGNU

インストール依存パッケージ: Bash, Coreutils, Diffutils, GCC, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Diffutils

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Perl
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Eudev

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Gperf, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Expat

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: XML::Parser
任意依存パッケージ: なし

Expect

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Tcl
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

E2fsprogs

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Make, Sed, Texinfo, Util-linux
テストスイート依存パッケージ: Procps-ng,Psmisc
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

File

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Zlib
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Findutils

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: DejaGNU, Diffutils, Expect
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Flex

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, M4, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Bison, Gawk
事前インストールパッケージ: IPRoute2, Kbd, Man-DB
任意依存パッケージ: なし

Gawk

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, Make, MPFR, Patch, Readline, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Gcc

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, GMP, Grep, M4, Make, MPC, MPFR, Patch, Perl, Sed, Tar, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: DejaGNU, Expect
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: CLooG-PPL, GNAT, PPL

GDBM

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Gettext

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Perl, Tcl
事前インストールパッケージ: Automake
任意依存パッケージ: なし

Glibc

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Gettext, Grep, Gzip, Linux API ヘッダー, Make, Perl, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: File
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

GMP

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, M4, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: MPFR, GCC
任意依存パッケージ: なし

Gperf

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Expect
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Grep

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Gawk
事前インストールパッケージ: Man-DB
任意依存パッケージ: Pcre

Groff

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Man-DB, Perl
任意依存パッケージ: GPL Ghostscript

GRUB

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Diffutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Texinfo, Xz
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Gzip

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Less
事前インストールパッケージ: Man-DB
任意依存パッケージ: なし

Iana-Etc

インストール依存パッケージ: Coreutils, Gawk, Make
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Perl
任意依存パッケージ: なし

Inetutils

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo, Zlib
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Tar
任意依存パッケージ: なし

Intltool

インストール依存パッケージ: Bash, Gawk, Glibc, Make, Perl, Sed, XML::Parser
テストスイート依存パッケージ: Perl
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

IProute2

インストール依存パッケージ: Bash, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Glibc, Make, Linux API ヘッダー
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Kbd

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Check, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Kmod

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bison, Coreutils, Flex, GCC, Gettext, Glibc, Gzip, Make, Sed, Xz-Utils, Zlib
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Eudev
任意依存パッケージ: なし

Less

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Gzip
任意依存パッケージ: Pcre

Libcap

インストール依存パッケージ: Attr, Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Perl, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: None
任意依存パッケージ: Linux-PAM

Libpipeline

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Check
事前インストールパッケージ: Man-DB
任意依存パッケージ: なし

Libtool

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Autoconf, Automake, Findutils
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Linux Kernel

インストール依存パッケージ: Bash, Bc, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, GCC, Glibc, Grep, Gzip, Kmod, Make, Ncurses, Perl, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: OpenSSL
任意依存パッケージ: なし

M4

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils
事前インストールパッケージ: Autoconf, Bison
任意依存パッケージ: libsigsegv

Make

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Perl, Procps-ng
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Man-DB

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Bzip2, Coreutils, Flex, GCC, GDBM, Gettext, Glibc, Grep, Groff, Gzip, Less, Libpipeline, Make, Sed, Xz
テストスイート依存パッケージ: Util-linux
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Man-Pages

インストール依存パッケージ: Bash, Coreutils, Make
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

MPC

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, MPFR, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: GCC
任意依存パッケージ: なし

MPFR

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, GMP, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: Gawk, GCC
任意依存パッケージ: なし

Ncurses

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Bash, GRUB, Inetutils, Less, Procps-ng, Psmisc, Readline, Texinfo, Util-linux, Vim
任意依存パッケージ: なし

Patch

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: Diffutils
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: Ed

Perl

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, GDBM, Glibc, Grep, Groff, Make, Sed, Zlib
テストスイート依存パッケージ: Iana-Etc, Procps-ng
事前インストールパッケージ: Autoconf
任意依存パッケージ: なし

Pkg-config

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Popt, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: Kmod
任意依存パッケージ: なし

Popt

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Sed
事前インストールパッケージ: Pkg-config
任意依存パッケージ: なし

Procps-ng

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Ncurses
テストスイート依存パッケージ: DejaGNU
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Psmisc

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Readline

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Gawk, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Bash, Gawk
任意依存パッケージ: なし

Sed

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Diffutils, Gawk
事前インストールパッケージ: E2fsprogs, File, Libtool, Shadow
任意依存パッケージ: Cracklib

Shadow

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: Coreutils
任意依存パッケージ: Acl, Attr, Cracklib, PAM

Sysklogd

インストール依存パッケージ: Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Patch
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Sysvinit

インストール依存パッケージ: Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: テストスイートはありません
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Tar

インストール依存パッケージ: Acl, Attr, Bash, Binutils, Bison, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Inetutils, Make, Sed, Texinfo
テストスイート依存パッケージ: Autoconf, Diffutils, Findutils, Gawk, Gzip
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Tcl

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Texinfo

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Patch, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: なし

Util-linux

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, Findutils, Gawk, GCC, Gettext, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed, Eudev, Zlib
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: libcap-ng

Vim

インストール依存パッケージ: Acl, Attr, Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Grep, Make, Ncurses, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: なし
任意依存パッケージ: Xorg, GTK+2, LessTif, Python, Tcl, Ruby, GPM

XML::Parser

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Expat, GCC, Glibc, Make, Perl
テストスイート依存パッケージ: Perl
事前インストールパッケージ: Intltool
任意依存パッケージ: なし

Xz

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, Diffutils, GCC, Glibc, Make
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: GRUB, Kmod, Man-DB, Eudev
任意依存パッケージ: なし

Zlib

インストール依存パッケージ: Bash, Binutils, Coreutils, GCC, Glibc, Make, Sed
テストスイート依存パッケージ: なし
事前インストールパッケージ: File, Kmod, Perl, Util-linux
任意依存パッケージ: なし

付録 D. ブートスクリプトと sysconfig スクリプト version-20150222

本付録に示すスクリプトは、それらが収容されているディレクトリごとに列記します。/etc/rc.d/init.d、/etc/sysconfig、/etc/sysconfig/network-devices、/etc/sysconfig/network-devices/servicesの順です。各ディレクトリにおいてのスクリプトは呼び出し順に説明します。

D.1. /etc/rc.d/init.d/rc

rc スクリプトは initによって呼び出される最初のスクリプトであり、ブート処理を初期化します。

```
#!/bin/bash
#############################################################################
# Begin rc
#
# Description : Main Run Level Control Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans  - gerard@linuxfromscratch.org
#             : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
#############################################################################

. /lib/lsb/init-functions

print_error_msg()
{
   log_failure_msg
   # $i is set when called
   MSG="FAILURE:\n\nYou should not be reading this error message.\n\n"
   MSG="${MSG}It means that an unforeseen error took place in\n"
   MSG="${MSG}${i},\n"
   MSG="${MSG}which exited with a return value of ${error_value}.\n"

   MSG="${MSG}If you're able to track this error down to a bug in one of\n"
   MSG="${MSG}the files provided by the ${DISTRO_MINI} book,\n"
   MSG="${MSG}please be so kind to inform us at ${DISTRO_CONTACT}.\n"
   log_failure_msg "${MSG}"

   log_info_msg "Press Enter to continue..."
   wait_for_user
}

check_script_status()
{
   # $i is set when called
   if [ ! -f ${i} ]; then
      log_warning_msg "${i} is not a valid symlink."
      continue
   fi

   if [ ! -x ${i} ]; then
      log_warning_msg "${i} is not executable, skipping."
      continue
   fi
}
```

```
run()
{
   if [ -z $interactive ]; then
      ${1} ${2}
      return $?
   fi

   while true; do
      read -p "Run ${1} ${2} (Yes/no/continue)? " -n 1 runit
      echo

      case ${runit} in
         c | C)
            interactive=""
            ${i} ${2}
            ret=${?}
            break;
            ;;

         n | N)
            return 0
            ;;

         y | Y)
            ${i} ${2}
            ret=${?}
            break
            ;;
      esac
   done

   return $ret
}

# Read any local settings/overrides
[ -r /etc/sysconfig/rc.site ] && source /etc/sysconfig/rc.site

DISTRO=${DISTRO:-"Linux From Scratch"}
DISTRO_CONTACT=${DISTRO_CONTACT:-"lfs-dev@linuxfromscratch.org (Registration required)"}
DISTRO_MINI=${DISTRO_MINI:-"LFS"}
IPROMPT=${IPROMPT:-"no"}

# These 3 signals will not cause our script to exit
trap "" INT QUIT TSTP

[ "${1}" != "" ] && runlevel=${1}

if [ "${runlevel}" == "" ]; then
   echo "Usage: ${0} <runlevel>" >&2
   exit 1
fi

previous=${PREVLEVEL}
[ "${previous}" == "" ] && previous=N

if [ ! -d /etc/rc.d/rc${runlevel}.d ]; then
   log_info_msg "/etc/rc.d/rc${runlevel}.d does not exist.\n"
   exit 1
fi

if [ "$runlevel" == "6" -o "$runlevel" == "0" ]; then IPROMPT="no"; fi
```

```
# Note: In ${LOGLEVEL:-7}, it is ':' 'dash' '7', not minus 7
if [ "$runlevel" == "S" ]; then
   [ -r /etc/sysconfig/console ] && source /etc/sysconfig/console
   dmesg -n "${LOGLEVEL:-7}"
fi

if [ "${IPROMPT}" == "yes" -a "${runlevel}" == "S" ]; then
   # The total length of the distro welcome string, without escape codes
   wlen=${wlen:-$(echo "Welcome to ${DISTRO}" | wc -c )}
   welcome_message=${welcome_message:-"Welcome to ${INFO}${DISTRO}${NORMAL}"}

   # The total length of the interactive string, without escape codes
   ilen=${ilen:-$(echo "Press 'I' to enter interactive startup" | wc -c )}
   i_message=${i_message:-"Press '${FAILURE}I${NORMAL}' to enter interactive startup"}


   # dcol and icol are spaces before the message to center the message
   # on screen. itime is the amount of wait time for the user to press a key
   wcol=$(( ( ${COLUMNS} - ${wlen} ) / 2 ))
   icol=$(( ( ${COLUMNS} - ${ilen} ) / 2 ))
   itime=${itime:-"3"}

   echo -e "\n\n"
   echo -e "\\033[${wcol}G${welcome_message}"
   echo -e "\\033[${icol}G${i_message}${NORMAL}"
   echo ""
   read -t "${itime}" -n 1 interactive 2>&1 > /dev/null
fi

# Make lower case
[ "${interactive}" == "I" ] && interactive="i"
[ "${interactive}" != "i" ] && interactive=""

# Read the state file if it exists from runlevel S
[ -r /var/run/interactive ] && source /var/run/interactive

# Attempt to stop all services started by the previous runlevel,
# and killed in this runlevel
if [ "${previous}" != "N" ]; then
   for i in $(ls -v /etc/rc.d/rc${runlevel}.d/K* 2> /dev/null)
   do
      check_script_status

      suffix=${i#/etc/rc.d/rc$runlevel.d/K[0-9][0-9]}
      prev_start=/etc/rc.d/rc$previous.d/S[0-9][0-9]$suffix
      sysinit_start=/etc/rc.d/rcS.d/S[0-9][0-9]$suffix

      if [ "${runlevel}" != "0" -a "${runlevel}" != "6" ]; then
         if [ ! -f ${prev_start} -a  ! -f ${sysinit_start} ]; then
            MSG="WARNING:\n\n${i} can't be "
            MSG="${MSG}executed because it was not "
            MSG="${MSG}not started in the previous "
            MSG="${MSG}runlevel (${previous})."
            log_warning_msg "$MSG"
            continue
         fi
      fi

      run ${i} stop
      error_value=${?}
```

```
      if [ "${error_value}" != "0" ]; then print_error_msg; fi
   done
fi

if [ "${previous}" == "N" ]; then export IN_BOOT=1; fi

if [ "$runlevel" == "6" -a -n "${FASTBOOT}" ]; then
   touch /fastboot
fi


# Start all functions in this runlevel
for i in $( ls -v /etc/rc.d/rc${runlevel}.d/S* 2> /dev/null)
do
   if [ "${previous}" != "N" ]; then
      suffix=${i#/etc/rc.d/rc$runlevel.d/S[0-9][0-9]}
      stop=/etc/rc.d/rc$runlevel.d/K[0-9][0-9]$suffix
      prev_start=/etc/rc.d/rc$previous.d/S[0-9][0-9]$suffix

      [ -f ${prev_start} -a ! -f ${stop} ] && continue
   fi

   check_script_status

   case ${runlevel} in
      0|6)
         run ${i} stop
         ;;
      *)
         run ${i} start
         ;;
   esac

   error_value=${?}

   if [ "${error_value}" != "0" ]; then print_error_msg; fi
done

# Store interactive variable on switch from runlevel S and remove if not
if [ "${runlevel}" == "S" -a "${interactive}" == "i" ]; then
    echo "interactive=\"i\"" > /var/run/interactive
else
    rm -f /var/run/interactive 2> /dev/null
fi

# Copy the boot log on initial boot only
if [ "${previous}" == "N" -a  "${runlevel}" != "S" ]; then
   cat $BOOTLOG >> /var/log/boot.log

   # Mark the end of boot
   echo "--------" >> /var/log/boot.log

   # Remove the temporary file
   rm -f $BOOTLOG 2> /dev/null
fi

# End rc
```

D.2. /lib/lsb/init-functions

```
#!/bin/sh
########################################################################
#
# Begin /lib/lsb/init-funtions
#
# Description : Run Level Control Functions
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#             : DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
# Notes       : With code based on Matthias Benkmann's simpleinit-msb
#               http://winterdrache.de/linux/newboot/index.html
#
#               The file should be located in /lib/lsb
#
########################################################################

## Environmental setup
# Setup default values for environment
umask 022
export PATH="/bin:/usr/bin:/sbin:/usr/sbin"

## Set color commands, used via echo
# Please consult `man console_codes for more information
# under the "ECMA-48 Set Graphics Rendition" section
#
# Warning: when switching from a 8bit to a 9bit font,
# the linux console will reinterpret the bold (1;) to
# the top 256 glyphs of the 9bit font.  This does
# not affect framebuffer consoles

NORMAL="\\033[0;39m"         # Standard console grey
SUCCESS="\\033[1;32m"        # Success is green
WARNING="\\033[1;33m"        # Warnings are yellow
FAILURE="\\033[1;31m"        # Failures are red
INFO="\\033[1;36m"           # Information is light cyan
BRACKET="\\033[1;34m"        # Brackets are blue

# Use a colored prefix
BMPREFIX="     "
SUCCESS_PREFIX="${SUCCESS}  *  ${NORMAL}"
FAILURE_PREFIX="${FAILURE}*****${NORMAL}"
WARNING_PREFIX="${WARNING} *** ${NORMAL}"
SKIP_PREFIX="${INFO}  S  ${NORMAL}"

SUCCESS_SUFFIX="${BRACKET}[${SUCCESS}  OK  ${BRACKET}]${NORMAL}"
FAILURE_SUFFIX="${BRACKET}[${FAILURE} FAIL ${BRACKET}]${NORMAL}"
WARNING_SUFFIX="${BRACKET}[${WARNING} WARN ${BRACKET}]${NORMAL}"
SKIP_SUFFIX="${BRACKET}[${INFO} SKIP ${BRACKET}]${NORMAL}"

BOOTLOG=/run/bootlog
KILLDELAY=3

# Set any user specified environment variables e.g. HEADLESS
[ -r /etc/sysconfig/rc.site ]  && . /etc/sysconfig/rc.site
```

```
## Screen Dimensions
# Find current screen size
if [ -z "${COLUMNS}" ]; then
   COLUMNS=$(stty size)
   COLUMNS=${COLUMNS##* }
fi

# When using remote connections, such as a serial port, stty size returns 0
if [ "${COLUMNS}" = "0" ]; then
   COLUMNS=80
fi

## Measurements for positioning result messages
COL=$((${COLUMNS} - 8))
WCOL=$((${COL} - 2))

## Set Cursor Position Commands, used via echo
SET_COL="\\033[${COL}G"      # at the $COL char
SET_WCOL="\\033[${WCOL}G"    # at the $WCOL char
CURS_UP="\\033[1A\\033[0G"   # Up one line, at the 0'th char
CURS_ZERO="\\033[0G"

#############################################################################
# start_daemon()                                                            #
# Usage: start_daemon [-f] [-n nicelevel] [-p pidfile] pathname [args...]   #
#                                                                           #
# Purpose: This runs the specified program as a daemon                      #
#                                                                           #
# Inputs: -f: (force) run the program even if it is already running.        #
#         -n nicelevel: specify a nice level. See 'man nice(1)'.            #
#         -p pidfile: use the specified file to determine PIDs.             #
#         pathname: the complete path to the specified program              #
#         args: additional arguments passed to the program (pathname)       #
#                                                                           #
# Return values (as defined by LSB exit codes):                             #
#       0 - program is running or service is OK                             #
#       1 - generic or unspecified error                                    #
#       2 - invalid or excessive argument(s)                                #
#       5 - program is not installed                                        #
#############################################################################
start_daemon()
{
    local force=""
    local nice="0"
    local pidfile=""
    local pidlist=""
    local retval=""

    # Process arguments
    while true
    do
        case "${1}" in

            -f)
                force="1"
                shift 1
                ;;

            -n)
                nice="${2}"
```

```
                shift 2
                ;;

            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;

            -*)
                return 2
                ;;

            *)
                program="${1}"
                break
                ;;
        esac
    done

    # Check for a valid program
    if [ ! -e "${program}" ]; then return 5; fi

    # Execute
    if [ -z "${force}" ]; then
        if [ -z "${pidfile}" ]; then
            # Determine the pid by discovery
            pidlist=`pidofproc "${1}"`
            retval="${?}"
        else
            # The PID file contains the needed PIDs
            # Note that by LSB requirement, the path must be given to pidofproc,
            # however, it is not used by the current implementation or standard.
            pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" "${1}"`
            retval="${?}"
        fi

        # Return a value ONLY
        # It is the init script's (or distribution's functions) responsibilty
        # to log messages!
        case "${retval}" in

            0)
                # Program is already running correctly, this is a
                # successful start.
                return 0
                ;;

            1)
                # Program is not running, but an invalid pid file exists
                # remove the pid file and continue
                rm -f "${pidfile}"
                ;;

            3)
                # Program is not running and no pidfile exists
                # do nothing here, let start_deamon continue.
                ;;

            *)
                # Others as returned by status values shall not be interpreted
                # and returned as an unspecified error.
```

```
                return 1
                ;;
        esac
    fi

    # Do the start!
    nice -n "${nice}" "${@}"
}

########################################################################################
# killproc()                                                                           #
# Usage: killproc [-p pidfile] pathname [signal]                                       #
#                                                                                      #
# Purpose: Send control signals to running processes                                   #
#                                                                                      #
# Inputs: -p pidfile, uses the specified pidfile                                       #
#         pathname, pathname to the specified program                                  #
#         signal, send this signal to pathname                                         #
#                                                                                      #
# Return values (as defined by LSB exit codes):                                       #
#       0 - program (pathname) has stopped/is already stopped or a                     #
#           running program has been sent specified signal and stopped                 #
#           successfully                                                               #
#       1 - generic or unspecified error                                               #
#       2 - invalid or excessive argument(s)                                           #
#       5 - program is not installed                                                   #
#       7 - program is not running and a signal was supplied                           #
########################################################################################
killproc()
{
    local pidfile
    local program
    local prefix
    local progname
    local signal="-TERM"
    local fallback="-KILL"
    local nosig
    local pidlist
    local retval
    local pid
    local delay="30"
    local piddead
    local dtime

    # Process arguments
    while true; do
        case "${1}" in
            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;

             *)
                 program="${1}"
                 if [ -n "${2}" ]; then
                     signal="${2}"
                     fallback=""
                 else
                     nosig=1
                 fi
```

```
                # Error on additional arguments
                if [ -n "${3}" ]; then
                    return 2
                else
                    break
                fi
                ;;
        esac
    done

    # Check for a valid program
    if [ ! -e "${program}" ]; then return 5; fi

    # Check for a valid signal
    check_signal "${signal}"
    if [ "${?}" -ne "0" ]; then return 2; fi

    # Get a list of pids
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        # determine the pid by discovery
        pidlist=`pidofproc "${1}"`
        retval="${?}"
    else
        # The PID file contains the needed PIDs
        # Note that by LSB requirement, the path must be given to pidofproc,
        # however, it is not used by the current implementation or standard.
        pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" "${1}"`
        retval="${?}"
    fi

    # Return a value ONLY
    # It is the init script's (or distribution's functions) responsibilty
    # to log messages!
    case "${retval}" in

        0)
            # Program is running correctly
            # Do nothing here, let killproc continue.
            ;;

        1)
            # Program is not running, but an invalid pid file exists
            # Remove the pid file.
            rm -f "${pidfile}"

            # This is only a success if no signal was passed.
            if [ -n "${nosig}" ]; then
                return 0
            else
                return 7
            fi
            ;;

        3)
            # Program is not running and no pidfile exists
            # This is only a success if no signal was passed.
            if [ -n "${nosig}" ]; then
                return 0
            else
                return 7
            fi
```

```
            ;;

        *)
            # Others as returned by status values shall not be interpreted
            # and returned as an unspecified error.
            return 1
            ;;
    esac

    # Perform different actions for exit signals and control signals
    check_sig_type "${signal}"

    if [ "${?}" -eq "0" ]; then # Signal is used to terminate the program

        # Account for empty pidlist (pid file still exists and no
        # signal was given)
        if [ "${pidlist}" != "" ]; then

            # Kill the list of pids
            for pid in ${pidlist}; do

                kill -0 "${pid}" 2> /dev/null

                if [ "${?}" -ne "0" ]; then
                    # Process is dead, continue to next and assume all is well
                    continue
                else
                    kill "${signal}" "${pid}" 2> /dev/null

                    # Wait up to ${delay}/10 seconds to for "${pid}" to
                    # terminate in 10ths of a second

                    while [ "${delay}" -ne "0" ]; do
                        kill -0 "${pid}" 2> /dev/null || piddead="1"
                        if [ "${piddead}" = "1" ]; then break; fi
                        sleep 0.1
                        delay="$(( ${delay} - 1 ))"
                    done

                    # If a fallback is set, and program is still running, then
                    # use the fallback
                    if [ -n "${fallback}" -a "${piddead}" != "1" ]; then
                        kill "${fallback}" "${pid}" 2> /dev/null
                        sleep 1
                        # Check again, and fail if still running
                        kill -0 "${pid}" 2> /dev/null && return 1
                    fi
                fi
            done
        fi

        # Check for and remove stale PID files.
        if [ -z "${pidfile}" ]; then
            # Find the basename of $program
            prefix=`echo "${program}" | sed 's/[^/]*$//'`
            progname=`echo "${program}" | sed "s@${prefix}@@"`

            if [ -e "/var/run/${progname}.pid" ]; then
                rm -f "/var/run/${progname}.pid" 2> /dev/null
            fi
        else
```

```
            if [ -e "${pidfile}" ]; then rm -f "${pidfile}" 2> /dev/null; fi
        fi

    # For signals that do not expect a program to exit, simply
    # let kill do its job, and evaluate kill's return for value

    else # check_sig_type - signal is not used to terminate program
        for pid in ${pidlist}; do
            kill "${signal}" "${pid}"
            if [ "${?}" -ne "0" ]; then return 1; fi
        done
    fi
}

##############################################################################
# pidofproc()                                                                #
# Usage: pidofproc [-p pidfile] pathname                                     #
#                                                                            #
# Purpose: This function returns one or more pid(s) for a particular daemon  #
#                                                                            #
# Inputs: -p pidfile, use the specified pidfile instead of pidof             #
#         pathname, path to the specified program                            #
#                                                                            #
# Return values (as defined by LSB status codes):                            #
#       0 - Success (PIDs to stdout)                                         #
#       1 - Program is dead, PID file still exists (remaining PIDs output)   #
#       3 - Program is not running (no output)                               #
##############################################################################
pidofproc()
{
    local pidfile
    local program
    local prefix
    local progname
    local pidlist
    local lpids
    local exitstatus="0"

    # Process arguments
    while true; do
        case "${1}" in

            -p)
                pidfile="${2}"
                shift 2
                ;;

            *)
                program="${1}"
                if [ -n "${2}" ]; then
                    # Too many arguments
                    # Since this is status, return unknown
                    return 4
                else
                    break
                fi
                ;;
        esac
    done

    # If a PID file is not specified, try and find one.
```

```
    if [ -z "${pidfile}" ]; then
        # Get the program's basename
        prefix=`echo "${program}" | sed 's/[^/]*$//'`

        if [ -z "${prefix}" ]; then
           progname="${program}"
        else
           progname=`echo "${program}" | sed "s@${prefix}@@"`
        fi

        # If a PID file exists with that name, assume that is it.
        if [ -e "/var/run/${progname}.pid" ]; then
            pidfile="/var/run/${progname}.pid"
        fi
    fi

    # If a PID file is set and exists, use it.
    if [ -n "${pidfile}" -a -e "${pidfile}" ]; then

        # Use the value in the first line of the pidfile
        pidlist=`/bin/head -n1 "${pidfile}"`
        # This can optionally be written as 'sed 1q' to repalce 'head -n1'
        # should LFS move /bin/head to /usr/bin/head
    else
        # Use pidof
        pidlist=`pidof "${program}"`
    fi

    # Figure out if all listed PIDs are running.
    for pid in ${pidlist}; do
        kill -0 ${pid} 2> /dev/null

        if [ "${?}" -eq "0" ]; then
            lpids="${lpids}${pid} "
        else
            exitstatus="1"
        fi
    done

    if [ -z "${lpids}" -a ! -f "${pidfile}" ]; then
        return 3
    else
        echo "${lpids}"
        return "${exitstatus}"
    fi
}

########################################################################################
# statusproc()                                                                         #
# Usage: statusproc [-p pidfile] pathname                                              #
#                                                                                      #
# Purpose: This function prints the status of a particular daemon to stdout            #
#                                                                                      #
# Inputs: -p pidfile, use the specified pidfile instead of pidof                       #
#         pathname, path to the specified program                                      #
#                                                                                      #
# Return values:                                                                       #
#       0 - Status printed                                                             #
#       1 - Input error. The daemon to check was not specified.                        #
########################################################################################
statusproc()
```

```
{
   local pidfile
   local pidlist

   if [ "${#}" = "0" ]; then
      echo "Usage: statusproc [-p pidfle] {program}"
      exit 1
   fi

   # Process arguments
   while true; do
       case "${1}" in

           -p)
               pidfile="${2}"
               shift 2
               ;;

           *)
               if [ -n "${2}" ]; then
                   echo "Too many arguments"
                   return 1
               else
                   break
               fi
               ;;
       esac
   done

   if [ -n "${pidfile}" ]; then
      pidlist=`pidofproc -p "${pidfile}" $@`
   else
      pidlist=`pidofproc $@`
   fi

   # Trim trailing blanks
   pidlist=`echo "${pidlist}" | sed -r 's/ +$//'`

   base="${1##*/}"

   if [ -n "${pidlist}" ]; then
      /bin/echo -e "${INFO}${base} is running with Process" \
         "ID(s) ${pidlist}.${NORMAL}"
   else
      if [ -n "${base}" -a -e "/var/run/${base}.pid" ]; then
         /bin/echo -e "${WARNING}${1} is not running but" \
            "/var/run/${base}.pid exists.${NORMAL}"
      else
         if [ -n "${pidfile}" -a -e "${pidfile}" ]; then
            /bin/echo -e "${WARNING}${1} is not running" \
               "but ${pidfile} exists.${NORMAL}"
         else
            /bin/echo -e "${INFO}${1} is not running.${NORMAL}"
         fi
      fi
   fi
}

##############################################################################
# timespec()                                                                 #
#                                                                            #
```

```
# Purpose: An internal utility function to format a timestamp                 #
#          a boot log file.  Sets the STAMP variable.                         #
#                                                                             #
# Return value: Not used                                                      #
###############################################################################
timespec()
{
   STAMP="$(echo `date +"%b %d %T %:z"` `hostname`) "
   return 0
}

###############################################################################
# log_success_msg()                                                           #
# Usage: log_success_msg ["message"]                                          #
#                                                                             #
# Purpose: Print a successful status message to the screen and                #
#          a boot log file.                                                   #
#                                                                             #
# Inputs: $@ - Message                                                        #
#                                                                             #
# Return values: Not used                                                     #
###############################################################################
log_success_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${SUCCESS_PREFIX}${SET_COL}${SUCCESS_SUFFIX}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`

    timespec
    /bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} OK" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

log_success_msg2()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${SUCCESS_PREFIX}${SET_COL}${SUCCESS_SUFFIX}"

    echo " OK" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

###############################################################################
# log_failure_msg()                                                           #
# Usage: log_failure_msg ["message"]                                          #
#                                                                             #
# Purpose: Print a failure status message to the screen and                   #
#          a boot log file.                                                   #
#                                                                             #
# Inputs: $@ - Message                                                        #
#                                                                             #
# Return values: Not used                                                     #
###############################################################################
log_failure_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${FAILURE_PREFIX}${SET_COL}${FAILURE_SUFFIX}"
```

```
    # Strip non-printable characters from log file

    timespec
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`
    /bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} FAIL" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

log_failure_msg2()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${FAILURE_PREFIX}${SET_COL}${FAILURE_SUFFIX}"

    echo "FAIL" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

########################################################################################
# log_warning_msg()                                                                    #
# Usage: log_warning_msg ["message"]                                                   #
#                                                                                      #
# Purpose: Print a warning status message to the screen and                            #
#          a boot log file.                                                            #
#                                                                                      #
# Return values: Not used                                                              #
########################################################################################
log_warning_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${WARNING_PREFIX}${SET_COL}${WARNING_SUFFIX}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`
    timespec
    /bin/echo -e "${STAMP} ${logmessage} WARN" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

log_skip_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"
    /bin/echo -e "${CURS_ZERO}${SKIP_PREFIX}${SET_COL}${SKIP_SUFFIX}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`
    /bin/echo "SKIP" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

########################################################################################
# log_info_msg()                                                                       #
# Usage: log_info_msg message                                                          #
#                                                                                      #
# Purpose: Print an information message to the screen and                              #
#          a boot log file.  Does not print a trailing newline character.              #
#                                                                                      #
```

```
# Return values: Not used                                                      #
###############################################################################
log_info_msg()
{
    /bin/echo -n -e "${BMPREFIX}${@}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`
    timespec
    /bin/echo -n -e "${STAMP} ${logmessage}" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

log_info_msg2()
{
    /bin/echo -n -e "${@}"

    # Strip non-printable characters from log file
    logmessage=`echo "${@}" | sed 's/\\\033[^a-zA-Z]*.//g'`
    /bin/echo -n -e "${logmessage}" >> ${BOOTLOG}

    return 0
}

###############################################################################
# evaluate_retval()                                                           #
# Usage: Evaluate a return value and print success or failyure as appropriate #
#                                                                             #
# Purpose: Convenience function to terminate an info message                  #
#                                                                             #
# Return values: Not used                                                     #
###############################################################################
evaluate_retval()
{
   local error_value="${?}"

   if [ ${error_value} = 0 ]; then
      log_success_msg2
   else
      log_failure_msg2
   fi
}

###############################################################################
# check_signal()                                                              #
# Usage: check_signal [ -{signal} | {signal} ]                                #
#                                                                             #
# Purpose: Check for a valid signal.  This is not defined by any LSB draft,   #
#          however, it is required to check the signals to determine if the   #
#          signals chosen are invalid arguments to the other functions.       #
#                                                                             #
# Inputs: Accepts a single string value in the form or -{signal} or {signal}  #
#                                                                             #
# Return values:                                                              #
#       0 - Success (signal is valid                                          #
#       1 - Signal is not valid                                               #
###############################################################################
check_signal()
{
    local valsig
```

```
    # Add error handling for invalid signals
    valsig="-ALRM -HUP -INT -KILL -PIPE -POLL -PROF -TERM -USR1 -USR2"
    valsig="${valsig} -VTALRM -STKFLT -PWR -WINCH -CHLD -URG -TSTP -TTIN"
    valsig="${valsig} -TTOU -STOP -CONT -ABRT -FPE -ILL -QUIT -SEGV -TRAP"
    valsig="${valsig} -SYS -EMT -BUS -XCPU -XFSZ -0 -1 -2 -3 -4 -5 -6 -8 -9"
    valsig="${valsig} -11 -13 -14 -15"

    echo "${valsig}" | grep -- " ${1} " > /dev/null

    if [ "${?}" -eq "0" ]; then
        return 0
    else
        return 1
    fi
}

##############################################################################
# check_sig_type()                                                           #
# Usage: check_signal [ -{signal} | {signal} ]                               #
#                                                                            #
# Purpose: Check if signal is a program termination signal or a control signal #
#          This is not defined by any LSB draft, however, it is required to  #
#          check the signals to determine if they are intended to end a      #
#          program or simply to control it.                                  #
#                                                                            #
# Inputs: Accepts a single string value in the form or -{signal} or {signal} #
#                                                                            #
# Return values:                                                             #
#       0 - Signal is used for program termination                           #
#       1 - Signal is used for program control                               #
##############################################################################
check_sig_type()
{
    local valsig

    # The list of termination signals (limited to generally used items)
    valsig="-ALRM -INT -KILL -TERM -PWR -STOP -ABRT -QUIT -2 -3 -6 -9 -14 -15"

    echo "${valsig}" | grep -- " ${1} " > /dev/null

    if [ "${?}" -eq "0" ]; then
        return 0
    else
        return 1
    fi
}

##############################################################################
# wait_for_user()                                                            #
#                                                                            #
# Purpose: Wait for the user to respond if not a headless system             #
#                                                                            #
##############################################################################
wait_for_user()
{
   # Wait for the user by default
   [ "${HEADLESS=0}" = "0" ] && read ENTER
   return 0
}
```

```
########################################################################################
# is_true()                                                                            #
#                                                                                      #
# Purpose: Utility to test if a variable is true | yes | 1                            #
#                                                                                      #
########################################################################################
is_true()
{
   [ "$1" = "1" ] || [ "$1" = "yes" ] || [ "$1" = "true" ] ||  [ "$1" = "y" ] ||
   [ "$1" = "t" ]
}

# End /lib/lsb/init-functions
```

D.3. /etc/rc.d/init.d/mountvirtfs

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin mountvirtfs
#
# Description : Mount proc, sysfs, and run
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            mountvirtfs
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Mounts /sys and /proc virtual (kernel) filesystems.
#                      Mounts /run (tmpfs) and /dev (devtmpfs).
# Description:         Mounts /sys and /proc virtual (kernel) filesystems.
#                      Mounts /run (tmpfs) and /dev (devtmpfs).
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      # Make sure /run is available before logging any messages
      if ! mountpoint /run >/dev/null; then
         mount /run || failed=1
      fi

      mkdir -p /run/lock /run/shm
      chmod 1777 /run/shm /run/lock

      log_info_msg "Mounting virtual file systems: ${INFO}/run"

      if ! mountpoint /proc >/dev/null; then
```

```
         log_info_msg2 " ${INFO}/proc"
         mount -o nosuid,noexec,nodev /proc || failed=1
      fi

      if ! mountpoint /sys >/dev/null; then
         log_info_msg2 " ${INFO}/sys"
         mount -o nosuid,noexec,nodev /sys || failed=1
      fi

      if ! mountpoint /dev >/dev/null; then
         log_info_msg2 " ${INFO}/dev"
         mount -o mode=0755,nosuid /dev  || failed=1
      fi

      ln -sfn /run/shm /dev/shm

      (exit ${failed})
      evaluate_retval
      exit $failed
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

# End mountvirtfs
```

D.4. /etc/rc.d/init.d/modules

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin modules
#
# Description : Module auto-loading script
#
# Authors     : Zack Winkles
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            modules
# Required-Start:      mountvirtfs sysctl
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Loads required modules.
# Description:         Loads modules listed in /etc/sysconfig/modules.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

# Assure that the kernel has module support.
[ -e /proc/modules ] || exit 0
```

```
. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      # Exit if there's no modules file or there are no
      # valid entries
      [ -r /etc/sysconfig/modules ]             || exit 0
      egrep -qv '^($|#)' /etc/sysconfig/modules || exit 0

      log_info_msg "Loading modules:"

      # Only try to load modules if the user has actually given us
      # some modules to load.

      while read module args; do

         # Ignore comments and blank lines.
         case "$module" in
            ""|"#"*) continue ;;
         esac

         # Attempt to load the module, passing any arguments provided.
         modprobe ${module} ${args} >/dev/null

         # Print the module name if successful, otherwise take note.
         if [ $? -eq 0 ]; then
            log_info_msg2 " ${module}"
         else
            failedmod="${failedmod} ${module}"
         fi
      done < /etc/sysconfig/modules

      # Print a message about successfully loaded modules on the correct line.
      log_success_msg2

      # Print a failure message with a list of any modules that
      # may have failed to load.
      if [ -n "${failedmod}" ]; then
         log_failure_msg "Failed to load modules:${failedmod}"
         exit 1
      fi
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End modules
```

D.5. /etc/rc.d/init.d/udev

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin udev
#
```

```
# Description : Udev cold-plugging script
#
# Authors     : Zack Winkles, Alexander E. Patrakov
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            udev $time
# Required-Start:
# Should-Start:        modules
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Populates /dev with device nodes.
# Description:         Mounts a tempfs on /dev and starts the udevd daemon.
#                      Device nodes are created as defined by udev.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Populating /dev with device nodes... "
      if ! grep -q '[[:space:]]sysfs' /proc/mounts; then
         log_failure_msg2
         msg="FAILURE:\n\nUnable to create "
         msg="${msg}devices without a SysFS filesystem\n\n"
         msg="${msg}After you press Enter, this system "
         msg="${msg}will be halted and powered off.\n\n"
         log_info_msg "$msg"
         log_info_msg "Press Enter to continue..."
         wait_for_user
         /etc/rc.d/init.d/halt stop
      fi

      # Start the udev daemon to continually watch for, and act on,
      # uevents
      /sbin/udevd --daemon

      # Now traverse /sys in order to "coldplug" devices that have
      # already been discovered
      /sbin/udevadm trigger --action=add    --type=subsystems
      /sbin/udevadm trigger --action=add    --type=devices
      /sbin/udevadm trigger --action=change --type=devices

      # Now wait for udevd to process the uevents we triggered
      if ! is_true "$OMIT_UDEV_SETTLE"; then
         /sbin/udevadm settle
      fi

      # If any LVM based partitions are on the system, ensure they
      # are activated so they can be used.
      if [ -x /sbin/vgchange ]; then /sbin/vgchange -a y >/dev/null; fi

      log_success_msg2
```

```
      ;;

   *)
      echo "Usage ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End udev
```

D.6. /etc/rc.d/init.d/swap

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin swap
#
# Description : Swap Control Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            swap
# Required-Start:      udev
# Should-Start:        modules
# Required-Stop:       localnet
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:        0 6
# Short-Description:   Mounts and unmounts swap partitions.
# Description:         Mounts and unmounts swap partitions defined in
#                      /etc/fstab.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Activating all swap files/partitions..."
      swapon -a
      evaluate_retval
      ;;

   stop)
      log_info_msg "Deactivating all swap files/partitions..."
      swapoff -a
      evaluate_retval
      ;;

   restart)
      ${0} stop
      sleep 1
```

```
      ${0} start
      ;;

   status)
      log_success_msg "Retrieving swap status."
      swapon -s
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop|restart|status}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End swap
```

D.7. /etc/rc.d/init.d/setclock

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin setclock
#
# Description : Setting Linux Clock
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:
# Required-Start:
# Should-Start:        modules
# Required-Stop:
# Should-Stop:         $syslog
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Stores and restores time from the hardware clock
# Description:         On boot, system time is obtained from hwclock.  The
#                      hardware clock can also be set on shutdown.
# X-LFS-Provided-By:   LFS BLFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

[ -r /etc/sysconfig/clock ] && . /etc/sysconfig/clock


case "${UTC}" in
   yes|true|1)
      CLOCKPARAMS="${CLOCKPARAMS} --utc"
      ;;

   no|false|0)
      CLOCKPARAMS="${CLOCKPARAMS} --localtime"
```

```
      ;;

esac

case ${1} in
   start)
      hwclock --hctosys ${CLOCKPARAMS} >/dev/null
      ;;

   stop)
      log_info_msg "Setting hardware clock..."
      hwclock --systohc ${CLOCKPARAMS} >/dev/null
      evaluate_retval
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop}"
      exit 1
      ;;

esac

exit 0
```

D.8. /etc/rc.d/init.d/checkfs

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin checkfs
#
# Description : File System Check
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               A. Luebke - luebke@users.sourceforge.net
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
# Based on checkfs script from LFS-3.1 and earlier.
#
# From man fsck
# 0    - No errors
# 1    - File system errors corrected
# 2    - System should be rebooted
# 4    - File system errors left uncorrected
# 8    - Operational error
# 16   - Usage or syntax error
# 32   - Fsck canceled by user request
# 128  - Shared library error
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            checkfs
# Required-Start:      udev swap $time
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
```

```
# Default-Stop:
# Short-Description:   Checks local filesystems before mounting.
# Description:         Checks local filesystmes before mounting.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      if [ -f /fastboot ]; then
         msg="/fastboot found, will omit "
         msg="${msg} file system checks as requested.\n"
         log_info_msg "${msg}"
         exit 0
      fi

      log_info_msg "Mounting root file system in read-only mode... "
      mount -n -o remount,ro / >/dev/null

      if [ ${?} != 0 ]; then
         log_failure_msg2
         msg="\n\nCannot check root "
         msg="${msg}filesystem because it could not be mounted "
         msg="${msg}in read-only mode.\n\n"
         msg="${msg}After you press Enter, this system will be "
         msg="${msg}halted and powered off.\n\n"
         log_failure_msg "${msg}"

         log_info_msg "Press Enter to continue..."
         wait_for_user
         /etc/rc.d/init.d/halt stop
      else
         log_success_msg2
      fi

      if [ -f /forcefsck ]; then
         msg="\n/forcefsck found, forcing file"
         msg="${msg} system checks as requested."
         log_success_msg "$msg"
         options="-f"
      else
         options=""
      fi

      log_info_msg "Checking file systems..."
      # Note: -a option used to be -p; but this fails e.g. on fsck.minix
      if is_true "$VERBOSE_FSCK"; then
        fsck ${options} -a -A -C -T
      else
        fsck ${options} -a -A -C -T >/dev/null
      fi

      error_value=${?}

      if [ "${error_value}" = 0 ]; then
         log_success_msg2
      fi

      if [ "${error_value}" = 1 ]; then
         msg="\nWARNING:\n\nFile system errors "
```

```
         msg="${msg}were found and have been corrected.\n"
         msg="${msg}You may want to double-check that "
         msg="${msg}everything was fixed properly."
         log_warning_msg "$msg"
      fi

      if [ "${error_value}" = 2 -o "${error_value}" = 3 ]; then
         msg="\nWARNING:\n\nFile system errors "
         msg="${msg}were found and have been been "
         msg="${msg}corrected, but the nature of the "
         msg="${msg}errors require this system to be rebooted.\n\n"
         msg="${msg}After you press enter, "
         msg="${msg}this system will be rebooted\n\n"
         log_failure_msg "$msg"

         log_info_msg "Press Enter to continue..."
         wait_for_user
         reboot -f
      fi

      if [ "${error_value}" -gt 3 -a "${error_value}" -lt 16 ]; then
         msg="\nFAILURE:\n\nFile system errors "
         msg="${msg}were encountered that could not be "
         msg="${msg}fixed automatically.  This system "
         msg="${msg}cannot continue to boot and will "
         msg="${msg}therefore be halted until those "
         msg="${msg}errors are fixed manually by a "
         msg="${msg}System Administrator.\n\n"
         msg="${msg}After you press Enter, this system will be "
         msg="${msg}halted and powered off.\n\n"
         log_failure_msg "$msg"

         log_info_msg "Press Enter to continue..."
         wait_for_user
         /etc/rc.d/init.d/halt stop
      fi

      if [ "${error_value}" -ge 16 ]; then
         msg="\nFAILURE:\n\nUnexpected Failure "
         msg="${msg}running fsck.  Exited with error "
         msg="${msg} code: ${error_value}."
         log_failure_msg $msg
         exit ${error_value}
      fi

      exit 0
      ;;
   *)
      echo "Usage: ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

# End checkfs
```

D.9. /etc/rc.d/init.d/mountfs

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin mountfs
```

```
#
# Description : File System Mount Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
##########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            $local_fs
# Required-Start:      udev checkfs
# Should-Start:
# Required-Stop:       swap
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:        0 6
# Short-Description:   Mounts/unmounts local filesystems defined in /etc/fstab.
# Description:         Remounts root filesystem read/write and mounts all
#                      remaining local filesystems defined in /etc/fstab on
#                      start.  Remounts root filesystem read-only and unmounts
#                      remaining filesystems on stop.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Remounting root file system in read-write mode..."
      mount -o remount,rw / >/dev/null
      evaluate_retval

      # Remove fsck-related file system watermarks.
      rm -f /fastboot /forcefsck

      # Make sure /dev/pts exists
      mkdir -p /dev/pts

      # This will mount all filesystems that do not have _netdev in
      # their option list.  _netdev denotes a network filesystem.

      log_info_msg "Mounting remaining file systems..."
      mount -a -O no_netdev >/dev/null
      evaluate_retval
      exit $failed
      ;;

   stop)
      # Don't unmount virtual file systems like /run
      log_info_msg "Unmounting all other currently mounted file systems..."
      umount -a -d -r -t notmpfs,nosysfs,nodevtmpfs,noproc,nodevpts >/dev/null
      evaluate_retval

      # Make sure / is mounted read only (umount bug)
      mount -o remount,ro /

      # Make all LVM volume groups unavailable, if appropriate
      # This fails if swap or / are on an LVM partition
```

```
      #if [ -x /sbin/vgchange ]; then /sbin/vgchange -an > /dev/null; fi
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop}"
      exit 1
      ;;
esac

# End mountfs
```

D.10. /etc/rc.d/init.d/udev_retry

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin udev_retry
#
# Description : Udev cold-plugging script (retry)
#
# Authors     : Alexander E. Patrakov
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#               Bryan Kadzban -
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            udev_retry
# Required-Start:      udev
# Should-Start:        $local_fs
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Replays failed uevents and creates additional devices.
# Description:         Replays any failed uevents that were skipped due to
#                      slow hardware initialization, and creates those needed
#                      device nodes
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Retrying failed uevents, if any..."

      # As of udev-186, the --run option is no longer valid
      #rundir=$(/sbin/udevadm info --run)
      rundir=/run/udev
      # From Debian: "copy the rules generated before / was mounted
      # read-write":

      for file in ${rundir}/tmp-rules--*; do
         dest=${file##*tmp-rules--}
         [ "$dest" = '*' ] && break
         cat $file >> /etc/udev/rules.d/$dest
         rm -f $file
```

```
      done

      # Re-trigger the uevents that may have failed,
      # in hope they will succeed now
      /bin/sed -e 's/#.*$//' /etc/sysconfig/udev_retry | /bin/grep -v '^$' | \
      while read line ; do
         for subsystem in $line ; do
            /sbin/udevadm trigger --subsystem-match=$subsystem --action=add
         done
      done

      # Now wait for udevd to process the uevents we triggered
      if ! is_true "$OMIT_UDEV_RETRY_SETTLE"; then
         /sbin/udevadm settle
      fi

      evaluate_retval
      ;;

   *)
      echo "Usage ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End udev_retry
```

D.11. /etc/rc.d/init.d/cleanfs

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin cleanfs
#
# Description : Clean file system
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            cleanfs
# Required-Start:      $local_fs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Cleans temporary directories early in the boot process.
# Description:         Cleans temporary directories /var/run, /var/lock, and
#                      optionally, /tmp.  cleanfs also creates /var/run/utmp
#                      and any files defined in /etc/sysconfig/createfiles.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO
```

```
. /lib/lsb/init-functions

# Function to create files/directory on boot.
create_files()
{
   # Input to file descriptor 9 and output to stdin (redirection)
   exec 9>&0 < /etc/sysconfig/createfiles

   while read name type perm usr grp dtype maj min junk
   do
      # Ignore comments and blank lines.
      case "${name}" in
         ""|\#*) continue ;;
      esac

      # Ignore existing files.
      if [ ! -e "${name}" ]; then
         # Create stuff based on its type.
         case "${type}" in
            dir)
               mkdir "${name}"
               ;;
            file)
               :> "${name}"
               ;;
            dev)
               case "${dtype}" in
                  char)
                     mknod "${name}" c ${maj} ${min}
                     ;;
                  block)
                     mknod "${name}" b ${maj} ${min}
                     ;;
                  pipe)
                     mknod "${name}" p
                     ;;
                  *)
                     log_warning_msg "\nUnknown device type: ${dtype}"
                     ;;
               esac
               ;;
            *)
               log_warning_msg "\nUnknown type: ${type}"
               continue
               ;;
         esac

         # Set up the permissions, too.
         chown ${usr}:${grp} "${name}"
         chmod ${perm} "${name}"
      fi
   done

   # Close file descriptor 9 (end redirection)
   exec 0>&9 9>&-
   return 0
}

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Cleaning file systems:"
```

```
      if [ "${SKIPTMPCLEAN}" = "" ]; then
         log_info_msg2 " /tmp"
         cd /tmp &&
         find . -xdev -mindepth 1 ! -name lost+found -delete || failed=1
      fi

      > /var/run/utmp

      if grep -q '^utmp:' /etc/group ; then
         chmod 664 /var/run/utmp
         chgrp utmp /var/run/utmp
      fi

      (exit ${failed})
      evaluate_retval

      if egrep -qv '^(#|$)' /etc/sysconfig/createfiles 2>/dev/null; then
         log_info_msg "Creating files and directories... "
         create_files      # Always returns 0
         evaluate_retval
      fi

      exit $failed
      ;;
   *)
      echo "Usage: ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

# End cleanfs
```

D.12. /etc/rc.d/init.d/console

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin console
#
# Description : Sets keymap and screen font
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               Alexander E. Patrakov
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            console
# Required-Start:
# Should-Start:        $local_fs
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Sets up a localised console.
# Description:         Sets up fonts and language settings for the user's
```

```
#                       local as defined by /etc/sysconfig/console.
# X-LFS-Provided-By:    LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

# Native English speakers probably don't have /etc/sysconfig/console at all
[ -r /etc/sysconfig/console ] && . /etc/sysconfig/console

is_true()
{
   [ "$1" = "1" ] || [ "$1" = "yes" ] || [ "$1" = "true" ]
}

failed=0

case "${1}" in
   start)
      # See if we need to do anything
      if [ -z "${KEYMAP}"         ] && [ -z "${KEYMAP_CORRECTIONS}" ] &&
         [ -z "${FONT}"           ] && [ -z "${LEGACY_CHARSET}"     ] &&
         ! is_true "${UNICODE}"; then
         exit 0
      fi

      # There should be no bogus failures below this line!
      log_info_msg "Setting up Linux console..."

      # Figure out if a framebuffer console is used
      [ -d /sys/class/graphics/fb0 ] && use_fb=1 || use_fb=0

      # Figure out the command to set the console into the
      # desired mode
      is_true "${UNICODE}" &&
         MODE_COMMAND="echo -en '\033%G' && kbd_mode -u" ||
         MODE_COMMAND="echo -en '\033%@\033(K' && kbd_mode -a"

      # On framebuffer consoles, font has to be set for each vt in
      # UTF-8 mode. This doesn't hurt in non-UTF-8 mode also.

      ! is_true "${use_fb}" || [ -z "${FONT}" ] ||
         MODE_COMMAND="${MODE_COMMAND} && setfont ${FONT}"

      # Apply that command to all consoles mentioned in
      # /etc/inittab. Important: in the UTF-8 mode this should
      # happen before setfont, otherwise a kernel bug will
      # show up and the unicode map of the font will not be
      # used.

      for TTY in `grep '^[^#].*respawn:/sbin/agetty' /etc/inittab |
         grep -o '\btty[[:digit:]]*\b'`
      do
         openvt -f -w -c ${TTY#tty} -- \
            /bin/sh -c "${MODE_COMMAND}" || failed=1
      done

      # Set the font (if not already set above) and the keymap
      [ "${use_fb}" == "1" ] || [ -z "${FONT}" ] || setfont $FONT || failed=1

      [ -z "${KEYMAP}" ] ||
         loadkeys ${KEYMAP} >/dev/null 2>&1 ||
```

```
         failed=1

      [ -z "${KEYMAP_CORRECTIONS}" ] ||
         loadkeys ${KEYMAP_CORRECTIONS} >/dev/null 2>&1 ||
         failed=1

      # Convert the keymap from $LEGACY_CHARSET to UTF-8
      [ -z "$LEGACY_CHARSET" ] ||
         dumpkeys -c "$LEGACY_CHARSET" | loadkeys -u >/dev/null 2>&1 ||
         failed=1

      # If any of the commands above failed, the trap at the
      # top would set $failed to 1
      ( exit $failed )
      evaluate_retval

      exit $failed
      ;;

   *)
      echo "Usage:  ${0} {start}"
      exit 1
      ;;
esac

# End console
```

D.13. /etc/rc.d/init.d/localnet

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin localnet
#
# Description : Loopback device
#
# Authors     : Gerard Beekmans  - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            localnet
# Required-Start:      $local_fs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:        0 6
# Short-Description:   Starts the local network.
# Description:         Sets the hostname of the machine and starts the
#                      loopback interface.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions
[ -r /etc/sysconfig/network ] && . /etc/sysconfig/network
[ -r /etc/hostname ] && HOSTNAME=`cat /etc/hostname`
```

```
case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Bringing up the loopback interface..."
      ip addr add 127.0.0.1/8 label lo dev lo
      ip link set lo up
      evaluate_retval

      log_info_msg "Setting hostname to ${HOSTNAME}..."
      hostname ${HOSTNAME}
      evaluate_retval
      ;;

   stop)
      log_info_msg "Bringing down the loopback interface..."
      ip link set lo down
      evaluate_retval
      ;;

   restart)
      ${0} stop
      sleep 1
      ${0} start
      ;;

   status)
      echo "Hostname is: $(hostname)"
      ip link show lo
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop|restart|status}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End localnet
```

D.14. /etc/rc.d/init.d/sysctl

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin sysctl
#
# Description : File uses /etc/sysctl.conf to set kernel runtime
#               parameters
#
# Authors     : Nathan Coulson (nathan@linuxfromscratch.org)
#               Matthew Burgress (matthew@linuxfromscratch.org)
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            sysctl
```

```
# Required-Start:      mountvirtfs
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       S
# Default-Stop:
# Short-Description:   Makes changes to the proc filesystem
# Description:         Makes changes to the proc filesystem as defined in
#                      /etc/sysctl.conf.  See 'man sysctl(8)'.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      if [ -f "/etc/sysctl.conf" ]; then
         log_info_msg "Setting kernel runtime parameters..."
         sysctl -q -p
         evaluate_retval
      fi
      ;;

   status)
      sysctl -a
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|status}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End sysctl
```

D.15. /etc/rc.d/init.d/sysklogd

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin sysklogd
#
# Description : Sysklogd loader
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            $syslog
# Required-Start:      localnet
# Should-Start:
# Required-Stop:       $local_fs sendsignals
# Should-Stop:
# Default-Start:       3 4 5
```

```
# Default-Stop:        0 1 2 6
# Short-Description:   Starts kernel and system log daemons.
# Description:         Starts kernel and system log daemons.
#                      /etc/fstab.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

# Note: sysklogd is not started in runlevel 2 due to possible
# remote logging configurations

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Starting system log daemon..."
      parms=${SYSKLOGD_PARMS-'-m 0'}
      start_daemon /sbin/syslogd $parms
      evaluate_retval

      log_info_msg "Starting kernel log daemon..."
      start_daemon /sbin/klogd
      evaluate_retval
      ;;

   stop)
      log_info_msg "Stopping kernel log daemon..."
      killproc /sbin/klogd
      evaluate_retval

      log_info_msg "Stopping system log daemon..."
      killproc /sbin/syslogd
      evaluate_retval
      ;;

   reload)
      log_info_msg "Reloading system log daemon config file..."
      pid=`pidofproc syslogd`
      kill -HUP "${pid}"
      evaluate_retval
      ;;

   restart)
      ${0} stop
      sleep 1
      ${0} start
      ;;

   status)
      statusproc /sbin/syslogd
      statusproc klogd
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop|reload|restart|status}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0
```

```
# End sysklogd
```

D.16. /etc/rc.d/init.d/network

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin network
#
# Description : Network Control Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            $network
# Required-Start:      $local_fs swap localnet
# Should-Start:        $syslog
# Required-Stop:       $local_fs swap localnet
# Should-Stop:         $syslog
# Default-Start:       3 4 5
# Default-Stop:        0 1 2 6
# Short-Description:   Starts and configures network interfaces.
# Description:         Starts and configures network interfaces.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

case "${1}" in
   start)
      # Start all network interfaces
      for file in /etc/sysconfig/ifconfig.*
      do
         interface=${file##*/ifconfig.}

         # Skip if $file is * (because nothing was found)
         if [ "${interface}" = "*" ]
         then
            continue
         fi

         /sbin/ifup ${interface}
      done
      ;;

   stop)
      # Reverse list
      net_files=""
      for file in  /etc/sysconfig/ifconfig.*
      do
         net_files="${file} ${net_files}"
      done

      # Stop all network interfaces
      for file in ${net_files}
```

```
      do
         interface=${file##*/ifconfig.}

         # Skip if $file is * (because nothing was found)
         if [ "${interface}" = "*" ]
         then
            continue
         fi

         /sbin/ifdown ${interface}
      done
      ;;

   restart)
      ${0} stop
      sleep 1
      ${0} start
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop|restart}"
      exit 1
      ;;
esac

exit 0

# End network
```

D.17. /etc/rc.d/init.d/sendsignals

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin sendsignals
#
# Description : Sendsignals Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            sendsignals
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:       $local_fs swap localnet
# Should-Stop:
# Default-Start:
# Default-Stop:        0 6
# Short-Description:   Attempts to kill remaining processes.
# Description:         Attempts to kill remaining processes.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions
```

```
case "${1}" in
   stop)
      log_info_msg "Sending all processes the TERM signal..."
      killall5 -15
      error_value=${?}

      sleep ${KILLDELAY}

      if [ "${error_value}" = 0 -o "${error_value}" = 2 ]; then
         log_success_msg
      else
         log_failure_msg
      fi

      log_info_msg "Sending all processes the KILL signal..."
      killall5 -9
      error_value=${?}

      sleep ${KILLDELAY}

      if [ "${error_value}" = 0 -o "${error_value}" = 2 ]; then
         log_success_msg
      else
         log_failure_msg
      fi
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {stop}"
      exit 1
      ;;

esac

exit 0

# End sendsignals
```

D.18. /etc/rc.d/init.d/reboot

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin reboot
#
# Description : Reboot Scripts
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            reboot
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
```

```
# Default-Start:       6
# Default-Stop:
# Short-Description:   Reboots the system.
# Description:         Reboots the System.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   stop)
      log_info_msg "Restarting system..."
      reboot -d -f -i
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {stop}"
      exit 1
      ;;

esac

# End reboot
```

D.19. /etc/rc.d/init.d/halt

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin halt
#
# Description : Halt Script
#
# Authors     : Gerard Beekmans - gerard@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            halt
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:       0
# Default-Stop:
# Short-Description:   Halts the system.
# Description:         Halts the System.
# X-LFS-Provided-By:   LFS
### END INIT INFO

case "${1}" in
   stop)
      halt -d -f -i -p
      ;;

   *)
      echo "Usage: {stop}"
```

```
      exit 1
      ;;
esac

# End halt
```

D.20. /etc/rc.d/init.d/template

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin scriptname
#
# Description :
#
# Authors     :
#
# Version     : LFS x.x
#
# Notes       :
#
########################################################################

### BEGIN INIT INFO
# Provides:            template
# Required-Start:
# Should-Start:
# Required-Stop:
# Should-Stop:
# Default-Start:
# Default-Stop:
# Short-Description:
# Description:
# X-LFS-Provided-By:
### END INIT INFO

. /lib/lsb/init-functions

case "${1}" in
   start)
      log_info_msg "Starting..."
      start_daemon fully_qualified_path
      ;;

   stop)
      log_info_msg "Stopping..."
      killproc fully_qualified_path
      ;;

   restart)
      ${0} stop
      sleep 1
      ${0} start
      ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} {start|stop|restart}"
      exit 1
      ;;
esac
```

```
exit 0

# End scriptname
```

D.21. /etc/sysconfig/modules

```
################################################################################
# Begin /etc/sysconfig/modules
#
# Description : Module auto-loading configuration
#
# Authors     :
#
# Version     : 00.00
#
# Notes       : The syntax of this file is as follows:
#          <module> [<arg1> <arg2> ...]
#
# Each module should be on its own line, and any options that you want
# passed to the module should follow it.  The line deliminator is either
# a space or a tab.
################################################################################

# End /etc/sysconfig/modules
```

D.22. /etc/sysconfig/createfiles

```
################################################################################
# Begin /etc/sysconfig/createfiles
#
# Description : Createfiles script config file
#
# Authors     :
#
# Version     : 00.00
#
# Notes       : The syntax of this file is as follows:
#         if type is equal to "file" or "dir"
#          <filename> <type> <permissions> <user> <group>
#         if type is equal to "dev"
#          <filename> <type> <permissions> <user> <group> <devtype>
#             <major> <minor>
#
#         <filename> is the name of the file which is to be created
#         <type> is either file, dir, or dev.
#               file creates a new file
#               dir creates a new directory
#               dev creates a new device
#         <devtype> is either block, char or pipe
#               block creates a block device
#               char creates a character deivce
#               pipe creates a pipe, this will ignore the <major> and
#           <minor> fields
#         <major> and <minor> are the major and minor numbers used for
#     the device.
################################################################################

# End /etc/sysconfig/createfiles
```

D.23. /etc/sysconfig/udev-retry

```
###############################################################################
# Begin /etc/sysconfig/udev_retry
#
# Description : udev_retry script configuration
#
# Authors     :
#
# Version     : 00.00
#
# Notes       : Each subsystem that may need to be re-triggered after mountfs
#               runs should be listed in this file.  Probable subsystems to be
#               listed here are rtc (due to /var/lib/hwclock/adjtime) and sound
#               (due to both /var/lib/alsa/asound.state and /usr/sbin/alsactl).
#               Entries are whitespace-separated.
###############################################################################

rtc

# End /etc/sysconfig/udev_retry
```

D.24. /sbin/ifup

```
#!/bin/sh
###############################################################################
# Begin /sbin/ifup
#
# Description : Interface Up
#
# Authors     : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.7
#
# Notes       : The IFCONFIG variable is passed to the SERVICE script
#               in the /lib/services directory, to indicate what file the
#               service should source to get interface specifications.
#
###############################################################################

up()
{
  if ip link show $1 > /dev/null 2>&1; then
     link_status=`ip link show $1`

     if [ -n "${link_status}" ]; then
        if ! echo "${link_status}" | grep -q UP; then
           ip link set $1 up
        fi
     fi

  else
     log_failure_msg "\nInterface ${IFACE} doesn't exist."
     exit 1
  fi
}

RELEASE="7.7"
```

```
USAGE="Usage: $0 [ -hV ] [--help] [--version] interface"
VERSTR="LFS ifup, version ${RELEASE}"

while [ $# -gt 0 ]; do
   case "$1" in
      --help | -h)     help="y"; break ;;

      --version | -V)  echo "${VERSTR}"; exit 0 ;;

      -*)              echo "ifup: ${1}: invalid option" >&2
                       echo "${USAGE}" >& 2
                       exit 2 ;;

      *)               break ;;
   esac
done

if [ -n "$help" ]; then
   echo "${VERSTR}"
   echo "${USAGE}"
   echo
   cat << HERE_EOF
ifup is used to bring up a network interface.  The interface
parameter, e.g. eth0 or eth0:2, must match the trailing part of the
interface specifications file, e.g. /etc/sysconfig/ifconfig.eth0:2.

HERE_EOF
   exit 0
fi

file=/etc/sysconfig/ifconfig.${1}

# Skip backup files
[ "${file}" = "${file%""~""}" ] || exit 0

. /lib/lsb/init-functions

log_info_msg "Bringing up the ${1} interface... "

if [ ! -r "${file}" ]; then
   log_failure_msg2 "${file} is missing or cannot be accessed."
   exit 1
fi

. $file

if [ "$IFACE" = "" ]; then
   log_failure_msg2 "${file} does not define an interface [IFACE]."
   exit 1
fi

# Do not process this service if started by boot, and ONBOOT
# is not set to yes
if [ "${IN_BOOT}" = "1" -a "${ONBOOT}" != "yes" ]; then
   log_skip_msg
   exit 0
fi

for S in ${SERVICE}; do
  if [ ! -x "/lib/services/${S}" ]; then
```

```
    MSG="\nUnable to process ${file}.  Either "
    MSG="${MSG}the SERVICE '${S} was not present "
    MSG="${MSG}or cannot be executed."
    log_failure_msg "$MSG"
    exit 1
  fi
done

if [ "${SERVICE}" = "wpa" ]; then log_success_msg; fi

# Create/configure the interface
for S in ${SERVICE}; do
  IFCONFIG=${file} /lib/services/${S} ${IFACE} up
done

# Bring up the interface and any components
for I in $IFACE $INTERFACE_COMPONENTS; do up $I; done

# Set MTU if requested. Check if MTU has a "good" value.
if test -n "${MTU}"; then
   if [[ ${MTU} =~ ^[0-9]+$ ]] && [[ $MTU -ge 68 ]] ; then
      for I in $IFACE $INTERFACE_COMPONENTS; do
         ip link set dev $I mtu $MTU;
      done
   else
      log_info_msg2 "Invalid MTU $MTU"
   fi
fi

# Set the route default gateway if requested
if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
   if ip route | grep -q default; then
      log_skip_msg "\n     Gateway already setup; skipping."
   else
      log_info_msg "Setting up default gateway..."
      ip route add default via ${GATEWAY} dev ${IFACE}
      evaluate_retval
   fi
fi

# End /sbin/ifup
```

D.25. /sbin/ifdown

```
#!/bin/bash
########################################################################
# Begin /sbin/ifdown
#
# Description : Interface Down
#
# Authors     : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
# Notes       : the IFCONFIG variable is passed to the scripts found
#               in the /lib/services directory, to indicate what file the
#               service should source to get interface specifications.
#
```

```
########################################################################

RELEASE="7.0"

USAGE="Usage: $0 [ -hV ] [--help] [--version] interface"
VERSTR="LFS ifdown, version ${RELEASE}"

while [ $# -gt 0 ]; do
   case "$1" in
      --help | -h)     help="y"; break ;;

      --version | -V)  echo "${VERSTR}"; exit 0 ;;

      -*)              echo "ifup: ${1}: invalid option" >&2
                       echo "${USAGE}" >& 2
                       exit 2 ;;

      *)               break ;;
   esac
done

if [ -n "$help" ]; then
   echo "${VERSTR}"
   echo "${USAGE}"
   echo
   cat << HERE_EOF
ifdown is used to bring down a network interface.  The interface
parameter, e.g. eth0 or eth0:2, must match the trailing part of the
interface specifications file, e.g. /etc/sysconfig/ifconfig.eth0:2.

HERE_EOF
   exit 0
fi

file=/etc/sysconfig/ifconfig.${1}

# Skip backup files
[ "${file}" = "${file%""~""}" ] || exit 0

. /lib/lsb/init-functions

if [ ! -r "${file}" ]; then
   log_warning_msg "${file} is missing or cannot be accessed."
   exit 1
fi

. ${file}

if [ "$IFACE" = "" ]; then
   log_failure_msg "${file} does not define an interface [IFACE]."
   exit 1
fi

# We only need to first service to bring down the interface
S=`echo ${SERVICE} | cut -f1 -d" "`

if ip link show ${IFACE} > /dev/null 2>&1; then
   if [ -n "${S}" -a -x "/lib/services/${S}" ]; then
     IFCONFIG=${file} /lib/services/${S} ${IFACE} down
   else
     MSG="Unable to process ${file}.  Either "
```

```
     MSG="${MSG}the SERVICE variable was not set "
     MSG="${MSG}or the specified service cannot be executed."
     log_failure_msg "$MSG"
     exit 1
  fi
else
   log_warning_msg "Interface ${1} doesn't exist."
fi

# Leave the interface up if there are additional interfaces in the device
link_status=`ip link show ${IFACE} 2>/dev/null`

if [ -n "${link_status}" ]; then
   if [ "$(echo "${link_status}" | grep UP)" != "" ]; then
      if [ "$(ip addr show ${IFACE} | grep 'inet ')" == ""  ]; then
         log_info_msg "Bringing down the ${IFACE} interface..."
         ip link set ${IFACE} down
         evaluate_retval
      fi
   fi
fi

# End /sbin/ifdown
```

D.26. /lib/services/ipv4-static

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin /lib/services/ipv4-static
#
# Description : IPV4 Static Boot Script
#
# Authors     : Nathan Coulson - nathan@linuxfromscratch.org
#               Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

. /lib/lsb/init-functions
. ${IFCONFIG}

if [ -z "${IP}" ]; then
   log_failure_msg "\nIP variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
   exit 1
fi

if [ -z "${PREFIX}" -a -z "${PEER}" ]; then
   log_warning_msg "\nPREFIX variable missing from ${IFCONFIG}, assuming 24."
   PREFIX=24
   args="${args} ${IP}/${PREFIX}"

elif [ -n "${PREFIX}" -a -n "${PEER}" ]; then
   log_failure_msg "\nPREFIX and PEER both specified in ${IFCONFIG}, cannot continue."
   exit 1

elif [ -n "${PREFIX}" ]; then
   args="${args} ${IP}/${PREFIX}"
```

```
elif [ -n "${PEER}" ]; then
   args="${args} ${IP} peer ${PEER}"
fi

if [ -n "${LABEL}" ]; then
   args="${args} label ${LABEL}"
fi

if [ -n "${BROADCAST}" ]; then
   args="${args} broadcast ${BROADCAST}"
fi

case "${2}" in
   up)
      if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep ${IP}/)" = "" ]; then

         # Cosmetic output
         if ! $(echo ${SERVICE} | grep -q " "); then
           log_info_msg2 "\n" # Terminate the previous message
         fi

         log_info_msg "Adding IPv4 address ${IP} to the ${1} interface..."
         ip addr add ${args} dev ${1}
         evaluate_retval
      else
         log_warning_msg "Cannot add IPv4 address ${IP} to ${1}.  Already present."
      fi
   ;;

   down)
      if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep ${IP}/)" != "" ]; then
         log_info_msg "Removing IPv4 address ${IP} from the ${1} interface..."
         ip addr del ${args} dev ${1}
         evaluate_retval
      fi

      if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
         # Only remove the gateway if there are no remaining ipv4 addresses
         if [ "$(ip addr show ${1} 2>/dev/null | grep 'inet ')" != "" ]; then
            log_info_msg "Removing default gateway..."
            ip route del default
            evaluate_retval
         fi
      fi
   ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} [interface] {up|down}"
      exit 1
   ;;
esac

# End /lib/services/ipv4-static
```

D.27. /lib/services/ipv4-static-route

```
#!/bin/sh
########################################################################
# Begin /lib/services/ipv4-static-route
#
```

```
# Description : IPV4 Static Route Script
#
# Authors     : Kevin P. Fleming - kpfleming@linuxfromscratch.org
#               DJ Lucas - dj@linuxfromscratch.org
# Update      : Bruce Dubbs - bdubbs@linuxfromscratch.org
#
# Version     : LFS 7.0
#
########################################################################

. /lib/lsb/init-functions
. ${IFCONFIG}

case "${TYPE}" in
   ("" | "network")
      need_ip=1
      need_gateway=1
   ;;

   ("default")
      need_gateway=1
      args="${args} default"
      desc="default"
   ;;

   ("host")
      need_ip=1
   ;;

   ("unreachable")
      need_ip=1
      args="${args} unreachable"
      desc="unreachable "
   ;;

   (*)
      log_failure_msg "Unknown route type (${TYPE}) in ${IFCONFIG}, cannot continue."
      exit 1
   ;;
esac

if [ -n "${GATEWAY}" ]; then
   MSG="The GATEWAY variable cannot be set in ${IFCONFIG} for static routes.\n"
   log_failure_msg "$MSG Use STATIC_GATEWAY only, cannot continue"
   exit 1
fi

if [ -n "${need_ip}" ]; then
   if [ -z "${IP}" ]; then
      log_failure_msg "IP variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
      exit 1
   fi

   if [ -z "${PREFIX}" ]; then
      log_failure_msg "PREFIX variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
      exit 1
   fi

   args="${args} ${IP}/${PREFIX}"
   desc="${desc}${IP}/${PREFIX}"
fi
```

```
if [ -n "${need_gateway}" ]; then
   if [ -z "${STATIC_GATEWAY}" ]; then
      log_failure_msg "STATIC_GATEWAY variable missing from ${IFCONFIG}, cannot continue."
      exit 1
   fi
   args="${args} via ${STATIC_GATEWAY}"
fi

if [ -n "${SOURCE}" ]; then
        args="${args} src ${SOURCE}"
fi

case "${2}" in
   up)
      log_info_msg "Adding '${desc}' route to the ${1} interface..."
      ip route add ${args} dev ${1}
      evaluate_retval
   ;;

   down)
      log_info_msg "Removing '${desc}' route from the ${1} interface..."
      ip route del ${args} dev ${1}
      evaluate_retval
   ;;

   *)
      echo "Usage: ${0} [interface] {up|down}"
      exit 1
   ;;
esac

# End /lib/services/ipv4-static-route
```

付録 E. Udev 設定ルール

本付録にて udev ルールを列記します。 インストール手順は 6.65.「Eudev-3.2.1」を参照してください。

E.1. 55-lfs.rules

```
# /etc/udev/rules.d/55-lfs.rules: Rule definitions for LFS.

# Core kernel devices

# This causes the system clock to be set as soon as /dev/rtc becomes available.
SUBSYSTEM=="rtc", ACTION=="add", MODE="0644", RUN+="/etc/rc.d/init.d/setclock start"
KERNEL=="rtc", ACTION=="add", MODE="0644", RUN+="/etc/rc.d/init.d/setclock start"

# Comms devices

KERNEL=="ippp[0-9]*",       GROUP="dialout"
KERNEL=="isdn[0-9]*",       GROUP="dialout"
KERNEL=="isdnctrl[0-9]*",   GROUP="dialout"
KERNEL=="dcbri[0-9]*",      GROUP="dialout"
```

付録 F. LFS ライセンス

本ブックはクリエイティブコモンズ (Creative Commons)の 表示-非営利-継承 (Attribution-NonCommercial-ShareAlike) 2.0ライセンスに従います。

本書のインストール手順のコマンドを抜き出したものは MIT ライセンスに従ってください。

F.1. クリエイティブコモンズライセンス

日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Creative Commons Legal Code

Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0

重要項目

CREATIVE COMMONS CORPORATION IS NOT A LAW FIRM AND DOES NOT PROVIDE LEGAL SERVICES. DISTRIBUTION OF THIS LICENSE DOES NOT CREATE AN ATTORNEY-CLIENT RELATIONSHIP. CREATIVE COMMONS PROVIDES THIS INFORMATION ON AN "AS-IS" BASIS. CREATIVE COMMONS MAKES NO WARRANTIES REGARDING THE INFORMATION PROVIDED, AND DISCLAIMS LIABILITY FOR DAMAGES RESULTING FROM ITS USE.

License

THE WORK (AS DEFINED BELOW) IS PROVIDED UNDER THE TERMS OF THIS CREATIVE COMMONS PUBLIC LICENSE ("CCPL" OR "LICENSE"). THE WORK IS PROTECTED BY COPYRIGHT AND/OR OTHER APPLICABLE LAW. ANY USE OF THE WORK OTHER THAN AS AUTHORIZED UNDER THIS LICENSE OR COPYRIGHT LAW IS PROHIBITED.

BY EXERCISING ANY RIGHTS TO THE WORK PROVIDED HERE, YOU ACCEPT AND AGREE TO BE BOUND BY THE TERMS OF THIS LICENSE. THE LICENSOR GRANTS YOU THE RIGHTS CONTAINED HERE IN CONSIDERATION OF YOUR ACCEPTANCE OF SUCH TERMS AND CONDITIONS.

1. Definitions
   a. "Collective Work" means a work, such as a periodical issue, anthology or encyclopedia, in which the Work in its entirety in unmodified form, along with a number of other contributions, constituting separate and independent works in themselves, are assembled into a collective whole. A work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work (as defined below) for the purposes of this License.
   b. "Derivative Work" means a work based upon the Work or upon the Work and other pre-existing works, such as a translation, musical arrangement, dramatization, fictionalization, motion picture version, sound recording, art reproduction, abridgment, condensation, or any other form in which the Work may be recast, transformed, or adapted, except that a work that constitutes a Collective Work will not be considered a Derivative Work for the purpose of this License. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition or sound recording, the synchronization of the Work in timed-relation with a moving image ("synching") will be considered a Derivative Work for the purpose of this License.
   c. "Licensor" means the individual or entity that offers the Work under the terms of this License.
   d. "Original Author" means the individual or entity who created the Work.
   e. "Work" means the copyrightable work of authorship offered under the terms of this License.
   f. "You" means an individual or entity exercising rights under this License who has not previously violated the terms of this License with respect to the Work, or who has received express permission from the Licensor to exercise rights under this License despite a previous violation.
   g. "License Elements" means the following high-level license attributes as selected by Licensor and indicated in the title of this License: Attribution, Noncommercial, ShareAlike.
2. Fair Use Rights. Nothing in this license is intended to reduce, limit, or restrict any rights arising from fair use, first sale or other limitations on the exclusive rights of the copyright owner under copyright law or other applicable laws.
3. License Grant. Subject to the terms and conditions of this License, Licensor hereby grants You a worldwide, royalty-free, non-exclusive, perpetual (for the duration of the applicable copyright) license to exercise the rights in the Work as stated below:

a. to reproduce the Work, to incorporate the Work into one or more Collective Works, and to reproduce the Work as incorporated in the Collective Works;

b. to create and reproduce Derivative Works;

c. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and perform publicly by means of a digital audio transmission the Work including as incorporated in Collective Works;

d. to distribute copies or phonorecords of, display publicly, perform publicly, and perform publicly by means of a digital audio transmission Derivative Works;

The above rights may be exercised in all media and formats whether now known or hereafter devised. The above rights include the right to make such modifications as are technically necessary to exercise the rights in other media and formats. All rights not expressly granted by Licensor are hereby reserved, including but not limited to the rights set forth in Sections 4(e) and 4(f).

4. Restrictions.The license granted in Section 3 above is expressly made subject to and limited by the following restrictions:

a. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work only under the terms of this License, and You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License with every copy or phonorecord of the Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Work that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder. You may not sublicense the Work. You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Work itself to be made subject to the terms of this License. If You create a Collective Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Collective Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested. If You create a Derivative Work, upon notice from any Licensor You must, to the extent practicable, remove from the Derivative Work any reference to such Licensor or the Original Author, as requested.

b. You may distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform a Derivative Work only under the terms of this License, a later version of this License with the same License Elements as this License, or a Creative Commons iCommons license that contains the same License Elements as this License (e.g. Attribution-NonCommercial-ShareAlike 2.0 Japan). You must include a copy of, or the Uniform Resource Identifier for, this License or other license specified in the previous sentence with every copy or phonorecord of each Derivative Work You distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform. You may not offer or impose any terms on the Derivative Works that alter or restrict the terms of this License or the recipients' exercise of the rights granted hereunder, and You must keep intact all notices that refer to this License and to the disclaimer of warranties. You may not distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Derivative Work with any technological measures that control access or use of the Work in a manner inconsistent with the terms of this License Agreement. The above applies to the Derivative Work as incorporated in a Collective Work, but this does not require the Collective Work apart from the Derivative Work itself to be made subject to the terms of this License.

c. You may not exercise any of the rights granted to You in Section 3 above in any manner that is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation. The exchange of the Work for other copyrighted works by means of digital file-sharing or otherwise shall not be considered to be intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation, provided there is no payment of any monetary compensation in connection with the exchange of copyrighted works.

d. If you distribute, publicly display, publicly perform, or publicly digitally perform the Work or any Derivative Works or Collective Works, You must keep intact all copyright notices for the Work and give the Original Author credit reasonable to the medium or means You are utilizing by conveying the name (or pseudonym if applicable) of the Original Author if supplied; the title of the Work if supplied; to the extent reasonably practicable, the Uniform Resource Identifier, if any, that Licensor specifies to be associated with the Work, unless such URI does not refer to the copyright notice or licensing information for the Work; and in the case of a Derivative Work, a credit identifying the use of the Work in the Derivative Work (e.g., "French translation of the Work by Original Author," or "Screenplay based on original Work by Original Author"). Such credit may be implemented in any reasonable manner;

provided, however, that in the case of a Derivative Work or Collective Work, at a minimum such credit will appear where any other comparable authorship credit appears and in a manner at least as prominent as such other comparable authorship credit.

e. For the avoidance of doubt, where the Work is a musical composition:

i. Performance Royalties Under Blanket Licenses. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance rights society (e.g. ASCAP, BMI, SESAC), royalties for the public performance or public digital performance (e.g. webcast) of the Work if that performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.

ii. Mechanical Rights and Statutory Royalties. Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a music rights agency or designated agent (e.g. Harry Fox Agency), royalties for any phonorecord You create from the Work ("cover version") and distribute, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 115 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your distribution of such cover version is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation. 6. Webcasting Rights and Statutory Royalties. For the avoidance of doubt, where the Work is a sound recording, Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance-rights society (e.g. SoundExchange), royalties for the public digital performance (e.g. webcast) of the Work, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 114 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your public digital performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.

f. Webcasting Rights and Statutory Royalties. For the avoidance of doubt, where the Work is a sound recording, Licensor reserves the exclusive right to collect, whether individually or via a performance-rights society (e.g. SoundExchange), royalties for the public digital performance (e.g. webcast) of the Work, subject to the compulsory license created by 17 USC Section 114 of the US Copyright Act (or the equivalent in other jurisdictions), if Your public digital performance is primarily intended for or directed toward commercial advantage or private monetary compensation.

5. Representations, Warranties and Disclaimer

UNLESS OTHERWISE MUTUALLY AGREED TO BY THE PARTIES IN WRITING, LICENSOR OFFERS THE WORK AS-IS AND MAKES NO REPRESENTATIONS OR WARRANTIES OF ANY KIND CONCERNING THE WORK, EXPRESS, IMPLIED, STATUTORY OR OTHERWISE, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, WARRANTIES OF TITLE, MERCHANTIBILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE, NONINFRINGEMENT, OR THE ABSENCE OF LATENT OR OTHER DEFECTS, ACCURACY, OR THE PRESENCE OF ABSENCE OF ERRORS, WHETHER OR NOT DISCOVERABLE. SOME JURISDICTIONS DO NOT ALLOW THE EXCLUSION OF IMPLIED WARRANTIES, SO SUCH EXCLUSION MAY NOT APPLY TO YOU.

6. Limitation on Liability. EXCEPT TO THE EXTENT REQUIRED BY APPLICABLE LAW, IN NO EVENT WILL LICENSOR BE LIABLE TO YOU ON ANY LEGAL THEORY FOR ANY SPECIAL, INCIDENTAL, CONSEQUENTIAL, PUNITIVE OR EXEMPLARY DAMAGES ARISING OUT OF THIS LICENSE OR THE USE OF THE WORK, EVEN IF LICENSOR HAS BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

7. Termination

a. This License and the rights granted hereunder will terminate automatically upon any breach by You of the terms of this License. Individuals or entities who have received Derivative Works or Collective Works from You under this License, however, will not have their licenses terminated provided such individuals or entities remain in full compliance with those licenses. Sections 1, 2, 5, 6, 7, and 8 will survive any termination of this License.

b. Subject to the above terms and conditions, the license granted here is perpetual (for the duration of the applicable copyright in the Work). Notwithstanding the above, Licensor reserves the right to release the Work under different license terms or to stop distributing the Work at any time; provided, however that any such election will not serve to withdraw this License (or any other license that has been, or is required to be, granted under the terms of this License), and this License will continue in full force and effect unless terminated as stated above.

8. Miscellaneous

a. Each time You distribute or publicly digitally perform the Work or a Collective Work, the Licensor offers to the recipient a license to the Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.

b. Each time You distribute or publicly digitally perform a Derivative Work, Licensor offers to the recipient a license to the original Work on the same terms and conditions as the license granted to You under this License.

c. If any provision of this License is invalid or unenforceable under applicable law, it shall not affect the validity or enforceability of the remainder of the terms of this License, and without further action by the parties to this agreement, such provision shall be reformed to the minimum extent necessary to make such provision valid and enforceable.

d. No term or provision of this License shall be deemed waived and no breach consented to unless such waiver or consent shall be in writing and signed by the party to be charged with such waiver or consent.

e. This License constitutes the entire agreement between the parties with respect to the Work licensed here. There are no understandings, agreements or representations with respect to the Work not specified here. Licensor shall not be bound by any additional provisions that may appear in any communication from You. This License may not be modified without the mutual written agreement of the Licensor and You.

重要項目

Creative Commons is not a party to this License, and makes no warranty whatsoever in connection with the Work. Creative Commons will not be liable to You or any party on any legal theory for any damages whatsoever, including without limitation any general, special, incidental or consequential damages arising in connection to this license. Notwithstanding the foregoing two (2) sentences, if Creative Commons has expressly identified itself as the Licensor hereunder, it shall have all rights and obligations of Licensor.

Except for the limited purpose of indicating to the public that the Work is licensed under the CCPL, neither party will use the trademark "Creative Commons" or any related trademark or logo of Creative Commons without the prior written consent of Creative Commons. Any permitted use will be in compliance with Creative Commons' then-current trademark usage guidelines, as may be published on its website or otherwise made available upon request from time to time.

Creative Commons may be contacted at http://creativecommons.org/.

F.2. MIT ライセンス (The MIT License)

日本語訳情報

以下は日本語へ訳出することなく、原文のライセンス条項をそのまま示します。

Copyright © 1999-2017 Gerard Beekmans

Permission is hereby granted, free of charge, to any person obtaining a copy of this software and associated documentation files (the "Software"), to deal in the Software without restriction, including without limitation the rights to use, copy, modify, merge, publish, distribute, sublicense, and/or sell copies of the Software, and to permit persons to whom the Software is furnished to do so, subject to the following conditions:

The above copyright notice and this permission notice shall be included in all copies or substantial portions of the Software.

THE SOFTWARE IS PROVIDED "AS IS", WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED, INCLUDING BUT NOT LIMITED TO THE WARRANTIES OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NONINFRINGEMENT. IN NO EVENT SHALL THE AUTHORS OR COPYRIGHT HOLDERS BE LIABLE FOR ANY CLAIM, DAMAGES OR OTHER LIABILITY, WHETHER IN AN ACTION OF CONTRACT, TORT OR OTHERWISE, ARISING FROM, OUT OF OR IN CONNECTION WITH THE SOFTWARE OR THE USE OR OTHER DEALINGS IN THE SOFTWARE.

項目別もくじ

パッケージ

Acl: 108
Attr: 107
Autoconf: 133
Automake: 134
Bash: 121
 ツール: 50
Bash: 121
 ツール: 50
Bc: 122
Binutils: 91
 ツール, 1回め: 32
 ツール, 2回め: 41
Binutils: 91
 ツール, 1回め: 32
 ツール, 2回め: 41
Binutils: 91
 ツール, 1回め: 32
 ツール, 2回め: 41
Bison: 117
ブートスクリプト: 186
 利用方法: 195
ブートスクリプト: 186
 利用方法: 195
Bzip2: 101
 ツール: 51
Bzip2: 101
 ツール: 51
Check: 48
Coreutils: 146
 ツール: 52
Coreutils: 146
 ツール: 52
DejaGNU: 47
Diffutils: 150
 ツール: 53
Diffutils: 150
 ツール: 53
E2fsprogs: 143
Eudev: 168
 設定: 168
Eudev: 168
 設定: 168
Expat: 126
Expect: 46
File: 90
 ツール: 54
File: 90
 ツール: 54
Findutils: 152
 ツール: 55
Findutils: 152
 ツール: 55
Flex: 118
Gawk: 151
 ツール: 56
Gawk: 151
 ツール: 56
GCC: 97
 ツール, 1回め: 34
 ツール, 2回め: 42
 ツール, libstdc++: 40
GCC: 97
 ツール, 1回め: 34
 ツール, 2回め: 42
 ツール, libstdc++: 40
GCC: 97
 ツール, 1回め: 34
 ツール, 2回め: 42
 ツール, libstdc++: 40
GCC: 97
 ツール, 1回め: 34
 ツール, 2回め: 42
 ツール, libstdc++: 40
GDBM: 124
Gettext: 139
 ツール: 57
Gettext: 139
 ツール: 57
Glibc: 81
 ツール: 38
Glibc: 81
 ツール: 38
GMP: 93
Gperf: 125
Grep: 119
 ツール: 58
Grep: 119
 ツール: 58
Groff: 153
GRUB: 155
Gzip: 158
 ツール: 59
Gzip: 158
 ツール: 59
Iana-Etc: 115
Inetutils: 127
Intltool: 132
IPRoute2: 159
Kbd: 161
Kmod: 137
Less: 157
Libcap: 109
Libpipeline: 163
Libtool: 123
Linux: 210
 API ヘッダー: 79
 ツール, API ヘッダー: 37
Linux: 210
 API ヘッダー: 79
 ツール, API ヘッダー: 37
Linux: 210
 API ヘッダー: 79
 ツール, API ヘッダー: 37
M4: 116
 ツール: 60
M4: 116

ツール: 60
Make: 164
ツール: 61
Make: 164
ツール: 61
Man-DB: 174
Man-pages: 80
MPC: 96
MPFR: 95
Ncurses: 104
ツール: 49
Ncurses: 104
ツール: 49
Patch: 165
ツール: 62
Patch: 165
ツール: 62
Perl: 129
ツール: 63
Perl: 129
ツール: 63
Pkgconfig: 103
Procps-ng: 141
Psmisc: 114
rc.site: 201
Readline: 120
Sed: 110
ツール: 64
Sed: 110
ツール: 64
Shadow: 111
設定: 112
Shadow: 111
設定: 112
Sysklogd: 166
設定: 166
Sysklogd: 166
設定: 166
Sysvinit: 167
設定: 196
Sysvinit: 167
設定: 196
Tar: 177
ツール: 65
Tar: 177
ツール: 65
Tcl-core: 45
Texinfo: 178
ツール: 66
Texinfo: 178
ツール: 66
Udev
利用方法: 188
Util-linux: 170
ツール: 67
Util-linux: 170
ツール: 67
Vim: 180
XML::Parser: 131
Xz: 135
ツール: 68
Xz: 135
ツール: 68
Zlib: 89

プログラム

accessdb: 174, 175
aclocal: 134, 134
aclocal-1.15: 134, 134
addftinfo: 153, 153
addpart: 170, 171
addr2line: 91, 92
afmtodit: 153, 153
agetty: 170, 171
apropos: 174, 175
ar: 91, 92
as: 91, 92
attr: 107, 107
autoconf: 133, 133
autoheader: 133, 133
autom4te: 133, 133
automake: 134, 134
automake-1.15: 134, 134
autopoint: 139, 139
autoreconf: 133, 133
autoscan: 133, 133
autoupdate: 133, 133
awk: 151, 151
badblocks: 143, 144
base64: 146, 147, 146, 147
base64: 146, 147, 146, 147
basename: 146, 147
bash: 121, 121
bashbug: 121, 121
bc: 122, 122
bison: 117, 117
blkdiscard: 170, 171
blkid: 170, 171
blockdev: 170, 171
bootlogd: 167, 167
bridge: 159, 159
bunzip2: 101, 101
bzcat: 101, 101
bzcmp: 101, 101
bzdiff: 101, 101
bzegrep: 101, 102
bzfgrep: 101, 102
bzgrep: 101, 102
bzip2: 101, 102
bzip2recover: 101, 102
bzless: 101, 102
bzmore: 101, 102
c++: 97, 100
c++filt: 91, 92
c2ph: 129, 130
cal: 170, 171
capsh: 109, 109
captoinfo: 104, 105
cat: 146, 147
catchsegv: 81, 84
catman: 174, 175

cc: 97, 100
cfdisk: 170, 171
chacl: 108, 108
chage: 111, 112
chattr: 143, 144
chcon: 146, 147
chcpu: 170, 171
checkmk: 48, 48
chem: 153, 153
chfn: 111, 112
chgpasswd: 111, 112
chgrp: 146, 147
chmod: 146, 147
chown: 146, 147
chpasswd: 111, 112
chroot: 146, 147
chrt: 170, 171
chsh: 111, 112
chvt: 161, 162
cksum: 146, 147
clear: 104, 105
cmp: 150, 150
code: 152, 152
col: 170, 171
colcrt: 170, 171
colrm: 170, 171
column: 170, 171
comm: 146, 147
compile_et: 143, 144
corelist: 129, 130
cp: 146, 147
cpan: 129, 130
cpp: 97, 100
csplit: 146, 147
ctrlaltdel: 170, 171
ctstat: 159, 159
cut: 146, 147
date: 146, 147
dc: 122, 122
dd: 146, 147
deallocvt: 161, 162
debugfs: 143, 144
delpart: 170, 171
depmod: 137, 137
df: 146, 147
diff: 150, 150
diff3: 150, 150
dir: 146, 147
dircolors: 146, 147
dirname: 146, 148
dmesg: 170, 171
dnsdomainname: 127, 128
du: 146, 148
dumpe2fs: 143, 144
dumpkeys: 161, 162
e2freefrag: 143, 144
e2fsck: 143, 144
e2image: 143, 144
e2label: 143, 144
e2undo: 143, 144
e4defrag: 143, 144
echo: 146, 148
egrep: 119, 119
eject: 170, 171
elfedit: 91, 92
enc2xs: 129, 130
encguess: 129, 130
env: 146, 148
envsubst: 139, 139
eqn: 153, 153
eqn2graph: 153, 153
ex: 180, 181
expand: 146, 148
expect: 46, 46
expiry: 111, 113
expr: 146, 148
factor: 146, 148
faillog: 111, 113
fallocate: 170, 171
false: 146, 148
fdformat: 170, 171
fdisk: 170, 171
fgconsole: 161, 162
fgrep: 119, 119
file: 90, 90
filefrag: 143, 144
find: 152, 152
findfs: 170, 171
findmnt: 170, 171
flex: 118, 118
flex++: 118, 118
flock: 170, 171
fmt: 146, 148
fold: 146, 148
free: 141, 141
fsck: 170, 171
fsck.cramfs: 170, 171
fsck.ext2: 143, 144
fsck.ext3: 143, 144
fsck.ext4: 143, 144
fsck.ext4dev: 143, 144
fsck.minix: 170, 171
fsfreeze: 170, 171
fstab-decode: 167, 167
fstrim: 170, 172
ftp: 127, 128
fuser: 114, 114
g++: 97, 100
gawk: 151, 151
gawk-4.1.4: 151, 151
gcc: 97, 100
gc-ar: 97, 100
gc-nm: 97, 100
gc-ranlib: 97, 100
gcov: 97, 100
gdbmtool: 124, 124
gdbm_dump: 124, 124
gdbm_load: 124, 124
gdiffmk: 153, 153
gencat: 81, 84
genl: 159, 159
getcap: 109, 109

getconf: 81, 84
getent: 81, 84
getfacl: 108, 108
getfattr: 107, 107
getkeycodes: 161, 162
getopt: 170, 172
getpcaps: 109, 109
gettext: 139, 139
gettext.sh: 139, 139
gettextize: 139, 139
glilypond: 153, 153
gpasswd: 111, 113
gperf: 125, 125
gperl: 153, 153
gpinyin: 153, 153
gprof: 91, 92
grap2graph: 153, 153
grep: 119, 119
grn: 153, 153
grodvi: 153, 153
groff: 153, 153
groffer: 153, 153
grog: 153, 153
grolbp: 153, 154
grolj4: 153, 154
gropdf: 153, 154
grops: 153, 154
grotty: 153, 154
groupadd: 111, 113
groupdel: 111, 113
groupmems: 111, 113
groupmod: 111, 113
groups: 146, 148
grpck: 111, 113
grpconv: 111, 113
grpunconv: 111, 113
grub-bios-setup: 155, 155
grub-editenv: 155, 155
grub-file: 155, 155
grub-fstest: 155, 155
grub-glue-efi: 155, 155
grub-install: 155, 155
grub-kbdcomp: 155, 155
grub-macbless: 155, 155
grub-menulst2cfg: 155, 155
grub-mkconfig: 155, 155
grub-mkimage: 155, 155
grub-mklayout: 155, 156
grub-mknetdir: 155, 156
grub-mkpasswd-pbkdf2: 155, 156
grub-mkrelpath: 155, 156
grub-mkrescue: 155, 156
grub-mkstandalone: 155, 156
grub-ofpathname: 155, 156
grub-probe: 155, 156
grub-reboot: 155, 156
grub-render-label: 155, 156
grub-script-check: 155, 156
grub-set-default: 155, 156
grub-setup: 155, 156
grub-syslinux2cfg: 155, 156
gunzip: 158, 158
gzexe: 158, 158
gzip: 158, 158
h2ph: 129, 130
h2xs: 129, 130
halt: 167, 167
head: 146, 148
hexdump: 170, 172
hostid: 146, 148
hostname: 127, 128
hpftodit: 153, 154
hwclock: 170, 172
i386: 170, 172
iconv: 81, 84
iconvconfig: 81, 85
id: 146, 148
ifcfg: 159, 159
ifconfig: 127, 128
ifnames: 133, 133
ifstat: 159, 159
igawk: 151, 151
indxbib: 153, 154
info: 178, 178
infocmp: 104, 105
infotocap: 104, 105
init: 167, 167
insmod: 137, 137
install: 146, 148
install-info: 178, 179
instmodsh: 129, 130
intltool-extract: 132, 132
intltool-merge: 132, 132
intltool-prepare: 132, 132
intltool-update: 132, 132
intltoolize: 132, 132
ionice: 170, 172
ip: 159, 159
ipcmk: 170, 172
ipcrm: 170, 172
ipcs: 170, 172
isosize: 170, 172
join: 146, 148
json_pp: 129, 130
kbdinfo: 161, 162
kbdrate: 161, 162
kbd_mode: 161, 162
kill: 170, 172
killall: 114, 114
killall5: 167, 167
klogd: 166, 166
kmod: 137, 137
last: 170, 172
lastb: 170, 172
lastlog: 111, 113
ld: 91, 92
ld.bfd: 91, 92
ldattach: 170, 172
ldconfig: 81, 85
ldd: 81, 85
lddlibc4: 81, 85
less: 157, 157

lessecho: 157, 157
lesskey: 157, 157
lex: 118, 118
lexgrog: 174, 175
lfskernel-4.9.5: 210, 213
libasan: 97, 100
libnetcfg: 129, 130
libtool: 123, 123
libtoolize: 123, 123
link: 146, 148
linux32: 170, 172
linux64: 170, 172
lkbib: 153, 154
ln: 146, 148
lnstat: 159, 160
loadkeys: 161, 162
loadunimap: 161, 162
locale: 81, 85
localedef: 81, 85
locate: 152, 152
logger: 170, 172
login: 111, 113
logname: 146, 148
logoutd: 111, 113
logsave: 143, 144
look: 170, 172
lookbib: 153, 154
losetup: 170, 172
ls: 146, 148
lsattr: 143, 144
lsblk: 170, 172
lscpu: 170, 172
lsipc: 170, 172
lslocks: 170, 172
lslogins: 170, 172
lsmod: 137, 137
lzcat: 135, 135
lzcmp: 135, 135
lzdiff: 135, 135
lzegrep: 135, 135
lzfgrep: 135, 135
lzgrep: 135, 135
lzless: 135, 135
lzma: 135, 135
lzmadec: 135, 135
lzmainfo: 135, 135
lzmore: 135, 135
m4: 116, 116
make: 164, 164
makedb: 81, 85
makeinfo: 178, 179
man: 174, 175
mandb: 174, 175
manpath: 174, 175
mapscrn: 161, 162
mcookie: 170, 172
md5sum: 146, 148
mesg: 170, 172
mkdir: 146, 148
mke2fs: 143, 145
mkfifo: 146, 148
mkfs: 170, 172
mkfs.bfs: 170, 172
mkfs.cramfs: 170, 172
mkfs.ext2: 143, 145
mkfs.ext3: 143, 145
mkfs.ext4: 143, 145
mkfs.ext4dev: 143, 145
mkfs.minix: 170, 172
mklost+found: 143, 145
mknod: 146, 148
mkswap: 170, 172
mktemp: 146, 148
mk_cmds: 143, 145
mmroff: 153, 154
modinfo: 137, 137
modprobe: 137, 137
more: 170, 172
mount: 170, 172
mountpoint: 170, 172
msgattrib: 139, 139
msgcat: 139, 139
msgcmp: 139, 139
msgcomm: 139, 139
msgconv: 139, 139
msgen: 139, 139
msgexec: 139, 139
msgfilter: 139, 139
msgfmt: 139, 139
msggrep: 139, 140
msginit: 139, 140
msgmerge: 139, 140
msgunfmt: 139, 140
msguniq: 139, 140
mtrace: 81, 85
mv: 146, 148
namei: 170, 172
ncursesw6-config: 104, 105
neqn: 153, 154
newgidmap: 111, 113
newgrp: 111, 113
newuidmap: 111, 113
newusers: 111, 113
ngettext: 139, 140
nice: 146, 148
nl: 146, 148
nm: 91, 92
nohup: 146, 148
nologin: 111, 113
nproc: 146, 148
nroff: 153, 154
nscd: 81, 85
nsenter: 170, 172
nstat: 159, 160
numfmt: 146, 148
objcopy: 91, 92
objdump: 91, 92
od: 146, 148
oldfind: 152, 152
openvt: 161, 162
partx: 170, 172
passwd: 111, 113

paste: 146, 148
patch: 165, 165
pathchk: 146, 148
pdfmom: 153, 154
pdfroff: 153, 154
pdftexi2dvi: 178, 179
peekfd: 114, 114
perl: 129, 130
perl5.24.1: 129, 130
perlbug: 129, 130
perldoc: 129, 130
perlivp: 129, 130
perlthanks: 129, 130
pfbtops: 153, 154
pg: 170, 172
pgrep: 141, 141
pic: 153, 154
pic2graph: 153, 154
piconv: 129, 130
pidof: 141, 141
ping: 127, 128
ping6: 127, 128
pinky: 146, 148
pivot_root: 170, 172
pkg-config: 103, 103
pkill: 141, 141
pl2pm: 129, 130
pldd: 81, 85
pmap: 141, 141
pod2html: 129, 130
pod2man: 129, 130
pod2texi: 178, 179
pod2text: 129, 130
pod2usage: 129, 130
podchecker: 129, 130
podselect: 129, 130
post-grohtml: 153, 154
poweroff: 167, 167
pr: 146, 148
pre-grohtml: 153, 154
preconv: 153, 154
printenv: 146, 148
printf: 146, 148
prlimit: 170, 172
prove: 129, 130
prtstat: 114, 114
ps: 141, 141
psfaddtable: 161, 162
psfgettable: 161, 162
psfstriptable: 161, 162
psfxtable: 161, 162
pstree: 114, 114
pstree.x11: 114, 114
pstruct: 129, 130
ptar: 129, 130
ptardiff: 129, 130
ptargrep: 129, 130
ptx: 146, 148
pwck: 111, 113
pwconv: 111, 113
pwd: 146, 148
pwdx: 141, 141
pwunconv: 111, 113
ranlib: 91, 92
raw: 170, 172
readelf: 91, 92
readlink: 146, 148
readprofile: 170, 173
realpath: 146, 148
reboot: 167, 167
recode-sr-latin: 139, 140
refer: 153, 154
rename: 170, 173
renice: 170, 173
reset: 104, 105
resize2fs: 143, 145
resizepart: 170, 173
rev: 170, 173
rm: 146, 149
rmdir: 146, 149
rmmod: 137, 137
roff2dvi: 153, 154
roff2html: 153, 154
roff2pdf: 153, 154
roff2ps: 153, 154
roff2text: 153, 154
roff2x: 153, 154
routef: 159, 160
routel: 159, 160
rpcgen: 81, 85
rtacct: 159, 160
rtcwake: 170, 173
rtmon: 159, 160
rtpr: 159, 160
rtstat: 159, 160
runcon: 146, 149
runlevel: 167, 167
runtest: 47, 47
rview: 180, 181
rvim: 180, 181
script: 170, 173
scriptreplay: 170, 173
sdiff: 150, 150
sed: 110, 110
seq: 146, 149
setacl: 108, 108
setarch: 170, 173
setattr: 107, 107
setcap: 109, 109
setfont: 161, 162
setkeycodes: 161, 162
setleds: 161, 162
setmetamode: 161, 162
setsid: 170, 173
setterm: 170, 173
setvtrgb: 161, 162
sfdisk: 170, 173
sg: 111, 113
sh: 121, 121
shalsum: 146, 149
sha224sum: 146, 149
sha256sum: 146, 149

sha384sum: 146, 149
sha512sum: 146, 149
shasum: 129, 130
showconsolefont: 161, 162
showkey: 161, 162
shred: 146, 149
shuf: 146, 149
shutdown: 167, 167
size: 91, 92
slabtop: 141, 141
sleep: 146, 149
sln: 81, 85
soelim: 153, 154
sort: 146, 149
sotruss: 81, 85
splain: 129, 130
split: 146, 149
sprof: 81, 85
ss: 159, 160
stat: 146, 149
stdbuf: 146, 149
strings: 91, 92
strip: 91, 92
stty: 146, 149
su: 111, 113
sulogin: 170, 173
sum: 146, 149
swaplabel: 170, 173
swapoff: 170, 173
swapon: 170, 173
switch_root: 170, 173
sync: 146, 149
sysctl: 141, 142
syslogd: 166, 166
tabs: 104, 105
tac: 146, 149
tail: 146, 149
tailf: 170, 173
talk: 127, 128
tar: 177, 177
taskset: 170, 173
tbl: 153, 154
tc: 159, 160
tclsh: 45, 45
tclsh8.6: 45, 45
tee: 146, 149
telinit: 167, 167
telnet: 127, 128
test: 146, 149
texi2dvi: 178, 179
texi2pdf: 178, 179
texi2any: 178, 179
texindex: 178, 179
tfmtodit: 153, 154
tftp: 127, 128
tic: 104, 105
timeout: 146, 149
tload: 141, 142
toe: 104, 105
top: 141, 142
touch: 146, 149
tput: 104, 105
tr: 146, 149
traceroute: 127, 128
troff: 153, 154
true: 146, 149
truncate: 146, 149
tset: 104, 105
tsort: 146, 149
tty: 146, 149
tune2fs: 143, 145
tzselect: 81, 85
udevadm: 168, 169
udevd: 168, 169
ul: 170, 173
umount: 170, 173
uname: 146, 149
uname26: 170, 173
uncompress: 158, 158
unexpand: 146, 149
unicode_start: 161, 162
unicode_stop: 161, 162
uniq: 146, 149
unlink: 146, 149
unlzma: 135, 135
unshare: 170, 173
unxz: 135, 135
updatedb: 152, 152
uptime: 141, 142
useradd: 111, 113
userdel: 111, 113
usermod: 111, 113
users: 146, 149
utmpdump: 170, 173
uuidd: 170, 173
uuidgen: 170, 173
vdir: 146, 149
vi: 180, 182
view: 180, 182
vigr: 111, 113
vim: 180, 182
vimdiff: 180, 182
vimtutor: 180, 182
vipw: 111, 113
vmstat: 141, 142
w: 141, 142
wall: 170, 173
watch: 141, 142
wc: 146, 149
wdctl: 170, 173
whatis: 174, 175
whereis: 170, 173
who: 146, 149
whoami: 146, 149
wipefs: 170, 173
x86_64: 170, 173
xargs: 152, 152
xgettext: 139, 140
xmlwf: 126, 126
xsubpp: 129, 130
xtrace: 81, 85
xxd: 180, 182

xz: 135, 135
xzcat: 135, 135
xzcmp: 135, 136
xzdec: 135, 136
xzdiff: 135, 136
xzegrep: 135, 136
xzfgrep: 135, 136
xzgrep: 135, 136
xzless: 135, 136
xzmore: 135, 136
yacc: 117, 117
yes: 146, 149
zcat: 158, 158
zcmp: 158, 158
zdiff: 158, 158
zdump: 81, 85
zegrep: 158, 158
zfgrep: 158, 158
zforce: 158, 158
zgrep: 158, 158
zic: 81, 85
zipdetails: 129, 130
zless: 158, 158
zmore: 158, 158
znew: 158, 158
zramctl: 170, 173

ライブラリ

Expat: 131, 131
ld-2.24.so: 81, 85
libacl: 108, 108
libanl: 81, 85
libasprintf: 139, 140
libattr: 107, 107
libbfd: 91, 92
libblkid: 170, 173
libBrokenLocale: 81, 85
libbz2: 101, 102
libc: 81, 85
libcap: 109, 109
libcheck: 48, 48
libcidn: 81, 85
libcom_err: 143, 145
libcrypt: 81, 85
libcursesw: 104, 105
libdl: 81, 85
libe2p: 143, 145
libexpat: 126, 126
libexpect-5.45: 46, 46
libext2fs: 143, 145
libfdisk: 170, 173
libfl: 118, 118
libformw: 104, 106
libg: 81, 85
libgcc: 97, 100
libgcov: 97, 100
libgdbm: 124, 124
libgdbm_compat: 124, 124
libgettextlib: 139, 140
libgettextpo: 139, 140
libgettextsrc: 139, 140
libgmp: 93, 94
libgmpxx: 93, 94
libgomp: 97, 100
libhistory: 120, 120
libiberty: 97, 100
libieee: 81, 85
libkmod: 137
libltdl: 123, 123
liblto_plugin: 97, 100
liblzma: 135, 136
libm: 81, 85
libmagic: 90, 90
libman: 174, 176
libmandb: 174, 176
libmcheck: 81, 85
libmemusage: 81, 85
libmenuw: 104, 106
libmount: 170, 173
libmpc: 96, 96
libmpfr: 95, 95
libncursesw: 104, 106
libnsl: 81, 85
libnss: 81, 85
libopcodes: 91, 92
libpanelw: 104, 106
libpipeline: 163
libprocps: 141, 142
libpthread: 81, 85
libquadmath: 97, 100
libreadline: 120, 120
libresolv: 81, 85
librpcsvc: 81, 85
librt: 81, 86
libSegFault: 81, 85
libsmartcols: 170, 173
libss: 143, 145
libssp: 97, 100
libstdbuf: 146, 149
libstdc++: 97, 100
libsupc++: 97, 100
libtcl8.6.so: 45, 45
libtclstub8.6.a: 45, 45
libthread_db: 81, 86
libtsan: 97, 100
libudev: 168, 169
libutil: 81, 86
libuuid: 170, 173
liby: 117, 117
libz: 89, 89
preloadable_libintl: 139, 140

スクリプト

checkfs: 186, 186
cleanfs: 186, 186
console: 186, 186
  設定: 199
console: 186, 186
  設定: 199
File creation at boot

設定: 201
functions: 186, 186
halt: 186, 186
hostname
設定: 194
ifdown: 186, 186
ifup: 186, 186
ipv4-static: 186, 186
localnet: 186, 186
/etc/hosts: 195
localnet: 186, 186
/etc/hosts: 195
modules: 186, 186
mountfs: 186, 186
mountvirtfs: 186, 186
network: 186, 186
/etc/hosts: 195
設定: 193
network: 186, 186
/etc/hosts: 195
設定: 193
network: 186, 186
/etc/hosts: 195
設定: 193
rc: 186, 186
reboot: 186, 186
setclock
設定: 198
sendsignals: 186, 186
setclock: 186, 186
swap: 186, 186
sysctl: 186, 186
sysklogd: 186, 186
設定: 201
sysklogd: 186, 186
設定: 201
template: 186, 187
udev: 186, 187
udev_retry: 186, 187

その他

/boot/config-4.9.5: 210, 213
/boot/System.map-4.9.5: 210, 213
/dev/*: 71
/etc/fstab: 208
/etc/group: 76
/etc/hosts: 195
/etc/inittab: 196
/etc/inputrc: 205
/etc/ld.so.conf: 84
/etc/lfs-release: 216
/etc/localtime: 82
/etc/lsb-release: 216
/etc/modprobe.d/usb.conf: 212
/etc/nsswitch.conf: 82
/etc/passwd: 76
/etc/profile: 203
/etc/protocols: 115
/etc/resolv.conf: 194
/etc/services: 115
/etc/syslog.conf: 166
/etc/udev: 168, 169
/etc/udev/hwdb.bin: 168
/etc/vimrc: 181
/usr/include/asm-generic/*.h: 79, 79
/usr/include/asm/*.h: 79, 79
/usr/include/drm/*.h: 79, 79
/usr/include/linux/*.h: 79, 79
/usr/include/mtd/*.h: 79, 79
/usr/include/rdma/*.h: 79, 79
/usr/include/scsi/*.h: 79, 79
/usr/include/sound/*.h: 79, 79
/usr/include/video/*.h: 79, 79
/usr/include/xen/*.h: 79, 79
/var/log/btmp: 76
/var/log/lastlog: 76
/var/log/wtmp: 76
/var/run/utmp: 76
/etc/shells: 206
man ページ: 80, 80